# 「ている」「ていた」「ていない」のアスペクト

## ―異なるジャンルのテクストでの使用状況と学習者の誤用―

江田すみれ

# 「ている」「ていた」「ていない」のアスペクト

## ―異なるジャンルのテクストでの使用状況と学習者の誤用―

江田すみれ

# 目　　次

第 1 章　研究の概要 ..... 13

1　はじめに ..... 13

2　先行研究 ..... 13

3　本稿の目的 ..... 16

4　動詞の分類 ..... 17

5　「動詞＋ている」の用法の分類 ..... 19

6　本稿の構成 ..... 24

第 2 章　使用コーパス ..... 27

1　概観 ..... 27

2　母語話者用コーパス作成 ..... 28

第 3 章　テクストの種類の違いとテンス ..... 30

1　先行研究 ..... 30

2　調査方法 ..... 32

3　調査結果 ..... 33

4　「る」「た」「ている」の用法 ..... 33

4.1　明示的な過去を示す「た」 ..... 33

4.2　事実・分析・判断を示す「る」 ..... 35

4.3　「る」「た」の共存 ..... 36

4.4　引用を示す「ている」、現在と関係させる「ている」 ..... 37

5　まとめ ..... 39

**第４章　「効力持続」について** ..... **40**

**1　先行研究** ..... **40**

**2　「効力」の存在について** ..... **44**

**3　「記録」の用法** ..... **46**

**4　「結果状態」と「効力持続」** ..... **49**

**5　未来の効力持続** ..... **51**

5.1　未来の効力持続に関係する先行研究 ..... 51
5.2　調査方法 ..... 52
5.3　調査結果 ..... 53
5.4　分析 ..... 53
5.4.1　文体 ..... 53
5.4.2　待つ対象 ..... 54
5.4.3　待つ対象との距離 ..... 54
5.4.4　待つ対象への評価 ..... 55
5.4.5　文末制限 ..... 55

**6　まとめ** ..... **56**

6.1　効力持続とは ..... 56
6.2「記録」をどう捉えるか ..... 57
6.3「結果状態」と「効力持続」をどう関係づけるか ..... 57
6.4　未来の効力持続 ..... 57

**第５章　「ている」の用法** ..... **60**

**1　「ている」の用法の分類** ..... **60**

1.1　運動短期 ..... 60
1.2　運動長期 ..... 60
1.3　繰り返し ..... 61
1.4　結果状態 ..... 62
1.5　効力持続 ..... 63
1.6　性状 ..... 64
1.7　完了 ..... 65

**2　会話・小説・新書における「ている」の使用状況** ..... **65**

2.1　概観 ..... 65

2.2　コーパスごとの使用状況 ..... 67

**3　会話における「ている」の用法 ..... 68**

3.1　会話における「運動長期」の「ている」 ..... 68

3.2　会話における「効力持続」の「ている」 ..... 70

3.2.1　効力あるいは影響の存在 ..... 71

3.2.2　「経験」 ..... 72

3.2.3　「記録」 ..... 73

3.2.4　「属性」 ..... 76

3.2.5　統括主題と「ている」 ..... 76

3.3　「効力持続」の「ている」の会話での使われ方 ..... 78

3.3.1　先行研究 ..... 78

3.3.2　現在に関係させる過去の事態 ..... 80

3.3.3　聞き手に関わること―「配慮」 ..... 84

3.3.4　自分のことの表現 ..... 86

3.4　会話における「運動長期」「効力持続」のまとめ ..... 88

**4　新書における「ている」の用法 ..... 89**

**4.1　概観** ..... 89

4.2　新書における「運動長期」 ..... 90

4.3　新書における「効力持続」 ..... 93

4.3.1　効力あるいは影響の存在 ..... 93

4.3.2　記録と引用 ..... 95

**5　「ている」の新書での機能 ..... 97**

5.1　話題提供 ..... 98

5.1.1　「運動長期」を使った話題提供 ..... 98

5.1.2　「効力持続」を使った話題提供 ..... 100

5.2　前提 ..... 102

5.3　結論提示 ..... 104

5.3.1　「運動長期」を使った結論提示 ..... 104

5.3.2　「効力持続」を使った結論提示 ..... 106

5.4　話題提供・結論提示をもたらすもの ..... 107

**6　新書における「運動長期」「効力持続」のまとめ ..... 108**

**7　会話と新書の「ている」 ..... 109**

**第 6 章　学習者による「ている」の使用状況 ..... 112**

1　調査方法 ..... 112

2　学習者の「ている」の使用状況 ..... 113
2.1　正用誤用の割合 ..... 113
2.2　意味的な使用状況 ..... 113
2.3　運動長期の使われ方 ..... 114
2.4　効力持続の使われ方 ..... 114
2.5　性状の使われ方 ..... 115

3　誤用について ..... 115
3.1　テクストによるテンスの書き分け ..... 116
3.2　まるごとの事態を表す「た」 ..... 117
3.3　連体修飾節の中での「た」と「ている」 ..... 118
3.4　「る」 ..... 118
3.5　動詞の自他の違い ..... 121

4 まとめ ..... 122

第 7 章　「ていた」の用法 ..... 123

1　問題の所在 ..... 123

2　「ていた」の先行研究 ..... 125

3　「ていた」の使用状況 ..... 129
3.1　意味的な分類 ..... 129
3.2　二つの事態の前後関係による分類 ..... 130
3.2.1　継続過去・状態過去・繰り返し過去・性状過去 ..... 130
3.2.2　同時 ..... 131
3.2.3　完了 ..... 132
3.2.4　二つの事態の間の関係 ..... 132

4　継続の「ていた」と完了相「た」の使い分け ..... 134
4.1　動作継続に関する先行研究 ..... 135
4.2　時間幅と事態の関係 ..... 137
4.3　許容度を高める方法 ..... 138
4.4　学習者の誤用例に対して ..... 139

5　過去を「ていた」で表示するもの ..... 140
5.1　状態動詞に分類されるもの ..... 140

5.2　思考動詞に分類されるもの ..... 141
5.3　結果状態に分類されるもの ..... 142

**6　「ていた」「た」の使い分け ..... 143**

**7　「ていた」が表す過去の状態 ..... 145**

**8　「発見」の用法の成立の条件 ..... 146**
8.1　先行研究 ..... 146
8.2　調査結果 ..... 148
8.3　「発見」の文を支える条件 ..... 148
8.3.1　アスペクト的観点から ..... 148
8.3.2　文中の位置と文体 ..... 149
8.3.3　「発見」の文が表れやすい条件 ..... 151
8.3.3.1　視点の変化 ..... 152
8.3.3.2　変化の表現 ..... 152
8.3.3.3　回想の表現 ..... 153
8.3.3.4　意外性の表現 ..... 154
8.3.3.5　感覚の表現 ..... 154
8.3.3.6　発見の意味を支える副詞 ..... 154
8.3.4　用法上の問題 ..... 155
8.3.4.1　報告、描写 ..... 155
8.3.4.2　客観視 ..... 155

**9　間接的な表現の「言っていた」 ..... 156**
9.1　調査方法及びその結果 ..... 157
9.2　「言っていた」の必然的な使われ方 ..... 158
9.2.1　「繰り返し」「動作継続」 ..... 158
9.2.2　「完了」 ..... 158
9.3　「言っていた」「言った」置き換え可能な例 ..... 159
9.4　「言った」に置き換えられない「言っていた」 ..... 160
9.4.1　発話者のあいまいさ ..... 160
9.4.2　情報の正確さとあいまいさ ..... 161
9.5　「言っていた」と「言った」の違い ..... 161

**10　完了の「ていた」 ..... 163**
10.1　完了の「ていた」についての疑問 ..... 163
10.2　先行研究 ..... 163
10.3　調査方法 ..... 165

10.4　「ていた」の節間の時間的な関係 ..... 165
10.4.1　継続過去・状態過去・繰り返し過去・性状過去 ..... 165
10.4.2　同時 ..... 165
10.4.3　完了 ..... 166
10.5　完了の「ていた」の成立の条件 ..... 167
10.5.1　話題の焦点 ..... 167
10.5.2　二つの節の間の時間的・意味的な切れ目 ..... 169
10.5.3　「完了」と「発見」の関係について ..... 171
10.5.4　「ていた」節の表す内容と「た」節の関係 ..... 172
10.5.5　外部からの描写 ..... 173

**11　まとめ ..... 173**
11.1　継続相と完了相の関係 ..... 173
11.2　動詞の性質と「ていた」の関係について ..... 174
11.3　「ていた」が表す過去の意味 ..... 174
11.4　発見の用法 ..... 174
11.5　「言っていた」について ..... 174
11.6　「完了」の「ていた」 ..... 175

**12　会話と新書における「ていた」 ..... 175**
12.1　テンスについての先行研究 ..... 176
12.2　「ている」の文中の機能についての先行研究 ..... 176
12.3　会話における「ていた」 ..... 177
12.3.1　過去の状態 ..... 177
12.3.2　話題提供 ..... 178
12.3.3　丁寧さの表現 ..... 179
12.3.4　「完了」による時間的な順序 ..... 180
12.3.5　「完了」による事態の変化の表現 ..... 180
12.4　新書における「ていた」 ..... 182
12.4.1　「発見」 ..... 183
12.4.2　時間的な進展の表現 ..... 184
12.4.3　前提—話題以前の状況 ..... 185
12.5　会話と新書における「ていた」の用法についてのまとめ ..... 187

**第 8 章　学習者の「ていた」の使用状況 ..... 189**

**1　学習者コーパス ..... 189**

**2　タスクによる使用数の異なり ..... 189**

3　タスクと正誤の関係 ..... 190

4　節間の関係による分類 ..... 191

5　誤用のテンス・アスペクトによる分類 ..... 192

6　正用 ..... 192
6.1　よく使う動詞のよく使う活用形 ..... 193
6.2　期間中の出来事 ..... 193

7　「た」の誤用 ..... 194
7.1　まるごとの事態 ..... 194
7.2　連体修飾節中の形 ..... 196
7.3　過去を「ていた」で表す動詞―特に思考動詞― ..... 196
7.4　完了 ..... 197

8　「る」の誤用 ..... 198

9　「ている」の誤用 ..... 199

10　固定化した活用形 ..... 200

11　まとめ ..... 201

第 9 章　「ていない」の用法 ..... 203

1　「ていない」についての先行研究 ..... 203

2　「ていない」の分類方法について ..... 209
2.1　工藤（1996）の分類 ..... 209
2.2　本稿での分類 ..... 211

3　「ていない」の使用状況概観 ..... 215

4　「ていない」の使われ方 ..... 216
4.1　「ていない」の非実現と未実現 ..... 217
4.2　「効力持続」の否定と過去の文脈 ..... 218
4.3　非実現の「ていない」と事態の把握のしかた ..... 220
4.4　「ていない」と統括主題の存在 ..... 223
4.5　未実現の「ていない」文における実現想定区間 ..... 224
4.6　意図的な否定か否か ..... 227

4.7　「ていない」と「なかった」 ..... 228

**5　まとめ ..... 231**

5.1　「ていない」「なかった」の使用状況 ..... 231
5.2　非実現の「ていない」と未実現の「ていない」 ..... 231
5.3　過去の文脈 ..... 231
5.4　事態の把握のしかた ..... 232
5.5　統括主題 ..... 232
5.6　未実現文の実現想定区間 ..... 232
5.7　意図的な否定か否か ..... 232
5.8　「なかった」の使い方 ..... 233

**第 10 章　まとめ ..... 235**

**1　テンスについて ..... 235**

**2　効力持続について ..... 235**

2.1　効力持続とは ..... 235
2.2　「記録」をどう捉えるか ..... 235
2.3　「結果状態」と「効力持続」の関係 ..... 236
2.4　未来の効力持続 ..... 236

**3　会話と新書の「ている」 ..... 236**

**4　学習者の「ている」の誤用 ..... 237**

**5　「ていた」について ..... 237**

5.1　「た」と「ていた」 ..... 237
5.2　動詞の性質と「ていた」の関係について ..... 237
5.3　「ていた」が表す過去の意味 ..... 238
5.4　発見の用法 ..... 238
5.5　「言っていた」について ..... 238
5.6　「完了」の「ていた」 ..... 238
5.7　会話と新書における「ていた」の用法について ..... 239

**6　学習者の「ていた」の使用状況 ..... 239**

**7　「ていない」 ..... 240**

7.1　「ていない」「なかった」の使用状況 ..... 240
7.2　未完了の「ていない」と非実現の「ていない」 ..... 240

7.3　過去の文脈 ..... 240
7.4　事態の把握のしかた—直接的体験か間接的な表現か ..... 240
7.5　統括主題 ..... 241
7.6　未実現文の実現想定区間 ..... 241
7.7　意図的な否定か否か ..... 241
7.8　「なかった」の使い方 ..... 242

**8　アスペクトについての疑問と答え ..... 242**
8.1　「ている」「ていた」「ていない」でとりあげた問題点 ..... 243
8.2　テクスト中での「ている」「ていた」「ていない」の使われ方の違い ..... 244
8.3　学習者の誤用例の検討 ..... 244

**第 11 章　これからの課題と日本語教育への提言 ..... 247**

**1　これからの課題 ..... 247**

**2　日本語教育への提言 ..... 247**

**資料および参考文献 ..... 250**

# 第１章　研究の概要

## 1　はじめに

本稿は、「ている」には代表形としての「ている」だけを見ていたのでは見落としてしまう点があるということを出発点に、「ている」「ていた」「ていない」がもつ固有の問題点を洗い出すことを目的とする。

アスペクトに関してはこれまで多くの研究がなされている。本稿はその中でも「ている」をとり扱う。従来比較的統一的に論じられてきた「ている」「ていた」「ていない」を別々に取り上げ、それらが実際の文脈でどのように使われており、どういった点が学習者にとって困難であるかを考えた。また、その際これらの項目が異なる種類のテクスト (1) の中でどのような意味を持つのか、中心的な用法、周辺的な用法についても考えた。そして、いくつかの用法についてはテクスト中で果たす機能について検討した。

「ていた」を「ている」とは別に検討するのは、詳細は後に述べるが、日本語学習者の「ていた」の誤用が「ている」より多いこと、「ていた」に特有の用法があることなどによる。また、「ていない」についても、「完了」の否定とする寺村（1984）の説と「過去にある事態が起こらなかったこと」と広い意味の否定とする松田（2002）の説が対立し、結論が出ていない。これらは「ている」だけ見ていたのでは解決されない問題である。

近年コーパス研究が一般化し、ジャンルの異なるテクストでの文法項目のふるまいの違いについての研究が数多く発表されている（野田 2004、小林 2005、小西 2011 など）。本稿はアスペクトの実際の文脈の中での使われ方を見たいと考える。そのため、会話と大学生が読むであろう科学的なテクストである新書の「ている」「ていた」「ていない」の使用について検討することとする。会話は日本語学習者が十分できるようになることを希望している活動であり、新書は大学に進学した学習者にとって、一般教養の授業などで読んで理解することが求められる書物である。こうした、すぐに必要なテクストの中での「ている」「ていた」「ていない」について検討し、その結果を示すことは、日本語学習者に対して学習の手助けになることであろう。

このような検討を通して、「ていた」「ていない」の特性を多少なりとも明らかにし、これまであまり多くの関心がはらわれてこなかった、特に「ていた」と「ていない」に関して、日本語教育に携わる方に多少の情報が提供できれば幸いである。

## 2　先行研究

これまでの「ている」についての研究を簡単に見てみる。なお、研究者によって「ている」「た」の表記は「シテイル」・シテイル・「ている」・「～ている」・「タ」・タ・「～た」などまちまちである。引用部分では著者の記述に従うようにするが、本稿では基本的には「る」「た」「ている」「ていた」「ていない」を用いる。記述がときに統一感に欠けているように見えることを先にお断りしておく。

金田一（1950:7）は　動詞を状態動詞・継続動詞・瞬間動詞・第四種の動詞の４つに分類することを提唱し、それらの分類と「ている」がつくかどうか、つくとしたらどのような意味になるかを論じ、「アスペクトの観点から観た国語動詞の分類」を行った。

さらに金田一（1955:60）は、「～る」「～た」「～ている」「～ところだ」などを取り上げ、どの種の動詞のどの形がテンスを表し、どれがアスペクトを表現するかを論じ、テンスは「ある動詞その他用言の意味する状態・動作・作用が、ある標準から眺めた場合、時間的にそれより以前であるか、同時であるか、以後であるかを示す形態のちがい」であり、アスペクトは「動詞その他用言の意味する動作・作用の進行の相を示す形態のちがい」であると定義した。金田一（1955）があげたアスペクトの中で「ている」に関係するものは既然態・進行態（この中に反復進行態が含まれる）・将然態・単純状態態の４つがあげられる。ここからテンス・アスペクト研究が明確に始まったといえよう。

その後、藤井（1966:105）は、金田一（1955）が「あの人はたくさんの小説を書いている」を「書く」という継続動詞が臨時的に瞬間動詞として用いられたものとし、「書いている」を「結果の残存」と位置づけていることを批判した。これは「過去において行われた動作・作用そのものが問題であって、それを現在から眺めた場合に用いるものである」としてこの用法を「経験」と名づけた。また、動詞は「動詞＋ている」ではなく動詞そのものの意味で分類しなければならないとし、動詞の分類において「結果動詞」「非結果動詞」という分類を示した。

奥田（1977:34）は、金田一（1950）から吉川（1973）までの研究が「している」ばかりを取り上げて論を構成しているが、アスペクト研究は「する」と「している」の対立を見なければならないと指摘し、「する」と「している」は「一方がなければ他方もありえないという、きりはなすことのできない有機的な関係のなかにある」と批判している。また、金田一の四分類はこの対立に関わらない状態動詞と第四種の動詞を取り上げているが、そうではなく、まず、アスペクトの体系をもつものともたないものの二つに分け、そこから議論を始めるべきであると述べている。

さらに、奥田（1978)は、高橋太郎、鈴木重幸がアスペクト対立をもつ動詞を、継続動詞と瞬間動詞、結果動詞と非結果動詞という二つの基準で分類していることを批判し、動詞の分類基準は＜主体の動作＞＜主体の変化＞が適当であるとし、この基準を用いれば自動詞他動詞の関係や受動態とアスペクトの関係も説明が可能であるとしている。奥田（1977、1978）によって動詞の分類に動詞の意味する時間の長さではなく、主体の動作と主体の変化という基準がもたらされたことは、大きな転換であるといえる。

町田（1989:17）は日本語ではル・タという限られた形式が多様な意味を持つことから、時制・アスペクトの意味を規定する条件を明確化する必要があるとして、時制・アスペクトが日本語で「どのような形式に対応しているか具体的かつ体系的に」記述している。町田は、アスペクトは、発話者の事象の時間的性質に対する見方を伝える形式とし、動詞の性質だけでなく動詞句のタイプ・主語・目的語・副詞句・助詞など様々な要素によって決定され

るので、それらを十分考慮する必要があると述べている。そして、動詞句のタイプを概観し、主節、従属節の中で一定の動詞句が一定のアスペクトを表す条件を整理している。

こうして町田（1989）は従来の動詞を中心とするアスペクト研究から、文中の他の要素との関係、文と文、節と節の関係まで視野を広げ、研究を進展させた。

工藤（1995）は文単位の文法を脱却し、テクストの中でテンス・アスペクトを位置づけている。話しことば・書きことば両者を対象とし、文脈の中での文法現象を捉えた点が従来の研究と異なる点であろう。テクストの多様性も特色の一つである。話しことばで小説の会話の文、書きことばは小説の地の文・体験的ノンフィクション・非体験的ノンフィクションを観察する。

また、テンス・アスペクトの捉え方も、形式・意味・機能の三つの視点から行っており、テクストの中でのアスペクトの機能を述べている点が注目される。「パーフェクト」を大きく取り上げ、その機能について多くを語ったことも特色である。

工藤（1995）は、テンス・アスペクトの形式と機能が、話しことば・小説・ノンフィクションで異なるが、それは文単位で文法現象を見ていたのでは理解できないということを明らかにした。その点で文法研究を大きく前進させたといえる。しかし、実際には大半の例が小説の文からとられており、自然会話・ノンフィクションの比重が比較的に軽いことが惜しまれる。また、テンス・アスペクトでの「中心的なものと周辺的なもの、中間的なものを介する連続性を追求す」ることも目的であると述べられているが（工藤 1995:12）、中心的なものと周辺的なものの振り分けは何によってされたのであろうか。この点についてはデータに基づいた検討がなされているとは言えないようである。

迫田久美子・家村伸子・川根千枝見・崔延朱（2008:15）は 6 名の学習者の 3、4 カ月ごとの 3 年間の自由会話による縦断的発話コーパスを作成し (2) 、それを用いた習得研究の結果を発表している。その中で家村（2008）は「ている」と「ていない」の動詞との結びつきの習得結果をまとめている。その結果として①「ていない」は必ずしも「ている」が出現した後の期に、またはそれと同時に出現するとは限らないこと、②「ていない」は「た」が出現した後に、またはそれと同時に出現することを報告し、学習者にとっては「ている」－「ていない」の結びつきよりも「た」－「ていない」の結びつきの方が強い可能性がある」とまとめている。そして、同じ形式と分類される文法形式はテンス・肯定否定などに関わらずすべて同様の性質をもつ、という前提をはずしてデータと向き合うことの必要性を述べた。

筆者はこの研究に大いに触発された。「ている」に関して言えば、「ていた」「ていない」についての研究が必要ということである。たとえば「ていない」の性質を明確にすれば、「た」と「ていない」との結びつきの問題は理解可能なこととなるであろう。

以上のように、「ている」の研究は「動詞+ている」の形を研究テーマとするところから始まり、完成相と継続相の対立を取り入れ、文中の他の要素との関係を取り上げ、テクスト全体でのアスペクト形式の機能を視野に入れる研究まで進んできた。

本稿はこれまでの研究成果を踏まえ、「ている」「ていた」「ていない」のそれぞれの意味・用法、文法上の性質、テクスト中での機能を調査し記述したい。そうすることによっ

て、学習者の多様化に対応する、違う種類のテクスト中での「ている」の用いられ方を考えることができるであろう。

## 3　本稿の目的

本稿は以下の 3 点を明らかにすることを目的とする。

1）「ている」「ていた」「ていない」を個別に取り上げ、それぞれが固有に持つ問題点を洗い出す。
2）テクストの種類の違いと「ている」「ていた」「ていない」の使われ方の違いを検討する。
3）学習者の誤用例を検討し、学習者にとって「ている」「ていた」「ていない」はどこが難しいかを考える。

以下にこれらの点について多少詳しく述べる。

第一の目的は、「ている」「ていた」「ていない」を個別に取り上げ、それぞれが固有に持つ問題点を洗い出すことである。

「ている」については、主に「運動長期」と「効力持続」に焦点をあてその用法を明らかにする。また、「ていた」については、「発見」「完了」など、「ている」にはない用法がある。それらの用法を取り上げ整理した。「ていない」は「ている」が示すアスペクトを単純に否定するだけではないということを確認し、「ていない」についてこれまで述べられてきたいくつかの論点について、どのように理解することが実際の使用状況により近いのかを考えた。

第二の目的は、テクストの種類の違いと「ている」「ていた」「ていない」の使われ方の違いを検討することである。テクストの違いによって文法項目は使われ方の異なるものがあるという研究はいろいろ発表されている（野田 2004、小林 2005、江田・小西 2007、小西 2011 など）。

本稿は社会人の会話・小説の地の文・科学的入門である新書（以後科学的入門書を新書と略す）を資料とする。分析は主に会話と新書を資料として「ている」「ていた」の使用傾向を探る。工藤（1995）にならって形式・意味・機能の三者を捉えるべく努める。

テンスに関しては、会話は、話者と聞き手の存在する現在がある点が小説や新書と異なる点であろう。工藤（1995:181）では「はなしあいでは、〈終止〉の位置のテンス形式は、発話時を基準軸として使用される」と述べている。また、会話では「長い語句をへだてて照応しあうような構成の長い発話は無く」「「場」に依存する要素が多い」と述べられているよう（メイナード 1992：93）に、文脈があるためすべてを述べなくても理解が可能、などの点でテクストに特色がある。

新書は大学で学ぶ学習者が入学後比較的早い段階で触れる書物であり、学習者にとっては大学生活を送る上で読んで理解する必要があり、レポートなどで使いこなしていくことが要

求される表現も含んでいる。そのため、大学で学ぶ学習者にとって有益となる資料として採用した。本稿で使った作品は次節で述べるが、分野は自然科学と社会科学である(3)。社会科学・自然科学のテクストの中での「ている」「ていた」は会話とは違っていることが予想される。その違いを述べたい。小説に関しては本稿では軽く扱った。

第三の目的は、学習者の誤用例を検討し、学習者にとって「ている」「ていた」「ていない」はどこが難しいかを考えることである。学習者コーパスが公開されるようになり、学習者の言語使用を確認しやすくなってきている。学習者の誤用例から、学習者にとって「ている」「ていた」はどのように使いにくいのか、調べてみた。

## 4　動詞の分類

テンス・アスペクトの研究と動詞の分類は大きな関係を持つ。これまでの分類法を概観し、本稿の考え方を述べる。

金田一（1950:8）は動詞を、状態動詞・継続動詞・瞬間動詞・第四種の動詞と四分類した。瞬間動詞は瞬間に終わってしまう動作・作用を表し、「現在～ている最中だ」と言うことができない動詞であるとしている。

その後、この分類に対し、藤井（1966:107-108）は、金田一の分類は（イ）動詞そのものの意味、（ロ）「動詞＋ている」の意味、（ハ）「ている」がつくかつかないか、という３つの基準が混在しており、それぞれの分類の結果にずれが生じると批判し、動詞を９分類することを提案した。そして藤井はこの動詞の分類の中で、継続動詞・瞬間動詞、結果動詞・非結果動詞の区分を導入した。

奥田（1977、1978）は金田一（1950）から藤井（1966）までの動詞の分類は動詞の表す時間の長さによってなされているが、その分類は現実の動詞のあり方とアスペクトの関係を反映できず矛盾が現れるとして、主体の動作・主体の変化という基準によって動詞を分類することを提案した。このように分類することにより、自動詞・他動詞、能動・受動とアスペクトの関係を整理することができると述べている。

高橋（1969:126）は状態動詞以外の動詞で以下のように十字分類を採用している。

表１　高橋（1969）による継続動詞・瞬間動詞の分類

| | 継続動詞 | 瞬間動詞 | |
|---|---|---|---|
| 主体に変化を生ずる動詞 | のびる・着る | パンクする・死ぬ | →(2) |
| 主体に変化を生じない動詞 | はしる・見る | ぶつかる・目撃する | |
| | (1) | | |

(1)「進行の状態」になるのは継続動詞であり、(2)「結果の状態」になるのは主体に変化を生ずる動詞であるとした。これらの十字分類によって動詞＋「ている」の意味が矛盾なく説明されるようになった。

寺村（1984:138）は金田一の四分類の第四種の動詞を形容詞的動詞と名づけ、「形容詞的動詞＋ている」は時間的な変化の中で物事を捉えるのではなく、他の物との比較の中での状態を捉えると述べている。

町田（1989:27-35）は状態動詞の状態性の強弱を取り上げ、存在を表す動詞、関係性を表す動詞などについて述べている。また、「思う・信じる」などの思考の動詞を状態動詞に含め、これらの動詞のテンス・アスペクトを検討している。瞬間動詞を「事象が偽である状態から真である状態への瞬間的な変化を意味する（同上:44）」と述べ、除々の変化であっても、結論が出るときは瞬間であるとして、瞬間動詞という語を使っている。本稿は関係性を表す動詞、思考を表す動詞についての分析は非常に参考になると考えるが、瞬間動詞という名称およびその定義の「瞬間的な変化」という表現は事実と合わないものが多々あると考える。

工藤（1995:45）はアスペクト対立の有無と動詞の関係で、まず動詞を＜外的運動動詞＞＜内的情態動詞＞＜静態動詞＞に分類している。そして＜外的運動動詞＞をさらに以下のように 3 分類し、主体の動作・変化と能動・受動の関係を整理し、これらに「ている」がついた場合は下のようになると述べている。

| | |
|---|---|
| 主体動作・客体変化動詞 | 動作継続（能動）／　結果継続（受動） |
| 主体変化動詞 | 結果継続 |
| 主体動作動詞 | 動作継続（能動・受動） |

（工藤 1995：72）

工藤(1995)によって、奥田（1978）からの流れである能動・受動とアスペクトの関係がきれいに整理されたといえる。

工藤（1995）の主体動作・客体変化動詞、主体変化動詞、主体動作動詞という考え方は受動・能動の場合も視野に入れた分類法であろう。しかし、本稿では受動態の「ている」を取り上げることは大きな目的とはしていないので、客体の変化についてはあまり触れない。よって、本稿の記述の多くは主体動作動詞、主体変化動詞という分類を使って表現できるであろう。

本稿は、主体動作動詞の「ている」が動作継続になる、という用語の使い方は複雑だと考えるため、単純化し、動作継続になる動詞を「継続動詞」、結果継続になる動詞を「結果動詞」とする。

工藤（1995:89-96）の〈内的情態動詞〉という分類は参考になる。「内的情態動詞」は「思う・信じる」等、主語の人称とアスペクトが関係する動詞を指す。しかし、本稿では会話と新書を主に対象とし、新書では一人称主体が「何かを思う」という文脈ではなく、（１）のように一般的な内容の文脈で使われることが多いため、本稿ではこれらは継続動詞に含めて考える。

(1)　適当にボタンを押せば、未来にも過去にも行けるというのがウェルズのタイムマシンである。機械を動かすには多大のエネルギーが必要であり、ボタン操作もなかな

か思うようにはいかないらしいが、とにかく小説などの中に出てくる機械は、原則的には、過去にも未来にも移動できる。（自然科学）

本稿は動詞を状態動詞・継続動詞・結果動詞・形容詞的動詞と分類するが、記述の必要に応じて町田（1989）の分類に従い、状態動詞の下位分類である思考動詞・関係性を表す動詞などを用いることもある。

## 5　「動詞＋ている」の用法の分類

金田一（1955）は「ている」の意味を「既然態」「進行態」「将然態」「単純状態態」と４つに分類した。進行態の中に反復進行態が含まれる。

藤井（1969:110－114）は金田一（1955）が「あの人はたくさんの小説を書いている」の「書いている」は継続動詞が一時的に瞬間動詞として使われていると述べているのを「経験」として、この用法を独立させた上で、「動作の進行」「持続（じっとしているなど）」「結果の残存」「経験」「単純状態」「反復」「存在」と７つに分類した。「経験」の用法はすべての動作動詞によって作ることが可能と述べている。藤井（1969）の研究以後「経験」の用法が認識されるようになる。

吉川（1973）はそれまでの研究史をまとめ「動詞＋ている」の意味を「動作継続」「結果継続」「習慣」「経験」「状態」と５分類し、「経験」の用法は結果継続からの派生であると説明している。

Comrie(1976:18-52)は様々な言語におけるアスペクトの表現を研究し、perfectivity、imperfectivitiy と perfect の概念の違いについて述べている。Perfective というのはまるごとの事態で、分割せずに事態を述べる場合のアスペクトであり、imperfective　というのは 事態を内側から述べる方法である。一方 perfect というのは二つの時に関わる概念であり、発生した事態がのちの時に何らかの影響を持っていることを表す形であるとしている。

そして、英語のアスペクトは progressive と perfective であるとし、perfect についてはその基本的な性質は past with current relative であるとして、以下の４つの用法をあげている。

1) Perfect of result ＜結果＞
   E.g., The taxi has arrived.
2) Experiential perfect ＜経験＞
   E.g., I’ve seen the movie.
3) Perfect of persistant situation　＜持続＞
   E.g., I’ve shopped there for years.
4) Perfect of recent past　＜完了＞
   E.g., He has recently graduated from college.　(Comrie1976:56－60)

寺村（1984）は「ている」の用法を大きく５つに分類している。「動作や現象が継続していること」「結果の状態」「現在の習慣」「現在に意義を持つ過去の事象」「性状規定」である。そして「現在に意義を持つ過去の事象」について、「過去の事実を、いま改めて確認し、ある現実の文脈の中でその意義を吟味しようとする心理を反映している」（寺村 1984:133）と述べている。

工藤（1982:78）は「ている」の基本的な意味は継続であるとし、その用法を大きく二つに分類している。

１）基本的意味
- (1) 動きの継続
- (2) 変化の結果の継続

２）派生的意味
- (1) (a)反復
  - (b) 現在有効な過去の運動の実現
- (2) 単なる状態

この２）の (1) (b)の「現在有効な過去の運動の実現」は二つの用法があり、それらは①過去に実現した運動が、記録として現在残されていること、②過去に実現した運動が現在の状態になんらかの関わりをもっていることを表しているとしている。藤井（1969）や吉川（1973）で「経験」とされていた用法を「現在有効な過去の運動の実現」と現実に合う名前をつけて分類した点、その内容に「記録」「現在との関係」の２つの要素があるとした点が進展である。

工藤（1995:39）はさらに論を進めアスペクト、テンス、ムード、ヴォイスを関係づけて論じ、「シテイル」の用法を大きくテンポラルな用法、ムード的な用法、脱アスペクト用法、脱テンス・アスペクト用法と４つに分類し、金田一（1955）藤井（1969）などが単純状態としていた用法を脱アスペクト用法とした。テンポラルな用法については、「シテイル」の基本的な意味は「継続性」であり、「動作の継続」「変化結果の継続」「効力持続」「反復」という用法をもつとして、これらを以下のように定義している。

| | |
|---|---|
| ＜パーフェクト性＞ | 後続時点における、それ以前に成立した運動の効力の現存 |
| ＜反復性＞ | 幅広い期間において繰り返し起こるポテンシャルな運動を捉えるもの |

工藤（1982、1995）によって「パーフェクト」の定義が明確になった。藤井(1966)、吉川(1973)、寺村(1984)、工藤(1982、1995)によって、日本語のパーフェクトは過去の事実が現在に影響をもつことと定義され、その意味用法としては、経験・記録があるとされた。英語の perfect との違いは、日本語に「記録」の用法があること、「完了」「結果」の用法について触れられていないことであろう。また、名称については、「パーフェクト」という用語は日本語の文脈においた場合、「それ以前に成立した運動の効力の現存」という意味を表面的に表しているだろうか。Comrie(1976)も perfect の定義をして議論を始めているが、日

本語にこの概念を導入する場合は語を見た段階でその語の意味する内容がわかるような命名が理解を促進するといえるだろう。

本稿は実際の使用例の分析から用法について検討するという方法上、工藤(1995)が脱アスペクト的用法としている「単なる状態」も、考慮の対象とする。

ここまでの研究は大まかに、「動作の継続」「変化結果の継続」「パーフェクトあるいは経験」「反復」「単なる状態」と分類されてきている。本稿も基本的には従来の考え方に賛成する。

Labadi(1990:82-89)は英語と日本語のアスペクトを比較し、アスペクトの考え方は英語と日本語で異なり、日本語はperfective対imperfective（「る」「た」対「ている」）であるのに対し、英語は perfect 対 progressive の対立であると述べている。そして英語と日本語のアスペクトを整理した以下の表を示している。

Labadi(1990)は①日本語は英語の present perfect と過去を区別することはできない、②日本語は一つの表現で英語の現在完了を表すことはできない、③特に完了の基本である「過去の事態が現在に影響を与える」ことは表現できないとしている。本稿でも、日本語で完了

表2　Labadi（1990）による日英語のアスペクト

| | | English | Japanese |
|---|---|---|---|
| 1) | perfective | (-ed)<br>(have -en) | -ta |
| 2) | experietial | have -en | -ta koto ga aru<br>-te iru |
| 3) | progressive | be -ing | -te iru |
| 4) | resultive | $\phi$ | -te iru |
| 5) | perfect progressive | have been -ing | -te iru |
| 6) | perfect resultive | have -en | -te iru |

形という明瞭な区分があまり使われるわけではないということは認める。しかし、上の表を日本語に焦点をおいて読むと、「ている」は動作作用の進行・結果状態と同時に英語の完了形の表す意味のほとんどを表現しているといえるようである。

三原(1997:112 - 135)も英語と日本語のアスペクトを比較している。三原は日本語の「テイル」の意味を以下のようにしている。

１）動作持続　　２）結果持続　　３）効力持続

また、英語の完了相については、先行研究によって以下の４つに分類したとしている。

1) John has pressed the botton.＜完了＞
2) The taxi has arrived.＜結果＞
3) I have lived in London since 1980.＜持続＞
4) I have read the book before.＜経験＞

そして、効力持続については、工藤(1995)がパーフェクトと名づけたことを評価し、これは英語の完了相と完全に並行していると述べている。本稿では日本語の中にある、英語の完了形に相当する「ている」について、考えたい。

許夏珮（2000:28）は、ＯＰＩデータ(4)を用いて中・韓・英語話者による「テイル」の習得状況を調査した。その結果、「テイル」は次の順序で習得されると述べている。

運動の持続（±長期）→性状(＋可変性)→性状（－可変性）
繰り返し→結果の状態→状態の変化→経歴・経験

「テイル」の習得は「現在性」「持続性」「運動性」の３つの典型的な要素から成り立ち、習得はこれらのプロトタイプをより多く持っているものほど先に行われると述べた。許（2000）の分類の特色は動作・作用の継続を「運動長期」「運動短期」と二分して調査したこと、「状態の変化」を入れたことである。

この「運動短期」と「運動長期」に分類する方法を、本稿でも採用する。「運動長期」という分類法を使うことにより、本調査で用いた資料の特性の一部が明らかになると考えたためである。「性状」は、「可変」と「不変」には分けず、一括して「性状」とした。両者を分類することは本稿の目的とはあまり関わらないと考えたためである。また、名称としては「単なる状態」より「性状」のほうが適当かと思われるため、「性状」を使う。「変化」は多くの研究が採用していない分類法なので、本稿でも採用しなかった。

庵（2001a:77-79）は「ている」の用法を、次のように分類した。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| a | 進行中 | b | 結果残存 | c | 繰り返し |
| d | 効力持続 | e | 記録 | f | 完了 |
| g | 反事実 | h | 単なる状態 | | |

また、庵（2001）は工藤（1995）の「パーフェクト」に対し、「効力をもつこと」はすべての例にはあてはまらないとし、「パーフェクト」にあたるものとして「効力持続」「記録」「完了」という３つの分類法を提言した。「効力」を持たない例として次のような例文をあげている。

(2) 昨年、本因坊治勲と小林光一天元が相次いで 1000 勝を達成したが、大竹英雄九段も昨年 5 月に<u>到達していた</u>ことがわかった。

上のような「効力」を持たない、「基準時以前に動作・出来事が完結」したことだけを述べるものを「完了」とし、未来完了は「～ている（だろう）」、過去完了は「～ていた」、現在完了として「～た」を認めている。

本稿は基本的に庵（2001a）の考え方を採用し、基準時を現在として過去に起こった出来事が現在に効力を持つ用法を「効力持続」とし、基準時が過去・未来で、それ以前に動作・作用・出来事が完結したことだけを述べるものを「完了」として以下の論を進める。現在完了は庵（2001a）にならい、「た」とする。ただし、庵(2001a)は「効力持続」と「記録」を別のものとして分類しているが、これらは実際の文脈では両者を兼ねる例が見られ、「記録」の文も現在に「効力」を持つという意味では共通した性質を持つため、この両者は一括して扱い、「効力持続」の下位分類として「記録」が存在するという考え方をとる。本稿では「効力持続」の定義を「過去に起こった事柄が現在に間接的な効力あるいは影響をもつこと」とする。

庵（2001a）の「反事実」という分類法は採用しなかった。「反事実」は「ている」そのものに反事実の意味があるのではなく、文脈によって反事実の意味が出てくることによる。

以上先行研究の検討の結果、本稿では「ている」の用法を次の７つに分類する。

① 運動短期　② 運動長期　③ 結果状態　④繰り返し
⑤ 効力持続　⑥ 性状　⑦ 完了

詳しくは第 3 章で述べるが、それぞれにあたる例文をあげておく。

① 運動短期

(3) お教えできない。テープが回ってる。（男性会話）

② 運動長期

(4) 版下と写植っていうのはひとつの部門でやってますから、（女性会話）

③ 結果状態

(5) （寝るときは）膀胱もからになっているほうがよい。（自然科学）

③ 繰り返し

(6) リーダーシップの欠如がしきりに指摘されている。（社会科学）

④ 効力持続

(7) うん、ぼくはあのー、局長と確認してんのよ。（男性会話）

⑤ 性状

(8) あ、そうかそうか、母数がちがってるんだ。（女性会話）

⑥ 完了

(9) 2546　05 I　あのー、よーするに、ポスターと、なにかで１００万、なにかで５０万、て払っていたものをぜーんぶまとめて、写植も含めて２００万にしちゃう、ったんですね、今回は。　（女性会話）

## 6　本稿の構成

本稿は 11 章によって成り立っている。

第 1 章は問題提起、第 2 章は使用コーパス、第 3 章はテクストの違いとテンス、第 4 章は「効力持続」について、第 5 章は「ている」の用法、第 6 章は学習者の「ている」の使用状況、第 7 章は「ていた」の用法、第８章は学習者の「ていた」の使用状況、第９章は「ていない」の用法、第 10 章はまとめ、第 11 章はこれからの課題と日本語教育への提言をそれぞれ述べる。

第 2 章の使用コーパスでは本研究で使用したコーパスについて説明する。

第 3 章のテクストの違いとテンスでは新書のテンスについて述べた。本稿で用いた新書は社会科学、自然科学のテクストであり、場合によって「科学的テクスト」という語を使う場合がある。

新書の基本的なテンスは「る」である。過去の事例や実験など、時系列的に事態の発生を述べる場合は「た」が用いられるが、そこから導き出される結論、解説、筆者の判断、一般論などは「る」によって表現される。

これに対し、会話は話者・聞き手が存在し話し手のいる現在を基準時として話を進めるものである。アスペクトを論じる場合、このテクストのテンスの違いを念頭においておく必要がある。

第 4 章では「効力持続」についての本稿の考え方を述べる。本稿では「効力持続」を過去の事態が現在に間接的な効力を持つ用法とする。また、未来の「効力持続」についても触れる。

第 5 章では会話と新書の「運動長期」と「効力持続」の「ている」について述べる。

本稿は動作継続を「運動短期」と「運動長期」に二分する。会話においては、「運動短期」は日常的な動作作用を表現するが、「運動長期」は仕事場面での長期的な活動を表現し、使われ方に差がある。会話の中での「効力持続」は、過去の出来事を現在と関係させることを目的として用い、話者は現在と関係を持たせたいと考える事態を「効力持続」で表現し、そうすることによって配慮などを示す場合がある。

新書での「効力持続」は引用として用いられる。「運動長期」は自然現象・社会現象・思想などを表し、新書においては「効力持続」とともに、話題提供、結論提示の機能を持つ。

第 6 章では学習者の「ている」の誤用を検討する。学習者コーパスを用いて誤用の傾向を探った。テクストの種類によって誤用の在り方が異なっていた。事態を時系列的に述べるテクストでは「た」との誤用、論述文的なテクストでは「る」との誤用が見られた。学習者の「ている」の誤用で最も多いのは「た」との混同であった。事態が進行するという意味の「た」が使えず、誤用となる例が多かった。

第 7 章はいくつかの観点から「ていた」の特性を考えた。

まず、動作継続の「ていた」と完了相の「た」の違いを取り上げる。次に「発見」の用法に触れ、「発見」の「ていた」が成立する条件を確認する。また、「完了」の「ていた」の成立の条件を示す。

次に会話と科学的なテクストでの「ていた」の機能を考える。会話では「ていた」は「思い出し」「気づき」を表現する。また「思い出し」によって丁寧さを表すこともできる。科学的なテクストでは「完了」の「ていた」によって時間的な進展の表現がなされていること、時系列に沿った表現がされる場合、「ていた」は話題として取り上げられる事象以前の状況を表現するのに用いられることを述べる。

第 8 章では学習者の「ていた」の誤用について考える。学習者が最も混乱するのは「た」と「ていた」であった。事態をそれに要する時間に関わらず、始めから終わりまでをまとめて表現する「まるごとの事態」の「た」の使い方が問題であることを述べる。

第 9 章では否定の「ていない」を取り上げる。否定の「ていない」は、①完了の否定であるか、②過去の文脈が必要なのか、③事態を間接的に把握する立場で使うか、④統括主題がある文脈で使うか、⑤どのテクストでも実現想定区間があるか、⑥非意図的な否定か、という疑問に答えようと思う。

第 10 章はまとめである。

「ている」については「効力持続」「運動長期」の用法が会話においても科学的なテクストにおいても重要な役割を果たしていることを述べる。

「ていた」は「ている」と異なり、基準時を設定する必要がある。「ていた」では「発見」「完了」の用法が重要である。それぞれの用法の成立する条件を述べる。

「ていない」では何を否定するかについて、直接体験か間接体験か、統括主題の存在、実現想定区間、意図性の有無など、いくつかの議論をとりあげる。その結果、「ていない」と「なかった」の境界は比較的あいまいだという結論になった。

第 11 章はこれからの課題と日本語教育への提言である。

本研究は「ている」「ていた」「ていない」を別々に捉えることを目的としたため、三者に共通する部分についての考察が不足している。コーパスの扱いも十分とはいえない。

日本語教育に対しては、テンスの教育を中級でもすること、「ている」「ていた」を初級の項目とだけ捉えるのでなく、中級でも取り上げること、テクストの違いによるテンス・アスペクトのふるまいの違いを認識することを提言したい。

注

(1) 日本語記述文法研究会（2009:3）では、談話を「文よりも大きな言語単位で、一般に語や文などのさまざまなレベルの言語表現が、適切な文脈に結びつけられることで構成される」 としている。本稿では談話ではなくテクストという語でこのような意味的なまとまりのある言語表現を指す。

(2) サコダ・コーパスは3年間にわたる学習者と日本語母語者の自然会話を文字化してコーパスとした縦断コーパスである。1991年7月から1994年3月までの期間の6名の学習者（中国語話者3名、韓国語話者3名　男性2名女性4名　18歳～28歳）と日本語母語話者との自由会話を3～４カ月ごとに8期、録音・文字起こししたとのことである（迫田2008）。

2018年現在、このコーパスはC-JAS（Corpus of Japanese As a Second language）として公開されている。

(3) 1例として、使役の用法について、新書を人文科学・社会科学・自然科学と大きく3分類し、それぞれでの出現状況を調査した（江田2008）ところ、人文科学は小説と似た傾向を示すという結果を得た。そこで、本調査では科学的なテクストの特色をより明確にもっている社会科学と自然科学の作品に対象を絞った。

(4) OPI（Oral Proficiency Intervew）とは全米外国語教育協会（American Council on the Teaching of Foreign Languages:ACTFL）が開発した口頭能力を測る試験で、15～30分間の試験官とのやりとりの形式で行われる（李・石川・砂川2018：161）。
鎌田修・山内博之両氏はＯＰＩデータを用いて『ＫＹコーパス』を作成した(p.25参照)。

## 第２章　使用コーパス

### １ 概観

母語話者の使用については調査時期が古いため、CD で発表されたコーパスを用い、検索も検索ソフト Kwic Finder を用いた。学習者の使用状況は『タグ付き KY コーパス（KY コーパス）』、『日本語学習者作文コーパス（作文コーパス）』、『多言語の日本語学習者横断コーパス（International Corpus of Japanese as a Second Language:『I-JAS』）』を用いた。

新書のデータは、日本語教育支援システム研究会によって開発された日本語教育支援システム（Computer Assisted System for Teaching & Learning / Japanese:CASTEL/J)を用いた。CASTEL/J は CD の形式で発表され、多種の辞書、新聞、日本語教科書、シナリオ、新書が収録されている。本稿はそのうち、新書を用いた。

会話では現代日本語研究会編（1999）『女性のことば職場篇』（以後女性会話）、同研究会編（2002）『男性のことば職場篇』（以後男性会話）を用いた。

『女性会話』は女性協力者 19 名、『男性会話』では男性協力者 21 名を中心に、職場での、当該協力者とその周辺の人たちの会話を録音し、文字起こししてコーパスとしたものである。場面は大きく「朝」「休憩」「会議」である。『女性会話』は 11421 行、552 分（約 9 時間 12 分）、『男性会話』は 11099 行、728 分（約 12 時間）のデータである。発話にはフォーマルなものとインフォーマルなものが含まれる。

一部で小説の結果も参考にした。小説は『新潮文庫の 100 冊』より作品を選んだ。『新潮文庫の 100 冊』は 1995 年に発売された日本の小説、外国語の小説の日本語訳のものを 100 冊収録した CD である。

学習者の日本語のコーパスはインターネット上に発表されたものを用いた。

『作文コーパス』は李在鎬氏を中心とする研究グループが構築したコーパスで、中国語母語・韓国語母語の二言語の学習者による二つのテーマの作文データ（「外国語が上手になる方法について」（192 名分）と「インターネット時代に新聞や雑誌は必要か」（112 名分））が収録されている。レベルは初級から上級で、人数は 304 名、総語数は 113,554 語である。（『日本語学習者作文コーパス』使い方）。

『KY コーパス』は鎌田修、山内博之両氏が構築したコーパスで、90 名分の OPI テープを文字化した言語資料である。中国語、英語、韓国語母語話者それぞれ 30 名ずつの発話が文字化されて収録されている。OPI の判定結果別の内訳は、初級 5 人、中級 10 人、上級 10 人、超級 5 人ずつとなっている。李在鎬氏が品詞・意味タグを付与し、検索ツールと共に公開している（タグ付き KY コーパストップページ）。

『I-JAS』は迫田久美子氏を中心とする研究グループが構築したコーパスで、12 の異なった母語の海外における日本語学習者、国内の教室環境の学習者、国内の自然習得者、日本語母語話者合計 660 名分の発話スクリプトと音声および作文（任意参加）が収録されている。2018 年に第三次データまで公開された。第三次データの被験者は、中国語母語話者（50

名）、ベトナム語・ハンガリー語・スペイン語・ロシア語の母語話者（各 35 名）、国内教室環境・自然環境（各 10 名）である。

収録されている内容はストーリーテリング２タスク、対話、ロールプレイ２タスク、絵描写（以上話し言葉）、ストーリーライティング２タスク（書き言葉）である。（『I-JAS』調査概要）

本稿では上の参加者のうち、日本語母語話者、自然環境での習得者を除いた学習者を対象とした。

## 2　母語話者用コーパス作成

母語話者については、上記の会話・小説・新書の既有のコーパスから、文字数が等量になるように一部をとり、小規模なコーパスを構成し、「ている」「ていた」「ていな」を検索し不要なものを削除する方法で資料を集めた。

会話と新書における「ている」の出現状況を比較するため、使用したコーパスは文字数カウント機能を用いて文字数をそろえた。

会話は『男性会話』『女性会話』より、会話部分の最初から 20 万字のところまで採用し、両者を合わせて 40 万字とした。女性会話は 11145 行目まで、男性会話は 8000 行までにあたる。これは、「女性会話」が 20 万 7 千字なので、端数を切り落とし 20 万字としたわけである。また、他のコーパスもそれぞれを 20 万字と分量をそろえた。

小説は、『新潮文庫の 100 冊』の 1960 年代以降の作品の中から、会話によって小説の流れが構成される作品以外のものから会話を省き、地の文を、一人称の視点から描いているものを 4 冊、三人称の視点から描いているものを 4 冊選んで、それぞれの作品から採用する部分に偏りがないように 5 万字ずつとり、合計 20 万字のコーパスを 2 種作成し、両者を合わせた(1)。

新書は『CASTEL/J』より自然科学、社会科学の新書をそれぞれ 4 冊選び、その中から採用する部分に偏りがないようにして 5 万字ずつとり、各 20 万字のコーパスを作り、両者を合わせた。

使用した作品は表１に載せた。

検索ソフトは KWIC Ver.3.28 を使用した。

表1　母語話者　使用資料一覧

| | |
|---|---|
| **会話** | |
| 現代日本語研究会編(1999)『女性のことば・職場編』ひつじ書房 | |
| 現代日本語研究会編(2002)『男性のことば・職場編』ひつじ書房 | |
| | |
| **小説** | |
| **一人称小説** | **三人称小説** |
| 沢木耕太郎（1981）『一瞬の夏』、、 | 安部公房（1962）『砂の女』 |
| 椎名誠（1987）『新橋烏森口青春篇』 | 北杜夫（1964）『楡家の人々』 |
| 宮本輝（1982）『錦繍』 | 塩野七生（1983）　『コンスタンティノープルの陥落』 |
| 村上春樹（1985）『世界の終りとハードボイルドワンダーランド』 | 筒井康隆（1977）『エディプスの恋人』 |
| | |
| **新書（日本語教育支援システム研究会編『CASTEL/J』より）** | |
| **自然科学入門書** | **社会科学入門書** |
| 井上昌次郎（1988）『睡眠の不思議』 | 織田武雄（1974）『地図の歴史―日本編』 |
| 都筑卓司（1991）『時間の不思議』 | 吉田寿三郎（1981）『日本の企業発展史』 |
| 中原秀臣（1991）『進化論が変わる』 | 中川剛（1985）『憲法を読む』 |
| 米山正信（1991）『化学とんち問答』 | 下川浩一（1990）『高齢化社会』 |
| | |

注

(1) 一人称小説と三人称小説という区分の立て方は工藤（1995：12）を参考にした。工藤（1995）では、一人称小説の地の文は（虚構の）語り手としての＜わたし＝一人称＞が存在して三人称小説の地の文とは人称構造が違っていると述べられている。

## 第３章　テクストの種類の違いとテンス

はじめに、テンスについてまとめる。新書・会話・小説のテンスを同一に考えるとそれぞれの特色が見えないのではないかという疑問に基づいた議論である。

### 1　先行研究

高橋（2003）は「る」「た」を完成相、「ている」「ていた」を継続相とし、「る」を非過去形、「た」を過去形と表現する。

完成相非過去形は未来の運動、直後の未来、アクチュアルな現在の動作や状態を表す。完成相過去形は過去の運動、直前過去、結果の局面を表す。このうち、直前過去は過去形でも非過去形でも表現できる。

（1）そうだ、君はあたまのいいことをいいました。
（2）さすがにいいことをいうよ、あなたは。（高橋 2003:119）

基本的なテンスと事象の推移の関係については、完成相は始発から終了までのまるごとの姿を示すが、それは事象の推移の点では「運動が始発から終了まで一過程分すすむということ」である。継続相は一定の時間をまたいで事柄が存在することを示し、事象の推移の点では「過程が存在することをあらわすだけで、過程がすすむことをあらわさない。」この過程を進ませるか進ませないかという対立が「順次的なことがらをあらわすか、同時的なことがらをあらわすかの対立となってあらわれる」（高橋 2003:109）と述べている。

テンスと時の関係では、「デキゴトとして一定の時間位置に局在するもの」であれば、テンス形式はテンス的な意味をもつが、「コンスタントに存在しつづけるコトガラ」、「特定されない時間位置でも一般的になりたつコトガラ」であればテンス的な意味を持つ表現がなされていてもそれらはテンス的な意味をもたない（高橋 2003：110）。また、繰り返し、属性、過去の一定の時間位置のなかに存在している物事を、質的属性を捉えて表現する場合には非過去形がテンスから解放される（高橋 2003：111）。継続相「している」「していた」は発話時あるいは過去の一定時以前に運動が完成したことを表す用法もある。

高橋（2003）は基本的なテンスと同時に、テンス的意味を持たない用法についても触れている。

日本語記述文法研究会(2007:117~124)はテンスについて、時間的な意味つまりテンポラリティをもつ用法とテンスがない場合について述べている。

テンス形式は「た」と「る」によって表現され、「た」は過去、「る」は非過去を表す。しかし、述語がテンスを表現しない時として、命令形・意志形などのもともとテンスを持たない場合と非過去形が脱時間的になり、テンス的な意味をあらわさない場合があると述べている。非過去形がテンスを表さない例として、劇やシナリオのト書き、手順を説明する場合、日記などの行動の覚書などの例を挙げている。

テンスとテクストの関係について見ていこう。
工藤（1995:210）は、テンスとテクストの関係について以下のようにまとめている。

・はなしあいのテクストにおいては＜終止＞の位置のテンス形式は発話時を基準として用いられる。
・小説の地の文ではアクチュアルな外的出来事提示部分＜典型的かたり＞での主導時制形式は過去形である。
・非アクチュアルな出来事提示部分＜解説＞の主導時制形式は、非過去形である。
・小説の地の文において一次的に重要なのは物語世界内部の出来事間の時間関係―＜継起性＝前進性＞＜非継起性（同時、以前、以後）＞ーである

以上のように、話し合いでは発話時を基準とし、小説の地の文では「た」形が出来事の進行を表し、＜解説＞の部分では非過去形が用いられるとして、テクストによってテンスが異なることを述べている。
また、工藤（1995:212-217）は、体験的ノンフィクションでは現場的同時進行性という効果を生むために、非過去形ならびに絶対的時間副詞が用いられるとしている。一方、非体験的ノンフィクションでは、「資料・記録という現在における痕跡に基づいて、非体験的な歴史的事実（間接知）が復元されて語られるとともに、歴史家の現在の立場から、その事実が意義づけられ解説・論述される。従って、事件の展開を示す完成相過去のシタと、論証的・解説的なパーフェクト相現在のシテイルが使用される」としている。この非体験的ノンフィクションとは「歴史的論述文のような、発話主体(書き手)の非体験的な、過去の出来事を提示する文章」と述べている。
工藤（1995）は話し合いのテクストの基準時は現在であるが、小説の基本的なテンスは「た」であり、「た」はタクシス的な働きする。そこに「ている」が入ることによって「た」によって進む物語の中の事象との同時性が示されるとしている。非体験的ノンフィクションでは事件の展開を示す「た」と論証的解説的な「ている」が用いられるとしている。この非体験的ノンフィクションは本稿で取り上げている科学的なテクストとテンスの上では似た性質を持つのであろうか。
石黒（2005:50）は、描写文と論説文という分類をたて、描写文と論説文は現在形と過去形の使い方が異なると述べている。
描写文は出来事時と執筆時が離れることから文章全体のベースは原則として過去形で、背景となる「地」が過去形、前面に出る「図」が現在形になる。それに対して論説文は執筆時から離れることがないため、「文章全体のベースは原則として現在形」、つまり、「論説文では「地」が現在形、「図」が過去形」と述べている。
一方、仁田（2009:216）は、テクストを、話者交代の起こり得る〈話し合い〉のテクストと、聞き手を直接意識しないで述べられる〈説き語り〉のテクストに分けられると述べている。さらに＜説き語り＞のテクストの中には〈語り物〉と〈論述〉があるとし、それぞれの定義

を以下のようにしている。<語り物>はある作り出された世界での出来事を記述するもの、<論述>は「話し手・聞き手がある話題をめぐって自らの考えや意見を証明したり述べたりしたもの」である

仁田（2009）は<語り物>では過去形が多用され、<論述>では非過去形が多用されるとして<語り物><論述>3 編ずつの文末のテンスの調査結果を載せている。

表 1 でわかるように、〈語り物〉では過去形が多く、〈論述〉では非過去形が多い。そしてこのことはヴァインリッヒ（1982）がすでに述べた事であるとしている。しかし、上の調査は会話および引用文を除外したとのことであり（仁田 2009:207）、また、それぞれの作品が 140 文程度の小さなものである。本稿が問題にしている「ている」はこの調査では除外されており、それは科学的なテクストの調査としては不十分といえるであろう。

表1　過去形と非過去形の現れ方

| | 過去形 | 非過去形 |
|---|---|---|
| 舞踏会（芥川龍之介） | 93 | 2 |
| 赤十字の父アンリーデュナン | 108 | 10 |
| 北天の星（吉村昭） | 109 | 33 |
| 社会的人間論（清水幾太郎） | 3 | 122 |
| 文化人類学のすすめ（祖父江孝男） | 10 | 98 |
| 考えを深めながら（小学校教科書より | 0 | 46 |
| 仁田（2009:217） | | |

そこで本稿は本調査に用いた新書のテンス・アスペクトを調査した。

本調査の目的は以下のようである。

・仁田（2009）の調査では〈論述〉文は過去形が 5%程度、非過去形が 95%程度となっているが、新書のテクストではどのような結果になるか。
・文末テンスの調査は「ている」「ていた」を考慮に入れて数えるとどのような結果になるか。
・非過去形「る」はどのように使われているか。

## 2　調査方法

作成した新書コーパスを用い、KWIC Finder で「。」を検索し、「。」の直前の活用形によって「る」「た」「ている」「ていた」に分類した。その際、文語文、会話文は対象からはずした。また、次の例のように「。」の前に（　）などで引用した資料が書かれているものは（　）の前の文のテンス・アスペクトを調べた。たとえば（3）では「である」を「る」として数えたわけである。

（3）厚生省の調査によれば、日本人の平均寿命は一九七九年現在で、男七十三・四六歳、女七十八・八九歳である（『各年簡易生命表』より）。（社会科学）

否定の文もテンスに従い分類した。つまり、「～ない」は「る」、「～ていない」は「ている」とした。体言止めの文は日本語記述文法研究会（2007）の下の例を参考に、文脈を見て「る」か「た」に振り分けた。

(4)「昨日は雨。1 日中家にいる」は過去。
「首相は明日、外遊先の中東に出発。」は未来
日本語記述文法研究会（2007：117）

モダリティ成分は文末のテンスによって分類した。例えば、「だろう」「にちがいない」など通常「る」で使うものは「る」に、「はずだ」のように「はずだ」「はずだった」などと活用するものはそのテンスに従った。「のだ」は「～のだ」は「る」に、「～のだった」は「た」にした。

疑問の「か」は「か」の前の要素のテンス・アスペクトに従った。「言ったか」は「た」に、「言ったのか」は「言ったのだ＋か」として「る」とした。

総文数は 7396 文であった。

## 3　調査結果

表 2 のように「る」が社会科学で 60%、自然科学で 77%、「た」が社会科学で約 24%、自然科学で 12%という結果になった。仁田（2009）が言うように論述的な科学のテクストでは「る」が多いことがわかる。しかし、仁田（2009）の調査のように「た」が「る」の 1/10 というほどではなかった。

表2　新書の文末テンス･アスペクト

| | 社会科学 | | 自然科学 | |
|---|---|---|---|---|
| る | 1799 | 60.2% | 3406 | 77.3% |
| た | 711 | 23.8% | 530 | 12.0% |
| ている | 426 | 14.3% | 439 | 10.0% |
| ていた | 50 | 1.7% | 34 | 0.8% |
| 合計 | 2986 | 100.0% | 4409 | 100.0% |

## 4　「る」「た」「ている」の用法

### 4.1　明示的な過去を示す「た」

明示的な過去、たとえば時系列的な出来事、過去に行われた実験、実験の結果明らかになった事柄、変化などは「た」で示される。

社会科学では『地図の歴史―日本編』、『日本の企業発展史』などの歴史的な本を使っているため、「た」が多くなったのであろう。自然科学では、『睡眠の不思議』『進化論が変わる』は研究史に言及がある。過去の研究や実験に触れる場合、「た」が用いられていた。

はじめに時系列的な出来事の例を挙げる。『日本の企業発展史』の一節である。主眼が文末であり、それぞれの文が長いので、省略できるところは省略して載せた。

(5) すでにみたように、高度成長期においては、高度な重化学工業化を目ざした大型設備投資が進められたが、その花形は石油化学コンビナートや臨海一貫製鋼プラント①であ

った。（中略）海外からの原料の輸送コストが大幅に切り下げられ、大型一貫プラントの臨海設置が脚光を浴び、（中略）君津などに、石油化学、製鉄を中心とする大型プラントが次々と②誕生した。石油化学の場合は、エチレンやナフサなどのセンターを中心に、これを加工原料として供給を受ける化学繊維や樹脂など多角的な生産工程が③集約されている。また一貫製鋼プラントの場合には、（中略）戦前の十倍以上の大規模出銑能力のある大型高炉と、（中略）大型転炉、そして（中略）ストリップミルなどが連続性をもつ形で建設され、連続操業で大きな規模の経済性を④実現した。それまでの日本では、緊密な連携性をもった（中略）一貫工程は⑤実現されていなかった。臨海製鉄所と銑鋼一貫体制の完成によって、日本の鉄鋼業は（中略）その高い国際競争力を背景に（中略）日本の輸出産業トップの座を⑥占めた。これらコンビナートや一貫製鋼プラントは、（中略）莫大な投資が必要であるので、中には（中略）共同のナフサセンターやエチレンセンターで組織する、相乗り型のコンビナートも⑦建設されている。このような（中略）設備投資拡大と、製品内容の多様化は、製品コストの引き下げと品質向上をもたらし、関連する加工産業の発展を⑧支えた。（社会科学）

高度経済成長期に次々に多くの大型プラントが建設されたことが述べられており、時系列的に表現する場合は「た」が用いられることがわかる。しかし、歴史的な記述であっても、③⑦のように「ている」が用いられている。

次に自然科学の文章をあげる。（6）は過去に行われた実験についての記述である。

（6）レム睡眠だけを選択的にうばう実験は、一九六〇年にデメントによりはじめて①おこなわれた。このとき、かれはレム断眠をすると精神障害がおこる、と②勇み足をしてしまった。これが世界中に大きな波紋をなげかけ、いまだにその③後遺症が残っている。当時レム睡眠は夢見睡眠である、と考えられていたから、レム断眠は夢をうばうことだと④みなされた。だから、夢が精神のバランスに必須である、と⑤解釈されてしまったのだ。この結論は、デメントをふくむ多くの専門家により、すぐに訂正されたのだが、⑥あとの祭であった。（自然科学）

実験が行われた、その時科学者が失敗をした、その結果起こったこと、などという過去の事柄が「た」で表されている。しかし、ここでも、③のように、現在まで関係のある事柄は「ている」で表現されている。

実験の結果明らかになったことは「発見」（高橋 1985）の意味が表面化するのであろうか、「た」で表現されることが多い（（7）①②）。

（7）回復第一～三夜の睡眠は、ふかいノンレム睡眠とレム睡眠とが、それぞれ全体の三分の一ちかくを占めている。ふかいノンレム睡眠は、いつもならこの半分の比率である。レム睡眠は、いつもならこの三分の二の比率である。したがって、あさいノンレム睡眠

の比率はいちじるしく①へったし、睡眠中の覚醒はまったく②なかった。文句なしの熟睡である。（自然科学）

また、変化の結果も「た」で表される。

(8) マーケティングもこのような組織特性を反映し、製品開発部門、市場調査部門、製造部門、販売促進部門の風通しがよくなり、マーケティング戦略のもとでの全体的統合が①進んだ。

(8) の例ではマーケティングに関する組織の統合が行われた、と変化を「た」で表現している。

以上のように明確な過去、あるいは時系列的な事柄、発見、変化は「た」で表現される。

### 4.2　事実・分析・判断を示す「る」

時に関わらない事態や属性、実験の内容の説明、調査や実験から導き出される事実、実験や出来事の分析は「る」で示す。

高橋（2003）は、属性や過去の一定の時間位置のなかに存在している物事を、その質的属性を捉えて表現する場合はテンスより解放される非過去形が用いられると述べているが、その用法が多いといえる。

(9) は時に関わらない事態と属性の例である。

(9) ブラックホールは確かに回転して運動量をもっているが、その他になにか固有の性質を備えているのか。このことも多くの専門家によって調べられた。たとえば地球なら陸地あり海あり大気あり、その表面は寒暖の別ありで、大いに変化に富んでいる。月面だって、砂漠ありクレーターありで複雑な様相を示す。ところがブラックホールは、何も情報を得られない暗い玉（？）である。（自然科学）

(9) の「複雑な様相を示す」は時に関わらない事態、「暗い玉である」は属性を述べている例である。

次は実験や事柄の内容を説明している例である。

(10) さて、動物実験に目をむけてみよう。人間を被験者とするばあいにくらべて、動物実験ではもっと徹底した解析をくわえることができるからである。はじめに、ネズミのこどものレム睡眠をうばった実験を紹介しよう。これは、オランダのマジド・ミルミランと、フィンランドのレーナ・ヒラキヴィの最近のしごとである。

すでに記したように、胎児や新生児の眠りは大半がレム睡眠である。ネズミは、とくにたいへん未熟な状態でうまれてくるから、レム睡眠が多い。生後一週間からはじめて

三週齢になるまでの乳児期に、毎日薬剤を注射して、レム睡眠をかなりの程度まで遮断してしまうことができる。

この薬剤には、神経伝達物質――神経細胞の終末（シナプス）から分泌されて、つぎの細胞へ情報を伝える物質――のうちのあるものをはたらかせなくする薬理作用がある。レム睡眠に関わる神経細胞の神経伝達物質は、モノアミンとよばれるいくつかの物質と、アセチルコリンとよばれる物質なので、これらをおさえるわけである。（自然科学）

上の例のように、実験の内容、睡眠の性質、薬の作用など、事柄の内容の説明には「る」が用いられる。

事柄の分析、筆者の判断も「る」で述べられる。

(11) 現在の日本が、以上述べてきたような深刻な事態に立ち至りつつあるにもかかわらず、わが国民の大多数は、(中略)楽観視しているように見受けられる。

その心理的背景を探っていくと、(中略)西欧型福祉社会に対する、“期待”と“憧憬”が多くの日本人の心の底にあるように私には思われる。（中略）

だが誠に残念なことながら、(中略)これら国々の“進んだ”高齢化対策は(中略)全体としてみると完全に破綻をきたしてしまったといってよい。

たとえばスウェーデン。この国では四十四年間にわたって高福祉政策に注力してきた政権がついに交替を余儀なくされた。このことは、“高負担・高福祉”路線をスウェーデン国民が自ら否定したことに他ならない。(社会科学)

引用した箇所の前には、イギリスやスウェーデンの高福祉政策が注目されていた時期があったが、それらの国の政策が転換されたことを述べている。引用箇所では、その変化に対する筆者の評価・判断が「～と見受けられる＝のように見える」「と思われる」「～といってよい＝だろう」と「る」で述べられている。

### 4.3　「る」「た」の共存

時系列的な描写は「た」、属性・説明は「る」と分類は可能であるが、時系列的な描写であれば必ず「た」というわけではない。

注意すべきことは、「る」で表現されていることが常に非過去のテンスを表しているわけではないということである。

(12) マルメも老人対策を誇りにしているところで、このとき案内してくれた人は、脊椎損傷で両下肢があまり①きかない。補助具をつけて特別な自動車で町を②案内してくれた。

このとき連れていかれたマルメ老人サービス・センターは中心街の(中略)非常に豪華な③ものである。受付の人も④身体障害者であった。

このセンターでは、上等な食事も安い価格で食べられるし、(中略)物理療法など多くの設備が⑤整っている。六十七歳になれば誰でもこのような施設を使用する⑥ことができる。(社会科学)

スウェーデンで老人施設を訪問した時の報告である。筆者自身が訪問したので②案内してくれた、④身体障碍者であった、などのように「た」も使われているが、①（自由が）きかない、③豪華なものである、⑤整っている、のように、そこで見聞したことについて「その人は自由がきかなかった」を「自由がきかない」、「豪華であった」を「豪華なものだ」、「整っていた」を「整っている」などのように「る」で表現する例も使われている。そして①から⑤は「る」と「た」を入れ替えて表現しても問題はない。⑥は一般的な規則なので、これは「る」でなければならない。このように「る」「た」の入れ替えのきかない例もあるが、入れ替えても問題がない書き方がなされているということはもっと意識してよいであろう。

テクストによっては「る」「た」の必然性が弱く、入れ替えが可能なものがある。

(13) 第一次世界大戦のあと、ヨーロッパに嗜眠性脳炎が①流行した。俗に「眠り病」とよばれるウイルス性の②脳炎である。この病気の初期に、患者は熱をだし興奮し、③不眠になる。やがて、病状は嗜眠、疲労、さらに過度の睡眠へと④かわる。死亡した患者の脳組織をしらべると、間脳の視床や視床下部を中心に病理変化が⑤みつかった。第三脳室の周囲と中脳水道の周囲というように脳脊髄液の通路ぞいに局在する⑥ものだ。当時、眠り病を研究したオーストリアの神経学者コンスタンチン・フォン・エコノモは、この知識をもとに、この部位に睡眠調節の中枢がある、という説を⑦発表した。(自然科学)

この例でも病気の性質を述べる③④、原因を説明する⑥は「る」になるが、それ以外は、一般化して述べるか、過去の事態として述べるかという表現の仕方の違いによって「る」「た」の選択が可能である。

「る」「た」の一般的な用法はあるが、われわれは述べようとする姿勢によって「る」と「た」を切り替えて文章を構成する。「た」が続いたので調子を変えるため、のような理由によっても「る」「た」は変更される場合がある。

### 4.4 引用を示す「ている」、現在と関係させる「ている」

「ている」は「記録」の用法があるが、それは過去の研究の引用、あるいは情報を示すために用いられることが多い。

(14)かれらは、ながいあいだ眠らないと体内に「睡眠毒素」がたまり、これが睡眠を誘発する、と考えた。この研究は、一九一三年に出版されたフランス語の論文にまとめられていて、たいへん有名である。(自然科学)

(15)ＤＳＩＰについては、以後一〇年間に膨大な量の研究が世界各国でおこなわれ、様々な結果が蓄積されている。臨床実験もスイスを中心にこころみられていて、かなりの成果をおさめている。(自然科学)

(14)(15)どちらも「効力持続」の「記録」用法の「ている」であるが、過去の研究を引用したり、過去の情報について述べたりしている。

次に、「効力持続」が現在に効力が残っていることを表す例である。

(16)また西ドイツのさる工場で、今はどこでも使われているプラスねじを見つけ、これをひろって帰り、トルクが強く自動ドリルで早くねじの締め付けができるこのプラスねじの試作を命じ、これが思わぬ成功を収めてもいる。(社会科学)

(16) はねじを作ることで「成功をおさめた」からホンダは世界的な企業になったと解釈でき、現在に効力があることを表している。

時系列的な事例を述べて、そこから問題点を洗い出したり結論を引き出したりする論を構成する場合、事例は「た」であるが、そこから導かれた結論などは「る」で表現する場合もある。

(17) 日本の大型流通業のしにせである百貨店は、戦前の大都会文化の一つの①象徴だった。三越、伊勢丹、（中略）などは、もともとしにせの呉服店だったことはよく②知られている。そしてこれらの呉服店が洋風文化の到来を受け入れ、（中略）豪華な店舗を構えてやがてその黄金時代を築くに③いたった。

これらの百貨店が、（中略）都心の目抜きに立地したのに対して、東京、京阪神などの私鉄の発達に伴って成立した電鉄会社の経営する終点駅のターミナルデパートは、（中略）各地に出現し、沿線の乗客を客層として④集めた。

もともと流通業というのは、（中略）革新的な試みはいつも関西を発信源としている⑤ことが多い。ターミナルデパートもそうだし、（中略）バーゲンセールを定着させたのもみな関西系デパートであり、スーパーでは主婦の店からスタートしたダイエー、（中略）など、みな関西から興り、やがて東京にも⑥波及していっている。

それにしても、百貨店を（中略）大衆化させていったのは関西⑦である。そこには、大阪商人の商売に徹した合理主義と革新性が⑧認められる。

とにかく、戦前から戦後５０年代の終わり頃までは、百貨店は（中略）黄金時代⑨であった。（社会科学）

百貨店の歴史と関西の経済的な先進性が述べられている。①③④⑨でデパートの歴史が語られるが、②⑥では「ている」が使われている。②の「よく知られている」は現在も多くの人が知っているため、結果状態と理解できる、⑥は関西から始まった革新的な試みが東京に波及している、と述べている。これは現在まで続いていると理解すれば結果状態であり、もともとの文が戦前からのデパートの歴史を物語る文章であるということを考えれば、過去の歴史に関西が影響を与えていた、と新書の述べている時代に対する影響と理解することもできる。新書の「た」「る」が「た」だから過去、「る」だから現在、と割り切れないため、この⑥は結果状態なのか、効力持続なのか、わかりにくいといえる。

## 5　まとめ

大学で学ぶ学習者が参考書として使うであろう新書を資料として使い文末のテンスの調査をしたところ、新書では「る」が 60%以上、分野によっては 80%近くになることが分かった。

「る」は、時に関わらない内容、一般的な事を述べる用法、解説、筆者の判断を述べる用法が多く、科学的なテクストでは「る」が重要であることがわかった。「る」には一般的なことを述べる、属性を表す用法がある、などの指摘は従来からなされていた（高橋 2003、現代日本語記述文法研究会 2007）。しかし、本稿は、この用法の重要性とそれが大きく関わるテクストを調査によって示したことで従来の研究に多少の新しい情報を付け加えた。

「た」は、科学的なテクストでは、過去の事例や実験など、時系列に沿った表現をする場合、個別の事態を表現する場合に用いられる。

「ている」は新書では「効力持続」の用法が重要である。「効力持続」は引用を表し、また、過去の事態を現在と関係のある事柄として述べたい場合に用いられることがある。

科学的なテクストでは過去の事態を述べると共に、そこから導かれる一般論や話者の判断などが組み込まれた文章になることがあり、文章の「た」「る」は「た」だから過去、「る」だから非過去、と単純に整理できるものではない。「た」と「る」は相互に入れ替えが可能な場合も多々ある。

「る」が多い、「ている」が引用あるいは過去の事態を現在に関係させて述べるなどのテンス・アスペクトの性質は、科学が一般的な傾向やものの本質・性質、社会の仕組みなどを解説しようとするテクストであること、現在の我々の関心と結び付けて語ろうとしていることによるのであろう。

また、科学的なテクストでは「る」が基本であるが、これらの「る」「ている」で表現されている事柄を「た」に置き換えることが可能な場合がある。それは、「る」「ている」で表現されていることのもとになっている事象が「た」であるということによる。

## 第４章　「効力持続」について

本章では、「ている」の用法で多くの議論がなされている「効力持続」について、先行研究であげられた問題点を整理し、本論の考え方を述べたい。

### 1　先行研究

「経験」を「結果状態」から独立させて一つの用法と意識したのは藤井（1969）である。藤井(1969:105)は金田一（1950、1955）の「あの人はたくさんの小説を書いている」の「書いている」は「過去において行われた動作・作用そのものが問題であって、それを現在から眺めた場合に用いるもの」としている。結果状態が現在の状態を表すため「今・現在」という修飾語をつけ得るのに対し、「経験」は現在の状態を表さないので

（1）×現在たくさんの小説を書いている。

とは言えないとしている。また、動作・作用を問題にするので、動作・作用を表さない動詞は「ている」をつけて「経験」を表すことはできないとして以下の例文をあげた。

（2）×いままでに何度もうぬぼれている。
（3）×いままでに何度も疲れている。
（4）×いままでに何度もふとっている。（（1）～（4）藤井 1969：106）

吉川（1973）は、この「ている」は「た」に置き換えが可能であると述べている。

工藤（1982:78）はこの用法の特質を「現在有効な過去の運動の実現」とまとめ、
① 過去に実現した運動が記録として現在に残されていること
② 過去に実現した運動が現在の状態に何らかのかかわりをもっていること
を表すとしている。

工藤（1982）によってこの用法の特徴が現在に対する効力効果であるという点が明確にされた。また、「記録が残っていること」「現在とのかかわり」という二つの特質も規定された。

寺村（1984:133）はこの用法を「過去の事実の回想」と表現し、「過去の事実を、いま改めて確認し、ある現実の文脈の中でその意義を吟味しようとする心理を反映」した用法であり、「結果状態は現状説明的、過去の事実の回想は過去の事実の意義、意味を考える心理の反映である」と述べている。その性質から、推理小説などで過去の事実を前に推理を働かせる場面、あるいは文学史、作家研究、スポーツ、囲碁将棋の記録などで過去の事実を吟味したり意義づけたりする場合に用いられるとしている。

工藤（1995:99）は「パーフェクト」について＜ある設定された時点において、それより前に実現した運動がひきつづき関わり、効力をもっていること＞を表すとし、「パーフェクト」の規定として次の３点を挙げている。

① 発話時点、出来事時点とは異なる＜設定時点＞が常にある。
② 設定時点に対して出来事時点が先行しており、テンス的要素としての＜先行性＞を含んでいる。
③ 先行して起こった運動が設定時点と結びつき＝関連性をもっていると捉えられている。運動自体の＜完成性＞とともに、その運動が実現した後の＜効力＞も複合的に捉えるというアスペクト的要素を持っている。

工藤（1995:104-105）は「パーフェクト」がもつ＜設定時点とのむすびつき＝関連性＞は＜設定時点における先行する運動の効力の現存＞であると説明している。そして「パーフェクト」は＜設定時点に対する出来事時点の先行性＞というテンス的要素と＜運動自体の完成性+その効力＞というアスペクト的要素を相互前提的に含みこんだ複合的な時間概念である」と述べている。また、設定時点・出来事時点・発話時点の三つの時点が関わるとして、設定時点のたてかたで未来パーフェクト・現在パーフェクト・過去パーフェクトがあるとしている。

庵（2001ａ:77）が工藤（1995）の「パーフェクト」を「効力持続・記録」と「完了」に分け、両者を区別すべきであると提案していることは先に述べた。それは「効力をもつこと」はすべての例にはあてはまらないためと述べ、次の例をあげている。

(5) （テレビのニュース）俳優の渥美清さんが１週間前に亡くなっていたことがわかりました。

本論は先にも述べたが、「ている」に関して「効力持続」という用語を使い、過去の出来事で現在に効力あるいは影響があるものを取り上げる。「ていた」については、用例をあげ、どのように理解するとよいか、考えたい。

工藤（1995:112-116）はまた「パーフェクト」の機能についても取り上げている。小説では、「た」の連続が、事柄が連続して次々に展開させ＜ものがたり＞の筋を前進させていく働きをするのに対し、「ている」は「ものがたりの時間の流れを中断させて、しばしそこに留まり、同時的なこと、共存している出来事を導入する。そして「シテイタ＜パーフェクト＞は同じく筋を中断するが、同時的な出来事ではなく、先行する出来事を導入する」としている。

さらに「パーフェクト」は＜時間的後退性＞だけでなく、＜理由の説明性＞という機能ももっており、この＜理由の説明性＞は非体験的ノンフィクションで現在パーフェクトがよく使われる理由であると述べている。

本論はこの「効力持続」の機能について、会話と新書ではどのような機能が考えられるか、用例を検討する中で考えていく。

しかし、岩崎（2000:34）は工藤の「パーフェクト」に対して、次の例をあげ、（6）の「あいている」は「あく」という動作終了後の結果が「る」によって現在に位置づけられ、（7）では「食べる」という動作終了後の効力が「る」によって現在に位置づけられている

という点で同じものであるとし、「パーフェクト」と結果継続は、結果継続が結果動詞に限られるという違いはあるものの、本質は同じもので、「パーフェクト」は結果継続の一バリアントであるとしている。

（6）窓が開いている。
（7）ご飯はもう食べている。（岩崎 2000：34）

工藤（1995:122-123）も、結果状態を状態パーフェクトと呼び、動作パーフェクトと状態パーフェクトの違いは効力が存在するかどうかであると述べ、結果状態と動作パーフェクトの間には、直接結果の有無、変化の形跡、設定時点との関わりの点について中間段階があるとして例をあげている。

庵（2001ａ）が岩崎（2000）の主張に理解を示しつつ、工藤（1995）の「パーフェクト」を「効力持続・記録」と「完了」に分け、両者を区別すべきであると提案していることは先に述べた。

「効力持続」は「過去に起こった動作・出来事の結果生じた効力が観察時（多くの場合は発話時）にも存在する」ことであり、効力というのは「現在観察される事実/属性が存在すること」で、「効力持続」の文では属性が表現され、

（8）父は若いころたくさん遊んでいる。（例文(8)～(11)庵 2001ａ）

例文（8）の場合は、例えば「若い者の行動に理解がある」という属性がよみとれるとしている（庵 2001a:83）。

本稿は、属性はどの程度の文において読み取れるのか、実際の用例の中で検討してみたい。

発話者がある会話のようなテクストでは発話時が想定できるが、新書のような科学的なテクストでは発話時はどのように設定すればいいのであろう。また、前章で見たように、「た」と「る」の入れ替えが可能なテクストでは、現在まで影響がある、という表現をどのように考えればいいのだろうか。

「記録」は「観察時以前の出来事を何らかの証拠に基づいて述べたり、主語の経歴として述べたりする際に用いられる」として以下の例文をあげている。

（9）犯人は 3 日前この店でうどんを食べている。（庵 2001ａ：84）

「効力持続」と「記録」は 1）「効力持続」では「述部が主語に対して有意な属性付けになっていなければならないのに対し、記録は証拠に基づいて述べているだけであるためそうした制約はない」（2001ａ：85）、2）「記録」は証拠が必要だが「効力持続」はそうでは

ない。また、「記録」で証拠を出さなければならないことから、以下のようにタ形が使いにくくなると述べている（2001ａ：85）

（10）？『権不十年』の著者によると、[細川氏]はこんなことを述べた。
（庵 2001ａ：？の判断も庵）

本稿は、新書を資料として使うため、証拠をあげて述べる「記録」の用法は重要と考える。「記録」の用法の新書での用いられ方について検討したい。

井上（2001）は「過去の出来事を表す表現が「シタ」「シテイル」と二つあるのはどうしてか」という問いを発し、「記録用法」の「シテイル」は当該の出来事を「現存する記録や痕跡を介してのみ把握可能なできごと」として述べる表現であるため、「シタ」で述べることはできない。それは「シタ」がその出来事を「出来事が実現された経過が具体的に把握されていなければ使えない」表現であるためである、と述べている（2001：113）。一方「過去的用法」では「出来事が実現された経過が把握できているのに「シテイル」が使えるのはどうしてかというと、それは過去の出来事を「現在も有効なある状態に従属する一局面」として捉えるためであるとし、その出来事の背後に、ある統括主題が存在する場合は「シテイル」が使えるとしている（2001：113）。

また、過去の出来事を表す表現を、「経験・記録用法のシテイル」は「過去の出来事を、発話時において有効なある統括主題に従属する一事例として述べる」のに対し、「シタ」は「実現の経過（少なくともその一端）が把握できている過去の出来事を統括主題に従属しない独立した出来事として述べる」としている（2001：154）。

井上（2001）では「た」と「ている」の置換えの問題、「経験記録用法」の「ている」が統括主題のもとで使われることが述べられている。「記録」の用法は「た」に置換えができないということは庵（2001ａ）も述べている。これはどのテクストでも同様なのであろうか。例えば科学的な文章では直接体験したことを述べている文章は少ない。このようなテクストでは「ている」と「た」の関係はどのようになるのであろうか。また、会話で「パーフェクト」の「ている」を使う場合は必ず統括主題が存在するのだろうか。

以上の先行研究をまとめる中で、本稿が検討したいと考えた論点をあげると

1　「効力」の存在をどのように捉えればよいか。

2　「結果継続」と「効力持続」はどのように考えればいいか。

3　「属性」の例はどの程度あるか。「効力持続」の中での「属性」の位置づけはどのようなものであるか。

4　「記録」の用法と新書でのテンスをどう捉えるか。

にまとめられる。以下、順に考え、本稿での「効力持続」の位置づけを述べたい。

## 2　「効力」の存在について

本節では「効力持続」の「効力」について考え、同時に「現在パーフェクト」「過去パーフェクト」あるいは「完了」という用語についても考える。

工藤（1995）は未来・現在・過去に「パーフェクト」の用法があり、それらは発話時とは別に設定時があり、その設定時より以前におこった出来事が設定時に対して、効力を持ち、影響を与えるとし、設定時によって、過去パーフェクト・現在パーフェクト・未来パーフェクトがあるとしている。

工藤（1995:122）は効力について変化動詞の結果と運動動詞の効力を対比させて説明している。変化動詞による変化が起こった場合は必然的に直接的な結果が表れるのに対し、運動動詞による効力は偶然的、間接的な結果となるとして次のような例をあげている。

（11）「豆の様子じゃ、十里ぐらい歩いてるよ。」（工藤 1995：126）

十里歩いたからといって必ずだれでも豆ができるわけではない。その意味では、「窓が閉まっている」といった場合は必ず閉まった窓が存在するのと違っている。こうした間接的、偶発的な結果を効力とする。

庵（2001ａ）は、工藤（1995）の「効力持続」について、すべての文が効力を示すとは限らないとして、現在パーフェクトという用語を採用せず「効力持続」「記録」とすることを提案している。同様に、過去パーフェクトではなく、完了とすることを提案している。これは基準時以前に動作・出来事が完結したことを表し「効力持続」のように動作・出来事の効力が認められないものであるとしている。

本稿では基準時が現在で「ている」を使う例については庵(2001a)の用語を用い「効力持続」とし、過去については庵（2001a）の用語である「完了」を使う。未来については、効力の存在が見られる例があるため、未来の効力持続は認める。同時に未来の「完了」も認める。

以下、本稿の考え方を述べる。

庵（2001a）が指摘するように、工藤（1995）の例文には効力が読み取れる例と効力が読みとれない例が入っているようである。

（12）「当り前でしょう。君が帰って来る頃は、私は 30 を越しているわ。とっくにどこかの奥さんになっていますよ。」

（13）明くる日、私は彼の机に近寄って、その番組の話をした。彼も番組を見ていた。「新宿のタオスです。ちょっといかすでしょう。」その夜案内してくれるように、話をもっていくのに苦労はなかった。（工藤 1995：103　下線も工藤）

（12）は未来パーフェクト、（13）は過去パーフェクトの例として挙げられおり、（12）は結婚しているからあなたとはそれなりの関係しか持てない、（13）は番組をみていたから

案内してもらえた、と効力が読める。しかし、すべての例で効力が読み取れるかというとそうとも言えない。例えば次の例は「ていた」で表現されている例であるが、

（14）明治 20 年の春、吟子は基督教日本組合教会の関東地区例会で、大宮教会の牧師、大久保慎次郎夫妻を知った。この年の 7 月、海老名弾正は家庭内の不幸で転勤できなくなっていた親友横井時雄の替りに熊本へ転勤することになり、本郷教会を去っていた。（例文工藤 1995：99　下線工藤）

この例では明治 20 年吟子が大久保慎次郎夫妻を知ったことが設定時点で、それに対して海老名弾正の転勤が以前であると述べられており、7 月に海老名弾正が本郷教会を去ったことはそれ以前の出来事であると図示されている（工藤 1995：100）。しかし、この転勤はどのような効力をもつのだろうか。引用されている例からは読み取りにくかったので本文にあたってみた。この後ろには大久保慎次郎の妻との交流の話、吟子の衣装の好みの話が続く。

（15）大久保慎次郎とはクリスチャンとして知り合っただけの関係であったが、その夫人とは女権拡張へ同じ意志をもっていたところから吟子と夫人は急速に近づいた。東京へ出て来ると夫人は必ず吟子の所に立ち寄り、一夜語り明かしていく。この夫人は徳富蘇峰の実妹で、久布白落実の母でもあり、当時の知識階級の名流夫人として高名な人でもあった。

　開業し、生活が安定してから、吟子は地色は黒味がかった、柄は小さな縞模様の地味なものを着ていたが、生地は縮緬、お召、紋羽二重といった上等のものしか着なかった。夏には黒絽の紋付羽織を着る、というように流行もとり入れた。（花埋み）

　海老名弾正が本郷教会を去ったことは間接的には大久保清次郎の妻との交流と関係があるといえないこともないが、「去っていた」こととその後の話の展開はあまり関係がない。

（16）それから近処のバナナを買ってもらい、パインアップルの罐詰を買いこみ、牛乳を飲み食パンを食って、それが終わるとまた元の道をまっすぐに戻って来た。夕方船へつくまでには彼等はシンガポールの「通」になっていた。（工藤 1995：101）

（16）は、移民船に乗っていた人々が彼らのできる小さな体験をもとにシンガポールのイメージを作ったという経験の狭さを物語っている部分であろう。「シンガポールの通になった」ことがその後の何らかの効力を持つことになったことは述べられていない。以上のように「ていた」では「効力」が読み取りにくい例が見られた。

　効力というものがそもそも間接的、偶発的なものであるという定義からは、効力の読み取り方が読み取る側によって違う可能性も考えられる。また、過去パーフェクト、現在パーフェクト、未来パーフェクトと規則的に捉える方が整理されているという考え方もあり得る。

過去の効力について見てきた。次に、未来には効力がある例があるかどうか、であるが、以下のような例が高梨（2014:35）で提示されている。

（17）5メートルほど先にバス停があります。そこで待っていてください。

高梨（2014）によると、それぞれ50名の母語話者・学習者にアンケート調査をしたところ、母語話者は9割以上が正解を選んだのに対し、学習者は9割近くが誤答となっている。
江田（2018）はこの問題をとりあげ、設定時点が未来の効力持続であると考察している。５で取り上げる。

本稿では設定時が現在・未来である用法を「効力持続」とし、工藤（1995）の枠組みを使って以下のように定義して使う。
1　設定時点に対して出来事時点が先行する。
2　「効力持続」の設定時点は、会話では現在または未来である。
3　「効力持続」では設定時点以前に先行して起こった運動・作用、出来事が設定時点に対して効力・影響を持つ。
本稿では工藤（1995）が過去パーフェクトとしている「ていた」は、庵（2001）の用語を用いて「完了」とする。それは「ていた」で示される動作・出来事が過去の一時点である設定時に対して効力を持っていると読み取りにくい例が多いためである。「完了」は庵（2001）の定語を踏襲して「基準時以前に動作・出来事が完結」したことを表す、とする。

## 3　「記録」の用法

「効力」と「記録」の用法については、庵（2001ａ）によって以下のように議論されている。

1）「効力持続」では述部が主語に対して有意な属性付けになっていなければならないのに対し、記録は証拠に基づいて述べているだけであるためそうした制約はない、
2）「記録」は証拠が必要だが「効力持続」はそうではない。また、「記録」で証拠を出さなければならないことから、タ形が使いにくくなる（庵2001ａ：85）

「記録用法」の「シテイル」は当該の出来事を「現存する記録や痕跡を介してのみ把握可能なできごと」として述べる表現であるため、その出来事を「出来事が実現された経過が具体的に把握されていなければ使えない」表現である「た」で述べる事はできない（井上2001：113）。
庵（2001ａ）井上（2001）は、「記録」は以下の2点で「効力」と異なる性格を持つ独立した用法であるとしている。

1）「記録」には属性の意味はなくてよい。
2）「記録」での文末は「た」に置き換えられない、あるいは置き換えにくい。

2）について本調査での結果を見ていこう。
「記録」として新書でよく用いられるのは引用表現である。

（18）九州大学の大村裕は、視床下部の神経細胞に、ウリジンで興奮がおさえられるものとたかまるものとがあることを見いだした。岡崎国立共同研究機構生理学研究所の尾崎毅は、ザリガニの腹部にある神経細胞の興奮が、ウリジンで完全に抑制されることをあきらかにした。ベルギーの生化学者たちは、ヌクレオシドが細胞内からでていけないようにすると、イヌやネズミの睡眠量がふえるので、アデノシンやウリジンのレベルがたかいせいだ、と結論づけている。（自然科学）

（18）は証拠として明確に書物はあげておらず、発表された時も表示されていないが、研究成果が示されていること、研究者の名前が表示されていることから、「記録」の用法と言っていいであろう。このような形式になるのは一般向けの新書という形式によるのであろう。そして、この例では、「結論づけている」は「結論づけた」としても認められるであろう。

また、新書では引用だけでなく、過去の事例について述べる例もよく見られた。

（19）このような人口の老齢化は日本だけの現象ではない。これは工業化にともなって大なり小なり起こるものだ。たとえばスウェーデンは一八五〇年に四・七九パーセントだった老年人口係数が一九一〇年には八・四四パーセントといまから七十年も前に現在の日本と同じ水準に達している。そして一九七五年には一四・八八パーセントと文字どおり高齢化社会となった。

イギリスも一八五一年に四・六五パーセントだった老年人口の比率が一九三九年に八・九七パーセント、一九七五年には一三・六四パーセントに達している。つまりスウェーデンやイギリスなど早目に工業化した国々は、日本よりも早目に本格的な高齢化社会に突入し、その厳しさを痛いほど体験しているわけである。（社会科学）

（20）純再生産率について見てみると、戦前も一九二〇年から一九四〇年までの二十年間で〇・一五ポイント低下しているが、戦後の場合は一九五〇年から一九五五年までの五年間で〇・四五ポイントも低下している。（社会科学）

（19）はスウェーデンが 1910 年に老年人口係数が 8.44%に達したこと、イギリスも 1975 年に 13.64%に達したこと、早くに工業化した国々は早くに高齢化社会を体験したと述べている。（20）は純再生産率が戦前も戦後も低下したことを述べている。どちらもいつのこと

であるか明確にされており、明確に文章に出ているとは言えないが、それぞれの著者の持っている記録に基づいているため証拠はあるといえるので「記録」の用法とした。これらはどれも「た」での置き換えが可能といえるだろう。例として（19）を「た」にして示す。

(19)’このような人口の老齢化は日本だけの現象ではない。これは工業化にともなって大なり小なり起こるものだ。たとえばスウェーデンは一八五〇年に四・七九パーセントだった老年人口係数が一九一〇年には八・四四パーセントといまから七十年も前に現在の日本と同じ水準に達した。そして一九七五年には一四・八八パーセントと文字どおり高齢化社会となった。

イギリスも一八五一年に四・六五パーセントだった老年人口の比率が一九三九年に八・九七パーセント、一九七五年には一三・六四パーセントに達した。つまりスウェーデンやイギリスなど早目に工業化した国々は、日本よりも早目に本格的な高齢化社会に突入し、その厳しさを痛いほど体験したわけである。

このように該当個所を「た」で表現して読んでも違和感はない。

新書では「る」「ている」で表現されている事例のもとの文脈が過去であることがしばしばあり、「た」に置き換えた場合は、過去の事例であるという文脈が表面化するため、読み手は違和感をもたずに読めるのであろう。

（21）昭和二五年に突発した朝鮮戦争で、マッカーサーが占領軍を前線に投入する必要から、「警察予備隊」七万五千人という、既存の警察官数の六割にあたる定員を創設している。これは事実上の軍隊であり、昭和二七年に保安隊、昭和二九年には自衛隊と発展して定員も大幅にふえていったことは、あらためて指摘するまでもないだろう。（社会科学）

（21）は昭和 25 年に「警察予備隊」が創設されたことを述べており、これも「記録」用法であるといえるだろう。そしてこれも下のように表現できる。

（21）’マッカーサーが（前略）「警察予備隊」七万五千人という、既存の警察官数の六割にあたる定員を創設した。これは事実上の軍隊であり、昭和二七年に保安隊、昭和二九年には自衛隊と発展して定員も大幅にふえていったことは、あらためて指摘するまでもないだろう。

そしてそのあとの文脈も「た」の連続により事実の連続と理解でき、違和感はないであろう。

話者があり、発話時があって現在を基準時間とする会話と、過去の事例をもとに社会制度について議論する、あるいは実験や発見の結果をもとに自然現象の中にある規則性を追究す

る科学的なテクストでは「ている」を取り払ったときに出現する時が異なるため、「記録」の用法であっても「た」との置き換えが可能な例がある。

## 4　「結果状態」と「効力持続」

岩崎（2000）は結果状態と「効力持続」は本質的に同じものであるとしている。

庵(2001ａ)は結果状態と岩崎の用語でいうパーフェクトの違いについて以下のように説明している。

（22）この橋はこわれている。（結果状態）
（23）この橋は5年前にこわれている。（効力持続）（庵 2001ａ：83）

（22）は現在こわれているのに対し、（23）は5年前にこわれたのであって現在はこわれていない。こわれたことがある、あるいはこわれた結果、たとえば「市の予算を使った」「その後はこわれないように頑丈に作り直した」などの効力が存在しているという点で結果状態と効力持続は異なる。

結果動詞を使った効力持続の例は以下のように探すことができる。

（24）たとえばスウェーデンは一八五〇年に四・七九パーセントだった老年人口係数が一九一〇年には八・四四パーセントといまから七十年も前に現在の日本と同じ水準に達している。（中略）つまりスウェーデンやイギリスなど早目に工業化した国々は、日本よりも早目に本格的な高齢化社会に突入し、その厳しさを痛いほど体験しているわけである。（社会科学）
（25）たとえば戦後の大争議といわれるものは、トヨタ争議、日産争議、そして東芝争議、さらに三池争議など、いずれも人員整理に端を発している。（社会科学）

（24）はスウェーデンが1910年に老年人口が高い水準に達したこと、ヨーロッパの国は高齢化社会を早くに体験したことを述べている。２つの事例があげられているが、どちらも過去である。（25）は戦後の労働争議はどれも人員整理から始まった、と述べている。どちらも過去の文脈での結果状態で、現在までは続いていない。このような例は効力持続として採用した。一方、（26）のような例は結果状態とした。

（26）発展途上国にあっては、爆発的人口増加がつづいている。医学の発展によって多死を招く感染性疾患を制圧できるようになったので、発展途上国が卒然と多産少死のステージにすでに入っているからである。（社会科学）

（26）は発展途上国が多産少死の時代に入ったこと、そして現在もその状態が続いていることが理解できるため、結果状態とした。

以上のように、「ている」が過去の文脈の中にあることが読み取れれば、効力持続と解釈できる。

しかし、岩崎（2000）が結局は結果状態と効力持続は同じではないかと疑問を提示する考えも理解できないわけではない。過去の研究や発見、状態などが「た」で表現されている文脈の中で、「ている」で結果状態が表現される文は結果状態であるか「効力持続」であるか、見分けにくい例もあった。

（27）国立上野図書館所蔵の伝紹巴自筆本や江戸時代の『拾芥抄』の諸刊本には、五天竺図を簡略したような「天竺国図」が所載されている。

しかしいわゆる天竺図の主題であった玄奘の仏国土巡礼の行程はこの図からは消えてなくなり、それにかわって、（中略）多くの国名や地名が加えられ、仏教的世界図から離れて、一般的な世界図への志向を示している。（社会科学）

（27）は記録あるいは引用と考えれば効力持続と考えられる。しかし、ある地図について、そこに何が書かれているかを述べている、と考えれば結果状態とも解釈できる。

次に会話の例を見てみよう。

（28）1138　03Ａ　で、いちおうね、［名字］さんがー、手書きで書いてくれた、（うん他者(男)）領収書は、どれだっけな、ある。
1139　03Ｂ　全額の↑
1140　03Ａ　うんう、だから、その渡してきた分の。
1141　03Ｂ　だけだよね。
1142　03Ａ　うん。
1143　03Ａ　だけど、３０万から出てるやつは、渡して来た分だけだからー。
1144　03Ｂ　→そし。←＜言いさし＞
1145　03Ｂ　→そしたら←、これに１枚つけてもらえばいいかな。（女性会話）

（28）は過去に支払ったお金の清算について話している。1143 の「出てるお金」を「効力持続」として採用した。1140 で「渡してきた分」と言っているので過去の支払いである。そのお金の領収書と 30 万から支出したお金の精算をどうするかと話している。そして 30 万から支出したのは過去のことであり、現在まで状態は続いていない。

本稿は「結果継続」と「効力持続」の仕分けは過去の文脈があるかどうか、その状態が現在まで続いているかどうかによった。過去の文脈がある中で「結果状態」が使われており、その状態が現在まで続いていない場合は「効力持続」として採用した。

## 5　未来の効力持続

高梨(2014)はコミュニケーションに問題がなくなった上級話者にとっても難しい項目があるとして、「ている」形をとりあげ、「ている」形の文には、学習者は困難を意識していないが実は運用に問題があるものがあるとしている。高梨(2014)は日本語教科書の調査をし、「ている」は、基本的用法は教科書で取り上げられているが、完了や経験・記録などの派生的用法については触れている教科書が少なく、例文・会話文などに文として表現されているのみであるという結果を報告している。そして、こうした派生的用法には、学習者が意識することがなく、その結果、産出につながりにくいものがあると指摘している。

本節は、高梨(2014:35)で学習者の誤用が特に多かったと報告されている以下の例文に使われている「待っている」の用法をとりあげる。

(29)「50 メートルほど先にバス停があります。そこで待っていてください」

この「待っていてください」は、事態としては「待つ」ことをお願いしているものであるため、学習者は未来のことであると考え「待ってください」と「る」で表現することが多いのに対し、日本語母語話者は「ている」で表現するものである。

この文は「(私が行くまで)バス停で待っている」ことを依頼している文で、発話時点・出来事時点が現在、設定時点が未来であり、現在の出来事が未来まで続くことを述べている。本稿はこの用法を設定時点が未来の「効力持続」として、その使い方を検討する。

### 5.1　未来の効力持続に関係する先行研究

発話時点・出来事時点・設定時点の複数の時に関わる論考はこれまで田窪(1993)のＳ時・R 時、工藤(1989・1995)のパーフェクトの記述、崔(2009・2011)・庵（2011）の発話時（S 時）・出来事時（E 時）・認識時（R 時）など数多くある。

本稿でとりあげる「ている」は発話時点・出来事時点・設定時点があるという点、出来事が未来の設定時点に対して「効力」があるという点では、工藤(1989・1995)の未来パーフェクトと共通している。しかし、庵(2001a)張(2001)江田(2011)の「完了」のように設定時点以前にある事態が完了する意味を持たないため、本稿では、この用法を設定時点が未来の「効力持続」と位置づける。

設定時点が未来の「ている」の用法について、崔（2009・2011）を見てみる。

崔（2009）は中国人学習者を対象に文法性判断テストを行い、動作継続と結果状態の「ている」「ていた」の習得状況を調べたものであるが、動作継続・結果状態、どちらの用法でも現在テンスより過去および未来のテンスの中での「ている」が難しいという結果が出たと述べている（崔 2009：84）。

崔（2011:10-16）は『ＫＹコーパス』を用いて中国語・韓国語・英語話者のテンス・アスペクト形式の習得状況を調べた。この論文では動作継続・結果状態だけでなく、反復・パー

フェクトなどの派生的な用法も視野に入れている。この論文では、過去パーフェクトは中国人学習者の超級で 8 例（うち 7 例が正用）、韓国人学習者の超級で 5 例、英語話者の上級で 7 例、超級で 2 例と多少出現しているが、未来パーフェクトは英語話者の中級で 1 例出現したのみということが述べられている。この結果について崔（2011）は「KY コーパスに過去テンスにおける「テイタ」、未来テンスにおける「テイル」が使用される文脈が少ない」ことを原因のひとつとあげている。崔（2011）があげた原因以外に、未来パーフェクトが少ないということについては 2 点が考えられる。(1)未来パーフェクトはかなり難しい用法であるということ、（2）指導されていないためか、学習者が習得していない用法であるということ、である。考えていきたい。

谷口（1997:143-150）は「テイル」形にはムード的な側面があるとして、①「待ち合わせ」、②「心理的な現在」、③「儀礼的な表現効果」、④「客観的な機能」、の４つの用法をあげている。

①の「待ち合わせ」は「未来の出来事について、話し手がある動作をしながら相手と合うことを期待している」ような用法である。

（30）何かあったら呼んでください。ここでワープロを打っていますから。

（谷口 1997:144）

本節では、谷口(1997)が「待ち合わせ」としたこの用法を、設定時点は未来、出来事時点・発話時点は現在であり、未来まで出来事の効力が持続する形、として、設定時点が未来の「効力持続」とする。この形は「ている」を使っているが、未来まで効力が持続することから、事態は「る」で表現が可能である。

### 5.2　調査方法

谷口（1997）の「待ち合わせ」の「未来の出来事について、話し手がある動作をしながら相手と会うことを期待している」という記述に従い、以下の特徴を持つ例文を作り、日本語母語話者、日本語学習者（以後ＮＳ，ＮＮＳ）を対象に、「る」「ている」のどちらをよく使うか、ニュアンスは同じか問うアンケート調査を行った。ＮＳは大学生 55 名、ＮＮＳは日本語学校で学ぶ中級以上の学習者 80 名であった。アンケートは章末に記す。

取り上げた特徴は以下のようである。

①話し言葉である。

②「待つ」対象の相手が存在する。

③未来に会うことを待ち望むことから、話者と待つ相手は一時的に離れるという文脈がある。

ＮＳのアンケートは、以下の質問に対し、指示のように、それぞれの文の違い、よく使うものがあるか否か、使わないものがあるか、記述してもらう形で行った。

ＮＮＳのアンケートは２校の日本語学校に依頼し、中級以上の学習者に答えてもらった。１校は 37 名、もう 1 校は 43 名の学習者が参加してくれ、合計 80 名の参加者を得られた。調査は 2013 年 11 月に行った。アンケート全文は章末に記載した。

## 5.3　調査結果

例として以下の 2 例を示す。例文はアンケート用紙の番号でなく、本稿の通し番号を使う。

表1　待っている・食べているの結果

| | 日本語母語話者 | | | | | 日本語学習者 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | る | ている | 両方 | 無答 | 合計 | る | ている | 両方 | 無答 | 合計 |
| 待つ | 0 | 52 | 2 | 1 | 55 | 30 | 36 | 14 | 0 | 80 |
| | 0.0% | 94.5% | 3.6% | 1.8% | 100.0% | 37.5% | 45.0% | 17.5% | 0.0% | 100.0% |
| 食べる | 0 | 45 | 7 | 0 | 55 | 76 | 2 | 2 | 0 | 80 |
| | 0.0% | 81.8% | 12.7% | 0.0% | 100.0% | 95.0% | 2.5% | 2.5% | 0.0% | 100.0% |

(31) 彼と二人で学内を歩いています。彼が事務に用があって行かなければならないと言いました。

「じゃ、図書館で｛a 待つわ／b 待ってるわ｝。」

(32)　(帰りが遅くなるという夫からのメールに対する妻の返信)

「じゃ、夕飯、先に｛a 食べるね／b 食べてるね｝。」

(31)は会話、(32)は話し言葉的な書き言葉のメール文である。

NS は (31) で約 95%、(32)で約 82%が「ている」を選んだのに対し、NNS は「待っている」が 45%、「待つ」が約 38%、「食べる」が 95%という結果になり、NS では大半がこれらの状況で「ている」を選ぶのに対し、NNS では未来であるということからか、「る」の選択が多い。

そして「る」と「ている」の違いを記述してもらったところ、NS では、例えば(31)では「テイル」を使うと「食べているけど、私の食事中に帰ってくるといいですね」のようなニュアンスがあるなどの解答があったのに対し、「る」を使った場合は「そっけない」「冷たい」などのコメントが見られた。

## 5.4　分析

### 5.4.1　文体

先の(32)の文脈を(33)のように事実を描写する文章で表現すると、

(33) 日本の家庭では、夫は会社の仕事が定時に終わらないことが多く、妻は夫の帰りを待たず、先に｛a 食事する／b 食事している｝場合が多い（作例）。

「食事している」は動作継続あるいは習慣を表すこととなり、夫の帰りを待ちながら、という未来に関係する表現とは解釈できない。

(31)のような会話、(32)のようなメールでは未来を設定時点とする効力持続の意味が表現されるが、それは、発信者と受信者が現在という時間を共にしており、未来についても同じように未来と認識できる関係にあるためであろう。

この用法は、書き言葉、話し言葉の別より、現在という時間について同じ認識を持てる相手が存在するか否かが大きな要素といえるようである。不特定多数を対象とする書き言葉では使いにくい。

### 5.4.2　待つ対象

これは未来の設定時点の内容はどのようなものであるかという疑問である。待つ対象は人間だけであろうか。自分で未来の一時点、事態を想定し、それを待ち望む場合はどうであろうか。

(34)飛行機が飛ぶのは明日になるそうだ。とりあえずホテルに行っていよう。
(35)来年退職だから身の回りを片付けていよう。

(34)のように飛行機の運航が再開される時を待つ場合は、「ホテルに行っていよう」は「これからホテルに行こう」という未来の意味になる。(35)の「身の回りを片付けている」も動作継続とともに、「身の回りを片付けよう」という未来の意味を含む。待つ対象は人でなく、事態でもこの文は成立する。

しかし、例えば、下の文では未来の事態を想定しているのに、なぜ「ている」が使えないのだろう。

(36)彼が午後来るからお菓子を｛買いに行こう／？買いに行っていよう｝。

これは(34)(35)が「ホテルに行って待つ」「片付けながら退職の日を待つ」のように「何かしながら待つ」という読みができるのに対し、「買いに行こう」は文字通り買いに行くことを述べるだけで「買いに行って待つ」とはなりにくいためであろう。

### 5.4.3　待つ対象との距離

「待つ」という意味から、相手は一時的に離れるという意味を含むのではないかという仮説をたてた。次のような例はどうであろう。

(37)お掃除、私台所をやるから、あなたあっちやってて。
(38)あなた先に帰ってて。

(37)(38)は現在、相手は目の前にいる。しかし、これらの文も、このように話した後、話し手と聞き手は一度離れて何かをし、その後、また会うという文脈が存在する。これを「る」で表現し、

(39) あなた先に帰って。

のようにした場合は、発話者はこの後「あなた」と接触するかどうかは不明になる。「ている」を使うことによって、対象と一時的に離れ、未来の設定時点を「待つ」という姿勢が浮かび上がってくる。

以上のほかにも疑問が出たので、それらについて考えていこう。

### 5.4.4 待つ対象への評価

谷口(1997)は「期待」という表現を使ってこの用法を説明している。「期待」ということは、よいことを待ち望むのであろうか。(40)の文についてどのような未来の事態が設定可能か、考えてみよう。

(40) 夕飯、先に食べてるね。
(41) 夕飯、先に食べてるね。早く帰れるといいね。
(42) 夕飯、先に食べてるね。あなたはいつもそうやって遅いんだから。

(41)のように相手を待つというプラスの表現も可能だが、(42)のように腹を立てた口ぶりで語ることも考え得る。「期待」という先行研究の語にひかれてプラス評価の場合だけ考えてはいけないようである。

しかし、アンケートに答えた母語話者が例文(31)(32)について、「る」を使う場合は「そっけない」「冷たい」のに対し、「ている」を使うと「相手を待っている」「あなたのために」というニュアンスが出る、とコメントしていることからわかるように、相手と時間を共有しているという文脈から、相手との間に一定の関係を保つことは表現されているといえるであろう。文脈によっては配慮を示すことにもなる。しかし、この「ている」が使える文脈で、未来であるからといって「る」を使った場合は相手との関係性は表現されなくなる。そのため、学習者がそのことを知らずに「る」で文を作った場合は、意図せずに、相手の存在を考えない「そっけない」表現となる可能性がある。

### 5.4.5 文末制限

文末制限を見てみよう。

(43)飛行機が飛ぶのは明日になるそうだ。仕方がないからホテルに
　　{行く／？行っている}。
(44)飛行機が飛ぶのは明日になるそうだ。仕方がないからホテルに
　　{行こう／行っていよう}。
(45)飛行機飛ぶの、明日になるんだって。仕方がないからホテルに
　　{行くね／行ってるね}。

(43)のように「ている」の言い切りの形にした場合は現在の動作継続や結果状態の意味になりやすくなり、だれが行くのかわかりにくい。しかし、(44)「～よう」の形にすると、独り言としても可能であり、連れの人に呼びかけていると理解することもできる。その際、実際には「これから行く」つまり未来のことであるのに、「ている」が使えることは注目していい。学習者に、どうしてここで「ている」を使うのか、と質問された場合は、未来に向けての効力持続であると説明できれば理解を促進するであろう。

また、文体の影響もあるようである。(45)のように「ね」をいれ、親しい関係の話し言葉にすると、「ホテルに行っている」という意味だけでなく、「ホテルに行くね、お先にね。あっちで待ってるよ」のように未来の意味が現れる。相手が必要というのは、「待つ相手」が必要というより、文を発話して関係性を維持する聞き手が必要ということであろう。(34)(35)のように自分に対して語りかける文は自分を相手として語りかけ、納得させるという文脈なのであろう。

## 6　まとめ

効力持続について先行研究で取り上げられた問題をテクストとの関わりによって検討してきた。

### 6.1　効力持続とは

本稿では基準時が現在・未来であり、その基準時以前に起こった動作・作用が何らかの効果・影響を残す場合を「効力持続」とし、基準時が過去あるいは未来で、基準時以前に別の事態が起こった例については「完了」とする。なぜなら、基準時が過去、未来の場合には「効力」が明確に読み取れない例があるためである。

効力持続の文において、過去にある動作・作用が起こった場合、その後残るものは間接的・偶発的な効果である。結果動詞がその結果を生じさせた場合には必然的にある結果が残るのと結果の性質が異なる。

基準時が未来の効力持続は未来の基準時に向けて何かをしながら待つという意味を表す。

### 6.2「記録」をどう捉えるか

「記録」は効力持続の下位分類とする。

科学的な書物である新書では基本テンスが「る」である。「た」は過去の事象や実験などを述べたり時系列的な出来事を述べたりするために使われる。そして、「る」はそこから考え得る一般的な結論や筆者の判断を表すために使われる。記録の用法は、そのようなテクストの中では、引用の形をとり資料を提示するという役割を果たす。

「記録」の用法では文末は「た」に置き換えられないという議論があるが、新書で用いられている「記録」の場合、文末を「た」に置きかえることは許容される。これは、新書では「る」「ている」で表現されている事柄のもとの文脈が過去であることがしばしばあり、「た」に置き換えた場合は、過去の事例であるという文脈が表面化するだけで、読み手は違和感をもたずに読めるためであろう。

### 6.3「結果状態」と「効力持続」をどう関係づけるか

新書では「た」と「る」が置き換え可能な場合が多々存在する。

新書で「た」で背景が描かれる文脈の中での「結果状態」と「効力持続」の仕分けは、効力持続は、「ている」で表現されている事態が背景である「た」の表現する時を基準時としている場合とした。それに対し、結果状態はその結果が読者が存在する現在まで存続する場合とした。

なお、「属性」については後の節で検討する。

### 6.4　未来の効力持続

未来の効力持続とは、未来のある時点を想定し、それに向かって何かをしながら待つという意味を表す。「ている」を使うが、未来を意味するので「る」に置き換えが可能である。

未来がいつのことであるか認識できる相手がある場面で用いる。自分を相手として自分に語りかけることも可能である。不特定多数を読者として想定する文章などでは使えない。

待つ事態は必ずしも良いこととは限らないが、この「ている」を使った場合は、相手との間に一定の関係性を保つことが表現される。

話し言葉あるいはメールなどの話し言葉的な書き言葉で使われ、文末は「～しよう」「～して（ください）」「～ね」などの形が多い。

日本語の話し言葉では、この設定時点が未来の効力持続が使える場面で、未来であるからといって「る」で表現すると、「冷たい」「そっけない」などと受け取られることがあるので、よく使う「先に～してる」「待ってる」などの表現はかたまり表現として教育に取り入れるのも一つの方法であろう。

この用法がどの程度使われるのかについての調査は今回行っていない。また、語彙のバリエーションはどの程度あるのかも触れることができなかった。次回の課題としたい。

資料

日本人対象のアンケートは以下のとおりである。

「る」と「ている」の意味の違いを調査しています。aからcはどのように違いますか、同じですか。どちらか、よく使うものがありますか、使わないものがありますか。述べてください。

1　（帰りが遅くなるという夫からのメールに対する妻の返信）

a　じゃ、夕飯、先に食べるね。

b　じゃ、夕飯、先に食べてるね。

2　（彼と二人で学内を歩いています。彼が事務に用があって行かなければならないと言いました。）

a　じゃ、図書館で待つわ。

b　じゃ、図書館で待ってるわ。

3　（ホールで部活の仲間の演奏が始まります。あなたは、寄り道をしていくと言う友達より先に行くことにしました。）

a　先に行って、席、とるね。

b　先に行って、席、とっとくね。

c　先に行って、席、とってるね。

4　（1時から会議ですが、同僚から1時ぎりぎりでないと会社に戻れないと電話が来ました。あなたは会議の資料を用意します。）

わかりました。資料、a　こちらで用意しますね。

b　こちらで用意しておきますね。

c　こちらで用意していますね。

5　（友人が家に遊びに来ました。）

お茶、飲む？今、aいれるね。

bいれとくね。

cいれてるね。

6　（独り言）彼が午後来るから　aお菓子を買いに行こう。

bお菓子を買っておこう。

cお菓子を買っていよう。

7　（独り言）明日はテストだ。今日は十分　a寝よう。

b寝ておこう。

c寝ていよう。

8　（市の広報の記事）

災害に備えて非常時の連絡体制を　a検討します。

b検討しておきます。

c検討しています。

9　（友人と大学の食堂で話しています。）
行き方わからないの？じゃ　a 地図書くね。
b 地図書いておくね。
c 地図書いているね。

学習者対象のアンケートは以下のとおりである。

「る」と「ている」の意味の違いを調査しています。a・b・c はどれを違いますか。使うものに〇をつけてください。答えは一つとは限りません。

1　（帰りが遅くなるという夫からのメールに対する妻の返信）
a（　　）じゃ、夕飯、先に食べるね。
b（　　）じゃ、夕飯、先に食べてるね。
2　（彼と二人で学内を歩いています。彼が事務に用があって行かなければならないと言いました。）
a（　　）　じゃ、図書館で待つわ。
b（　　）　じゃ、図書館で待ってるわ。
3　（ホールで部活の仲間の演奏が始まります。あなたは、寄り道をしていくと言う友達より先に行くことにしました。）
a　先に行って、席、とるね。
b　先に行って、席、とっとくね。
c　先に行って、席、とってるね。
4　（1 時から会議ですが、同僚から 1 時ぎりぎりでないと会社に戻れないと電話が来ました。あなたは会議の資料を用意します。）
わかりました。資料、a　こちらで用意しますね。
b　こちらで用意しておきますね。
（5 以下は NS と同様なので省略）

ＮＮＳ対象のアンケートは〇は一つとは限りません、と書いたが、その指示が読み切れなかった学習者がいたようで、一つの質問に対し、一つだけ〇を付けた答えがあったが、そのまま集計した。

# 第５章　「ている」の用法

本章は、会話と新書において運動長期・効力持続の「ている」がどのように使われ、どのような機能を果たしているかを述べる。小説の効力持続については工藤(1995)がパーフェクトとして述べているため、本稿では分析対象を新書と会話にする。

## 1　「ている」の用法の分類

以下に本調査による「動詞＋ている」の分類基準をあげる。第１章で述べたように、本稿では「ている」の用法を「運動短期」「運動長期」「繰り返し」「結果状態」「効力持続」「性状」「完了」の７つに分類する。

### 1.1　運動短期

動作・作用が一定時間継続することを表すものである。寺村（1984:127）は「本来時間的な幅をもつ動作、現象」の「ている」の形は「その動作・現象が始まって、終わらずに今存在している。つまり開始の結果が今もある」ことと定義している。高橋（1985:87）は動作動詞というのは、動作（運動）の局面が終わったあと、主体の状態がもとに戻るような運動を表す動詞」であり、継続相の形式をとる場合「動作動詞は、動詞のさししめす動作が、持続過程をなす動作（運動）の局面のなかにあるすがたをさしだ」すと述べている。許（2005:89）は運動短期について「現在において動作がその運動の局面にあること」としており、「現在の時点において持続過程の中にある」ため「現在性」が強いと述べている。三者ともに、現在を中心とした時間の中で継続していることを表すとしている。本稿でも現在を中心とした継続という定義を採用する。動作・作用をしないことを表すものも含む（「じっとする」など　吉川 1976）。

（1）58 01Ａ　なんで気持ち悪いの。
　　59 01Ｂ　いまこの二人してこうやって見合わしてへらへら<u>笑ってんだ</u>もん。
　　（女性会話）

### 1.2　運動長期

動作・作用の継続を運動短期と運動長期に分けるのは、運動長期という分類をすることによって、長期的に継続する動作・作用の性質の違いを意識できる可能性があるためである。

運動長期とは、動作・作用の長期間にわたる継続を表すものである。本稿では、期間を定めず動作・作用が継続するもの、休んだり継続したりしながら長期間継続するもの、という

基準を用いる。中村（1996）は「反復」の意味が現れる条件として夜を超えるかどうかという基準を用いているが、それも参考にする。また、許（2005）は日本語教育の初級で提示される所属・職業表現、「住んでいる」などを運動長期としているようである。本稿では新書を資料として使っているため、多様な表現が採取できた。

（2）幼児期のレム睡眠は、脳、とくに感覚系の成熟とか神経回路の柔軟性を促進することに重要なはたらきをしているのではないか、と考えられる。（自然科学）

運動短期が一定時間継続することを表すのに対し、運動長期はその期間中のすべての時間にその運動が継続しているわけではない。休止期間も含まれながら全体として動作・作用が継続していることを表す。

（3）臨床実験もスイスを中心にこころみられていて、かなりの成果をおさめている。（自然科学）

（3）では臨床試験が行われていることが述べられているが、試験場では作業に携わる人たちが週日は働き、週末は休んで、全体としては臨床実験を行い続けていることを表している。このように活動時間と休止時間を中に含む動作・作用の継続を捉える場合、運動長期とする。

また、徐々に変化する動きも長期にわたる例は「運動長期」に含めた。

（4）７０年代以降になると、企業の社会への責任や公共性、国際性、文化性、個人の創造性や自由、高度技術への挑戦、といったことを強調するようになってきている。（社会科学）

これは変化も一種の作用であり、動きが感じられるためである。

### 1.3　繰り返し

寺村（1984:130）は繰り返しについて「一つ一つの動作、一つ一つの現象はそれぞれ始まって終わるもの、つまり、点であるけれども、それらが何回も繰り返して起こるとき、全体としては点の連続として、つまり線として捉えられる」ものとしている。単一の主体の動作の繰り返しの場合も複数の主体に関わる場合もある。

（5）報酬（餌）のない刺激をくりかえし 聞かされていると、イヌは音に反応しなくなり、餌を予期してだしていた唾液をださなくなってしまう。（社会科学）

動作・事象の連続を単一の事象として捉えるのは、そのことをうかがわせる文脈、状況が必要と述べている。それらは例えば「この頃」「最近」のような語の共起、油絵を描くなどのような「動作自体以外に特に意味のある内容」などが手掛かりになるとしている。

繰返しと「運動長期」は区分が難しい場合が見られた。どちらも休止時間を含むためである。本稿では繰り返しを意味する副詞が存在する場合、文脈から繰り返しと解釈できる場合を繰り返しとした。

(6) 64 01A　もうね、脳細胞どんどん 死んでる。
　65 01A　加速度つけて。　(女性会話)

(7) 中枢性つまり脳の呼吸中枢に障害のあるばあいには、(中略) チューブを挿入したり、轡のようなものを口にはめたりする。また、口蓋垂、軟口蓋、咽頭を整形手術することもおこなわれている。　(自然科学)

(6) の例では「どんどん」という副詞によって、(7) では手術を複数の患者に対して行うという文脈から、繰り返しと採用した。

### 1.4　結果状態

寺村 (1984:127) は、結果状態について「ふつう瞬間動詞とされるもの、つまり本来、始まると同時に終わるような現象を表す動詞の場合、～テイルは、その現象が既に実現した、つまり終わってしまったが、その結果 (痕跡) が物理的あるいは心理的に、現在存在する」ことと定義している。本稿では、ある事柄が起こった後の状態を表しているもの、結果動詞を使った文で性状とはとりにくいものを結果状態とした。

(8) 議員定数の割当てが人口に比例しないまま放置されていると、選挙民の一票の重みは人口が増加した地域ほど軽くなってしまい、不平等である。(社会科学)

(9) よくばりの現代人がもとめる眠りは、自然の生理的な欲求のレベルをとっくにこえている。(自然科学)

(8) は「放置する」という判断をしたと考え得るため、結果状態に含めた。(9) も、現代人はより良い睡眠を求めて照明を工夫したり睡眠剤を開発したりする、という活動が想定できるため、結果状態に含めた。しかし、新書では明確に事態が起こったかどうか判断が難しい例も見られた。

工藤 (1982:59-64) は「運動の動きの側面を切り取った動き動詞は「ている」で「動きの継続」を、運動の変化の側面をきりとった変化動詞は「変化の結果の継続」を表す」が「一定の条件の下で、相互移行の現象がおこる」と述べている。本稿でもその考えにより、次のようなものを結果状態とした。

（10）965　03A　で、ちょっとご迷惑をおかけしているような形になっちゃってるんですけどもー。（男性会話）

上の（10）の「迷惑をかける」は通常は継続動詞として使われるが、（8）の文脈では「そちらに迷惑をかけてしまった状態」という結果状態の意味で使われている。

### 1.5　効力持続

効力持続は過去に起こった出来事が現在に効力あるいは影響を持つものである。前章で未来へ向けての効力持続も取り上げたが、これは使う文脈に制限があるため、これ以降は、基準時を現在とし、出来事は過去に起こった効力持続について述べていく。基準時現在の効力持続は、事態自身は一度過去に終了しており、現在まで継続しておらず、その影響だけが現在に関係するものである。先にも述べたが、新書の場合、基準時はその文脈で取り上げている時とする。

（11）西ドイツのＡ・Ｅ・コルンミュラーらは、二頭のネコの頸動脈を交叉させて、たがいに血は流交換がおこるようにした。いっぽうのネコの脳を電気刺激して眠らせると、やがて他方のネコも眠りはじめた。このばあい、両者ともに脳波をモニターしている。（自然科学）

(11)は実験の内容を説明している。実験は行われてその結果が出たので、モニターしたことはすでに終わっているため、効力持続とした。

「運動長期」と「効力持続」の違いは、「運動長期」が現在まで続く動作・作用を述べるのに対し、「効力持続」は一度その事柄が終了していることとした。

（12）エチルアルコールは、分子式で書くとＣ2H6Ｏである。ふつう示性式でＣ2H5ＯＨと書いている。（運動長期）（自然科学）
（13）『種の起原』の中でダーウィンは、飼育されている動物や品種改良された植物が、もとの品種からいかに変化したかをくわしく書いている。（効力持続）（自然科学）

上の（12）は現在もそのように書くので「運動長期」とし、（13）はダーウィンがその著書に「書いた」ことを表しているので「効力持続」とした。
結果状態的な例については、過去の文脈の中で結果が出、その状態が現在と途切れているものは「効力持続」とし、その結果が続いていると読める場合は「結果状態」とした。

（14）カルメ焼きはコークスに似ているんだ。へェー、どんなところが？かたまる前に一回融けているところがさ。（効力持続）（自然科学）

（15）入れ物に入れておいた塩がとけている。（結果状態）（作例）
（16）純再生産率について見てみると、戦前も一九二〇年から一九四〇年までの二十年間で〇・一五ポイント低下しているが、戦後の場合は一九五〇年から一九五五年までの五年間で〇・四五ポイントも低下している。（効力持続）（社会科学）

（14）は一度溶けて固まったという性質を問題にしている。溶けた後で固まったというところから、溶けたことは過去であり、その後に固まったという文脈があり、現在と一旦切れているので「効力持続」として採用した。（15）は比較のために出した作例だが、塩が空気に触れて溶けた、と述べる文は現在溶けた塩が目の前にあるという文脈なので「結果状態」となる。（16）は 1920 年から 1940 年までの推移、1950 年から 1955 年までの推移、と両者ともに過去の結果であり、現在と切りはなされているので「効力持続」とした。

### 1.6　性状

寺村（1984:137）は性状について「眼前の事態の、他者と比較してのありかたを描こうとする」表現で「動詞の一つのアスペクトを表すというよりも形容詞のような性格を帯びる」ものであると述べている。

高橋（1985:125）は「状態の持続のなかにあるすがた」として「継続相のかたちで持続過程のなかにあることをあらわしていても、その持続過程が動作の局面でない」場合があるとして以下の例を挙げている。

（17）額はややふとめの赤い絹のうちひもでつるすようになっている。

そして、この状態は動作の局面でないのでアスペクトに準じるものと捉えたほうがいいと述べている。

結果の局面にあるものと状態持続のすがたの間には中間的なものがあり、明確に分けるのは難しいとして次の例を挙げている。

（18）ア　くぎがまがっている。
　　イ　みちがまがっている。（高橋 1985:126）

本稿では、時間と関係がない状態を示すものという基準で例を選んだ。結果状態は、結果動詞が表す事柄があり、その結果としてある一定の状態になるが、性状はそのようなきっかけがないものである。

（19）電子がまわる軌道はとびとびにいくつもあって、安定した状態では、電子は規則にそって低い軌道に乗っている。そこへ光が当たると、電子は一時、上の方の軌道にはね上げられる。（自然科学）

(20) それにひきかえ、わが国のこの面での対応は遅れているといわざるをえない。（自然科学）

### 1.7　完了

町田（1989:96-97）は2つの非状態述語の文が連続する場合は2つの文の意味する事象が重なることも時間的に連続することもあるとして次の文をあげている。

(21) 花子は走った。花子の妹も走った。

そして「最初の文よりも2番目の文のほうが、時間的に前に成立したような解釈を与える」ことは「2番目の文を「テイタ」にすること」によって可能になるとして次の文をあげている。

(22) 花子は走った。花子の妹は走っていた。

本稿では、上に説明されるような、「ている」「ていた」が単にある文以前の出来事を表す場合を「完了」とする。「ていた」は「た」に対し、「ている」は「る」に対して、それ以前の事態を表すことができる。

(23) ことに戦後の日本は、もともと教育水準の高い、若さに溢れた労働力が豊富にあり、しかも勤勉だったから、（中略）工業化が進展する人的な土壌としては十分すぎる条件がそろっていたといえる。そこへ、まず朝鮮動乱によって特需がおき、日本経済は息を吹きかえした。(社会科学)

(23) は「ていた」による過去の完了の例である。

## 2　会話・小説・新書における「ている」の使用状況

### 2.1　概観

等量の会話・小説・新書、それぞれ40万字のコーパスを用い「てい・でい・てる・でる・てて・でて・てま・でま・てん・でん・てれ・でれ・てよう・でよう・てな・でな・てお・でお(1)」で検索し、不要なものを捨てる方法で資料を作った。その結果、会話・小説・新書での「ている」の使用数は1400から2000程度であった（表1）。

表1　会話･小説･新書における「ている」

| | 会話 | 小説 | 新書 |
|---|---|---|---|
| ている | 1436 | 1571 | 2075 |

次に「運動短期」「運動長期」などそれぞれの用法の使用状況を見ると表 2 のようになった。

会話では、よくつかわれる順に「結果状態」「運動長期」「運動短期」「効力持続」「繰り返し」「性状」であった。

小説では「結果状態」「運動短期」「運動長期」「性状」と続き、多少頻度が落ちる用法は「効力持続」「繰り返し」であった。

新書では「結果状態」「運動長期」がほぼ同程度、次いで「性状」が多く、続いて「効力持続」であり、「運動短期」「繰り返し」は少ない。

「運動短期」つまり比較的短時間での動作・作用の継続は小説で多く、会話である程度見られたが、新書では非常に少ない。いわゆる動作継続と考えられる「運動短期」は、今回の調査で最も多い小説においても 25%程度である。「運動短期」だけでなく、「運動長期」や「結果状態」などの用法の重要性を認識する必要があることを示しているといえよう。

表2 会話・小説・新書における「ている」の用法

| | 会話 | | 小説 | | 新書 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 運動短期 | 167 | 11.6% | 388 | 24.7% | 67 | 3.2% |
| 運動長期 | 321 | 22.4% | 337 | 21.5% | 584 | 28.1% |
| 繰り返し | 135 | 9.4% | 72 | 4.6% | 37 | 1.8% |
| 結果状態 | 560 | 39.0% | 442 | 28.1% | 580 | 28.0% |
| 効力持続 | 144 | 10.0% | 125 | 8.0% | 295 | 14.2% |
| 性状 | 109 | 7.6% | 207 | 13.2% | 512 | 24.7% |
| 合計 | 1436 | 100.0% | 1571 | 100.0% | 2075 | 100.0% |

一方、「運動長期」は 3 種類のコーパスにおいてどれも 20%以上を占めており、その中でも特に新書において割合が高い。「運動短期」は小説では「運動長期」と同じ程度の割合があるが、会話においては「運動長期」ほどの頻度は見られない。小説では人物の行動を描写するため「運動短期」が用いられるが、会話での「運動短期」は「運動長期」の半数程度であり、新書では非常に少ない。この傾向は「運動短期」と「運動長期」を分けて考えてみて見えたことであり、本稿ではその結果をもとに「運動長期」が科学的なテクストで多いと述べているが、これは今回使った新書で多いのか、論述的なテクストでは一般的に多いのか、随筆などではどうなのかなど、いろいろな文体での使用状況については更に調査をしてみなければならないであろう。

本稿は以上の結果から、「運動長期」という用法に着目する必要があることを述べる。

「性状」が新書でかなりよく使われている。小説・会話でもある程度の使用が見られる。「効力持続」はどのテクストでも 10%程度見られ、これは日本語教育で取り上げる必要がある用法であることがわかる。

次に会話・小説・新書のそれぞれのコーパスでの違いを見てみよう。

## 2.2　コーパスごとの使用状況

会話は「男性会話」と「女性会話」の資料を使った。「男性会話」と「女性会話」での結果を見てみよう。

前節でも述べたが、会話では「結果状態」「運動長期」「運動短期」「繰り返し」の順に出現が見られた。従来の日本語教育で取り扱ってきた「ている」の使い方に「効力持続」の用法の教育を加えれば社会人の会話は成立するといえよう。

「女性会話」と「男性会話」を比較すると、「運動長期」と「運動短期」の出現状況が多少異なり、「男性会話」では「運動短期」の割合が低く「運動長期」の割合が高い。

小説では一人称小説と三人称小説での「ている」の使い方にはあまり大きな違いは見られなかった。

表3　会話における「ている」の用法

| | 女性会話 | | 男性会話 | |
|---|---|---|---|---|
| 運動短期 | 105 | 15.0% | 62 | 8.4% |
| 運動長期 | 135 | 19.2% | 186 | 25.3% |
| 繰り返し | 68 | 9.7% | 67 | 9.1% |
| 結果状態 | 274 | 39.0% | 286 | 39.0% |
| 効力持続 | 72 | 10.3% | 72 | 9.8% |
| 性状 | 48 | 6.8% | 61 | 8.3% |
| 合計 | 702 | 100.0% | 734 | 100.0% |

小説は人の行為の描写が多いであろう、それゆえ人の動作を述べる「運動短期」の割合が高いだろうと予想していた。表4と表5を比較すると、確かに小説では「運動短期」の割合が会話より高い。しかし、小説の中で見ると「運動短期」と「運動長期」に大きな差がなく、「運動長期」の割合が「運動短期」と同程度あり、小説では人や物の動きを短期的にも長期的にも描写していることがわかる。（24）は小説内での運動長期の例である。

表4　小説における「ている」の用法

| | 一人称小説 | | 三人称小説 | |
|---|---|---|---|---|
| 運動短期 | 194 | 25.7% | 194 | 23.8% |
| 運動長期 | 175 | 23.1% | 162 | 19.9% |
| 繰り返し | 41 | 5.4% | 31 | 3.8% |
| 結果状態 | 230 | 30.4% | 212 | 26.0% |
| 効力持続 | 27 | 3.6% | 98 | 12.0% |
| 性状 | 89 | 11.8% | 118 | 14.5% |
| 合計 | 756 | 100.0% | 815 | 100.0% |

（24）万事合理的なヴェネツィア人からすれば、国の存亡が決する時というのに教理論争にあけくれているビザンチンの人間が、我慢ならなかったのである。（運動長期）

新書では、「社会科学」は「運動長期」「結果状態」「効力持続」が多い。

| 表5 新書における「ている」の用法 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 社会科学 | | 自然科学 | |
| 運動短期 | 13 | 1.3% | 54 | 4.9% |
| 運動長期 | 254 | 25.9% | 333 | 30.4% |
| 繰り返し | 11 | 1.1% | 31 | 2.8% |
| 結果状態 | 353 | 36.0% | 192 | 17.5% |
| 効力持続 | 194 | 19.8% | 108 | 9.9% |
| 性状 | 155 | 15.8% | 377 | 34.4% |
| 合計 | 980 | 100.0% | 1095 | 100.0% |

「自然科学」では「運動長期」「性状」が多く「結果状態」が少ない。これは、ある結果が出てその状態を述べるというより、ものの性質を述べるためであろう。

新書は、「運動長期」「結果状態」「性状」等、物事の性質や社会的な仕組みなど一般的なこと、規範や規則を述べるのに使える用法が多いといえる。

大学で学ぶ学習者は「運動長期」「結果状態」「効力持続」「性状」の用法を身につける必要がある。

以下、会話においても新書においても「効力持続」と「運動長期」の問題点を考えることにする。

## 3　会話における「ている」の用法

会話では「運動長期」と「効力持続」の用法を取り上げる。

### 3.1　会話における「運動長期」の「ている」

「女性会話」と「男性会話」では「運動長期」の割合がなぜ違うのであろうか。

本稿は、これはそれぞれのコーパスでの場面の違いに関係があるであろうと仮定し、調査をした。

はじめに、今回使ったコーパスについて簡単に説明する。「男性会話」は複数の男性調査協力者を中心にその協力者と周囲の人との会話を録音し、文字起こししたもの、「女性会話」は女性協力者中心の会話を録音したものである。会話部分と行番号を採集したファイルからそれぞれ 20 万字をとり、資料としたところ、「女性会話」は 11145 行、「男性会話」は 8000 行となった。男性のほうが一つの発話が長いものが含まれる傾向がある。

このコーパスには「場面」として「雑談」「打ち合わせ」「応対」「会議」など、どのような場面での会話であるかが記してある。それらを大きく仕事場面と雑談場面に振り分けて行数を数えた。「会議」「客との応対」「報告」「ミーティング」「電話（打ち合わせ）」などを仕事場面とした。「打ち合わせ」は普通体での仲間内の打ち合わせと丁寧体を使った会議的な会話が含まれており、仕事場面か雑談場面か分けにくいものも見られたが、個別に分類するのも基準があいまいなので、「打ち合わせ」はまとめて仕事場面とした。「雑談」「電話（雑談）」「休憩時」などは雑談場面とした。

会話の例の最初の数字は行番号、次の 03Ａなどは調査協力者 03Ａさんの発話という意味である。→←★は発話の重なり、＃は聞き取れなかった印を示す。場合によっては、話の流れを損なわないようにではあるが、相づちや繰り返し、聞き取れない＃、発話の重なりを示す★などは一部省略した。

表 6 は「女性会話」と「男性会話」における仕事場面と雑談場面の行数とその割合を示したものである。

表6　女性会話と男性会話の場面（行および割合）

| | 女性会話 | | 男性会話 | |
|---|---|---|---|---|
| 仕事場面 | 4218 | 37.8% | 4163 | 52.0% |
| 雑談場面 | 6927 | 62.2% | 3837 | 48.0% |
| 合計 | 11145 | 100.0% | 8000 | 100.0% |

割合で見ると、「女性会話」より「男性会話」のほうが仕事場面の割合が高いことが分かる。今回の録音の中心になった協力者は「男性会話」と「女性会話」ではやや違う場面での会話を録音した傾向にあったようである。まとめると、男性会話は仕事場面が多く、一つ一つの発話が長い。

表 7 は「運動短期」「運動長期」「繰り返し」だけとりあげ、それらが「女性会話」「男性会話」の中の、仕事場面で使われているか雑談場面で使われているかを調べたものである。

「運動短期」「運動長期」の出現数を仕事場面と雑談場面の合計で見ると、「女性会話」では、運動短期が 105 例、運動長期が 123 例とほぼ同数なのに対し、「男性会話」では「運動短期」対「運動長期」は 62 例と 186 例、約 1：3 になっており、「男性会話」での「運動長期」の出現割合は高い。

表7　運動短期・運動長期・繰り返しの場面別出現状況

| | | 運動短期 | | 運動長期 | | 繰り返し | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 女 | 仕事場面 | 29 | 27.6% | 65 | 52.8% | 17 | 23.9% |
| 性 | 雑談場面 | 76 | 72.4% | 58 | 47.2% | 54 | 76.1% |
| | 合計 | 105 | 100.0% | 123 | 100.0% | 71 | 100.0% |
| 男 | 仕事場面 | 28 | 45.2% | 122 | 65.6% | 32 | 47.8% |
| 性 | 雑談場面 | 34 | 54.8% | 64 | 34.4% | 35 | 52.2% |
| | 合計 | 62 | 100.0% | 186 | 100.0% | 67 | 100.0% |

場面別に見ると、「運動短期」は「女性会話」では雑談で 70％以上が使われており、「男性会話」でも仕事場面より雑談場面でやや多い。一方「運動長期」は「女性会話」「男性会話」どちらにおいても仕事場面で用いられており、「男性会話」での仕事場面の割合は「女性会話」より高い。つまり、「運動長期」は仕事場面で用いられることが多い用法ということが言える。

ではなぜ「運動長期」は仕事場面で多いのか。

「運動短期」は、（25）（26）のように、日常的な動作や作用で使われている。

（25）1593　04Ａ　だから、全部同じってわけには、いかないなあ、なんてね、<u>思ってる</u>んですけど。（女性会話　運動短期）

(26) 2551　06A　だから、７月ぱかっとあいちゃったからどうしようかなと思って、今、迷ってんだよ＜笑い＞。（男性会話　運動短期）

一方「運動長期」は（27）～（31）のように長期にわたる行動を表して使われることが多く、長期にわたる取り組みは仕事関係でよくみられる。このような関係で仕事場面の多さと「運動長期」の多さは比例しているといえるだろう。

(27) 1341　03A　ま、特にうちで、［社名］の一課で抱えているお店って、（中略）、ほかの大きいお店でどうやってるのかって、けっこう気にするお店が多いんでねー。（男性会話　運動長期）

(28) 2585　03A　あのー、すごい構造改革を皆さんしてるわけですよ、えあの、会社が、それぞれ。（女性会話　運動長期）

(29) 5339　12F　あ＃＃［商品名］は、［社名］でいくらで売って＃＃↑今売ってんのかなー。（男性会話　運動長期）

(30) 2900　06A そのあいだ２年はほぼ［名字］が代行しておりますから。（女性会話　運動長期）

(31) 2223　03A　～を定例化したらどうかと、とゆうふうに思っておりましてー、（男性会話　運動長期）

「運動長期」で用いられる動詞を見てみよう。初級教科書では「住む」「勤める」「通う」「アルバイトをする」などの、動詞そのものが長期的な動作を表現するものが紹介される(2)。しかし、（27）～（31）の例でわかるように、「運動長期」の例はそれ自体が長期的な意味を持つものだけを使うのではない。工藤（1995:72）が動詞を、それ自体の中に達成限界を含む動詞と含まない動詞に分類し、前者を内的限界動詞、後者を非内的限界動詞としたが、「運動長期」では長期的な動作・作用が可能という意味で非内的限界動詞がよく用いられる。上の例では（29）が「売る」には「売れた」という限界があるようにも見えるが、この文ではその会社がその商品にいくらの値をつけて売り続けているのか、という意味で「売る」が用いられており、この用法では非内的限界動詞であるといえよう。

「動作継続」と一括して捉えるだけでなく、「運動短期」と「運動長期」で使う場面も表現する内容も多少違うことを認識する必要がある(3)。

### 3.2　会話における「効力持続」の「ている」

「効力持続」の「ている」について検討することは３点ある。

１）従来の研究であげられてきた「効力持続」の「ている」の下位分類である経験・記録・属性は社会人の会話ではそれぞれどのように使われているか。

２）「効力持続」の「ている」と統括主題は会話ではどのように関係するか。

３）会話の中での「効力持続」の「ている」が現在と関係するということは、どのようなことを意味するのか。

以下、順に見ていこう。

本稿では、①効力あるいは影響の存在（工藤 1982）、②経験（寺村 1984）、③記録（工藤 1982、1995、井上 2001、庵 2001ａ）、④属性（庵 2001ａ）を「効力持続」の「ている」の下位分類的な用法とし、これらの用法の使われ方を概観し、どのような用法がどのように使われているかについて 3.2.1～3.2.4 でそれぞれ見ることにする。

なお、「効力」は「効力持続」の「ている」全体に関わる要素であるが、「経験」「記録」「属性」などは一つの文の中にそれらの要素が重なり合って出現する例が見られた。例の数について触れる場合は、それらの用法の重なりは重なりとして数えたものである。

### 3.2.1　効力あるいは影響の存在

話し手の存在している「現在」がある会話では、「効力持続」は過去の事柄が現在と関係すること、そのことが次の事柄にも影響することがしばしば述べられる。

（32）1104　03A　再、挑戦することにしました。
　　1107　03A　要は、店の人と名刺、前回名刺交わしてるからー、行っちゃっていいよねってゆう。
　　1109　03B　わたしも知らないもん、よく。
　　1110　03A　はっきりゆうとー、みたいな。
　　1111　03A　なんか、そのあともなんか、ディスプレイ取りに行ったりとか、けっこう勝手にしてるらしいんですよ、［社名］は。（男性会話）
（33）714　02A　もし内容についていろいろ細かいこととか、なにかこう疑問な点があったらさー、＃＃＃が書いてるの知ってた↑（男性会話）

（32）は営業担当の人が「前回名刺を交換した」から先方のことを知っているので、近いうちにそこへもう一度営業に行くことを話している効力持続の例である。一方、1111 行での「勝手にしてるらしい」の「してる」は以前から現在まで何度か「している」と考え、「繰り返し」に分類した。（33）は大学職員と学生の会話である。職員が、夏期講座でタイ・バングラデシュに行けるプログラムがあること、いい経験になることを述べ、＃さんが内容について書いていることを話している。この学生が行きたいと思って何か疑問があった場合はそれを参考にすることができると言っているわけである。現在に影響・効力があることは、上に見た会話の場合、（32）では営業活動、（33）では旅行への参加というこれからのことにつながっている。

会話では、以上のように、さらにその効力をもとに、「だから～する」「だから～できる」という次の行動に結びつく表現がなされる例が多く見られた。

### 3.2.2　「経験」

過去の出来事や経験を述べる用法で「たことがある」に近い表現である。

(34) 9123　15B　だからー、ただ、★話としては、そうねー。
　　9124　15A　→だい、うん、←うん。
　　9125　15A　ルックス表示の概要とー、表情とは、ってゆう話、（そうね）コミュニケーションギャップ、第一印象の重要性、心の、心と表情の分離の要因、（うん　他者(女)）（中略）。
　　9126　15B　ただこれねー、（ええ　Inf(女)）あの、コミニ、あの、あれの時にゆってるねー、あのー。＜録音中断＞
　　9127　15A　こないだ来た人達が、多いんでしょうかねー。（女性会話）

(35) 2563　05A　わたしは、なんか前からそうゆうふうにね、ゆってたのね。
　　2564　05A　うちでやったほうが安いですよ、とかって、（中略）
　　2567　05A　→去年のね、←あのあれをやってるでしょう↑
　　2568　05A　だから、あのー、おそらくきっとこれ大変だろうなと思って。
　　2569　05A　けっこうまあ、安くできたってゆうこともあるんで、（うん）よけいなこと★ゆったんだけど。（女性会話）

(34) は講演をする人が次回の講演の内容を相談していて、「このような内容の話をするつもりだが、以前話したことがある」と語っている。(35) は印刷業者に対する発注を変えようという相談をしているところである。A さんは以前からそういう風に言っていた。そして「去年一度やった」から、大変だろうと思って、提案した、という流れになる。(34) (35) どちらも「たことがある」に置き換えることができる。

(36) 347 02A でなんか、ハワイ行くんです、みたいな話をしてたらー、その一自転車屋さんの、お客さんの人なのね、で、おれ、でー、ロスにはもうなんじゅっ回って行ってる人なんだけど。
　　348 02C　うん。
　　349 02A　ハワイのなんか行ったことないとかってゆってー、（んーんー）行こうかなとかってゆってー。
　　350 02C　ふーん。＜笑い＞
　　351 02A　それでなんか、家族もいいかな、みたいになっちゃってー、そしたらなんかその人の友達まで、おれも行くーみたいなかんじで。（女性会話）

(36) は「ロスには何十回も行ったことがある」けれどハワイには行ったことがない、という話をしており、「経験」の文と読める。しかし、今回集めた例文では、上のように「経

験」つまり過去に一度か二度したという意味になる例はあまり多くなく、会話全体の効力持続の例 144 例中、5 例であった。

### 3.2.3　「記録」

「記録」は「過去に実現した運動が記録として残されているもの」（工藤 1982：78）、「観察時以前の出来事を証拠に基づいて述べたり、主語の経歴として述べたりする際に用いられる」（庵 2001：84）とされる用法である。工藤（1982）井上（2001）庵(2001a)は「記録」の「ている」は「た」に置き換えできないと述べている。

会話で時が明示されている例は「女性会話」で 6 例「男性会話」で 3 例とあまり多くないが、以下のようなものが見られた。

これらが「記録」用法にあたるか、単に時が明示されていると考えられるか、見ていこう。

(37) 4419　09Ｅ　遅刻ー、50 回でいいのかな。
4420　090　うん、これー、ちょっと回数わかんないから 50 回越えてるような人は危険信号が点滅してるって、こう、曖昧にしたんだけど。（中略）
4429　09Ｅ　［名字］さんから話がでたときの、学年会でー、なんか申し合わせたような気がするね。（中略）
4439　09Ｐ　40 回ですね。（中略）
4443　09Ｍ　＜笑い＞ちゃんとメモしてある。（中略）
4457　09M　あっ、りゃあ、6 月 30 日、そんなこと書いてんの↑（女性会話）

(38) 1398　04A　それでですねー、あのー、ちょっと細かいんですがー、いちおー、10 月はつか（20）の日付で、［名字］さんのほうにいただいてるんですけどー、これってー、別にー、あれですかね、うちの支払いを気にしていただいてー、10 月 20 日ですって話なんですか↑（男性会話）

(37) は学校の会議で、進学の内申書に記載する生徒の出席状況についてＭさんが疑問を呈したところ、別の会議参加者から、6 月 30 日の会議で話し合われてそのことが記録に載っていると指摘されたという文脈である。(38)は書類を 10 月 20 日に受け取ったことを述べている。どちらも過去の記録を証拠に「ている」を使って話している。

一方、次のように記録というより多少あいまいな、記憶に頼って話している例も見られた。これは証拠に基づいて述べるというほど強く確信していない例である。

(39) 3595　09A　えーとー、これはあのー、毎月、あのー持ち回りで部長がこー、発表してんだけど、今月ってゆうか、先月は生産技術部が当番だったらしくてー、えー、その中でねー、えーとー、これもポイントだけね、「安全衛

生点検の実施のなかでー」、えー、「計画グループの自主点検、これを５回、指摘 25 件、対策すべて終わってます」とゆうような 発表をしていると。（男性会話）

（40）6432　11Ｈ　25 か、26 か、25 日に帰ってきてる。
6433　11Ａ　あ、帰ってきてんの↑、もう。
6434　11Ｈ　帰ってきた。
6435　11Ｈ　いる、予定ですけどね。
6436　11Ｇ　あ、そうか、20 日出発で 25 日だっけ。
6438　11Ａ　あ、そんな早かったんだ。（「女性会話」）

（41）8531　15Ａ　そうか、面接かあ。＜間＞
8532　15Ａ　きょう、２人だけですか↑
8533　15Ｅ　きょう、２人ー。
8535　15Ａ　また電話入るかなー。
8537　15Ｅ　入るといい＃＃＃。
8538　15Ａ　→きょう木曜日←だからー、ねえ↑＜間＞
（中略）
8541　15Ｅ　でもきのう２人、編集経験があるって（うん）ゆってるから（うん）、そんな悪い人（うん）じゃないし。（女性会話）

（39）は「先月」と時の表現があること、報告書の引用している箇所に「　」がついていることから、証拠があるといえそうだが、「というような発表をしている」のようにぼかして述べている点では「記録」にあたるのかどうか明確には判断できない。

（40）は出張に行った同僚が 25 日に帰って来たという話をしている。6434 では「帰って来た」と、すでに帰国したことを述べているが、6435 では帰ってきている予定だ、と付け加えており、これは証拠をあげているというより、単に日付が話の中に述べられている例といえるだろう。

(41)は「きのう」の二人について述べているが、これも単に日付が話の中に出ている程度の扱いといえよう。

「過去に実現した運動が記録として残されているもの」という基準で「記録」の事例を会話の中で探そうとした場合、「証拠」という意識で述べているのかどうか、不明な例がよく見られた。「証拠」をあげて「記録」として残す表現をする場面もあるであろうが、一般的な会話ではそういった例は多くないと考えられる。

それぞれの例の「た」への置き換えについて見てみよう。

（37）では「た」への置き換えはできない。「た」にすると、単に過去に書いたことを述べるだけになり、はじめの文と違う意味になってしまう。

（37）’　6 月 30 日、そんなこと書いたの？

一方（38）は「た」とすることが可能なようである。

（38）’10 月 20 日の日付で、［名字］さんのほうにいただいたんですけどー、これってー、うちの支払いを気にしていただいてー、10 月 20 日ですって話なんですか↑

（38）’は証拠をあげて話している会社での取引の話である。「た」への置き換えは可能なようであるが、「た」にすると現在との関係のニュアンスは薄くなり、「連絡をいただいた」という過去の事態の表現になるようである。

（39）（40）も「た」にすると、(39)は「もう終わりました」、(40)は「もう帰ってきた」と、過去の出来事や過去の報告を述べる表現になり、事態は過ぎ去ったことになる。

（39）’（前略）先月は生産技術部が当番だったらしくてー、その中でねー、（中略）えー、「計画グループの自主点検、（中略）対策すべて終わりました」とゆうような発表をしたと。

（40）’11H　25 か 26 か、25 日に帰ってきた

11A　あ、帰ってきたの、もう

11H　帰ってきた。いる、予定ですけどね。

（41）’でもきのう２人、編集経験があるってゆったから、そんな悪い人じゃないし。

(41)は、「ゆってるから」だと現在も審査の過程にあることが感じられる。それに対し「と言ったから」だと、面接に来た人はそのように言ったからそのような過去の実績があるのでしょう、と、過去が事実として述べられているように感じられる。

「た」に置き換えた場合、これらの例文は現在との関係を失い、過去の事態を表すだけになる。会話では、「記録」の用法あるいは過去の時が示されている文は、「ている」を「た」に置き換えることができない、あるいは、置きかえると意味が変わるということがわかった。

「記録」という用法は、庵(2001a)が「記録」の例文をあげた取り調べの場面（2001：84）や論文などの一定の文脈では明確にその存在が際立つが、一般的な社会人の会話では証拠を出しながら話す機会があまり多くない可能性がある。今回採集した例も、「記録」という用法を広く解釈し、証拠をあげて述べるというより時が表現されている例という基準で選んだ。

また、今回「記録」として採用した例は「男性会話」の効力持続 72 例中 3 例、「女性会話」72 例中で 6 例であったが、それらすべてが仕事場面であり、雑談場面ではみられなかった。例が少ないので明確には言えないが、雑談ではひとつひとつ事柄を確認して話すような話し方をしない傾向があるかとも思われる。論文や取り調べなど、証拠を明確に示す表現

をする言葉の使い方と、相手があり、相手に合わせながら流れを作っていき、必要に合わせて表現を変えていく表現方法の違いによるのであろう。

### 3.2.4　「属性」

庵（2001a:84）は「効力持続」には「現在観察される事実/属性が存在する」として「効力持続」には事実を表すと同時に属性の意味があると述べている。会話では事実と属性はどの程度の割合でみられるか調査した。

属性は以下のような文で見られた。

（42）3961　09M　どれが主語だってゆわれると、えーっつって。
　　3962　09L　だいたい、国語できなくて理系きてんだから。（男性会話）
（43）572　02C　いたもんな、フィジーでも。
　　573　02C　フィジー夜中に乗って、朝方の7時につくっていう便があるのね。
　　575　02C　その人なんかー、だ、それで帰ってそのまま会社直行よ、とかゆってるの。（女性会話）

（42）は過去に単位を落とした話をしている中での発言である。「国語ができなくて理系の学部に来た」という表現で、自分は外国語が苦手な人間であるという属性を表現している。（43）ではCがフィジーに旅行したときに、海外旅行から朝帰国してそのまま会社へ出勤すると言っている人がいた、と話している。そのように言う人、ということから旅行慣れした人という属性が読み取れる。

属性を表していると読めた文は今回の調査では、「女性会話」で8例、「男性会話」で10例であった。会話の効力持続144例中12.5%を占めると言える。「経験」「記録」より重要な用法と言えるであろう。

また、例の数はそれほど多くはないが、属性的な用法は会話では特色が見られた。後に述べる。

### 3.2.5　統括主題と「ている」

井上（2001:154）は過去の出来事を示すのに「た」と「ている」の二つの表現が可能なのはなぜか、という疑問を呈し、「た」は「実現の経過が把握できている過去の出来事を、特定の統括主題に従属しない独立の出来事として捉える」のに対し、「ている」は「過去の出来事を、発話時において有効なある統括主題（複数の類似の出来事の背後にある一つの状態）に従属する一事例として捉える」と述べている。

統括主題の考え方は「効力持続」の「ている」の使い方の一面を明確に捉えている。例えば論文の中で引用文の文末をよく「ている」で示す。ある事柄について事例を出したり引用

したりして、いろいろな方法で述べていく場合には統括主題のもとに「ている」を使っているといえるであろう。

しかし、「統括主題」の考え方はすべての例に適用できるかどうか、というと疑問が出る。

(44) 6858　14D　あー、部屋の鍵忘れた。
6859　14G　あー、ごめん、わたしがそこに乗っけたからさー。
6860　14D　あーあー、違うんです、忘れないようにしようと思って、すっかり忘れたんです。
6861　14G　忘れてんの↑
6862　14D　電話でない。
6863　14D　もー。
6864　14G　少し待ってれば＃＃＃＃＃。
6865　14D　帰ったらいいのか、ここで待ってたらいいのか、どっちにしたらいいのかが★わからないのよ、迎えにきてくれんのか。（男性会話）

(45) 7448　13Ａ　あのー、これとー、あっ、この 2020 とこれ保守料なんですけどー、これ、［地名］とー、本社工場に分けたぶん、あの、これー、再リースの分でー、
7449　13Ｇ　払い済み。
7450　13Ａ　もう、あのー、ええ、これに１２かけた分、あの、年間、１年、いっぺんにこう一括で払っちゃったんですよ、この前。
7451　13Ｇ　うんとー、９月分、で↑
7452　13Ｇ　そうだよね。
7453　13Ａ　→えーとー←、あのー、再リースの場合別の請求書が来るんでー。
7454　13Ｇ　→あ、ちょっと待って、待って待って、←これが１回目分てことは、だからー、ここが１０月の請求だからー。
7455　13Ａ　えーっと、だからー。
7456　13Ｇ　→その時に←請求来た時点で一括払いしちゃってんだよね↑
7457　13Ａ　あの、べつ、別にーこれだけで請求書がー来たんでー、それを本社とみよし工場に分けてー、１年間分。
7458　13Ｇ　→うん、来ちゃったんでー。←
7459　13Ｇ　→だからー、←これを抹消して、ほしいってことだよね↑
7460　13Ａ　ええ、１年間分、支払っちゃった。（女性会話）

(44)は美容院のスタッフルームでの会話で、Ｄが鍵を忘れてきたと話している場面である。この場面の統括主題は 14Ｄが鍵を忘れて、その後どう動けばいいか分からないということであろう。その中で、6858、6860 でＤは「忘れた」と話しているのに対し、6861 のＧ

は「忘れているの」と尋ねている。この切り替えはどのような意識に基づくものなのだろうか。Dは「忘れた」と、今ここに鍵がないことを述べているのに対し、Gは「現在ここに鍵がないのか」という気持ちで「忘れているの？」と聞いているという読み方、つまりGにとってはDが鍵を忘れたことが現在に関係していると受け止めた、という表現をしている、という解釈も可能かと思う。しかし、「た」と「ている」と統括主題との関係はどのように考えることができるのだろうか。

（45）は会社内の会話で、リース料をすでに払ったので、記入してある金額を抹消してほしいという内容の話である。再リースの場合、別請求書が来たので払ってあると述べているが、7450、7460 でAは「払った」と「た」で、7456 でGは「一括払いしちゃっている」と「効力持続」で述べている。この会話でも、Aは過去に「払った」ことを述べており、Gは現在との関係で「払ってあるのか」と聞いている。Gは「だから抹消してほしいってことだよね」と現在に続けている。その意味で効力持続は効果を果たしている。しかし、この例においても、統括主題と「た」「ている」の関係は理解しにくい。

会話では多くの場合、何らかの話題があるため、ひとつの話題が続く場合は統括主題が存在するといえるが、その中で「た」も「ている」も使われているというのはどのような意識に基づいているのであろう。「た」「ている」の使い分けについて、会話では統括主題の存在以上に重要な要素が関係していることが想像される。会話のように話者が交代して話題も転換するテクストでは統括主題という一つの考え方で議論をまとめるのは難しいと思われる。

### 3.3　「効力持続」の「ている」の会話での使われ方

「効力持続」の「ている」は過去の出来事を現在に関係させて述べる用法であるが、それは、会話の中では、多くの場合属性を表すより出来事を表現しており、「記録」という意識で表現している例もそれほど多くないと述べてきた。会話の中で現在と関係するということは、話し手と聞き手の話している現在という場に関係させること、相手との関係に絡ませるということを意味する。話し手はどのような考えで過去の出来事を現在に関係させているか考えてみよう。

#### 3.3.1　先行研究

谷口（1997：143 - 150）が「テイル」形にはムード的な側面があるとして、①話し手と聞き手との再会や待ち合わせを含意する場合、②心理的な現在を表す場合、③儀礼的な表現効果を生む場合、④出来事を客観的に言い表す場合、の４つの観点から考察したことはすでに述べた。ここではそれぞれの例文と共に、これらの用法を確認する。

①の「待ち合わせ」は「未来の出来事について、話し手がある動作をしながら相手と合うことを期待している」ような用法である。

（46）何かあったら呼んでください。ここでワープロを打っていますから。

① の「心理的な現在」は、

（47）ご存じのように、先生はいろいろな作品を発表していらっしゃいます。

の例をあげ、「その人物についての過去の出来事、すなわち功績が発話時においても効力のあるものとして提示されている」と述べている。

③の「儀礼的な表現効果」については「テイル形には、ある事柄について、それを意図的に行ったものではないという話し手の気持ちが反映されるばあいがある」としている。

（48）ただいまの字幕で「ハベル大統領」を「バベル大統領」と書いておりました。訂正の上、おわび致します。

④の「客観的な機能」では「スルの場合は話し手とその出来事との心理的関係がかなり密接であり、テイル形の場合には、その間に一定の心理的距離が置かれている」と述べている。

谷口（1997）が「効力持続」に限らず、「ている」の用法の中には配慮の意味が含まれるものがあることを示した点は新しい観点の提示であろう。しかし、谷口（1997）の分類は①が「再会や待ち合わせ」、②が「心理的な現在」、③「儀礼的な表現効果」、④「客観的な表現」と分類の基準がばらばらである。本稿がここまで見てきた「ている」の用法と関係させてまとめると、①の「待ち合わせ」は本稿では未来の効力持続として先に述べた。②は過去の事態が現在に効力・影響があるということで、本稿でいう「効力持続」にあたるものであろう。③と④は井上(2001)が間接的と述べている使われ方であろう。

井上（2001）は過去を表す表現に「た」と「ている」があるのは、事態に対する筆者の捉え方の違いによるとしている。

「シタ」は「実現の経過（少なくともその一端）が把握できている過去の出来事を、特定の統括主題に従属しない独立の出来事として述べる」のに対し、記録用法の「シテイル」は「現存する記録や痕跡では出来事Pが実現されたことになっているが、出来事Pが実現された時の経過は把握できていない」という場合「シタ」は使えず、そのかわりに「シテイル」が用いられる(井上 2001:111)」と過去の出来事を、発話時において有効なある統括主題（複数の類似の出来事の背後にある一つの状態）に従属する一事例として述べる」としている（井上 2001:120）。つまり、直接的な体験であり、部分的にでも事態に直接的に関与している場合は「た」が使えるが、間接的あるいは記録でのみ知っている事態は「ている」になる、ということで、谷口（1997）の③④と井上の議論は共通している。「ている」は間接的な事態の把握であるといえる。

谷口（1997）をまとめると、「ている」には過去の事態を現在に関係させる用法、間接的な体験を述べる用法があり、それらはムード的な側面を持つといえるであろう。

本稿では、谷口（1997）のようにテンス的に広いものは取り上げず、「効力持続」の「ている」について、1)過去の出来事を現在に関係させる表現方法であること、2)配慮の意味を含む場合があることを述べる。

### 3.3.2　現在に関係させる過去の事態

本稿は、「効力持続」は過去に起こった出来事を現在に関係づけて述べるのが本質であると考える。庵（2001a:83）はこれを「異なる時点における２つの事態を包含して表している」としている。

そして、会話の中では多くの場合、その関係性をもとに、「これからどうするか」に発展していく。

（49）883　02E　西安の［学校名］学院てゆうのはね↑、あのーこちらの大学の。
884　02F　先生が行かれたところねー↑
886　02H　すごく歓待されて、すごく喜んでおりました。
887　02H　もー、ごちそうぜめだったって。
888　02E　あーそうですか。
889　02H　すごく喜んでおりましたですか。＜笑い　複数＞
890　02E　ぼくは、教育の設備が、これで寮。
891　02H　わかんないですね。
892　02F　であのー、留学生楼は建ててる、新しく建ててるんですね、２年ぐらい前。
893　02E　えー、えー、えー。
894　02F　だから、部屋自体がきれいだと思うんですけどもー。（男性会話）

この例は協定大学について、大学関係者が話している例である。2 年ほど前に留学生寮を建てたので、寮の部屋はきれいだから留学生を送るのに適当だという話を続けている。「2 年前に寮を建てた」ことがこれからの留学生派遣と関係を持ったこととして語られている。

次の例は相手と関係を持って話している例である。

（50）3640　09Ａ　これはあのー、みなさんこれ、内容は見てるのかなー。
3641　09Ａ　初めての人はー、いるかなー。
3642　09Ａ　みな知ってる↑
3643　09Ａ　えーとねー、そいでねー、ちょっとここできき、聞きたいんだけどねー、じゃー当てて聞こうかなー。（男性会話）

（51）920　02H　＄＃＃＃があんまり認めてしまいますと、うちの学校で勉強しない間に、卒業できちゃう。（中略）

927　02A　　ここが 60 単位になったって話、先生聞いてます↑
928　02Ｅ　　１年ですか↑
929　02A　　いや 60 単位まで認めていいじゃないかって、外国語。（男性会話）

（50）の 3640 は配布した資料はもう見たかと聞いている。（51）は協定大学の単位認定が甘くなったということをもう知っているか、と尋ねている。これらは「た」で十分表現できる内容である。

(50)’　みなさんこれ、内容は見てるかなー。
(50)”　みなさんこれ、内容は見たかなー。

(50)”のように「た」を使った場合は過去の事柄になる。それに対し「ている」を使った場合、現在にまで影響はあるか、と問うことになる。「ている」を使うと「見てわかっているか。印象に残っているか」と尋ね、共感を確認して話を続けていく姿勢がとれる。実際 3643 は相手の態度を見ながら柔らかく話を続けている。つまり、「ている」は過去と現在を結合するのだが、それがその場にいる聞き手との間に共感を生み、その共感の上に立ってこれからの活動に話を続けている。

（51）’ここが 60 単位になったって話、先生聞いてます↑
（51）”ここが 60 単位になったって話、先生聞きましたか↑

（51）’の「聞いてます↑」は現在と関係を持つため、「聞きましたか」と同時に、「聞いて覚えていますか」を含意する。そして先ほどから述べているように、未来とも関係させて「だからそれに対してどう思いますか」などを意味することができる。これに対し、「先生聞きましたか」にすると、「もう聞きましたか」という意味になり、積極的に現在と関係させる意識は表面化されない。「聞いていますか」のほうが、事実を確認する意識が感じられる。

次は自分の行為を述べている例である。

（52）624　02A　それからもう一方のほうのー、［学部名］学部のほうは、Ａ案Ｂ案あるけどもー、どちらかの案ひとつに絞りなさい、とゆうことだったよねー↑
625　02A　うん、ぼくはあのー、局長と確認してんのよ。
626　02A　だから、あのー、委員長とも確認したうえでねー、あのー、［名字（02Ｉ）］さん、［名字］局長と確認してみたら。
627　02A　うん、そしてすり合わせをしてー、大学審議会にーどうゆうふうに載せていくのかとゆうことでー、えー、［学科名］の意向も確認しなきゃいけないんでね↑　（女性会話）

（52）はこれまでの流れを「だった」と「た」で確認し、自分が局長と確認したことを「ている」で述べている。「確認してある」からその結果をもとにこれからのことを考えるつもりであると、「確認した」ことを現在、未来と関係させて述べているといえる。

（52）’局長とも確認してるのよ
（52）”局長とも確認したのよ

（52）’は「確認している」の形で、過去に確認したことと同時に現在その効力があり、それをもとにこれからのことに対応できると述べていると理解できる。それに対し、（52）”のように「確認した」とすると、過去に確認はすでにしたと述べているようにとれる。

以上のように、「ている」は過去のことを現在と関係させて述べ、会話では多くの場合、その効力をもとにこれからの事を考える傾向がある。

次の例はやはり現在と関係があるが、この例はより現実的に自分と関係があると述べている。

（53）1158　03Ｂ　違う、違う、これはもう払ったやつでしょ。
1159　03Ａ　うん、うん、だっ（だから）、これも、払ったやつなんだけどー、これ、３０万から出てるやつはこれなのね。
1160　03Ｂ　うん、だから、それは、こんなかに入ってるわけでしょ。
1161　03Ａ　→うん、←うんうん。
1162　03Ｂ　で、それとはまったく別に一枚。
1163　03Ａ　あ、これをコピーして↑
1164　03Ｂ　→まったく一枚、←これ、これが、いくらいくらで。
1165　03Ａ　はーはーはー。
1166　03Ｂ　→これは←、よーするに、うちの会社から出てんだけど、ぼくから出てるわけだからー。
1167　03Ａ　うーん。
1168　03Ｂ　→基本的←にはー、えーっと、誰だっけ。
1169　03Ｂ　［名字］さん。
1170　03Ｂ　［名字］さんが、ま、前受けなしでー、立て替えて払ったってことでしょ。　（女性会話）

（53）は会社で、精算について話している場面で、Ｂが払った分の領収書を見せて説明している。本稿では 1160 の「入ってる」は結果状態とし、1159 の「30 万から出てる」の「出てる」、1166 の「うちの会社から出てる」「ぼくから出てる」を「効力持続」と分類し

た。「入っている」はＡさんが示した領収書に入っていると述べていると理解でき、その場合、手元にあるものに含まれているので結果状態と理解できる。一方、1159 は結果状態とも理解可能と思えるが、1166 では「払った」という過去の行為を捉え、その中で「会社から出た」「ぼくから出た」と表現しているので「効力持続」とした。

（53）’これはぼくから出ているわけだから
（53）”これはぼくから出たわけだから

（53)’に比べて(53)”のほうが客観的に事実を示し、「ている」のほうが現在と関係がある事態と述べているように感じられる。

「た」は「出来事が実現された経過が具体的に把握されていなければ使えない」表現であるのに対し、「ている」は「現存する記録や痕跡を介してのみ把握可能なできごと」として述べる表現であり、また、過去の出来事を「現在も有効なある状態に従属する一局面」として捉える表現（井上 2001：113）とされている。

上の例ではお金を払ったのは自分なので出来事の経過は具体的に把握されており、「た」でも表現できるはずであり、同じ会話の他の部分では支払いが「た」で述べられている。しかし、この部分では「ている」で表現されている。この部分は「ている」で表現することにより、現在に関係のあること、つまりまだ精算されていない支払であることを示しているといえよう。その発言の後は再び「た」になっており、過去扱いになっている。この例では、実質的な利害が関わる場面で、まだ過去になっていない事柄であることの表示として「ている」が使われているといえる。「ている」は現在と関係させ、「た」は過去のこととして表現する、という姿勢が明確に出ている例といえるであろう。

次の例（54）も同様に考えることができるだろう。（54）は(45)の再掲である。

（54）7454　13Ｇ　→あ、ちょっと待って、待って待って、←これが１回目分てことは、だからー、ここが１０月の請求だからー。
7455　13Ａ　えーっと、だからー。
7456　13Ｇ　→その時に←請求来た時点で一括払いしちゃってんだよね↑
7457　13Ａ　あの、べつ、別にーこれだけで請求書がー来たんでー、それを本社とみよし工場に分けてー、１年間分。
7458　13Ｇ　→うん、来ちゃったんでー。←
7459　13Ｇ　→だからー、←これを抹消して、ほしいってことだよね↑
7460　13Ａ　ええ、１年間分、支払っちゃった。（女性会話）

この例でも「一括払いしてある」からこの請求を抹消してほしいと現在との関係を述べ、これからの対応を取り上げやすい表現になっている。

### 3.3.3　聞き手に関わることー「配慮」

「効力持続」の「ている」は谷口（1997）がムード的な用法と述べたように、相手への配慮を示すこともできる。

（55）2281　06H　あのですねー、わたしが去年出したんですがー、実はその前も通っていないんですよ。
2282　06A　えっ。＜驚き＞
2283　06G　あー、そうですか↑
2284　06H　２年続けてってゆうのはめずらしいって、ぼくもちょっと図書館のほうに確認したんですが、なかなかやっぱりその一今までの実績一の予算で、実績でまー、通ったってゆう最近２年、３年のね、なんか額を足していってー、順番をつけると［研究室名］は２年続けてはずれたんですよ。
2285　06A　あー、そうですか。
2286　06H　→だから、←それなりの根拠があったんですよ。
2287　06A　あー、そうですか。
2288　06H　それで、だからあのー、わたしもはずれましてね、その前は［名字（06F）］さんだし、お出しになっていてー、それもはずれているのでー、ま、できればーそのー、［名字（06F）］さんのほうから、とゆうふうにおもったー、わたしは個人的には思ってるんですよね。（男性会話）

（55）は研究予算の希望をだれが出すかという話である。2281 でHは自分が出したこと、外れたことを述べている。2284、2288 は「はずれた」のように「た」を使っている。一方Ｆさんについて述べる時は 2288 でのように「ている」を使っている。

自分が申請したこと、はずれたことは過去のこととして「た」で述べ、06Ｆさんについては「お出しになっていて」「はずれている」と「効力持続」の「ている」で表現している。自己の申請と不採用は事実経過を把握し、過去のことであると認識しているという意味の「た」で表現していると考えることもできる。その場合、2288 の「ている」をどう捉えるかであるが、本稿は、この部分について、一種の配慮表現という見かたをとることを提案したい。つまり、他者のことは「ている」で述べることによって現在もまだ関係があることとして表現し、自分のことは「た」で過去のこととして表していると考える。このように表現することによって、今度の申請は 06Ｆさんからどうぞ、と述べやすくなろう。つまり、「ている」が現在と関係するということが一種の配慮表現として働いているといえるだろう。

次の例は営業の人Ｂと客のやりとりである。書類があるかという話をしている。

（56）7821　16B　いや、一緒お渡ししているはずです、★書類とー。

7822　16A　→＃＃＃＃。←＜電話の音＞
7823　16B　あの、＃＃契約書とか★あれとか。
7824　16A　→あのー←控えでしょ↑＜電話の音＞
7825　16B　　控えじゃなくて、一緒にこれにサインをしてくださいね、っていって。
7826　16A　サインしてださない、だしてなかったら、だって来ない。
7827　16B　　これ、お渡ししたものの中にー、あのー、七福神にせんいち（2001）導入にあたってって。
7828　16A　あのー、これをー、契約書出した後にー、もらってんだよみんな。
7829　16A　もらったのが★いっしょ。
7830　16B　→いやいや←いっしょにー、お渡ししました。
7831　16A　それは、おれが渡したちゃった分、手元にないんだよ。（男性会話）

7821 では営業の人は書類を「お渡ししている」と言っている。それに対して客がもらっていないと何度も答える。応対が数回あった後で 7830 はきっぱりと「お渡ししました」と答えている。最初は相手に配慮して「ている」の形に「はず」をつけて柔らかい表現をしているが、相手が納得しないので、結論を出そうということで 7830 では「お渡ししました」と井上（2001）が述べる「実現の経過（少なくともその一端）が把握できている過去の出来事を、特定の統括主題に従属しない独立の出来事として述べる」表現である「た」の形で答えている。つまり、7821 の「ている」は配慮表現となっており、逆に 7830 は配慮するのをやめたことがわかる。

次の例は他の人をからかう例である。

（57）5613　10G　あ、サンドイッチなんですねー。
5615　10C　今日ね、★ほら。＜言いさし＞
5616　10G　→まめ←ですよねー、奥さん。
5620　10A　まーったくねー。
5621　10A　あの★奥さんにしてー。
5622　10D　→もーったいないよなー。←
5623　10A　そうですよー、ほーんとに。
5624　10C　★もう、いいよ。
5625　10A　→そいでー、←きのうは毒殺するような話をしてんだからー。＜笑い＞
（女性会話）

（57）はCの奥さんがまめだということをCのお弁当を見ながら同僚たちが話している場面である。5625 でAは「Cが昨日は奥さんを毒殺するような話をしていた」と語っている。同僚も本人も冗談であることはよくわかっていて笑っている。

(57) ’そいで、きのうは奥さんを毒殺するような話をしてるんだから
(57) ”そいで、きのうは奥さんを毒殺するような話をしたんだから

(57) ”のように「た」で表現すると具体的に事態を把握できた過去の表現になる。
一方「ている」で表現すると「昨日話した」だけでなく、「繰り返し」的に「よくそういう発言をする」という意味もあり、そういった文脈では、Ｃさんの話は現在ここにいる皆がそのような話をよく聞いていて今日もその話を覚えているということが表され、そこから、「もったいない」という気持ちも皆共通に持っているように感じられやすい。「ている」に現在との関係を表現する「効力持続」の用法や「繰り返し」の用法があることが効果的に作用しているといえよう。「ている」を使うことによって、場合によっては冗談や共感にまで広がる一種の配慮表現になっているといえるだろう。上にあげた例に「笑い」があったことも、話者聞き手双方に、この「ている」がムード的な配慮を表すものであるということが認識されていることを示しているといえよう。「ている」は谷口（1997）が言うようにムード的な使い方ができるといえる。

以上のように、効力持続の「ている」の使い方には、相手に関わることでは現在と関係させることが相手といい関係を持ち続けたいという表現に近くなったり、冗談にまで広がったりする一種の配慮表現となることが見えた。逆に、「た」と断言することで配慮しないこと、自分は事実を把握しているということを表現することもできることがわかった。

### 3.3.4　自分のことの表現

「効力持続」の「ている」で自分のことを表現する場合はどのようになっているか、いくつかの例を見てみよう。

(58) 4808　09 J　→それでね←出かけるとね、ほんとにあほな、こないだ、鎌倉へね、うーんとーほら、１９５０年代、世代的にゆうとぼくらくらいな、フランスの絵描きで、あっ、ドスタール。
4809　09 I　うーん、うーん。
4810　09 J　あの、なんかドをつけるんですよねえ、なんとかドスタールってゆう絵描きのね、個展見に行ったの、女房と。
4811　09 J　そしたら、きのう終わりました。＜笑い＞
（中略）
4853　09 J　そうゆうね、へまやってんですよね。
4854　09Ａ　→そうなんだ。←
4855　09 J　だから、見て、これだけは見にいこうなんていって、あのー、あれしてるとね、結局、で、★い、行く、行くと終わっちゃってる
4856　09 I　→そうなんですよね。←

4857　09Ｊ　鎌倉までよー。
4858　09Ａ　先生ね、遠出なさったのにねえー。（女性会話）

（58）は60代の男性が展覧会を見に行ったところ、一日違いで終わっていたということを話し、自分はへまをやったと述べている。また、4855では展覧会が、せっかく行ったのに終わってしまっていた、と話している。4855の「あれしてるとね」は「他のいろいろなことをしていると」という「繰り返し」ととり、4853の「へまやってる」を「効力持続」ととった。
4853の「へまやってる」を「た」と「ている」で表現してみよう。

（58）’そういうへまやってるんですよね。
（58）”そういうへまやったんですよね。

（58）”は過去に一度へまをやったと理解できる。一方（58）’は「繰り返し」の意味が現れ、属性表現とも感じられる。この場合は、「ている」で述べて属性として表現することにより、相手に共感してもらっている。相手も4858のように共感を示している。「ている」が使われることによって自分のドジさ加減を冗談めかして述べることができている。「た」では過去に起こった出来事を客観的に述べるだけである点が「ている」と異なる。

（59）3851　09A　おなしロシア語とってた友達ってさ、みんな落っことしてたよ、★単位。
3852　09K　→あ、←そうですか、ぼくー、うちのロシア語、すごい楽なんですよ、{あ、そう}なんでかしんないけど。
3853　09K　てゆわれて、たんですけど、ぼく、落としたんですよねー＜笑い＞。
3854　09K　「アルファベット書ければとおるよ」とかゆわれてたのに、なんかおれ落ちてるんですよねー。＜笑い　複数＞
3855　09K　＜笑いながら＞だめじゃん。
3856　09M　＜笑いながら＞だめだね。＜笑い　複数＞(男性会話)

（59）は最初「落とした」と「た」を使って事柄を述べ、さらに「落ちてる」と「効力持続」を使って繰り返している。

（59）’なんかおれ落ちてるんですよね
（59）”なんかおれ落ちたんですよね

これは谷口(1997）が「心理的な現在」として「その人物についての過去の出来事、すなわち功績が発話時においても効力のあるものとして提示されている」と述べているものにあ

たっているであろう。「ている」を使い、自分が語学の不得手な人間であるという「功績」を述べている。bのように「た」を使った場合は過去の出来事になり、すでに過ぎ去ったこととして表現されることになる。一方、「ている」を使うと、過去の事態が現在も影響があることが表現され、「ぼく」は言葉の学習が苦手な人間であるという属性としても表現されることになる。

ここで周囲も話者も笑っていることを考えてみよう。早川(1999:179)は会話の中の笑いについて分析している。この笑いは早川(1999）の分類では「恥の笑い」にあたり、深刻さを減少させる効果をもっているとされる用法であろう(4)。聞いている側もその発言を認め、同意の意味をこめて笑っている。早川(1999）は、仲間としての共感の表明が笑いで表されると述べているが、この複数の笑いはそれに当たるであろう。つまり、周囲はこの09Kさんの自嘲に理解と共感を示しているといえる。

以上、自分のことを「ている」を使って述べている例をあげたが、比較的、自分のことはからかいや自嘲、冗談をこめて表現しており、3.3.3の例（55）のように、相手のこと、話題の人物のことは現在も過去の事象に関係を持って機会や可能性が保持されていると述べるのと対照的である。

「効力持続」の「ている」の配慮の表現は、相手があり、過去があり現在がある会話において明確に機能するものといえる。配慮する相手があるからこそ成り立つ「効力持続」の意味・機能といえるであろう。

### 3.4　会話における「運動長期」「効力持続」のまとめ

会話の中での「運動長期」は「運動短期」と多少異なった使い方がされている。「運動短期」は日常的な動作・作用の継続を表すのに対し、「運動長期」は仕事場面で比較的多く用いられ、内容的にも長期的に取り組む仕事に関係する事柄が多い。

従来、日本語教育では、「運動長期」については、初級で、それ自体が長期的な意味を持つ動詞を使い「（会社）で働いている」「勤めている」「通っている」などを教えてきているが、社会人の会話では、それ自体に長期的な意味があるわけではない非内的限界動詞を使うことによって長期的な意味が表される「運動長期」が用いられているということがわかった。このような「運動長期」は使える方がいいということを意識化させる必要があるであろう。

「運動短期」「運動長期」を分けて扱うことは許（2000）の研究などで行われてきたが、その用法と使われる場が違うことを実証したのは本稿の新しさである。

これまであげられてきた「効力持続」の「ている」のいくつかの用法について社会人の会話の中での使用例を調べてみたところ、会話の中での「効力持続」の「ている」は相手と共に存在している現在に過去の事物を関係させて述べることを基本義とすることがわかった。基本的な用法は過去の出来事を現在に関係させて述べることであり、「経験」「記録」「属性」の用法は数としてはあまり多くなく、周辺的な用法であるといえる。過去の出来事を現在に結び付けて述べることは、会話の中では、未来と関係させて述べることも多い。

「効力持続」の「ている」はある事態がすでに過ぎ去ったことではなく、現在にまだ関係しつづける事態であるということを述べる場合に用いられる。実現の過程を把握していることを表す場合は「た」、把握していない場合は「ている」を使うとされる（井上 2001）が、過去の出来事を、自分のことは「た」で、相手あるいは他者のことは「ている」で表現することによって、自分のことは過ぎ去ったことであると述べ、相手のことは現在も関係があり、未来にも生かすことができるものであるという表現をすることも可能である。このような使い方をする場合、「効力持続」の「ている」は一種の配慮表現として働く。

自分のことを「ている」で述べる場合は、過去のことであると同時に「繰り返し」あるいは「属性」も示す場合があった。今回見られた例では、「繰り返し」「属性」などによって、謙遜を示したり、からかいの対象であると述べたりすることを表し、それによって相手に共感してもらうことを期待する表現になっていた。このように、「効力持続」の「ている」は、基本は現在と関係させる過去の表現であるが、会話の中では相手との関係があるため、一種の配慮表現として使われている場合がある。

「ている」はテクストによって違った機能が表面化されて使われているといえる。具体的に言うと、会話では「記録」の用法はあまり有効に働いているようには見えなかった。統括主題の存在も、相手のある会話では十分に作用しているとは言いにくい。会話での「ている」は相手との関係の中での働きのほうが重要といえるであろう。日本語教育の現場では学習者の求める日本語によって「ている」のどのような面を強調して教材に取り入れるかを考える必要がある。

## 4　新書における「ている」の用法

### 4.1　概観

新書での「ている」の用法を「運動短期」「運動長期」「繰り返し」「結果状態」「効力持続」「性状」と分類して集計した。その結果が表 9 である。「運動短期」が非常に少なく、「運動長期」「結果状態」「性状」「効力持続」が多い。

表9　新書における「ている」の用法

| | 社会科学 | | 自然科学 | | 合計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 運動短期 | 13 | 1.3% | 54 | 4.9% | 67 | 3.2% |
| 運動長期 | 254 | 25.9% | 333 | 30.4% | 587 | 28.3% |
| 繰り返し | 11 | 1.1% | 31 | 2.8% | 42 | 2.0% |
| 結果状態 | 353 | 36.0% | 192 | 17.5% | 545 | 26.3% |
| 効力持続 | 194 | 19.8% | 108 | 9.9% | 302 | 14.6% |
| 性状 | 155 | 15.8% | 377 | 34.4% | 532 | 25.6% |
| 合計 | 980 | 100.0% | 1095 | 100.0% | 2075 | 100.0% |

「運動短期」は以下のように具体的な行為を描く場合に用いられている。

(60) この病気の症状はたいへん劇的で、話をしている最中に眠ってしまうとか、自転車に乗っていて眠ってしまうなど、ほんらい眠れないはずの状況で、突如として「睡眠発作」がおこる。(自然科学)

しかし、新書ではそうした具体的な行為・動作は、例などでは見られるが、事象の分析や社会の情勢を描写する場合などでは使われないことが多い。そのため、このように少なくなっている。

それに対し、「運動長期」は自然現象や社会現象について述べるのに使われる。

(61) 現在日本企業の国際的なプレゼンスが高まり、より国際性と大きなビジョンをもった活動がこれらの団体には要請されている中で、三団体の不協和音や指導者のリーダーシップの欠如がしきりに指摘されている。(社会科学)

「結果状態」は次の例のように、結果動詞を用いる文で使われていた。

(62) 前国家的権利と後国家的権利とが基本的人権として一括されているので、日本国憲法の人権イデオロギーは論理が一貫せず、理念がぶちこわしになっている。(社会科学)

(61) では日本国憲法の文章の中に述べられている人権イデオロギーは矛盾を含んでいるため、理念として一貫していないということを述べている。日本国憲法は十分な思索を経ないで作られたため、基本的理念を混乱させた、と述べており、時間と関係のない「性状」とはとれないため、「結果状態」と判断した。

「運動短期」と「運動長期」を分割して考えたように、「結果状態」も具体的な動きがあってその結果が存在する場合と、結果動詞は使われているが、より一般的な、「性状」に近い例とを分割し整理したほうがいいのかもしれない。このあたりは機会を改めて再度考えてみたい。

### 4.2 新書における「運動長期」

なぜ新書では「運動長期」と「効力持続」が多いか、考える。はじめに「運動長期」である。

「運動長期」は長期間にわたる動作・作用を表す。新書ではどのようなことが「運動長期」の形によって述べられているかを大まかに見てみよう。

「運動長期」の文を大まかに「思考・言語」「運動」「現象」「感情・感覚」と分類する。どのようなことが「運動長期」で表現されているかを見るのが目的であり、厳密に分類するものではない。「感情・感覚」は例も多くなく、本論の議論ともあまり関係していないと思われるので(5)、「思考・言語」「運動」「現象」について述べる。

#### 4.2.1 思考・言語

思考・感情の動詞は、研究者によって動詞全体の中での位置づけが異なる。町田（1989）は状態動詞に含め、工藤（1995）はこれを「内的情態動詞」として「外的運動動詞」と「静態動詞」の中間的なものとしている。工藤（1995:71）は同時に、「内的情態動詞」に「る」ー「ている」の対立があることを考慮すると「外的運動動詞」と「内的情態動詞」を一括して運動動詞とすることも可能とも述べている。本稿ではこの「外的運動動詞」と「内的情態動詞」を一括して運動動詞とする考え方をとり、通常の動作動詞と同様、これらの動詞の「ている」は「運動短期」「運動長期」を表現するものとして扱った。

新書では、「考える」「研究する」「～といわれる」「～とされる」など思考や言語に関係する表現を使った文が多い。

(63) カナダの神経解剖学者バーバラ・ジョーンズも、（中略）橋から橋被蓋の背側部をへて、腹内側部の延髄網様体にいたる経路が、レム睡眠と筋弛緩に必須である、と考えている。（自然科学）

(64) 南方中国人の祖先は南モンゴロイドだとされている。（自然科学）

(65) スウェーデンと日本のホーム・ヘルパーの数を比べると、老人の数に対して日本はスウェーデンの八十分の一ぐらいといわれている。（社会科学）

これらの表現は、あるテーマに従って研究し、その結果を述べる文脈で用いられている。どのような研究が行われており、どのような考え方が一般的であるか、あるいはある研究者はどのような考えであるかを述べている。科学的なテクストでは、一般的に認められている考えや新しい学説などを述べて、それに対する実例を出す、反論を出す、その説を検討するなどの記述が行われる。

このほかの研究や説の発表に関係する表現は「注目している」「見直されている」「認識されている」「示している」「主張している」などであった。

#### 4.2.2　運動

人やものの長期間にわたる動作・作用をまとめて「運動」とした。動作・作用の動きが感じられるものである。

(66) 心臓は全身に血液を送り出しているポンプであることは衆知のとおりだ。（自然科学）

(67) 固体では、それを構成するたくさんの小さな原子が規則正しく並んでおり、しかもそれら原子は、狭い範囲で振動している。（自然科学）

(68) この間企業として多大の教育コストを負担していることを、これは意味している。（社会科学）

（66）は心臓の働きを述べる文である。期間を定めない動きの継続である。（67）は「振動する」という動きを表現しており、（68）の「コストを負担している」は「費用を払い続けている」という意味なので「運動長期」の「運動」とした。ほかに、「一人の老人を７人で支えている」「企業が後援している」などのような表現が見られた。

「運動長期」は、個別の例ではなく、一般的な物事の動き、社会の動きなどを述べることができる形であり、事物や社会の一般的な傾向などを表現するのに適した形であるといえよう。

(69) 社会サービスの精力が亡命者対策に向けられているのでは老年問題への対応が遅れているのはやむを得ないことであった。（社会科学）

(70) それがアメリカ独立の根拠となり、共和国の理論づけにもなって、アメリカの建国神話ができあがり、今日まで受けつがれている。（社会科学）

（69）（70）のように行為者を明示しない受身文による「運動長期」の文は社会科学に多く見られた。同様な例として「デイ・サービスが運営されている」「補償が実施されている」などがある。

行為者を明示しない受身文では動作主を不問に付すところから、より一層一般化が進み、社会的な状況に近い表現となり、議論の背景的な情報を提示することになる。益岡（1991:109）も降格受動文について「表現の主観性という観点から言えば、事象の生起を中立的な立場から客観的に表現した文である」と述べている。

### 4.2.3　現象

一方、行為や活動があまり感じられない例も数多く見られた。これらを「現象」とした。自然現象・社会現象の表現も見られた。長期的な変化の表現はここに分類した。

（71）石灰分は陸地と海の間をぐるぐると循環していることになる。（自然科学）

（72）今日もイギリスの老人は、生活するに足りるだけの年金をもらえず、貯蓄のない老人が非常にみじめな生活を強いられていることは前述したとおりである。（社会科学）

(73) 現在、この構想どおりにすべてが進んでいるわけではなく、地域ごとに変化がある。（社会科学）

（71）は自然現象の継続的な動きである。「循環する」というのは動き的な表現ではではあるが、石灰分そのものが動いているというより、長い時間の中で石灰石として陸地に存在することも動物の殻の形で海中に存在することもあるということを述べており、石灰分が運動しているわけではないので、「現象」とした。ほかに「本能は、その行動に対する強い欲求と、それが充足されるときに感じるよろこびとを、自動的にあたえてきている」「低い水準で推移している」などの例が見られた。

（72）の例では「老人」がこの現象に巻き込まれているだけなので「運動」とは分類しにくい。同様の例として「長い歴史が重ねられている」「変貌を迫られている」、自然科学では「生体の機能が調節されている」などがある。

（73）は社会がある方向に動き続けているという継続的な変化を表現している。社会科学ではこのような継続的な変化はよく使われている。「衰退の兆しを見せ始めている」「変質してきている」「急速に進展している」などのような表現が見られた。

「運動」と「現象」は傾向として運動が読みとれるもの、読みとりにくいものという基準でわけたもので、「精神や肉体が活動を持続している」などのように、境界が明確でない例も見られた。「現象」と分類した例では動作性や意志性は低いといえる。

新書における「運動長期」は、「運動」「現象」ともに、一般的な社会的現象あるいは自然現象を表す例が多く、自然現象や社会現象を取り上げ、それについて議論する科学的な文献では必要な表現といえる。

社会の変化を取り上げその原因や傾向などを述べる社会科学では、変化の表現は必須のものといえる。社会科学で変化を表す「運動長期」が多いことはうなずける。

「思考・言語」の動詞の「ている」は議論の前提となる研究動向を述べるなどの使われ方をしていたためよく使われている。

従来「動作継続」とまとめられてきた動作性の述語の「ている」の形式の中に、長期にわたる、運動性や意志性の感じにくい例が含まれていること、それは社会現象・自然現象といえるような、状態性の強い、背景的な事柄を表していることを述べてきた。

以上述べてきたような表現が使われることにより、新書では「運動長期」の例が多くなっているといえよう。

### 4.3　新書における「効力持続」

新書での「効力持続」の使われ方、意味を見てみよう。新書での「現在との関係」はどのような関係になっているか、「記録」はどのような特色をもっているだろうか。

#### 4.3.1　効力あるいは影響の存在

「効力持続」の「ている」は過去に起こったことで現在にその効力や影響が残っていることを述べる。新書では記述されている時とどのように関係しているだろうか。例を見てみよう。

（74）コペンハーゲンにデウ・ガムル・ビイという有名な老人総合施設があることは既述したが、私たちの試みの二年後にデイ・ホスピタルを始めている。（社会科学）

（75）高度成長のひずみとして公害問題が噴出したことにより、日本はいっきょに公害先進国になったといわれたものだが、その後の経過としては、公害防止技術への真剣な取り

組みと、公害防止費用をその費用構造の中に織り込んで何とかこれに対応することに成功している。（社会科学）

（74）はデンマークの老人総合施設がデイ・ホスピタルを始めた、と述べている。「私たちの試み」を基準時として、その２年後に開始したと述べており、現在ではなく、論述の時を基準としているので、このような例を効力持続とした。

（75）も、高度経済成長期に日本が公害先進国になったことを述べ、その後、公害防止に成功した、と公害防止に取り組んだときを基準として「成功した」ことを表現しており、この例も「成功した」ことが直接現在まで続いていないため、結果状態ではなく、効力持続とした。

次の例は「た」「る」と「効力持続」がその効果を明確に示している例である。

（76）ついで、フランスから二つの研究が①発表された。パリのジョエル・アドリアンらは、植木鉢法でレム睡眠を選択的にうばっておいたネズミの脳脊髄液を、薬剤によりレム睡眠を抑制してあるネズミの脳室内に①注入してみた。すると、レム睡眠が②回復したのである。また、ジュヴェー門下のマルセル・サラノンも、類似の実験をネコでおこなって、同様の結果を①えた。これらの物質の正体については、まだなにもわかっていない。

また、ジュヴェー門下のフランソワ・リウーらと、メキシコのラウル・ドルッカー＝コリンらは、血管作動性腸ポリペプチドに、睡眠促進作用があり、とくにレム睡眠に効果があるという結論を、それぞれネズミとネコでの実験から③えている。

これよりずっと以前から、ドルッカー＝コリンは、レム睡眠期のさい、脳幹には未知の蛋白質が出現している、とくりかえし①報告してきた。

さいきん、フィンランドのダグ・ステンベリーとターシャ・ポルカ＝ハイスカーネンも、同様の事実をつきとめたが、物質の単離はたいへんむずかしい、②ということだ。（自然科学）

（76）は「た」を①、「る」を②、「ている」を③で表示した。研究の経過・結果や実験などの事例は、「発表された・注入してみた・結果をえた・報告してきた」など、「た」（①）で、結果についての解説は「回復したのである・ということだ」のように「る」で（②）で示され、結果の中で現在と関係がある事柄は「えている」と「効力持続」で記されている。「まだなにもわかっていない」ジョエル・アドリアンらの実験、ドルッカーやダグ・ステンベリーらの実験の報告は過去の事として「た」で示されており、ある睡眠物質が効果があると述べている事柄は「効力持続」で表現されており、現在との関係を「効力持続」で表すという傾向が明確に出ている。

以上の例で見られるように、過去の事態で現在と関係があると筆者が捉えた事柄は「効力持続」で表現されている。

### 4.3.2　記録と引用

「効力持続」は新書では引用表現としてよく用いられている(6)。この用法は、工藤（1982）庵（2001a）の用語の「記録」といえる。論文で筆者と発表年を表す形式は時間と証拠を示す「記録」の用法である。

(77) 昭和二一年五月一六日召集の第九〇帝国議会、すなわち「日本国国民ノ自由ニ表明セル意思」（ポツダム宣言）を代弁するはずのいわゆる憲法制定議会で、憲法学者佐々木惣一は、審議中の憲法案について、内容から見ても手続きから見ても、とうてい自主的な制定を可能にするとは思えないという意見を表明している（八月二九日貴族院本会議）。（社会科学）

(78) 天武天皇十年（六八二）には「多禰国（種子島）図」を、同十三年には「信濃国図」を朝廷から派遣された使臣たちが呈上していることからみて、国郡図の作成は辺境の地方にまで及ぶようになったことがうかがわれる。（社会科学）

(77)（78）はいつのことであるかが明示されており、論文形式ならば証拠となる引用文献が記されるはずの記述であり、「記録」の用法といえるであろう。

(79) 環境権などの新しい人権との関係で、幸福追求権が注目されている。アメリカの独立宣言は、天賦の権利として、生命・自由・幸福の追求を挙げている。起草者ジェファソンは書簡のなかで、市民の自然権として、生命・自由・財産・安全の保持を数えている。独立宣言と同年に発布されたバージニアの権利章典では、生命・自由・財産が生得の権利とされ、幸福と安全を追求獲得する前提として位置づけられている。合衆国憲法の修正第五条にも、生命・自由・財産が並記されている。この当時の幸福追求の意味は非常に限定されていた。地上の幸福に役立つものが財産の所有、永遠の幸福に役立つものが信教の自由と考えられていたのである。（社会科学）

(80) ダーウィンは変異の例を数多くあげている。彼は園芸家がときどき目にする「植物の変わりもの」と呼んでいるものは、実は変異が積み重なって生じたものだと指摘している。もっとも、後で述べるように、突然変異は一九〇一年、ド・フリースが提唱した概念で、ダーウィン自身はまだ突然変異という言葉は使っていない。

　彼は、さらにモモの木の芽からネクタリン（ツバイモモともいう）が生じたこと、人が飼育しているハトは野生のハトの変異種であることなどを論じている。ダーウィンは『種の起原』の中で、かなりの部分をさいてこの変種について述べていて、読み通すのが苦痛なくらいである。（自然科学）

(79)の第一行目の「注目されている」は一般的に現在も注目されていると読めるので「運動長期」とした。そのほかの下線の部分はそれぞれ「アメリカの独立宣言」は「～を挙

げている」、「ジェファソン」は「～を数えている」、「ダーウィン」は「指摘している」「ダーウィンは」その著書の中で「例をあげている」「論じている」「述べている」などのように引用表現で用いられている。

新書では専門書と異なり、筆者名や文献名などだけ表す多少ゆるやかな引用表現がよく使われており、このような形式も「記録」とすれば、新書では「記録」は非常に多いことになる。

(81) また日本的労働組合主義は、企業別組合の長所を活かしつつ、政策要求で企業別の壁を取り払ってその欠点を補うという労組側から出てきたアイデアであるが、ここでも日経連は日本的労使関係の確立という形で対案を出しているが、やがて高度成長期に入って賃金水準が上がり始めるにおよんで、労使関係の日本化を目ざした日経連の考え方は実質的に浸透したといってよいであろう。（社会科学）

(82) 西ドイツのＡ・Ｅ・コルンミュラーらは、二頭のネコの頸動脈を交叉させて、たがいに血流交換がおこるようにした。いっぽうのネコの脳を電気刺激して眠らせると、やがて他方のネコも眠りはじめた。このばあい、両者ともに脳波をモニターしているので、睡眠と覚醒の状態を厳密に判定できたところが、これまでの研究と飛躍的にことなっている。（自然科学）

以上あげた例は引用であることから、思考・言語の動詞が使われている。(81) (82) などの例も、出典などは明示されていないが、何らかの参考書に基づいて書かれていると読め、これらも一種の記録といえるであろう。

こうした「記録」の用法が多いことが「効力持続」で思考・言語の動詞が非常に多いことと関係している。

上の例に見られるように、新書での「効力持続」は　かなりの部分が思考・言語の動詞による引用や研究についての説明といえるであろう。

「効力持続」の文の動詞について簡単に見てみよう。表 10 は、思考・言語の動詞がどの程度使われているかの調査である。表 10 は (83) (84) の例のように、文中の思考・言語と関係を持つ動詞も「思考・言語」の動詞として分類した結果である。

表10 「効力持続」の文の動詞

| | 社会科学 | | 自然科学 | |
|---|---|---|---|---|
| 思考・言語 | 124 | 67.0% | 92 | 82.9% |
| その他 | 61 | 33.0% | 19 | 17.1% |
| 合計 | 185 | 100.0% | 111 | 100.0% |

(83) バージニアの権利章典では、生命・自由・財産が生得の権利とされ、幸福と安全を追求獲得する前提として位置づけられている。（社会科学）((79)の一部抜粋)

(84) 両者ともに脳波をモニターしているので、睡眠と覚醒の状態を厳密に判定できたところが、これまでの研究と飛躍的にことなっている。（自然科学）((82)の一部抜粋)

表 10 でわかるように、新書の「効力持続」の文では思考・言語に関する動詞がかなりよく使われている。新書における「効力持続」の多くは引用であることがわかる。

## 5　「ている」の新書での機能

工藤（1995:116）は「効力持続」の「ている」はノンフィクションの文脈では判断・意見の理由・根拠を説明する機能を持つとしている。

ここでアスペクトの持つ「用法」と「機能」について考えておこう。工藤(1995)はアスペクトについて「アスペクトは、基本的に、完成相と継続相の対立によって示される、同一の動的事象に対する＜時間的展開（内的時間）の側面からの捉え方の相違＞」としている(工藤 1995:47）。同時に、まるごとの事態を示す「る」「た」と同時性などを示す「ている」などの関係については、＜出来事（運動）間の時間関係＞を示すカテゴリーでもある(工藤 1995:63）とも述べ、「ている」の機能として事象の同時性、逆進性、あるいは＜原因理由の説明性＞(工藤 1995:116）などをあげている。工藤（1995）は必ずしも一つの事象の時間的展開をアスペクト、出来事間の時間的関係を機能、と截然と分けたわけではない。また、時に関わる用法であるかどうかでアスペクトであるかどうかを分類したわけでもない。たとえばアスペクトには基本的意味と派生的意味があるとして＜テンポラルな用法＞＜モーダルな用法＞＜脱アスペクト用法＞＜脱アスペクト・テンス用法＞のように拡大アスペクト・テンス体系の表を挙げている(工藤 1995:43）。

アスペクトの用法あるいは意味と機能は一体となっており判然としないものといえるため、明確に区切りを設けるのが難しいのではあるが、本稿では、他の事態との関係性を表す用法、あるいは、工藤（1995）があげている「判断の根拠」などのように時を表すだけとは言えない用法を「機能」と捉えることにする。

以下に実際に科学的なテクスト中での「ている」の機能を考えていこう。

本稿の調査で得られた資料の中にも工藤（1995）が述べるような判断の根拠の表現の例も見られた。

(85) これよりさきの和銅六年（七一三）には、わが国最初の地理書である『風土記』の編纂がおこなわれていることからみても、このころには国郡図も全国にわたって完成されたものと思われる。（社会科学）

(86) これらの墾田図や開田図は免祖の特権を得るために、東大寺の初期荘園の開田地の状態を図示して提出したもので、田図そのものではないにしても、田図の手法をそのまま伝えていると思われる。すなわち、これらの地図は保存に耐えるように麻布に描かれたものが多く、その描法は、当時施行された条里制の碁盤目の地割にしたがった方格（方眼）図法の形態をとり、それに田畑林野の別や田数などを記入し、主な河川や山地、家屋などが絵画的に描かれている。（社会科学）

しかし、上の例は「～ことから見て」「すなわち」などの表現の助けによっている。「ている」そのものが根拠の機能を持つ、と積極的に言える例はあまり多くない。

### 5.1　話題提供

本稿は、科学的なテクストにおいては、「運動長期」と「効力持続」に、話題提供、前提、結論を示す機能があることを述べる。話題を提供する機能とは、本稿では、議論を続けるきっかけとなる状況の提示を指すとこととする。

#### 5.1.1　「運動長期」を使った話題提供

テクストの構成については多くの先行研究があるが、新聞のコラムをとりあげたメイナード（1997）と論文について述べた石黒（2007）をあげる。

メイナード（1997:139-140）は、日本語の新聞のコラムのテクストは、個人的な経験談、歴史的な背景・事件や状況の描写などの非コメント文が先に来て、段落・文章の終わりにコメント文が来る構成になっていると述べている。

石黒（2007:233-234）は、論文とは「学術的に価値のある問い（研究テーマ）を設定し、客観的な論証のプロセスを経て、その問題に対する適切な答え（結論となる主張）を示した文章」であると述べている。

新書は論文ほど厳密に証拠をあげるわけではないが、全体としては論文のテクストの構成をなしているといえる。つまり、新書の各段落では、はじめにある考えや現象などを述べ、続いてそれについて実際の事象を示したり議論をしたりし、最後に結論を出すという構成が見られる。その糸口となる考えや現象、状況などが「運動長期」「効力持続」の「ている」によって表現されている場合がある。

はじめに「運動長期」を使った話題提供の例である。

これから述べようとすることを提示する例が見られた。

(87) では施設に収容されないでもなんとかやっていける老人たちはスウェーデンではどんな生活をしているか。次に福祉サービス面をみてみよう。

福祉面では、在宅サービスの他に老人ホーム、老人サービス・センターがあり、ホーム・ヘルパー、ナイト・シッター、ソーシャル・ワーカーなどが配置されている。

日本人のこの国に対するイメージとしては、老人ホームはじめ老人施設はきわめて完備されていて六十七歳になって希望すればいつでもそこに入れるかのごとく思っているようだが、実情はそう生やさしいものではない。（社会科学）

(87) ではスウェーデンの老人たちはどんな生活をしているか、という疑問を出し、次の段落でその答えを述べている。

社会的に認められた考えやある著者の考えをあげ、それについての議論を展開する場合もある。考えの中にはその本の著者の意見も含まれる。

(88) 世の中では、「身体の眠り」がレム睡眠で、「脳の眠り」がノンレム睡眠だとか、あるいは、「身体のための眠り」がノンレム睡眠で、「脳のための眠り」がレム睡眠だとかいうような説がまかりとおっているようだ。しかし、睡眠は「脳のしごと」である。脳が、脳自身を相手に休息させる状態が睡眠だ、とわたしは考えている。

脳は、いろいろな身体のはたらきを監視しながら、全体の調和をたもつのが専門の器官である。脳自身が休息すれば、とうぜん身体の状態もかわる。そのさまがわりに、目をうばわれすぎてはいけない。(自然科学)

(89) 川村がはっきり主張するように、いままた前脳の役割が見なおされている。

川村の主張の根拠は、みずからの研究室でおこなわれた実験にもとづいている。ネズミの中脳の前部を切断して、離断脳をつくる。かつて、ブレメーがネコでえた結論は、手術直後に睡眠が持続する、というものだった。しかし、もっとながいあいだ観察したら、眠ってばかりいるだろうか。手術から回復したネズミは、正常のネズミとおなじように、覚醒やレム睡眠の指標である低振幅速波のエピソードと、ノンレム睡眠の指標である高振幅徐波のエピソードとを、周期的にしめしたのだ。(自然科学)

(88) は世の中一般に考えられている説をあげてそれに対する筆者の考えを述べ、その具体的な内容を続けて語っている。(89) では新しい研究の動向が述べられ、次にその内容が説明されている。

社会現象、社会の変化などを取り上げて話題とする場合もある。

(90) デイ・ケア施設は近年、様々な形態をとりつつ増加し、これにともなって機能分担も漸次起こってきているが、歴史が浅いこともあってなお混然としているのが現状である。

だが、今後のデイ・ケア充実のためにはデイ・ケア各施設が、分化・分業について意識的に研究をしないと、施設相互間の協働にも支障をきたし、折角の社会投資も有効に生かせないことになる。

ことにデイ・ホスピタルで扱う対象をもっとはっきりと選別しなければならないとの指摘がなされている。たとえば孤独感をもったり無視されたりしたケースは心理的な問題なのだから、これをデイ・ホスピタルで取扱うべきではないといった声もある。

たしかにこれらの症候が医学と関係なく起こってくる場合はデイ・センターで扱うべきであろう。しかし医学的なものを含むケース、とくに老人の場合、強制退職とか孤独とかからくる情緒障害が身体的障害を起こしたり、またその逆にたとえば脳卒中などからくる肉体的障害が情緒障害を起こすことも少なくない。このようなケースはやはりデイ・ホスピタルとデイ・センターが共働して扱うのが妥当ではあるまいか。ことに後者

のケースはソーシャル・ワークとヘルス・ケアの両サービスの密接な協力が必要であることはいうまでもないところである。(社会科学)

(90) はデイ・ケア施設が増加し機能分担も起こってきているが、まだ混とんとしている状況である、と話題提供をしている。この例では節の途中でさらに小さな話題、デイ・ホスピタルで扱う対象を明確化する必要がある、という話題も取り上げられ議論が進んでいる。

自然現象も話題として取り上げられる。

(91) 不確定性原理の式は物理学でよく見かけるが、いったいその効用はどこにあるのかと問われる読者がいるかもしれない。その一つは、こんなところにある……。

固体では、それを構成するたくさんの小さな原子が規則正しく並んでおり、しかもそれら原子は、狭い範囲で振動している。その振動――格子振動とよばれる――は、固体の温度が高くなればなるほど激しくなる。逆に、温度が低くなれば、原子の動きはおとなしくなってくる。

その振動の強さは絶対温度（マイナス２７３度Ｃが絶対零度に相当）に比例することがわかっているから、仮にその温度が絶対零度（マイナス２７３度Ｃ）にまで下がれば、きれいに並んだ原子は全部、コトリともせず静止してしまうはずである。絶対零度より低い温度はこの世には存在せず、温度とは小さな粒子が動くことにほかならない――原子の振動の激しい固体にさわるとわれわれは熱いと感じる――以上、ありとあらゆるものがことごとく止まってしまうのが絶対零度の不気味な静寂の世界である。多少、自然科学とは違った文化の進化という面からも、進化の単位が個体なのか、種なのかという疑問について面白いことがわかっている。（自然科学）

話題提供の「ている」は、節のはじめの方の段落の末尾近くの文の文末、あるいは (94) のように、その次の段落のはじめのほうによく現れる。はじめの段落で話題を提示し、次の段落でその内容について検討する、という構成は読む側に分かりやすい文章となるということであろう。

「～と考えられている」「～が議論されている」などの思考・言語の表現、「調節されている」「共存している」などの現象的な表現が使われる。つまり、ある考えや主張がなされたり、一定の自然現象・社会現象が存在していたりすることを紹介し、それについての具体例を挙げる、あるいは異論を提出することを次の段落で行うという形式が見られる。

### 5.1.2 「効力持続」を使った話題提供

ある思想や考えを引用の形で紹介し、それによって話題を述べる方法が見られる。

(92) 日本国憲法の条文は、近代憲法の詞華集とも言うべきもので、規定するところが実現されれば、理想の状態が現前するような思いにさせられる。前文でも、この憲法は「人類普遍の原理」に基くものであると宣言されている。

それがじつは独立宣言やリンカーンの焼直しであることは、アメリカのジャーナリストにはとうの昔に見抜かれていたところであるが、論理的にもおかしな文脈である。

ここにいう人類には、日本人も含まれているはずであり、普遍というからには、時代を越えて妥当するはずである。もしもそうなら、明治憲法も人類普遍の原理に立っていたことになるから、根本的に別なものとする必要はなかった。まして占領軍総司令部に教えられるいわれはなかった。（社会科学）

(93) そこで、まず日本の老年人口の推移をたどってみることにしよう。

老年人口が近年急増していることは前述したが、現実にどのくらいかというと、一九八〇年で一千万人を越したと推定されている（厚生省人口問題研究所の推計）。

第一回の国勢調査の行なわれた一九二〇年はわずか二百九十四万人だった。これが十年後の一九三〇年には三百六万人になった。この間の伸び率はわずか四パーセント強である。

ところが戦後の老年人口の伸びはというとこれが実にめざましい。一九五〇年、四百十万人に対し、十年後の一九六〇年には五百三十五万人となった。伸び率は三〇パーセントを越す高率である。さらに一九七〇年、七百三十三万人（伸び率三七パーセント）、そして一九八〇年で一千四十三万人（推定）となったわけである。（社会科学）

(92) は日本国憲法前文で基本的な思想が述べられていると話題提供され、それに続いて「人類普遍の原理」についての議論がなされている。(93)は老年人口の推移についてまず厚生省の推計が述べられ、それに続いて 20 世紀の日本の老年人口の変化が挙げられている。

「思考・言語」の動詞を使った「運動長期」では現在まで続いている意見によって議論の糸口が示されるのに対し、「効力持続」は過去の研究を引用し、それに基づいて議論を続けるという点では異なるが、ある考え、研究をもとに議論をするという点では共通している。

「効力持続」の話題提供は、多くの例は「思考・言語」の表現によって成り立っているが、中には以下のようにそれ以外の表現でなされる場合もある。

(94) 昭和二五年に突発した朝鮮戦争で、マッカーサーが占領軍を前線に投入する必要から、「警察予備隊」七万五千人という、既存の警察官数の六割にあたる定員を創設している。これは事実上の軍隊であり、昭和二七年に保安隊、昭和二九年には自衛隊と発展して定員も大幅にふえていったことは、あらためて指摘するまでもないだろう。

崇高な理想は、現実の必要の前にわずか数年で反故にされてしまった。しかも言いだした者が平然と捨ててかえりみなかったのである。じつは理想でもなんでもなく、軍事力において日本が競争者となることを、半永久的に禁じるそのときの必要に出るもので

あった。いずれにしてもそれは、政策にすぎなかった。それ以上でも以下でもない。平和憲法と称して、あたかも日本国民の願望がここに実っているようなもちあげ方は、事実とはあい容れないのである。（社会科学）

(95) ウォルター・アルバレスは地質学者で、古地磁気学を専門とする。地球は大きな磁石のようなもので、これを地磁気という。地磁気は現在は北極がＳ極で南極がＮ極であるが、過去に何回か入れかわって逆転していることがわかっている。

地磁気の逆転は地球環境に大きな影響を与える。恐竜の絶滅も、もしかしたら地磁気の逆転によるのかも知れない。アルバレスが粘土をアメリカに持ち帰ったのは、このような地磁気の変化の影響や痕跡を調べるためだった。父親のルイス・W・アルバレスはノーベル賞を受賞した物理学者で、息子が持ってきた粘土に興味を示したのである。（自然科学）

以上のように、「運動長期」や「効力持続」の「ている」は、一定の考えや現象を提示することによって話題を提供する機能を持っているといえるであろう。

### 5.2　前提

「前提」とは、先に示した話題提供のさらに前に述べられている状況を指すこととする。話題提供は問題提起をするが、その話題を導く何らかの状況を提示する場合が見られたので、そのような時に使われている「ている」を「前提」と名づけた。

(96) 宇宙の初期にはビッグバンと呼ばれる大爆発があり、その余勢で今も宇宙は膨張し続けている。おそらくビッグバンは１５０～１６０億年まえだといわれているが、学者のなかには１００億年ほどという説もあり、あまりはっきりしない。そうして宇宙空間では、星が一生を終えてきわめて密度の高い状態になり、それがブラックホールになっている。どうもこのブラックホールは一つといわず、かなりの数のものが宇宙空間にあるようだ。（自然科学）

(97) 今日のように女性が積極的に社会へ進出するようになると、職業に“生きがい”を感じる人も出てきて、結婚しないケースもふえる。事実、昨今は“翔んでる女”とか“自立する女”がマスコミの話題になっている。なかには“未婚の母”なる存在も一部では“進んでいる”ことの証明と受けとられているようだが、むしろ異常な世潮の証とみるべきではなかろうか。（社会科学）

(96) では「宇宙が膨張し続けている」こと、(97) では「マスコミの話題になっている」ことを「前提」とし、「ビッグバンは 150 から 160 億年まえだといわれている」こと、「進んでいることの証明と受けとられている」ことを「話題提供」と考える。(96) ではビッグバンが 150 億年前といわれていることが話題となって次の話に続いているように読める。「話題提供」はその話題が示され、その後、その話題に関する議論が行われるが、「前提」は

「話題」を述べる前に必要な状況などを示すものであり、「話題」との違いは「前提」の部分がなくても話の流れはそれほど大きな影響は受けないという点である。（96）’の宇宙が膨張していることは省いても文脈は通じる。同じく（97）も（97）’のように自立する女がマスコミの話題になっていることは省くことが可能であろう。

（96）’宇宙の初期にはビッグバンと呼ばれる大爆発があり、おそらくビッグバンは１５０～１６０億年まえだといわれているが、学者のなかには１００億年ほどという説もあり、あまりはっきりしない。そうして宇宙空間では、星が一生を終えてきわめて密度の高い状態になり、それがブラックホールになっている。

（97）’今日のように女性が積極的に社会へ進出するようになると、職業に“生きがい”を感じる人も出てきて、結婚しないケースもふえる。なかには“未婚の母”なる存在も一部では“進んでいる”ことの証明と受けとられているようだが、むしろ異常な世潮の証とみるべきではなかろうか。

（96）’（97）’に違和感がないということから、話題として提供されている情報は「ビッグバンは100億年まえといわれている」「社会に進出した女性の中では“未婚の母という存在も “進んでいる”ことの証明と受け取られている」ことと理解可能といえるであろう。

そう考えた場合、ビッグバンがあって現在も宇宙は膨張し続けている、という前提があり、そのビッグバンは150～160億年前に起こったといわれている、のように説明することは状況をより明確にすることに役立っているといえよう。結婚しない女性も増え、“自立する女”がマスコミの話題になっている状況があるが、その中で、未婚の母になる道を選ぶことが進んでいることの証明と受け取られていることが異常だと論じている。この流れの中で「話題になっている」「受け取られている」などのように、「話題」の状況を設定している表現を「前提」とすることでテクストの流れの中での機能とすることができるのではないかと考える。

このような前提としては、話題が述べられている段落の中で話題より前におかれているものを採用した。

前提という区分を設けたのは、話題というほど明確に後続の文脈と関係しないが、一定の状況を述べている表現があるためである。

しかし、前提と話題は区分が難しい例もある。

（98）アメリカの社会は物質的には豊かであるが人間的な観点ではいろいろ工業化社会のもっているひずみをうかがうことができる。

前述したように、多少余裕のある老人たちは暖かい土地、安全な場所を求め南へ移動しようとし、これを迎え、老人村が形成されている。フロリダや南カリフォルニアとい

った地方はだんだん老人がいっぱいになってきて、昨今ではアリゾナのような熱帯地区に老人は集まり出している。

一九七八年晩春、そして八〇年の秋とアリゾナの町ツゥーソンに滞在した折、老人の処遇の実際を見せてもらう機会があったが、そこにアメリカ人的明るさはあったものの、たとえば老人食の配給所へいってみると、銀紙に包んだインスタント食品が山積みになっていて、とても日本人の胃袋にはおさまりそうもなかった。（社会科学）

(98) では「老人村が形成されている」「老人は集まり出している」という二つの「ている」が続いている。この例では両者を話題ととることもできるし、「老人村が形成されている」という一般的な状況が前提として述べられ、昨今の例としてアリゾナのような地区に老人が「集まりだしている」という話題提示をし、次の段落でアリゾナのことを述べているともとれる。

### 5.3　結論提示

話題が提示され、例をあげたり研究史を述べたりして、筆者はその話題についていろいろ議論する。そして最後に結論を出すが、そこに「運動長期」「効力持続」の「ている」が使われることがある。

#### 5.3.1　「運動長期」を使った結論提示

いくつかの例から導かれる結論を、研究者の考え、研究者によって出された結論という形でまとめることがある。

(99) カゲロウについても、同じような現象がある。エペオラス・ウエノイとエペオラス・エスキュラスは賀茂川の中流部と上流部を棲みわけている。この二つのカゲロウは、地域的な棲みわけと同時に、羽化する時期についても季節的な棲みわけをしている。エスキュラスはクロスジギンヤンマと同じように、初夏に羽化してしまうのに、ウエノイはギンヤンマと同じように、後から羽化するのである。

今西は、生物の世界が多数の種社会から成り、それぞれの種社会が地球上に棲みわけることで、お互いに共存していると考えている。このような棲みわけがどのように形成されてきたかについて説明しようとするのが「今西進化論」なのである。（自然科学）

(100) ダーウィン進化論の弱点は、むしろダーウィン進化論が進化の統一理論だと長く信じ込まれてきたことにあるのかも知れない。

この本では、このような最近の進化論の現状をくわしく説明したいと思っている。まずダーウィン進化論と、その流れを正統的に継承した総合進化説を解説したうえで、中立進化説、連続共生説、ウイルス進化説といったまったく新しいタイプの進化説を紹介しよう。また広く人気がある今西進化論と断続平衡説も取り上げてみる。

もともと進化論には適応、系統、分岐という三つのテーマがある。ダーウィンは「適応」をもっとも重視した。ダーウィン進化論や総合進化説は、生物が環境に適応して生き残ることから進化がはじまるとみる。（中略）

分子生物学の進歩によって、遺伝子に書かれた進化の歴史が解読できる時代に入ったのである。「分岐」というのは、どのようにして新しい生物が誕生するのかということである。今までは突然変異だけが新しい生物を生み出す要因と考えられてきたが、連続共生説やウイルス進化説は、それとは別の考え方がありうることを示している。（社会科学）

（99）はカゲロウのすみ分けについて述べて、それに対する今西の考え方を紹介して節の終わりとしている。（100）は進化論の流れについての大まかな考え方を述べ、進化論の中のいろいろな説を取り上げることを語り、最新の説の考え方を紹介してその節を終えている。

（101）こういう、（財産権を制限された当事者でない）第三者への補償や、生活上の補償まで考えあわせると、現実は憲法からかなり隔たったところへまで来ていると考えざるをえない。それは、生存権で説明できるものでもない。生存権なら生活保護法の問題になり、健康で文化的な最低限度の生活保障ですむからである。

にもかかわらず、このような補償が当然とされるのも、できるだけもとどおりの水準の生活が続けられるよう配慮するという、日本人に独自の人権感覚があるためではないかと考えられる。そのようにして、憲法規定の足らないところ、身に合わないところも必要によって補修されているのである。（社会科学）

（101）は思考・言語の動詞以外の動詞によって結論が示されているが、内容としては憲法で規定されていない部分については別の考え方によって補っているということであり、法的な考え方を述べているともとれる例である。「補修されている」は「結果状態」ともとれる。しかし、ここでは、いろいろな問題が起きたときに憲法で足りない部分を補いつつ法を解釈しているともとれ、その場合は「運動長期」にあたると理解した。このように、思考・言語の動詞を使って、あるいは思考・言語動詞以外の動詞によって、運動長期の用法で結論を示すことが可能である。

（102）のように長期的な運動、（103）（104）のように長期的な変化によっても結論を示すことができる。

（102）こうした生物同士の共生の例は、ほかにもたくさんある。しかし、共生とはいっても、それぞれの生物はまったく別々の個体として生きているのである。（自然科学）

（103）三菱重工や川崎重工などはもともと重機部門が大きな比重を占めていたが、これに合併した石川島播磨などが続き、造船専業に近かった三井造船や日立造船などはずっと

おくれはしたが、７０年代後半以降の構造的造船不況の中で、結局はリストラクチャリングに取り組むことになる。残る独立系の専業造船会社、たとえば佐世保重工業、函館ドックなどは、再編成の波の中で何とか生き残りをはかろうとしている。（社会科学）

（104）こうした細胞内共生という現象が、真核細胞の成立そのものにかかわっているのではないかという考え方がある。それが、細胞進化における共生説と呼ばれている仮説で、今や、進化論の分野では一つの潮流となりはじめているところなのである。（自然科学）

### 5.3.2　「効力持続」を使った結論提示

次に「効力持続」の例を見てみよう。はじめに思考・言語の表現を使った例である。

（105）ホールステッドは、今西が発見したカゲロウの幼虫の棲みわけ現象が、今西の主張するようなプロト・アイデンティティ（直訳すれば原帰属性）などによるものではないと批判している。

さらに、今西が生物社会の本質が競争よりも調和にあると考えるのに対し、「最近の淡水、海洋、陸上での実験、生態学的研究は、全研究例の約九〇パーセントにおいて種間競争があることを示している」と、今西進化論を強く否定している。（自然科学）

（105）はホールステッドの、今西の考えを批判し、否定しているという考えを紹介し、結論としている。

次に過去の事態によって結論としている例である。

（106）この弱い相互作用のなかだちをする粒子としては、ワインバーグやサラムらによってウィークボソンという粒子が提唱され、フランス（実際にはフランスとスイスの国境にまたがっている）のセルンという研究所の大型荷電粒子加速器を使って、イタリアの実験物理学者ルビアの率いるチームが、これの検出に成功している。（自然科学）

（106）は実験成功という過去の事実が結論となったものである。

（107）は社会現象の例である。

（107）このような人口の老齢化は日本だけの現象ではない。これは工業化にともなって大なり小なり起こるものだ。たとえばスウェーデンは一八五〇年に四・七九パーセントだった老年人口係数が一九一〇年には八・四四パーセントといまから七十年も前に現在の日本と同じ水準に達している。そして一九七五年には一四・八八パーセントと文字どおり高齢化社会となった。

イギリスも一八五一年に四・六五パーセントだった老年人口の比率が一九三九年に八・九七パーセント、一九七五年には一三・六四パーセントに達している。つまりスウ

ェーデンやイギリスなど早目に工業化した国々は、日本よりも早目に本格的な高齢化社会に突入し、その厳しさを痛いほど体験しているわけである。（社会科学）

（107）はスウェーデン、イギリスが老齢化を早くに体験したことを結論としている。

次の例は前の段落で一度結論が出、その後、それを受けて最終的な結論を出している例である。文章によってはこのように、少しずつ結論を出しながらまとめていくものもある。

（108）とはいうものの、これに異を唱える学説がないわけではない。カリフォルニア大学のハンネス・アルフベン名誉教授は、自分の専門であるプラズマ理論から宇宙の創成を説明しようとしている。プラズマとは超高温の物質が振動する現象だが、彼はこのプラズマ状物質から星団や銀河が生まれたとしている。ちなみにアルフベンはネールと共に１９７０年度のノーベル物理学賞受賞者である。

彼の計算によれば１５０億年どころではなく、宇宙の初めはもっともっと過去になるらしい。

もちろん彼の説くところにもそれなりの根拠はあるが、少数派であることは確かである。要するに、ことほど左様に宇宙というものには様々な考え方、いろいろな学説があるということでもある。（自然科学）

### 5.4　話題提供・結論提示をもたらすもの

「運動長期」と「効力持続」は状況・背景を提示して話題を提示する、前提を表現する、結論を示すことがあるという点で、機能としては同じものを持っていることがわかった。これらはどのようにして話題提供・結論表示の機能を持つのであろうか。

いくつかの要因が考えられる。第一に、「運動長期」「効力持続」では思考・言語に関する動詞がよく用いられており、それらはある考えや研究結果を示している。これが話題提供や結論提示の機能を果たすのであろう。これまで多くの研究結果（工藤 1995、浜田 1997、二通 2000、庵 2001ａ）が示しているように、「効力持続」の「記録」の用法は引用を示すことができる。同時に「運動長期」の思考・言語に関する動詞を使った場合でも、「と考えている」「とされている」などのように、先人あるいは筆者の研究や業績あるいは考えなど、先行研究を表すことができる。「効力持続」と「運動長期」の違いは、出典があるかどうか、その考え方が一度現在と切れて過去のものとなっているかどうか、という点であり、大きな違いとは必ずしもいえない。このような先行研究は議論の前提となり、結論としても用いることができる。

また、「運動長期」が社会現象や自然現象を示すことができるという点も「効力持続」との違いと関係するであろう。ある社会現象があると紹介し、これに注目してその現状を詳しく説明し、その成立の原因を述べる、あるいはある自然現象があることを示し、それに関係するいろいろな要素を取り上げそれらについて議論する、というように、現象とその内容の説明、原因の究明によって一つの節が成立する構成ができるであろう。

次に、井上（2001）があげた、「効力持続」の「ている」は統括主題が存在する文脈で用いられるという性質が働いているといえる。井上（2001）の統括主題の存在は「ている」がなぜ話題提供や結論で用いることができるかを明確に説明する。ひとつの統括主題のもとに、過去の研究を引用して話題を提供し、続く節で議論をし、最後に結論を出すという文章の構成を新書では行っているわけである。

効力持続の「ている」が現在と関係をもつという点も重要であろう。現在の我々の問題意識に対し、このような過去の研究あるいは事態があると述べ、それは現在の関心と関係があることである、と「効力持続」の「ている」を使って述べていることになっている。結論に「効力持続」の「ている」を用いる場合も、その結論は現在の我々と関係があると述べることになる。

以上、「運動長期」「効力持続」が結論を示すことができるのは、それ以前にあげられた具体的な事例や議論の後、ある考え方が示されたこと、一定の社会現象や自然現象が成立したこと、ある変化が始まったことを述べることが結論として適当なためであろう。

本稿では「運動長期」「効力持続」が話題提供、結論を示す機能を持つと述べたが、あるいはこれは「運動長期」「効力持続」に限ったものではないという考え方も可能かもしれない。「効力持続」のもつ統括主題の存在は段落全体に関わる要素として重要ではあるが、別の見方をすれば、段落の初めにおかれる状態性の記述そのものが一定の現象や状態を示し、そのことをもとに議論を続けるという段落の構成が考えられるのではないか。同時に、議論を進めてきた最後に現在はこのような結果になっている、このような状態が続いている、などのように、状態性の記述によって結論が示されると考えることも可能といえよう。今回は「運動長期」「効力持続」の機能ということで考えてきたが、次は、より広い、結果状態、性状なども視野に入れて、状態性の記述の文章中の機能を考えてみる必要があると考えられる。

## 6　新書における「運動長期」「効力持続」のまとめ

新書においても「運動短期」と「運動長期」は用法が異なることがわかった。「運動短期」が日常的な動作の継続を表現するのに対し、「運動長期」は長期間にわたる行為や作用、社会現象、自然現象、思想や研究動向、変化を表す。

「運動長期」については、「運動」「現象」「思考・言語」「感情・感覚」と大きく分類でき、「現象」「思考・言語」の比重は高いといえる。

「運動長期」と「効力持続」は、新書では「話題提供」「前提」「結論」を表現する機能を持っている。「効力持続」は小説では一時後退性を示すとされる（工藤 1995）が、新書での機能は異なる。科学的なテクストは一定の現象や状況を示し、それについて議論したり解説したりし、結論を社会現象・自然現象・一定の考えとして示すという構成になっている。そうした文脈の中では、「運動長期」「効力持続」の「ている」は研究の結果や研究者の主張、ある自然現象あるいは社会現象を取り上げ、そのことによってその節で何を問題にするかを提示するという話題提供あるいはその前提となる事象を提示する役割を果たしてい

た。そして、結論部分でも、「運動長期」「効力持続」が一定の現象や考え方、社会的自然的変化を示す形で用いられることがよくある。

新書で「運動長期」「効力持続」が話題提供、結論の表示に用いられるのは、「運動長期」が現在まで続く一般的な長期的な考えや主張、あるいは社会現象・自然現象を表すことができるためであろう。また「効力持続」の「記録」の用法が科学的なテクストで引用として有効に働いている。「効力持続」の用法では、統括主題の存在が、話題・議論・結論の構成と関わっているであろう。「効力持続」が現在と関係を持つことが、現在の我々の問題意識と共通する話題を取り上げ、現在と関係がある結論を提示することに役割を果たしていると言える。

以上のように、新書での「運動長期」「効力持続」は会話や小説とは果たしている機能が異なることが分かった。

一定の状態という点では「結果状態」「性状」も状態や状況を表現できるであろう。今回は「結果状態」には触れることができなかったが、「結果状態」「性状」などが話題や結論の提示とどのように関わるか、別の機会に考えてみたい。

## 7　会話と新書の「ている」

ここで会話と新書の「ている」について比較しよう。

会話・小説・新書の運動短期・運動長期・結果状態などの使用状況を調べてみたところ、運動短期は小説ではある程度使われていたが、新書では少なかった。人の行為を表現する小説と現象を一般化して述べる新書の違いであろう。運動長期はどのテクストでもある程度見られた。運動長期は会話では職業に関すること、その内容など、新書では自然現象・社会現象・思想などが表現されていた。結果状態もどの資料においてもよく使われていた。

運動長期・結果状態はそれらの意味が表現できる語を使いこなすことが求められる。効力持続もどの資料においても10%以上見られ、ある程度重要であることが分かった。新書では性状が多かった。性状もそれを表現するための語彙が必要と言える。

運動長期が長期間にわたる動作作用の継続を表す点では会話と新書は共通である。しかし、会話の運動長期が仕事関係の動作作用の継続を表現しているのに対し、新書では継続期間がさらに長くなり、自然現象・社会現象まで表現している点が異なる。また、新書では長期間にわたる変化を表現する例も見られた。

「効力持続」が過去の出来事を現在に関係づけるものであるという点では会話・新書は共通である。しかし、その下位分類である「記録」の用法および統括主題の存在の点では異なる。

会話では「記録」のように証拠をあげて物事を述べる用法は多いとは言えず、時の表現と「効力持続」の「ている」を使う際にはもっと漠然とした表現が使われる傾向があるのに対し、新書では「記録」は引用として非常に重要な役割を果たしている。

会話で「効力持続」の「ている」を使う際、統括主題が存在しているかどうかは明確とは言い切れないが、新書では「ている」が話題提供・前提・結論などの働きをする場合には統括主題の存在が非常に重要といえる。

会話では「効力持続」の「ている」は何を現在と関係させて述べるかを選択して使うことにより、場合によっては配慮表現として機能する。

以上のように、「ている」の使い方は会話・新書で異なるところがあり、それは小説とも違う面があるといえる。

表12　効力持続の会話と新書での使われ方の違い

| | 会話 | 新書 |
|---|---|---|
| 現在との関係 | ◎ | ◎ |
| 属性 | △ | △ |
| 記録 | △ | ◎ |
| 統括主題の存在 | △ | ◎ |
| 配慮 | ○ | × |

注

(1)　「てん」「でん」は「わかってんですか」「読んでんだよ」の「てる」の省略形の「てん「でん」である。「てお」「でお」は「ております」「でおります」の「てお」「でお」である。

(2)　「運動長期」の提出の仕方の例をいくつか挙げる。

『みんなの日本語』では28課で「～ながら～ています」として「長期にわたる並列の行為」（教師用指導書Ⅱp. 40）と述べられており、「ながら」と共に使う文脈で提示されている。「ている」の「運動長期」そのものを提示しているとは言い切れない。この課で提出されている動詞は「日本語を勉強しています」「日本で働いています」「大学で教えています」「研究しています」「通っています」などであり、これらはそれ自体が長期に継続する意味を持つ動詞と言えよう。このほか、同じ課に「習慣・繰り返し」の「いつもニュースやドラマをみています」などが示されている。

『新文化初級日本語』では11課で「横浜に住んでいます」「会社に勤めています」「経済学を勉強しています」「アルバイトをしています」の例が出されている。

どの教科書もいくつかの動詞を出しているだけである。

(3)宮崎道子他（2010）はビジネスパーソン用の初級教科書であるが、「ている」を教える際、最初に「運動長期」の長期的な継続の用法を教え、その後短期的な継続を提出している。これはビジネスパーソンにとっては長期的な継続が必要であるということを意識化させる点で優れた方法であろう。

(4)早川(1999:190)は笑いをＡ「バランスの笑い」Ｂ「仲間づくりの笑い」Ｃ「ごまかし」と大きく3分類し、その内容としてＡは「笑いが付加された発話内容が強調方向に向いていず、それを笑いによって緩和し、協調方向に持って行く」ものであり、Ｂは「もともと実質発話が協調方向にあり、それを促進」する笑い、Ｃは「実質内容を表現すること

なく非実質発話である笑いのみで談話展開のターンを保持して談話を協調方向にもっていこうとする」もの、と述べている。

(5) 新書で見られた感覚・感情の例文は社会科学 11 例、自然科学 3 例であった。

次のような例が見られた。

・しかし、しばらくいて帰ろうとすると「もっと話をしていかないか」としきりにひきとめる。物質的には恵まれているが、孤独感にさいなまれているのだ。(社会科学)

・こういう不眠症の患者は、もともと不眠の原因となるいろいろな病気にかかりやすい素質があるうえに、ひどいストレス状態がつづいてくるしんでいることが多い。(自然科学)

・マルメも老人対策を誇りにしているところで、このとき案内してくれた人は、脊椎損傷で両下肢があまりきかない。（社会科学）

(6) 清水（2008）は論文における引用では「ている」だけでなく「た」も使われていることを述べているが、今回の資料は新書であり、「佐々木は～という意見を表明した（山田 20XX）」のように厳密に引用を示す形式が少なかったため、「ている」について考えた。

# 第６章　学習者による「ている」の使用状況

これまで述べてきた「ている」の用法は、学習者はどの程度使えているのだろうか。どこに問題を感じているのだろうか。学習者の使用状況を調査した。

## 1　調査方法

学習者の使用状況を『日本語学習者作文コーパス』、『多言語の日本語学習者横断コーパス（I-JAS）』を用いて調査した。

『I－JAS』のデータは、6 種類 12 タスクで構成されており、発話については 4 種類ある。ストーリーテリングは連続するコマの絵を見てそれを言葉で表現するタスクである。ストーリーテリング１（ST1）はピクニックのサンドイッチを犬に食べられる話、ストーリーテリング２（ST2）は鍵を忘れたケンがおまわりさんにつかまりそうになる話、 対話（I）はインタビューである。ロールプレイは 2 タスクあり、ロールプレイ１（RP1）はアルバイトの日数を減らしてもらう交渉、ロールプレイ２（RP2）は店長から調理の仕事をしてくれないかと頼まれて断るタスクである。絵描写（D）は絵を言葉で表現するタスクである。作文については 2 種類あり、ストーリーライティング（SW1）（SW2）は ST1,ST2 を文章で書くタスクである。（『I-JAS』　研究詳細)。

表1「ている」の出現数・使用数

| | 総数 | 「ている」のみ |
|---|---|---|
| ST1 | 437 | 274 |
| ST2 | 884 | 423 |
| SW1 | 628 | 380 |
| SW2 | 816 | 392 |
| RP1 | 444 | 402 |
| RP2 | 304 | 256 |
| D | 2299 | 400 |
| 作文 | 787 | 400 |

話し言葉は、『I-JAS』のストーリーテリング（ST1・ST2）・ロールプレイ（RP1・RP2）・絵描写（D）を用い、書き言葉では『I-JAS』のストーリーライティング（SW1・SW2）、『作文コーパス』を使用した。

『I-JAS』では、上のタスクについて、中納言で、キーワードは語彙素読み「テ」、後ろ共起表現を語彙素「いる」として検索した。中納言を使ったため、「いる」の活用形である「ていた」「ていない」の形も現れるが、それらは「ていた」「ていない」の部分で使うため、この節の例文からは排除した。

『作文コーパス』では文字列検索を用い「てい」で検索した。

表 1 は今回調査対象とした「ている」の例である。総数は中納言でヒットした「テ＋いる」で、それから「ていない」「ていた」「ていなかった」を省くと、表 1 の「ているのみ」の数字になった。RP は「ている」の割合が高いなど、タスクによって総数に占める「ている」の割合が異なることがわかる。D は 2312 例、『作文コーパス』は 787 例出現したので、そのうち、他の使用例と同等の数ということで各 400 例を採用した。

## 2　学習者の「ている」の使用状況

### 2.1　正用誤用の割合

表 2 のように、『I-JAS』では、学習者は RP、D、SW2 は 85%程度あるいはそれ以上、ST、SW も 75%から 80%程度「ている」が正しく使えていた。タスクの中では作文が最も誤用が多く 34.5%誤用があった。

以下例文を出すが、文中の＜C＞は調査者、＜K＞は被験者である。(JJE27　RP1　7190) のように 3 種の記号が書いてある例は『I-JAS』である。『I-JAS』の最初の J などは母語、そして調査地、第 3 の数字は学習者の番号である。そしてタスクと行番号が続いている（『I-JAS』研究詳細）。(CG046) (KG087)のように ID が C あるいは K で始まり学習者番号がついている例は『作文コーパス』の例である。

表2　学習者の「ている」の正誤の状況

| | 正 | 誤 | 合計 |
|---|---|---|---|
| ST1 | 209 | 65 | 274 |
| | 76.3% | 23.7% | 100% |
| ST2 | 338 | 85 | 423 |
| | 79.9% | 20.1% | 100.0% |
| ＳW1 | 303 | 77 | 380 |
| | 79.7% | 20.3% | 100.0% |
| SW2 | 331 | 61 | 392 |
| | 84.4% | 15.6% | 100.0% |
| RP1 | 381 | 21 | 402 |
| | 94.8% | 5.2% | 100.0% |
| RP2 | 220 | 36 | 256 |
| | 85.9% | 14.1% | 100.0% |
| D | 346 | 54 | 400 |
| | 86.5% | 13.5% | 100.0% |
| 作文 | 262 | 138 | 400 |
| | 65.5% | 34.5% | 100.0% |
| 合計 | 2390 | 537 | 2927 |
| 割合 | 81.7% | 18.3% | 100.0% |

### 2.2　意味的な使用状況

表3　学習者の「ている」の意味的な使用状況と誤用

| | 運動短期 | 運動長期 | 結果状態 | 繰り返し | 効力持続 | 性状 | 誤用 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ST1 | 166 | 18 | 25 | 0 | 0 | 0 | 65 | 274 |
| | 60.6% | 6.6% | 9.1% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 23.7% | 100.0% |
| ST2 | 303 | 11 | 22 | 2 | 0 | 0 | 85 | 423 |
| | 71.6% | 2.6% | 5.2% | 0.5% | 0.0% | 0.0% | 20.1% | 100.0% |
| SW1 | 240 | 27 | 35 | 1 | 0 | 0 | 77 | 380 |
| | 63.2% | 7.1% | 9.2% | 0.3% | 0.0% | 0.0% | 20.3% | 100.0% |
| SW2 | 282 | 16 | 32 | 1 | 0 | 0 | 61 | 392 |
| | 71.9% | 4.1% | 8.2% | 0.3% | 0.0% | 0.0% | 15.6% | 100.0% |
| RP1 | 35 | 162 | 49 | 132 | 1 | 2 | 21 | 402 |
| | 8.7% | 40.3% | 12.2% | 32.8% | 0.2% | 0.5% | 5.2% | 100.0% |
| RP2 | 15 | 140 | 34 | 17 | 0 | 14 | 36 | 256 |
| | 5.9% | 54.7% | 13.3% | 6.6% | 0.0% | 5.5% | 14.1% | 100.0% |
| D | 178 | 10 | 151 | 0 | 0 | 7 | 54 | 400 |
| | 44.5% | 2.5% | 37.8% | 0.0% | 0.0% | 1.8% | 13.5% | 100.0% |
| 作文 | 8 | 99 | 104 | 14 | 4 | 33 | 138 | 400 |
| | 2.0% | 24.8% | 26.0% | 3.5% | 1.0% | 8.3% | 34.5% | 100.0% |

表 3 は「ている」の用法を運動短期・運動長期などに分類したものである。誤用は誤用とまとめた。

タスクによって「ている」のよく使われる意味が異なるのが見られる。

絵を見ながら出来事を時系列的に描写するST・SWは運動短期の用法が多い。アルバイトの日数を週3回から週2回に減らしてもらうよう交渉するRP1、あるいはアルバイトの内容を変えてくれと頼まれて断るRP2では「アルバイトをしている」「働いている」などの運動長期が多く、RP1 では「週3回～ている」「よく～ている」などの繰り返しがそれに次いで多い。Dは運動短期と結果状態が多く、作文は運動長期・結果状態が多かったが、運動短期は少ない。

第5章2.2で母語話者の会話・小説・新書での「ている」の用法をあげたが、その結果では運動長期の割合が比較的高く、結果状態も30%ほどを占め、性状・効力持続も見られると述べた。それと比較すると、学習者のST、SWでの使用は運動短期が約60%と偏りが見られる。結果状態はDと作文ではある程度見られたが、全体的に少ない。

第5章で運動長期・効力持続を取り上げたので、それらがどのように使われているか確認する。

### 2.3　運動長期の使われ方

運動長期はRPと作文で割合が高いが、使用している語の範囲は狭い。今回出現した運動長期で使われた動詞を見ると、「犬を飼う」（ST・SW）「アルバイトを探す」「卒論を準備する」「働く」や「（卒論の準備・アルバイト・仕事・勉強）をする」（RP）など、使用する語の幅は広いとは言えない。

### 2.4　効力持続の使われ方

効力持続は使えていない。効力持続と読めるものはRPで1例、作文で4例だけである。効力持続と読める文を以下にあげる。

(1) <K>ずっとその店が働いてるのですが<C>〈うん〉<K>、まあお客さんのことはその仕事のことよくわかるんです<C>〈うん〉<K>あその書いています〈うん〉だから、普通は何曜日何曜日が忙しい自分で、大体がわかります、（JJE27　RP1　7190）
(2) それは昔から中国の外国語の勉強総方針だと聞いている。（CG046）
(3) 長い時間にパソコンを見ることが目を傷すと聞いています。これは副射の影響（CG119）

(1) は自分がどんな仕事をしたか、これまでのことを書いている、つまり記録していると説明しているため、効力持続と判断した。(2) は「聞いたことがある」と読める。(3) も「聞いたことがある」と考えることができる。これらは積極的に効力持続の文を探そうとすれば、該当する可能性がある例である。以上のように考えると、上の3例文は効力持続と考えることができる。動詞は「書く」「聞く」などのよく使う動詞である。これらは、どの例も、現在書いている、現在聞いている、などの意味にならないため、効力持続と振り分け

た。しかし、学習者が効力持続の意味や効果を知っていてこれらの文を作ったのかどうかは定かではない。第5章で述べたように、効力持続という表現の意味を整理して伝える必要があるだろう。

### 2.5　性状の使われ方

母語話者の自然科学でかなりよく使われていた（5章2.2.1）性状は、ほとんど使うことができていない。以下は出現した例である。

(4) <K>あのねあー私は、卒業にー、あー近くていま卒業に控えています〈うん〉あー卒業論文なんか、準備ーしなければなりません（CCM36　RP1　　4580）
(5) それにー、とてもー部屋の中は静かでー、なんか変な雰囲気が、しています（CCT31　D　610）

これらも、「ている」が単純に状態を表すことができると知っていてこれらの表現を使ったというより、たまたまそれが性状に読めたと理解したほうがいいかもしれない。そのほかには「木が立っています」「いえがゴタゴタしています」という表現が使われていたが、「ゴタゴタしている」は汚くなったの意味で使っている可能性もある。そうすると、結果状態であり、性状としてはほとんど使えていないことになる。。

一般的に語彙力がなく、表現の幅が広くないことがわかる。

## 3　誤用について

高梨（2014:30）は、学習者は助詞・自他動詞・敬語については難しいと認識するが、「あまり意識されないが、実は運用に問題が生じやすい項目」として「ている」「ていた」を含む「テイル」形をあげているが、その指摘が学習者の誤用となって表れている。高梨（2014:34）は、説明も練習もなく、ただ難易度の高い「テイル」形が会話・例文に無意識的に提示されている現状を問題視している。本稿はそういった項目として、効力持続、未来にむけての効力持続、語彙の難易度の高い運動長期・性状などがあると考える。下に述べるまるごとの事態や論述文での「る」の使い方も、指導することにより、学習者は使いこなしていくであろうと考えられる。

学習者の誤用の種類を表4に出した。ST1とST2を合わせてSTとする、というように、同様のタスクはまとめて表示した。誤りはタスクによって違いが見られる。

表4によると、誤用の内容は自他の違い、「た」「る」と「ている」の混同、文型の理解の不十分さなどによるものであった。作文は「思う」と「思っている」の誤用が多かった。

誤用とテンス・アスペクトの関係を見ると、全体として「た」と「ている」の誤用が最も多く、40%以上を占め、次に多かったのが「る」との誤用である。

ST・SW は時間とともに移り変わる状況を述べていくタスクのため、「た」「ている」「ていた」のどれを使うかで誤用が出た。「て」は「～て～」や「てくる」「ても」などが正しい例である。RP はこれからどうするかの相談なので「る」、作文は一般論を述べるタスクなので「る」との誤用、とタスクによって誤用の性質が異なる。D は結果状態が関わるので、動詞の自他に関係する誤用が多い。

表4　学習者の誤用の種類

| | た | て | る | 自他 | 受身 | その他 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ＳＴ | 46 | 6 | 1 | 2 | | 10 | 65 |
| ＳＷ | 52 | 7 | 4 | 1 | | 13 | 77 |
| ＲＰ | 1 | | 15 | 1 | | 4 | 21 |
| D | | 1 | 1 | 30 | 2 | 20 | 54 |
| 作文 | 10 | 1 | 101 | 4 | 2 | 20 | 138 |
| 合計 | 109 | 15 | 122 | 38 | 4 | 67 | 355 |

### 3.1　テクストによるテンスの書き分け

第３章で述べたように、日本語のテンスはテクストによって使い方が異なる。物語、小説、歴史を述べる文脈など、時系列に沿って物事を述べるのテクストでは「た」、論述文では「る」が基本になる。目の前の絵を描写する場合は「ている」が基本アスペクトになる。

ST、SW については、学習者は、物語を述べるときは基本テンスを「た」にする、ということを認識する必要がある。このようなタスクに慣れておらず目の前に絵があるため、当該の絵の内容をそれぞれ別々に「ている」の形で述べる学習者が多数いる。

(6) いちゅえーー番目にはえっとーえーマリとケンさんはえーピクニックの食べ物をつえ作っております作って、おいおいています#えー二番目にはえっとーえーマリマリとケンさんはえー地図を、を見るを見る間えー犬は犬は（SES25　　ST1　360）

(7) えー、え三番目ーに、えー、えふえー、ケンとマリえーは、えー遠足をーします、ピクニックをしています#えー次にーえー、い、マリ、マリとーケン、はー、えーバスケットバスケット、の中、に、見る（SES37　　ST1　　1270）

(8) バスケットを開けます。#犬はサンドイッチとりんごを食べます。#そして、ケンさんとマリさんは庭へ行きます。#バスケットを持っています。#後で、ケンさんとマリさんはバスケットを*開けます*。犬は全部の食べ物が食べました！（SES17　　SW1　　850）

D のタスクと同様、目の前の絵を述べることを要求されていると考え、その絵の中で登場人物が何を「しているか」を述べている。時系列的に物語を述べる場合は「た」と指示するだけでこれらの問題の大半は解決できる。

ST、SW は時間の流れに沿って物事を述べ、数コマの絵の物語を語る、あるいは書くというタスクである。時間の流れに沿って事柄を述べていく文章は「ている」と「た」の混同が大きな問題になる。

### 3.2　まるごとの事態を表す「た」

(9) ケンとマリは大丈夫と思います。#そのままに外にいきます、目的地に到着とき犬がバスケットに逃げています。#その中の食べ物は犬に全部食べ切ります。（犬がバスケットから逃げていきました、食べられました）（CCM53　SW1　790）

(10) マリはパンを切ってケンはサンドイッチをバスケットに入れています。#部屋の中に，犬もいます。#マリとケンは地図を見るうち，犬はバスケットに入れています（入りました）（FFR24　SW1　140）

(11) サンドイッチあーバスケット、かか、バスケットーの中から、犬さんはー、出てしまいました#そして、食べ物は、食べられています。（食べられてしまいました）（IID56 ST1 1240）

(12) 公園に行きました。#公園に着いたら、ちょっとお腹が空いたから、サンドイッチを食べようとしました。バスケットを開けている時、犬が跳んで来ました。（開けた時）（CCM10　SW1　930）

(9) ～ (11) はどれも一つの事態が終わったことを「た」で表現するべきである。(9) は犬が逃げている状態としてではなく、「逃げていきました」と出来事が終わったという形で表現すると正しくなる。(10) も「現在入っています」ではなく、「入りました」の形で表現する。(11) は「食べられている状態」として表現するのでなく、「食べられました」「食べられてしまいました」と表現しなければならない。つまり、ここに挙げた例文は皆、事態の終了を意味するように表現する必要がある。まるごとの事態（高橋 1985：13）を表現するには「た」を用い、「た」「た」と続けることによって物語を前へ進める、という用法を意識する必要があるのである。

学習者は (12) については「開けている最中に犬が逃げた」と理解したのかもしれない。あるいは「あけた後の状態」を表現しようとしたのかもしれない。しかし、一般的に考えると、ふたをあけている最中でなく、あけた後で犬が飛び出すであろう。従属節内の述語のテンスについては、日本語記述文法研究会（2007:153）は従属節内の「る」は主節の事態より後、「た」は主節の事態より先に事態が起こったことを表すと述べている。この知識が十分に活用できていない例であろう。

初級では、「た」は、初めは過去と教える（『みんなの日本語』第 4 課教え方の手引き過去 p.52）。その後、複文を学ぶ課で主節と従属節の先後関係あるいは従属節の完了未完了という形で「る」と「た」を学ぶ（例『みんなの日本語』23 課　従属節の事態が未完了の場合は「る」、完了の場合は「た」　pp.193-195）。また、作文の時間に日記などの形で出来事を書かせるタスクはよくある（『大地』19 課　タスク日記 p.130）。しかし、その時、「た」を使うことが物事を先へ進めることになると明示的に説明しているだろうか。事態をまるごと全体として捉えてその事態の終了を「た」で表現すると明確に説明している教科書は少ないのではないだろうか。物語を語る時は「た」は過去ではなく、事態の終わりを示

し、「た」が事態を前へ進める役割を持つ（高橋 1985、工藤 1995）ということを明確に伝える必要がある。

そして、このような事態が連続すると「て」になる。

（13）見ているときに、太郎という犬はサンドイッチがあるバスケットに隠れてしまいました。#そして、ケンとマリはバスケットを持っていて公園へ散歩に行きました。（持って）（EAU05　SW1　370）。

（14）地図を、見ている間に、子犬、隣に犬、隣に犬、子犬ちゃんは、えバスケットには、入っていてパンを食べてしまったんです#二人は気が付かないでそのまま、バスケットを持って行って、（入って）（JJE15　ST1　530）

事態の連続の場合も、基本は一つの事態が起こって次の事態へ進むということなので、「ている」ではなく「た」つまり「て」になる。

### 3.3　連体修飾節の中での「た」と「ている」

文末、節末では「ている」で表現できる語であっても連体修飾節内では「た」になる場合がある。結果状態の場合である。

（15）#ケンとマリはやっと目的地に到着して、喜んでバスケットの蓋を開けてみると、満足している犬は中から出てきて、リンゴとかサンドイッチとか全部ぼろぼろになってしまいました。（満足した犬が）（CCT39　SW1　1120）

（16）#ピクニック場所は着いた時、バスケットを開ける時、持っている果物とサンドイッチを犬に食べられました。（持って行ったサンドイッチ）（JJE60　　SW1　　590）

日本語記述文法研究会（2007:171）では、格成分名詞修飾節内の述語は「主文事態の成立時を基準として以前の事態」を表す時「た」の形をとるとしている。この犬はサンドイッチを食べて満足した状態なので、ここでは「た」になる。

### 3.4　「る」

第 2 章の 4 で述べたように、「る」は論述文でよく使われ、時に関わらない事柄、属性、筆者の判断などを表現する。

今回の資料のうち、論述文的な文章は『作文コーパス』であり、やはりこれが最も「る」との間の誤用が多かった。『作文コーパス』138 例の誤用例のうち 101 例が「る」との混同であった。

一般化して述べる場合は「る」を使うのであるが、学習者は以下のような文を作る。

（17）大切なのはコミュニケーションすること。日本語を勉強している以上、日本人と交流すべきだ。（する以上）（CG042）
（18）しかし、趣味は先生じゃない、寿することもあって、特にいい趣味だ。確しい心態を持っているは外国語勉強することについて、大重要だ。（持つこと）（CG056）

（17）は「勉強している以上」でも許容という判断を持つ人もあるであろう。会話でなら「今勉強していて、これからも頑張る」のような文も使うであろう。しかし、この文章はいかに外国語を上達させるか、という目的で書かれている論述文である。その場合、自分が勉強している、という書き方でなく、より一般的に、外国語を勉強する以上、という書き方をした方が目的にかなっていると言えよう。（18）の「持っている」は、一般論として「強い意志を持つことは外国語を勉強することについて重要だ」がいいであろう。「持っている」「知っている」は初級の最初に「持つ」でなく「持っている」「知っている」の形で導入されるためか、中級以降になっても「持つ」「持った」などの活用形が使えない傾向が見られるとのことである(1)。この点も考慮して、「持つ」「知る」の形を積極的に使わせるよう、教師は意識する必要があるであろう。
上の例のように、論述文では「る」を用いるほうが一般化して述べる姿勢が明確になり、よりふさわしい表現となる。論述文的に書くための指導を授業に取り入れることを提案したい。

「る」は属性も表現する。日本語記述文法研究会（2007：130）は「非過去形には、ある主体が性質や能力をもっていることを表す用法がある。このとき、非過去形は、特定の時点に位置づけることをせず、恒常的な事実を表す」と述べている。

（19）いま日本語を勉強している人が多くなりました。（勉強する人）（CG050）
（20）読者達にとっては担任して責任を持っている会社がどっちかがわかるので安心である。（責任を持つ会社）（CG111）

（19）（20）のような例がこれにあたる。動的な述語であっても「る」で表現することによって恒常的にその行動をする＝そのような属性を持つ、ということが表現される。このような「る」にも学習者の意識を向けさせる指導が必要であろう。

『作文コーパス』で最も多かった「る」との混同は「思う」と「思っている」であった。
「思う」について日本語記述文法研究会（2003:184 - 185）は以下の例文と共に 3 つの用法をあげている。

（21）この本はきっと売れると思う。
（22）たしか、あのときは、鈴木もそこにいたと思います。

(23) あの人は身勝手だと思う。

(21) は「未知のことに対して話し手なりの判断を示す用法」、(22) は「話し手の記憶の中での不確かさを表す用法」、(23) は「引用節に示した判断・意見が話し手の個人的な主張であることを明示する用法」である。

これに対して「思っている」は話し手以外の思考を表すだけでなく、

(24) 先生は私が 2 年生だと思っている。

(24) のように「その思考主体（他者）の認識が誤りであるということが意味される」。あるいは「引用節の内容が偽であることを知りつつ、そのように見なしているという意味で」使うことがある。

「思う」「思っている」両方を使うことができる場合も、認識・態度に差があるとして、

(25) 私は、山本君もこの仕事に協力してくれると思う。
(26) 私は、山本君もこの仕事に協力してくれると思っている。

(25) は話者が判断を下しているのに対し、(26) は判断を下すのではなく、「それを信じていいたり期待していたりする」ことが意味されるとしている。

「思う」には確かな明確な判断、不確かさ、個人的な主張といった不確かさの程度の違う用法が含まれており、「思っている」にもその判断が誤りであるとわかっているという用法がある。

『作文コーパス』の以下のような例文ではどちらも筆者の主張を述べている。

(27) インターネットは図書館みたい、最近のニュースだけ見付けるではなく、歴史がある資料もさがしやすいだと思っている。（思う）(CG104)
(28) 単語が多くに覚えている、機会あれば、外国人が話し合う。その二つのことをするなら、外国語がうまくなると思っている。（思う）(CG019)

論述文では「引用節に示した判断・意見が話し手の個人的な主張であることを明示する用法」である「思う」が一般的な判断を示しやすいため、「思う」が適当と判断されるであろう。そして、「思っている」にするとその情報は偽のようだが、期待している、信じているという意味が表面化しやすくなる。以上の点で、論述文では「思っている」でなく「思う」を使う方が適当と言えるであろう。

「る」は習慣・繰り返しとしても使われる。この表現方法は書き言葉だけにあるのではなく、話し言葉でも同様に使われる。

(29) <K>疲れているので、あまり勉強する力が<C>〈うんうんうん〉<K>ないので、あーそのためには<C>〈うん〉<K>、あの、はー、働いているの〈うん〉日は〈うん〉、できるだけ少なくするように〈うん〉、あのお願いす#<C>だいじょぶだいじょぶ、それならいいいい、（働く日）（JJC40　RP1　4440）

(29) を「働いている日」にすると現在働いている日になる。これから繰り返しとして週に何日働くか、の相談なので、「働く日」になる。

時間的な関係で「る」になる例も見られた。

(30) <K>は公園に届いたとき、散歩してきれいな景色を見た。#その時、お腹が空いていたので、座っている所を探した。#バスケットを開けた瞬間に、犬が突然飛んできた。#ケンとマリはとてもびっくりした。（座るところ）（EAU18-SW1　EAU18　SW1）

(31) はこれから座る場所であって現在座っている場所ではない。

また、文型の要求により、「る」を使う必要がある場合もある。

(32) ケンさんが、バスケットを、をー開けている時ー、犬がんーバスケット、のー中にー飛びます。（開けると）（CCM34-ST1　）

(33) #バスケットを開けた瞬間に、犬が突然飛んできた。#ケンとマリはとてもびっくりした。#そして、中に見ていると、全部の食べ物は犬に食べてしまった。（見ると）（EAU18　SW1　　1550）

(32) は「開けると」、(33) は「中を見ると」となる。このように「と」の文では前件の述語は「る」でなければならない。これがまだ定着していない学習者もいる。

### 3.5　動詞の自他の違い

動詞の自他の違いは、描写のタスクでよく見られた。

(34) コートはー、だ、誰もー、着ていません#<C>うん、で、電気#<K>電気はー、でん、っつ、あいる、あいてい、点けています<C>窓<K>窓はー、〈うん〉えーとー、や、う、割れています#<（ CCT04　　D　2520）

(35) 外に、えー力を入れて、えーオープンします<C>ううん、ドアは今これどうですかこれ？<K>あ肉屋のドアは閉めています<C>うん#<K>でも、隣の喫茶店のドアが開けています（CCT17　D　6020　390）

(36) サンドイッチが出来上がった後、マリはサンドイッチをバスケットに入れました。バスケットが開けていますから、犬がそこに入りました。（CCM05SW1　540）

(34) は３つの動詞が使われている。「着ている」「割れている」はできているが、電気は「あいている」か「つけている」が迷った結果、「つけている」を選んでいる。

(35) は２つの動詞を使い、「あいている」「しまっている」を使うべきところで「あけている」「しめている」を使っている。(36) は「サンドイッチを入れました」「犬が入りました」はできているが「バスケットがあいている」を「あけている」としている。中石（2005）が学習者の自他動詞の選択は、語によって自動詞他動詞の一方に固定されるなどいくつかの傾向があると述べているが (2) 、そのような結果が現れたのかもしれない。

アスペクトと同時に、自他の問題も大きな問題と言える。

## 4 まとめ

以上見てきたように、学習者の「ている」の使用は、以下のような特徴が見られた。

母語話者と同様に、述べる内容によって「ている」の意味的な用法でよく使うものは違っている。

母語話者との違いは、効力持続・性状があまり使えていないこと、運動長期は使用する語の範囲が狭いことである。

作文を除いて、多くのタスクで誤用の割合は 5～25％程度であった。『作文コーパス』は 35％ほどの誤用が見られた。

誤用の性質はタスクによって異なる。物語的なテクストでは「ている」と「た」、描写のテクストでは自他の混同、論述文では「ている」と「る」の混同が問題であった。

「た」は過去だけでなく、まるごとの事態の終了という用法を意識させる必要がある。

「る」は、論述文内で多い、一般化して述べる用法、属性を描写する用法の教育が必要である。

注

(1)　黒沢晶子氏（山形大学）、堀恵子氏（東洋大学・筑波大学・日本女子大学）の指摘である。

(2)　中石（2005:25 - 30）では学習者の自他動詞の使用は①いずれの活用形においても自動詞のみを使用する、②いずれの活用形においても他動詞のみを使用する、③活用形によって使用が固定している、④ある活用形において自動詞、他動詞どちらも使用している、などの傾向が見られたと報告している。

## 第７章　「ていた」の用法

第４章の「ている」は違う種類のテクストの中で「ている」がどのように使われているかを中心に見てきた。

本章では学習者に「ていた」をいかに使ってもらうかという観点と、違うテクストでの「ていた」の用法の違いという２つの観点から分析していく。

### 1　問題の所在

寺村(1984:144)は、「ている」と「ていた」を比較した場合、「ている」は継続相現在、「ていた」は継続相過去であり、「ている」を過去にすれば「ていた」は使えると母語話者は考えるかもしれないが、「ていた」は学習者の目から見ると使いやすい表現ではないと述べている。筆者も自分の学習者の作った次のような誤用例をもっている。

（1）×旅行中京都の街で優雅できれいな芸者に会っているし、写真をとっていました。
⑴　（台湾）

学習者の考えたことを推測すると、写真をとったのは一定の時間がかかったので、継続相を使ったほうがいいと判断した可能性がある。

学習者の問題は大きく二つ考えられる。ひとつは「た」と「ていた」の違いが分かっていないこと、もうひとつは「ていた」を使いきれない問題であろう。

まず、「ていた」が使えないという問題について見てみよう。

寺村（1990:315）では以下のような例が見られる。

（2）×私は、大学時代に学問を勉強する方法がすこしまちがいました。

この例では「ていた」が使いきれず、「た」で表現されている。

寺村（1990）は国際学友会、筑波大学留学生教育センター、東京国際大学留学生別科、香港大学言語センターに協力してもらい、学習者の誤用例を集めたものであり、「音韻論」「文字論」「語彙論」「形態論」「シンタクス・意味論」などのように分類された誤用例が400ページにわたって掲げられている。その中の「ている」の項目の誤りの傾向は、以下のようになる。

表1　寺村（1990）による「ている」の誤用例

| 正 | 誤 | | 正 | 誤 | |
|---|---|---|---|---|---|
| る | ている | 52例 | た | ていた | 7例 |
| ている | る | 24例 | ていた | た | 3例 |
| た | ている | 12例 | る | ていた | 3例 |

「る」→「ている」の誤用が最も多く、次に「ている」→「る」であり、「ている」が関係する誤用例が 88 例であるのに対し、「ていた」が関係する誤用は 13 例である。正用と誤用を一緒に論じるのは問題かもしれないが、誤用についても「ていた」関係が少々少ないようである。その誤用の中では「た」「る」と「ていた」の誤用が問題なようである。

本稿では、母語話者の会話コーパスと学習者コーパスを比較し、「ていた」の使用状況を確認した。母語話者は女性会話・男性会話、学習者は『I-JAS』・『作文コーパス』を用い、母語話者のデータも学習者のデータも複数のコーパスの出現数の合計で表示した。

表 2 のように、「ている」「ていた」全体に占める「ていた」の割合は、母語話者が 18%に対し、学習者コーパス中では約 5%と低い。

表2 母語話者と学習者の「ている」「ていた」の使用状況

| | ている | ていた | 合計 | 「ていた」の割合 |
|---|---|---|---|---|
| 母語話者 | 1436 | 318 | 1754 | 18.1% |
| 学習者 | 4142 | 214 | 4356 | 4.9% |

タスクによる違いが影響している可能性があるので、学習者についてはタスク別の割合も出した。

時系列的に事態を述べる ST、SW は 13%、17%とある程度使われていたが、これまでどのように働いていたかを述べ、これからどう働きたいかを説明する RP、目の前の絵を描

表3 学習者による「ている「ていた」の使用状況

| コーパス | ている | ていた | タスク別合計 | 「ていた」の割合 |
|---|---|---|---|---|
| ST | 274 | 42 | 316 | 13.3% |
| SW | 380 | 80 | 460 | 17.4% |
| RP | 402 | 14 | 416 | 3.4% |
| D | 2299 | 17 | 2316 | 0.7% |
| 作文 | 787 | 61 | 848 | 7.2% |
| 合計 | 4142 | 214 | 4356 | 4.9% |

写する D では「ていた」の使用率は非常に低い。一方、母語話者の会話は社会人の社内の会話なので、過去の事態も未来のことも含まれている。やはり全体的に見て、学習者は「ていた」がまだ十分に使えていないといってもいいのではないかと思われる。

次に、「ていた」と「た」の区別がつきにくいという問題について、許（2005）の研究を見てみよう。許（200:109 - 112）は「ていた」の習得について文法テストによる調査を行っている。その解答が正答誤答ともに挙げられている表で、誤答者の多い設問は表 4 のようになっており、この調査からも「ていた」と「た」の違いは分かりにくいことが読み取れる。

表4 許（2005）による「ていた」の文法テスト結果

| 正 | 誤 | 誤答者の割合が20%を超えた設問数 |
|---|---|---|
| ていた | た | 14（日本での学習者） |
| | | 16（台湾での学習者） |
| ていた | ている | 4（日本での学習者） |
| | | 4（台湾での学習者） |

許（2005:145）は学習者が「テイタがテイルの過去形であることを認識できたとしても、テイタを正しく使用できない原因として、教室での指導不足が考えられる」としている。

「ていた」を認識し、正しく使ってもらうようにするには、どのように考えるとよいか考えていきたい。

学習者は「ていた」のどこに困難を感じているのだろうか。

過去の事態や状態を表現する場合、学習者は「た」でも「ていた」でも表現できるように考え、区別しにくいようである（例文（1））。また、結果継続の過去についてはその概念自体整理された状態とは言えないのではないか（例文（2））。

高橋（1985）や工藤（1995）は、まるごとの事態は「る」「た」で表現するように、と述べており、そのように指導することは重要であるが、一方、学習者の目に一定の動作の継続と映っているものを、それはまるごとの事態であるというだけで納得してもらえるのであろうか。学習者の目に過去の一定の動作の継続と映っている事象を継続相で表現するか完成相で表現するか、可能であれば納得してもらえるよう説明できればと考える。

## 2　「ていた」の先行研究

寺村（1984:144）は、「ていた」について次の例文をあげ、この「かからなかった」は日本語母語話者ならば「かかっていなかった」にし、「泊まっていた」は「泊まった」とするだろうと説明している。

(3) ×曲がりくねった道にそって、おもしろい話をしながらおりてきた。ふもとにもどって時計を見ると、二十分しかかからなかった。実は走っておりたのだった。その夜、山ノ上旅館で泊っていた。翌日の朝、早く起きて、山にのぼった。

継続相と完成相については、日本語のテンスとアスペクトの表現は実際にかかった時間の長さではなく、個々の事柄をまとまり性のあるものととらえた場合には「た」を使うというように、話者のとらえ方によるとしている。

継続相と完成相についてはComrie(1976:21) はperfective について以下のように述べている。

> Thus it is quite possible for perfective forms to be used for situations that are internally complex, such as those that last for a considerable period of time, or include a number of distinct internal phases, provided only that the whole of the situation is subsumed as a single whole.

Comrie も、しばらくの間続く事態や内部にいくつかの局面を含む事態であっても、一つのまとまった事柄を捉え得るのであればperfective つまり完成相を使うことができるとしている。

高橋（1985:33）も同様に、完成相の基本的な意味は「動詞のあらわす動作（広義）、または、その一定の局面を、分割することなく、始発から終了までふくめて、まるごとのすがたでさしだすこと」と述べている。

次に「ている」と「ていた」についての議論を見てみよう。

寺村（1984：144）は「ていた」は①ある動作・作用の継続の間に何かが起こったこと、②過去の出来事よりさらに前のことを表すとしている。

本稿はこれらに対し、過去よりひとつ前であればどんな事柄でも「ていた」で表現できるわけではないという疑問をもった。具体的には、（3）の例でいうと、「ふもとに戻る」ことを基準として考えれば、「降りてきた」は「ひとつ前の事態」ではあるが、これはｃのように「ていた」では表せない。

（4）ａ　ふもとまでおりてきた。20 分しかかかっていなかった。

ｂ ×ふもとまでおりてきた。20 分しかかからなかった。

ｃ ×ふもとまでおりてきていた。20 分しかかからなかった。

この「ひとつ前の事態」の文の成立する条件を考えてみたい。

高橋(1985:219)は、継続相については、「ている」「ていた」が本来の継続相の意味ではなく完成相つまり「その一定の局面がまるごとのすがたで完成した」という意味を表すことがあるとして、そのような使い方を意味的にテンス形式に準ずるものとし、①前非過去形と前過去形に相当する「している」と「していた」、②「経験・記録」、③現在以前の動作やできごとの質化、④発見・確認・思い出しという 4 点をあげている。

①の前非過去形と前過去形に相当する「している」と「していた」では、「ている」は現在・未来の一定時を基準とし、それ以前に完成した事項は「ている」で、過去の一定時より前に完成した事柄は「ていた」で示されるとし、次のような例文を挙げている。

（5）むすこはすでに大学を卒業している。‥現在以前に完成（前現在）

（6）わたしが定年になる前に息子は大学を卒業している。

‥未来のある時以前に完成（前未来）

（7）わたしが定年になる前に息子は大学を卒業していた。

‥過去のあるとき以前に完成（前過去）（高橋 1985：220）

②の「経験・記録」は過去の動作が現在と何らかのつながりがあるものとしている。

③の現在以前の動作やできごとの質化とは、「事実上、過去に完成した動作とおなじこと」と述べ、下のような例文をあげている（高橋 1985：222）。

（8）昨年の夏の大会は、Ａ校が優勝している。

（9）昨年の夏の大会は、Ａ校が優勝した。

④の「発見」は「ふつうの継続相と同様、過去形にして発見、確認、おもいだしをあらわすことができる」としている（高橋 1985：223）。

（10）あいつ、三年まえに離婚してたよ。

高橋（1985）の①②③の指摘は工藤（1995）の「パーフェクト」、本稿の「効力持続」と重なり、①は寺村（1984）の「ひとつ前の事態」、庵(2001ａ)の「完了」と重なっている。

庵（2001a:91-93）は工藤（1995）の「パーフェクト」の概念を評価しつつも、「ーていー」には「継続」と「以前」という意味が含まれ、以前が表面化すると「完了」の用法になるとしている。つまり工藤（1995）の「パーフェクト」を「効力」のある用法とない用法にわけ、「効力」のない用法を「完了」としているのである。本稿で実際に「ていた」の文を収集したところ、「効力」が読み取れる文が少なかったため、それらの文に「パーフェクト」というレベルをはって「ている」と同じように「発話時に効力を持つこと」と分類することは難しいという結論に達した。

本稿では寺村（1984）の「ひとつ前の事態」、高橋（1985）の「前過去形に相当する「ていた」」、工藤（1995）の「過去パーフェクト」に相当するものとして、庵（2001ａ）の考え方を採用し、「完了」という考え方でまとめる。また、文中で「まるごとの事態」を表現する「る」「た」をまとめて扱う場合があるが、その場合は完成相、「ている」「ていた」をまとめて扱う場合は「継続相」という用語を使う。

「ていた」のムード的な用法としては、高橋（1985）が「発見・確認・おもいだし」と述べている。また、藤城（1996）は「ていた」に感知の視点を表す機能があると述べている。ムード的な用法はどの程度の重要性があるのだろうか。この点もあとで検討したい。

許（2005）は台湾人学習者を対象に「ていた」の習得の研究をし、以下のように3段階で習得されると結論している。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 性状（＋可変） | → | 繰り返し | → | 運動効力 |
| 運動の持続（＋長期） | | 運動の持続（－長期） | | 結果の継続 |
| | | 性状（－可変） | | 状態の変化の結果 |
| | | 直前までの持続 | | |

そして「ていた」の習得について以下のように述べている。

1）プロトタイプ性が最も強く、運動や状態の基準時間が現在と切り離された過去にある「性状（＋可変性）」「運動の持続（+長期）」は学習者に、もっとも習得されやすい。

2）「繰返し」と「性状（－可変性）」は過去における持続過程の中でどの観察時点でも基準時間になり得ることで共通している。しかし、「運動の持続（－長期）」「直前までの持続」は中国語からの負の転移があるため、「繰り返し」「性状（－可変性）」とは性質を異にする。

3）プロトタイプ性が低い「運動効力」「結果の状態」「状態の変化の結果」の 3 項目は、運動が基準時間より前に完成していることで共通しており、しかも中国語からの負の転移も考えられるため、習得が最も困難である（許 2005:140-141）。

本稿は許（2005）には教えられるところが多々ある。しかし、二つ疑問をもった。調査方法、分類の項目だて、である。

まず、調査方法であるが、この調査はそれぞれの項目につき 2 問の文法問題を解く形で得られている。本稿は、ある用法が習得されたという結論をそれぞれの用法について 2 例ずつから導き出している点に疑問を抱く。2 題の問題では、たまたまかたまりで覚えた表現が出題されていた可能性も否定しきれないであろう。たとえば最初に習得されるという「運動の持続(+長期)」の用法では、新書でよく使われる「～と考えられていた」「～が主張されていた」などの表現は、学習者は使えるのであろうか。

また、分類の項目だてについては、「直前までの持続」「状態の変化の結果」という 2 項目に疑問がある。「直前までの持続」は「発言の直前まである動作や状態が持続過程にあったこと」として以下のような例をあげている。

（11）（電話で）
山下：早くからごめんね。もしかして寝ていた？
田中：ううん、大丈夫。（許 2005：103）

「ていた」には発話によってとぎれる直前までの持続過程はあるだろうが、項目としてたてる必要はあるであろうか。本稿は、「直前まで」であるかどうかではなく、「ていた」には現在と状況が異なるという意味が含まれる場合があると考える。しかし、それは文脈によって成立するものであり、「運動短期」「運動長期」「結果状態」などの項目だてと同じレベルのことではないと考える。

また、許(2005)において「状態の変化の結果」と「結果の状態」は次のように分類される。

（12）火が消えている　　絶対的な限界
（13）水位が上がっている　　相対的な限界

絶対的な限界をもつ動詞の「ている」は結果状態に、相対的な限界の場合は「状態の変化の結果」に分類すると述べている(許 2005:104)。しかし、絶対的な限界と相対的な限界を分ける必要はどこにあるのだろうか。また、絶対的な限界と相対的な限界も文脈によって変わるのではないだろうか。本稿は「ている」のところでも「状態の変化」という分類を採用しなかったので、「ていた」での「状態の変化の結果」も採用しなかった。

以上の先行研究から明らかになった問題は、①アスペクトの観点からの用法の分類方法の違い、②他の節との時間的な関係、③ムードの観点の 3 つの点にある。以後、これらの点について分析する。

①のアスペクトの分類法に関しては、3.1 で用法の分類を整理したい。そして「ていた」の過去の動作・作用の継続、結果状態で学習者が自然な文を作れるようにするにはどのように考えればいいのかを明らかにしようと考える。②他の節との時間的な関係については 3.2 で触れる。寺村（1984）があげた「過去よりひとつ前の事態」、本稿の用語でいえば「完了」は、どのような性質をもつ用法であるかを明らかにし、それよって学習者にこの形を使ってもらえるようにしたい。そして③のムードの観点で重要なのは「発見」であるが、これについては、8 節で、その成立条件を明らかにしたい。

## 3　「ていた」の使用状況

本稿は「ていた」に関して 3.1 で意味的な分類、3.2 で二つの事態の前後関係という、二種類の分類を行う。

### 3.1　意味的な分類

意味的な分類法は以下とする。

a　運動短期　b 運動長期　c 繰り返し　d 結果状態　e 性状

表5　会話・小説・新書における「ていた」の用法

| | 会話 | | 小説 | | 新書 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 運動短期 | 124 | 36.6% | 286 | 18.8% | 10 | 3.2% |
| 運動長期 | 67 | 19.8% | 190 | 12.5% | 136 | 44.2% |
| 繰り返し | 36 | 10.6% | 72 | 4.7% | 5 | 1.6% |
| 結果状態 | 110 | 32.4% | 508 | 33.5% | 116 | 37.7% |
| 性状 | 2 | 0.6% | 140 | 9.2% | 41 | 13.3% |
| 合計 | 339 | 100.0% | 1518 | 100.0% | 308 | 100.0% |

「ている」では「効力持続」を入れていたが、「ていた」ではそれは 3.2 の「節間の時間的な関係」で扱う。

上記の分類は「ている」と同様なため、説明を省略する。

表 5 によると、会話・小説と新書は「ていた」においてもアスペクトの使用状況がかなり異なっていることがわかる。

「運動短期」は会話で多いが新書では非常に少ない。「運動長期」は新書でかなり多いが会話では 20%ほどである。「ている」について、科学的な書物では、「運動短期」で表現される日常的な動作の継続は例などで多少見られる程度で、多くは長期的な継続が使われると述べたが、「ていた」でも同様なことが言えるようである。

「結果状態」の割合は比較的高く、会話でも新書でも同程度の重要性を持つ。結果状態の重要性が高いのは何故であろうか。「性状」は新書での重要性が高い。物事の性質を述べるという目的によるのであろう。

このほかに、分類はしないが、ムード的な意味としてａ発見、ｂ客観視、という考え方も必要に応じて使う。

### 3.2　二つの事態の前後関係による分類

3.1の意味的な分類はアスペクトとして「ていた」がどのような意味を担っているかを分類したものである。それに対して、本節では二つの事態の前後関係という別の尺度で分類する。それは、「ていた」の文あるいは節が運動短期・運動長期あるいは結果状態というアスペクトを表現すると同時に他の事態との時間的な関係も表現するためである。運動短期でもあり他の節との関係で言えば完了となる、というように複合的な関係を持つため、単一の分類では全体が見通せないと考えたためである。

二つの事態は文または節で表現される。そこで、二つの事態の前後関係は、単文の関係も、主節・従属節の関係も扱う。そこで、「文または節」とすべてで繰り返すのが煩雑なため、以下では単純化し、単文を扱う場合も含めて「節」と表現し、「た」節・「ていた」節の語を使用する。

「ていた」節と他の節との関係については以下の６分類を使う。

ａ「過去の動作・作用の継続」（以後「継続過去」と省略する）
ｂ「過去の結果状態」（以後「状態過去」と省略する）
ｃ「繰り返し」（以後「繰り返し過去」と省略する）
ｄ「性状」（以後「性状過去」と省略する）
ｅ「同時」
ｆ「完了」

#### 3.2.1　継続過去・状態過去・繰り返し過去・性状過去

「継続過去」「状態過去」「繰り返し過去」「性状過去」は動作や作用が過去に継続したこと、結果状態が過去にあったこと、繰り返しが過去にあったこと、性状を過去で述べており、他の節と時間的な関係が読めないものとした。

(14) イギリスの場合も、日本では福祉国家の典型のように思っている人もあるようだが、この二十数年間に死んでいった老人の三分の一以上が生活苦にあえいでいたという悲惨な事実がある。（社会科学　継続過去）

(15)のぞいてみたら，床の上に空気が沈んでたまっていた、なんてことはない。 これでは、部屋の中でじっと立っていたら、酸欠におちいってしまう。（自然科学　状態過去）

（16）当時は老年問題への対応はずいぶん遅れていたし、慢性の疾患に対する施設も未整備だった。最近では、だいぶ改善されているようだ。（社会科学　性状）

（14）は継続過去、（15）は状態過去、（16）は性状過去である。それぞれ動作継続、結果状態などを表しているが、他の節と時間的な関係はない。

「ていた」節が「る」節と関係している場合、過去の動作継続や結果状態が現在や未来と関係を持つ場合は「継続過去」「状態過去」に分類した。

(17)1542　04G 読売もいってきました、来ますっていってました。
　1543　04D ああそうですか。
　1545　04G あのー、新聞社の席はちょっと別につくっといた方がいいですね、
（女性会話）

（17）のように、1542 で「いってました」と話したことが、1545 のこれからの対策の発言を引き出している場合は「継続過去」とした。それは、1542 が過去を表し、それに続けてＧが自己の判断を述べている文脈であり、他の節との関係というより、具体的な時の関係になっており、「言ってました」の「た」がテンスとして機能していると考えたためである。

### 3.2.2　同時

「同時」は「継続過去」「状態過去」「繰り返し過去」と別の事態が時間的に重なる場合である。

４章 1.7 で、「ている」「ていた」がある文以前の出来事を表す場合を「完了」とすると定義した。これに対し、「ていた」では「完了」とともに「同時」という分類をする。これは先行研究と本稿の調査の結果の違いを明確にするためである。

寺村(1982:144)は（18）の例文について、「ていた」の完了はその間に別の事態が起こること、と説明している。

（18）ソノ夜、山ノ上旅館デ泊マッテイタ。翌日ノ朝、早ク起キテ、山ニノボッタ。

「泊まっていた」とすると、読者の注意は、「そのあいだに何か起こったのか」という方向に向く。だから、たとえば、

（19）山ノ上旅館ニ泊マッテイタ。夜中ニ地震ガアッテ、皆トビ起キタ。

のように、その間に何かが起こったことを表現することを提案している（寺村 1984:145）。しかし、本稿は、ある事態の一定の継続期間内に別の事態が起こることと、事

態以前の出来事を表す場合とで、例文の数はどの程度の違いがあるかを明確にしたいと考え、「完了」「同時」という分類を行う。

「同時」では、（20）（21）のように二つの事態が同じような期間で重なっている場合と、（22）のように「ていた」節の期間の間に一部別の事態が重なっている場合とがある。

(20) 有機物は，植物や動物など生命のあるものから作られると昔は考えられていた。つまり，生命力というものが関係して初めて有機物が作られると信じられており，(中略)大化学者ベルセリウスさえそう信じていたのである。(自然科学)

(21) ヨーロッパの人々はこれを事実として信じていた。しかし、時の流れはダーウィン側に有利であった。（自然科学）

(22) あの、旅行に行ったんですがー、そのときに、なんか、あの、散歩していたときに、あのー、青蛇っていうんですかねー。青大将を目撃してー、（男性会話）

（20）の例では「考えられていた」ことと「信じていた」ことが同じ時期に起こっている。（21）では人々が「信じていた」時、時の流れはダーウィンに有利だった、と二つの事態が同時に起こっていたことが述べられている。このような例を「同時」とした。（22）では「散歩していた」間に蛇を見た、と期間中に別の事態が起こったことが述べられている。

### 3.2.3　完了

「完了」には「ていた」節が「た」節より以前を表すものを採用した。

(23) 科学的には過去への旅は夢物語だと思われていた。ところが驚いたことに　　は、1988 年暮れ、アメリカの物理学者(中略)が驚異的な説を発表した。(自然科学)

(24) 彼の論文は日本語で出版されたまま、七〇年あまり埋もれていたが、数年まえわたしが国際学会で紹介して以来、ひろく欧米の学者も引用するようになった。(自然科学)

(23)は、以前は無理だと思われていたことに対し、1988 年に別の説が発表された、としており、「ていた」が「た」より以前の状態を表している。(24)は埋もれていた論文を、後に多くの人が引用するようになったと述べ、時間的前後関係がある。「完了」には（24）のように変化を表すものも含める。

### 3.2.4　二つの事態の間の関係

表 6 は以上の二つの事態の前後関係をまとめたものである。

| 表6　二つの事態の間の用法 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 会話 | | 新書 | |
| 継続過去 | 140 | 41.3% | 72 | 23.4% |
| 結果状態過去 | 102 | 30.1% | 63 | 20.5% |
| 繰り返し過去 | 29 | 8.6% | 4 | 1.3% |
| 性状過去 | 1 | 0.3% | 28 | 9.1% |
| 同時 | 24 | 7.1% | 50 | 16.2% |
| 完了 | 43 | 12.7% | 91 | 29.5% |
| 合計 | 339 | 100.0% | 308 | 100.0% |

小説について二つの事態の間の関係を探ろうとしたが、小説の文のテンスは変化が大きく、「る」を使っていても過去とも読める例もあり、恣意的な判断になる可能性があるので、ここでは会話と新書だけの結果を示す。

「ていた」節が他の節と関係しない、あるいは「る」節と関係する例の割合は、継続過去・結果状態過去・繰り返し過去・性状過去の合計であるが、会話では80%、新書では54.3%となっている。「同時」「完了」の合計は、会話では約20%に対し、新書では45%ほどと、会話では「る」節と関係をもつ例（25）、他の節との関係が読み取りにくい例（26）が多いことがわかる。それに対し、新書では半数近くが「た」節と関係のある例であった。

（25）5311　10C　それ、なに聞いてたの↑
5312　10C　なんでゆわないの↑
5313　10C　なんで隠すことないじゃん。＜笑い・複＞
5314　10C　お経でも、はいってるの。
5315　10A　お経がね。
5316　10A　そんなもんでしょ。＜笑い＞＜間＞

（26）2930　07A　おととい、寝たの、２時じゃん↑
2931　07A　きのうも２時じゃん↑
2932　07A　で、眠いじゃん↑
2933　07A　で、［取引先社名］行こうと思ってたんだよ、おれ、電車ん中で寝れるからー。
2934　07G　うーん。
2935　07A　どーも、無理そうじゃーん↑＜間　５秒＞
2936　07G　なんで２時↑＜笑い＞
2937　07A　なんかほら、12時ぐらいに着いてもさー、なんだかんだで風呂入って、飯食ったりすぐ、なっちゃうじゃん。

（25）は現在と関係を持つ例である。（26）は他の節との関係が読み取りにくい例である。（26）は電車の中で寝られるから取引先に行こうと思っていたがどうも無理そうだと思っているという話で、書きことばであれば「行けなかった」が続くであろうが、会話では例

のように、なぜ眠いかの説明が続いてしまう。このように、言わなくてもわかってもらえることは省略するため、「ていた」節が形のうえでは「た」節と関係をもっているとは言えない例がある。

そして、「完了」と「同時」を分けて整理したところ、「同時」にあたる例が新書ではある程度あるが、会話ではかなり少ないことが目に付く。

また、「同時」の内訳、つまり前掲の（20）（21）のように二つの事態が重なっている場合と、（22）のように「ていた」節の期間の間に一部別の事態が重なっている場合とで、その例の数を比較した。

表7　期間中の出来事

| | 会話 | 新書 |
|---|---|---|
| 同時 | 24 | 50 |
| うち期間中の出来事 | 11 | 2 |

表 7 のように、会話においては「ていた」節の間に別の事態が起こったことを述べる例はある程度あるが、書き言葉においては「同時」は二つの事態が同じように存在するという形で用いられていることがわかる。

それではこれらの結果と「ていた」の用法はどのように関係しているのであろうか。会話においても科学的な書物においても、結果状態が多いが、それはなぜか。なぜ新書では「完了」が多いか。これらの疑問に答えていきたい。

上の質問に答える中で「ていた」の用法を整理し、その後、テクストの違いによる「ていた」の用法の違いを考えたい。

「ていた」の用法にどのような性質があるかをまず考えたい。過去の動作・作用の継続、結果状態、完了の順に取り上げる。

## 4　継続の「ていた」と完了相「た」の使い分け

学習者は「た」と「ていた」の違いについて混乱を起こしているようである。「た」と「ていた」の意味の違いはこれまで何度も言われてきた「まるごとの事態」か「継続」であるかの違い（寺村 1984、高橋 1985、工藤 1995）である。

次の文はこの章のはじめにあげた誤用例である。

(1) ×旅行中京都の街で優雅できれいな芸者に会っているし、写真をとっていました。
（再掲）

寺村（1984）、高橋（1985）工藤（1995）などはまるごとの事態は完成相「る」「た」で述べるべきとしている。始まってから終わるまでのすべてを捉える場合は完成相を使うと述べている。

(27) ？加藤さんと家族は荷物を運ぶのを手伝っていました。（例文寺村 1990：318）

上のような例文はどう考えればいいのだろうか。文脈がないので学習者の意図は正確には分からないが、（27）は加藤さんの家族がはじめから終りまで手伝ったことを述べているようにもとれる。学習者には動作が一定時間続いたように見えている例を、まるごとの事態として、はじめから終りまでの全体が関係するということで、「た」を使うほうがいいと説明するにはどのように考えればいいのだろうか。ある事態が学習者の目にまるごとの事態と感じられない場合、それをどのように「た」で表すと指導するかが問題といえるであろう。

### 4.1　動作継続に関する先行研究

高橋（2003:12）は完成相と継続相の違いについて、「完成相は動詞の示す運動をはじめからおわりまで、まるごとのすがたでとらえてあらわすいいかた」であり、継続相は「動詞のしめす運動を、持続過程をなす局面のなかにあるすがたで捉えてあらわす」として次の例文をあげている。

（28）a ？さっきわたしが運動場にいるとき、子どもたちがトラックを<u>はしった</u>。
　　b　さっきわたしが運動場にいるとき、子どもたちがトラックを<u>はしっていた</u>。

（28）a はわたしが見ている間に子どもたちは走り始めて走り終えたのであり、（28 b）はわたしが運動場へ行く前に子どもたちは走り始めており、私が運動場をさるときもまだ走り終わっていなかったことを表すとしている。

町田（1989:75 - 76）は継続動詞の「タ」と「テイタ」は共に過去において成立した事象を示すとし、その事象と時間的な区間との関係について、「タ」はその区間全体において事柄が真であるときに使われ、「テイタ」は事象の一部が真であるときに使われるとしている。

（29）a？ 太郎は 3 時 1 分に<u>走った</u>。
　　b　太郎は 3 時 1 分に<u>走っていた</u>。　（？の判断町田 1989：76）

つまり、「た」を使った場合は、3 時 1 分という時間の長さ全体の中で「走る」という動作が真でなければならないのに対し、「ていた」を使った場合はその時間の中で当該の動作の一部が真であればいい、すなわち、太郎は 3 時から「走る」動作をはじめ、3 時 10 分まで走っていてもかまわないし、3 時 1 分 02 秒には走り終わっていてもかまわないとしている。「た」を使う場合は当該の時間全体でその事柄が真でなければならないが、「ている」を使う場合はその一部だけが真であればいいのである。

ある時間に当該のできごとがはじめから終りまで入るという高橋（1985、2003）の表現と似てはいるが、ある区間を基準にし、その区間の中で当該の事象がどうであるかという見かたをした点は興味深い指摘である。本稿は区間という考え方を「ていた」にあてはめてはどうかと考えた。時点ではなく期間を問題するとどのような議論が可能であろうか。

また、町田（1989:149）は描写のしかたについても、「た」は俯瞰的、「ていた」は事象の内部の様態に注目して述べると説明している。学習者の作った以下の例は、この町田（1989）の議論を用いて説明ができるであろう。

（30）？カンボジアは（中略）20 年くらい戦争をうけました。とくにポルポト時代の中にいろいろなものがはかいされていました。そして、カンボジアは弱い国です。（例文宇佐美 1999）

この文は「戦争」「破壊」「弱体化」という大まかな流れを述べているので、 俯瞰的な「た」によって(30)’のようにすると適当な文になるであろう。

（30）’カンボジアは（中略）20 年くらい戦争がありました。とくにポルポト時代にいろいろなものがはかいされました。そして、今もカンボジアは弱い国です。

具体的な内部の事柄について述べるのではない、事柄の連続を述べる場合は俯瞰的に事態を述べる「た」を使うといえるであろう。

また、高橋（1985:265）は継続相過去形のアスペクト・テンス的性質について、「継続相過去形のテンス的意味は動作の持続過程をなす局面が過去にあること」とし、現在形と過去形の違いは、「現在形のばあいは始発と終了のしめされた持続過程にかかわるものがないのに対して、過去形のばあいは、それがあること」としている。つまり、「ている」では始発と終了は特にあってもなくてもかまわないが、「ていた」では始発あるいは終了の意味が文中に表されると文の適格度が高まると述べているのである。「ていた」では継続が表現されるが、その継続の意味を確保するためには、始発あるいは終了または期間が示された方が、文が落ち着くということである。

高橋（1985:265-272）に従って時間の表現を見ていこう。高橋は「過去に持続過程のなかにあったこと」「過去に持続過程が成立したこと」「持続過程の一方のはしが示される場合」として継続相過去が成立する時間的な状況語について以下のように述べている。

１）基準時間が示される場合

a 基準時間が瞬間

瞬間的な時間を表示することによって、その時間を中心とした継続を表すことが自然になる。また、条件句、条件節を用いることにより「発見」の意味を表し、それによって文末に状態性の表現を使うことが可能となる。

b 基準時間がはばのある時間

はばのある時間帯、瞬間とそぐわない修飾語、「しながら」「しいしい」のような副動詞、連続的なくりかえしなどを表示することによって「ていた」が使いやすくなる。

２）時間量を示す修飾語でかざられる場合

時間量の表示、いつからいつまでと指定する場合、「～の間」、時間はばをしめす状況語・修飾語などを示すなどの条件があれば「ていた」を使うことが可能となる。

高橋（1985）では「ていた」が成立する条件が整理されており、非常に参考になる。

### 4.2　時間幅と事態の関係

まるごとの事態の議論では一定の時間に当該の動作・作用がおさまるかどうかという観点から議論がなされてきたが、本稿では、先にあげた高橋(1985)や町田(1989)の観点を用いて、一定の期間に当該の動作・作用が「ていた」の形で表現できるかどうかという見方で分析することにする。一定の期間を本稿では「時間幅」という用語を用いて示す。

時間幅を示す語と動詞の示す事柄との間には「ている」「ていた」が適当なものと「る」「た」が適当なものがあるのではないだろうか。

(31)　昨日、学校に行っていた。（作例）
(32)　？昨日、走っていた。（作例）
(33)　？その時、スポーツカーを運転している人が通っていました。（寺村 1990：318）

(31)～(33)は時間幅を示す語と「ていた」をともに使った例であるが、(32)(33)は文脈の助けを借りなければ適当とは言えない。

「学校に行く」ことが朝行って数時間学校で過ごし午後帰るという継続的な動作でありうることは我々の既有知識で理解できる。つまり、「昨日」1 日と「学校に行っていた」ことは矛盾がない使い方ができる。それに対し、「走る」ことは 5 分でも 3 時間でも可能であるが、1 日中走ることは普通の状況では考えられない。

(34)（陸上部の先輩がマネージャーに聞く）私は昨日の練習に出られなかったけど、みんなちゃんと走ってた？（作例）

のように、部活などで毎日一定の時間走ることが想定されているような場合は「昨日は走っていたか」という質問は許容される。そのような文脈がない場合、(32)の文は適当とは考えにくい。

工藤（1995:72）は動詞をアスペクト対立の有無の観点から外的運動動詞・内的情態動詞・静態動詞に区分し、その外的運動動詞を、さらに＜そこに至れば運動が必然的に尽きるべき目標としての内的時間的限界＞を持つかどうかという観点から、内的限界動詞と非内的限界動詞に区分している。そして、主体動作・客体変化動詞、主体変化動詞は内的限界動詞、主体動作動詞は非内的限界動詞となる、と整理し、動詞の例をあげている（工藤 1995:73-78）。内的限界動詞・非内的限界動詞ともに、補語との関係で、ある程度の時間幅が想定できる。

(35) 手紙を書く。（作例）
(36) 博士論文を書く。（作例）

この一定の時間幅と文の時間幅が許容範囲を超えた場合、我々はその文を不適当と判断する。

(35)’　昨日の午後、手紙を書いていた。（作例）
(35)”？去年、手紙を書いていた。（作例）

(35)’のように、午後の一定の時間、手紙を書くことは許容範囲の中におさまる。しかし(35)”のように1年間手紙を書くことは、繰り返し以外、続けることができないため、許容範囲を超えていると判断される。動詞の述べる事柄と時間幅とはある程度の許容範囲に入らなければ不適格な文ができてしまうといえる。

文脈の助けがない場合、動詞と補語の組み合わせから想像される時間幅と「ていた」の文の示す時間幅が許容範囲を超える場合は高橋（1985）の指摘するように基準時間、開始時、終了時のような「持続過程の一方のはし」などを示す必要があるといえる。

### 4.3　許容度を高める方法

動詞と時間幅の関係で「ていた」の許容度を高める方法は、高橋(1985)の記述によると、基準時間を示す、開始時間や終了時間、または時間幅を示す、があげられる。そして、「繰り返し」にすることも有効な方法である。そして、複文にするという方法も挙げられる。以下、順に見ていく。

なお、許容できるかどうかの判断は、特別な文脈がない限り、「繰り返し」でない状況という条件である。

はじめに、基準時間を示す例をあげる。

(37) a ？昨日、手を洗っていた。（作例）
　　b　昨日、朝7時ごろ手を洗っていた。（作例）
(38) a？　昨日、手紙を書いていた。（作例）
　　b　昨日の夜9時ごろ、手紙を書いていた。（作例）

基準時間と時間幅は基準時間が優先的に解釈されるようで、基準時間を示すと、その時を中心とする時間の広がりの中での動作の継続ということが理解されるため、許容度が高まる。

第二に、開始時間や終了時間、時間幅を示す例をあげる。

（39） a ?昨日、走っていた。（作例）
b 昨日、9 時から走っていた。（作例）
c 昨日、5 時まで走っていた。（作例）
d 昨日、1 時間くらい走っていた。（作例）
e ？1 月から走っていた。（作例）

その時間から現在まで、あるいはある終了時間までの継続という意味が出るため許容されやすくなる。 たとえば（39） b は 9 時から走り始めて一定の終了時間まで走ったであろうと読み手は想像する。通常は夜までに走り終わることが了解される。それは我々の生活体験から来る知識であろう。それにも違反するような e のような開始時間・終了時間ではやはり認めにくくなる。（39） e は陸上の選手であれば可能であろうが通常の文脈では認めにくい。陸上の選手であるという文脈においても、この文では繰り返しの意味が含まれる。

第三に、繰り返しの文にする例である。繰り返しの文にすると多くの場合認められやすくなる。

（40）昨日は何度も 手を洗っていた。

複文にするということをあげたが、これは完了の用法のところで述べる。

### 4.4 学習者の誤用例に対して

学習者の作る文で不適格なものは、上にあげたような動作の連続期間を考えていないことによると思われる例がある。ここでは学習者がよく間違える 3 つのケースをあげる。

一つめとして、時間幅が示されているのに、「た」を使うケースである。時間幅が文中に示されているため、読む側では動作継続を想像するのに、「た」を使っている場合がある。

（41）×でも、図書館で、大部分の時間は、友達といろいろなことを、話したで、勉強ができませんでした。（寺村 1990：319）
（42）？去年、カニバールにポルトセグーロへ行きました。家族と行きました。とても楽しいかった。飛行機で旅行しました。妹は高さが大こわい、てすから飛行中に泣きました。（例文 宇佐美 1999）

（41）は「大部分の時間」と時間幅が明示されているので、継続相を使うべきである。（42）は「泣きました」でも許容されるが、「飛行中、泣いていました」も可能であろう。学習者はこのように「ていた」を使わず「た」で表現する場合があるが、できれば、このように、使える時には「ていた」も可能と示すことによって意識化させることも一つの教育方法であろう。そういった場合、時間幅が示されている文は学習者に注意を向けさせるのにちょうどいい機会といえるであろう。

二つめは、時間幅が示されていないケースである。

(27) a？加藤さんと家族は荷物を運ぶのを手伝っていました。
（寺村 1990：318　再掲）
b 加藤さんは｛ずっと/初めから/最後まで｝運ぶのを手伝っていました。
（作例）
c 加藤さんは運ぶのを手伝いました。（作例）

(27) a は文脈が書かれていないので明確なことはわからないが、違和感を覚える。それは「手伝う」という非内的限界動詞が使われているが時間幅が示されておらず、時間幅を探る手がかりも文中に与えられていないので不安定な感覚を覚えるのであろう。
(27) b のようにその動作に対して適当な時間幅を示し、継続であることを明確にするか、開始時間・終了時間を示す、あるいは (27) c のように完了相で表現することが必要といえる。
三つめは、想像できる時間幅と描写があっていないケースである。

(1) ×旅行中京都の街で優雅できれいな芸者に会っているし、写真をとっていました。
（再掲）

(1) は写真を撮ることが達成できる時間はかなり短い。数分ですむであろう。それに対し、この文は「旅行中」という時間幅を表現している。このように時間幅と実際の行為に必要な時間があっていない場合は誤用となる。

## 5　過去を「ていた」で表示するもの

動詞の中には、過去を「た」ではなく「ていた」で表現する必要があるものがある。それを整理しておこう。

### 5.1　状態動詞に分類されるもの

過去を表現する場合には通常「ていた」形を使うことが要求される語群がある。状態動詞を見ていこう。
町田(1989:27－28)は状態動詞を「存在」「必要」「関係」「可能」「知覚作用」「思考」と下位分類し、それぞれのアスペクト的な性質について述べている。
その中の関係を表す語「異なる」「対応する」「含む」「適する」などについては、「ている」をつけることができる点で状態性が「ある」などより少し低いとしている。そしてこれらの動詞で過去を表す場合は「ていた」をとるのが普通であるとしている。

(43) a　言語学と文献学とは異なっている。

b ？言語学と文献学とは異なった。
c　言語学と文献学とは異なっていた。（町田 1989：27 - 28）

寺村（1984:83）では状態性述語の現在は「る」過去は「た」と述べられているが、状態性述語の内部での状態性の強弱と「た」「ていた」の関係を理解する必要があるといえよう。

本稿における調査でも、状態動詞、関係を表す動詞で過去が「ていた」で表される例が採取できた。(44)はいわゆる状態動詞、(45)～(47)は関係を表す動詞の例である。

(44) 4340　10A ほー、だけどその、鉱脈が流れてるってのは、じゃー、ちゃんとわかってたんだねー↑、(男性会話)
(45) 7445　13A あっ、いえ、あのー。
7446　13G　違ってた↑(女性会話)
(46) 水俣病には、酢酸を作る工程が深くかかわっていたのである。(自然科学)
(47) もとは同じ種に属していた個体が、最初にごくわずかな変異によって、ほんの少しだけ自然淘汰に対して有利になる。(自然科学)

(48)は形容詞的動詞を使った性状の文である。性状も過去の述定では「ていた」の形をとる。

(48)（前略）というエピソードも、忠敬の測量がいかにすぐれていたかを示すものである。(社会科学)

### 5.2　思考動詞に分類されるもの

また、町田（1989:34）は「思う」「疑う」「信じる」などの「思考」を意味する動詞も、過去を表現する場合「ていた」を使わなければならず、「た」を使った場合は過去における状態ではなく、過去のある時点における状態の「変化」を表すと述べている。

(49) a 私は花子が美しいと思った。
b 私は花子が美しいと思っていた。（町田 1989：34）

思考を表す動詞は、町田は状態動詞に分類するが、工藤（1995:69-71）は内的情態動詞と分類してこれらの動詞は広い意味で動態動詞に含まれると述べており、研究者によって捉え方が異なる。つまり思考動詞は「る」で現在を表すことができるという意味では状態動詞的性格を持つが、その用法が第一人称に限られる、アスペクト対立をもつという意味では完全な状態動詞とはいえない。

思考動詞は工藤（1995）が動態動詞に含めるように、「ている」がついた場合は結果状態ではなく動作継続の意味になる。しかし、現在の考察の対象である「ていた」については、関係性を表す状態動詞と同様、過去は「ていた」で表され、「た」は変化を表す。

次は思考動詞を使った例である。

(50) 333　01A　だから、ほかのもんが頼めなくなっちゃってー。
　　334　01A　これと一緒に頼もうと思ってたんでー、きょう話聞いてから。
（男性会話）

(51) 7855　13Ｂ　［名字］さん、気づいてないのかと思ってた。（女性会話）

このように、思考動詞を表す動詞は過去を「ていた」で表現し、これらの語群では「た」ではなく「ていた」が要求されることを学習者に意識させる必要があるといえよう。

### 5.3　結果状態に分類されるもの

「知る」「もつ」などの結果動詞は「る」が未来あるいは習慣、「ている」が結果状態を表す（町田 1989　工藤 1995）、そして「た」が現在の変化または過去の変化、「ていた」が過去の状態を表す。

(52) あのニュース聞いた？いや、今知った。（作例　現在の変化）
(53) あのニュース聞いた？うん、昨日知った。（作例　過去の変化）
(54) あのニュース聞いた？うん、知ってた。（作例　過去の状態）
(55) まさかこの伝説の作者が、一般相対論を知っていた―あるいは予知していた―とは思えないのだが…。(自然科学)
(56) 714　02A もし内容についていろいろ細かいこととか、なにかこう疑問な点があったらさー、＃＃＃が書いてるの知ってた↑(男性会話)
(57) 一九四〇年代はまだ政治と行政の二分論が力を持っていた。(社会科学)

(52)(53)は「知る」の現在の変化、過去の変化の例である。すでに過去に知識があった場合は(54)のように「た」ではなく「ていた」を使う。(55)は過去のタイムマシンの小説の作者が一般相対論を知っていたかどうかわからない、と過去のことを述べている。(56)は大学の職員が学生にこのような情報を過去にもっていたかと聞いており、こちらは過去の状態を述べているが、このように過去に関係する場合は「ていた」が使われている。(57)は「持つ」の例である。ある考え方が力を持っていた、つまり力があったと述べており、「ていた」は過去の状態を述べている。これらの例では「た」で表現すると変化になってしまう。

「なる」もよく使われる結果動詞である。「なる」は（58）のように「た」では変化を示す。過去の時の副詞がある場合は（59）のように過去の変化である。それに対し、過去の状

態は（61）のように「ていた」で示される。そのほかの結果動詞も(62)～（64）のように、「た」は変化、「ていた」は過去の状態を示す。

(58) 暗くなった。（作例　現在の変化）
(59) さっき空が急に暗くなった。（作例　過去の変化）
(60) 12 月ごろは 4 時半には暗くなっていた。（作例　過去の状態）
(61) 4944　11A あー、ぼくたちの時はもー、軽音楽部とか、そうゆう連中の一、飲み会の場所になってた。(男性会話)
(62) その部屋は飲み会の場所になった。　（作例）
(63) 9704　16 I　なんか、合格するための本の、参考文献にのってたってゆうこと。(女性会話)
(64)私の詩が雑誌に載った。（作例）

## 6　「ていた」「た」の使い分け

以上見てきた「ていた」「た」の使い分けについて、まとめてみよう。

表7 「る」「た」「ている」「ていた」の位置づけ

| | | 辞書形 | 変化の局面 | 過去 | 現在 | 未来 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 状態性述語 | いる | — | いた | いる | いる |
| 2 | 関係性動詞 | 異なる | ×異なった | 異なっていた | 異なる<br>異なっている | |
| 3 | 思考動詞 | 思う | 思った | 思っていた | 思う<br>思っている | 思う |
| 4 | 動作動詞 | 読む | | 読んだ | 読んだ<br>（開始→終了） | 読む |
| 5 | 結果動詞 | 持つ | 持った | 持った<br>持っていた | 持っている | 持つ |

表 7 は本節で述べてきた動詞の種類と「る」「た」「ている」「ていた」の関係をまとめたものである。

テンスとして過去・現在・未来をあげたが、それと同時に「変化の局面」という項目をいれた。結果動詞の「た」は変化の局面を表す。

状態動詞、関係性の動詞、思考動詞、動作動詞、結果動詞を比較した。

5.1 から 5.3 まで述べたことを簡単にまとめると、上の表のように、未来は、一部未来を表現しない語はあるが、多くは「る」であり、統一されていると言える。現在を表現するには「る」「ている」であり、動作動詞、結果動詞は「ている」になる。

過去の事態を時系列的にとりあげてまるごとの事態として述べる場合には「た」で表現する。

結果動詞は、「た」でまるごとの過去の事態を表すことができると高橋（1985：35）で述べられている。

（65）とけいが 2 時にとまった。
（66）とけいが 2 時から 3 時までとまった。（高橋 1985：35）

（65）は変化の局面、（66）は持続過程をなす局面を表すとしている。下の例で「ていた」と「た」を比較しよう。

（67）ネズミのこどものレム睡眠をうばった実験を紹介しよう。（中略）こういう処理をうけたネズミが成長したのち、その行動を解析してみると、（中略）音の刺激に対する反応性がおちていた。（自然科学）
（68）？こういう処理をうけたネズミが成長したのち、その行動を解析してみると、音の刺激に対する反応性がおちた。
（69）シュワルツシルトの解は出たが、まだブラックホールという名はなかった。ただしシュワルツシルトの半径は正しく計算されていた。（自然科学）
（70）シュワルツシルトの解は出たが、まだブラックホールという名はなかった。ただしシュワルツシルトの半径は正しく計算された。

実際の文脈では、（68）のように「た」で過去を表現すると不安定になるが、(70)のように、Ａがあった、そしてＢがあった、と述べる文脈では「た」の連続という要因が作用し、「た」が認められる。文の安定性にはいくつかの要因が関わる。
状態性述語と動態性述語が現在を表す形が違うのと同様に、過去は実際の例では、動作動詞と結果動詞が異なる傾向を見せ、動作動詞は「た」によって過去を表現しやすいのに対し、結果動詞は「ていた」の方が過去を表現しやすい場合があるといえよう。
関係性を表す動詞は「た」がない。過去を表現する時は、必要に応じて、「ていた」を使う。
現在が「ている」であるから、それを過去の形である「ていた」にすれば自動的に過去になるのではなく、動作動詞では過去の基本形は「た」であり、結果動詞は「ていた」が現れやすいと伝えることにより、多くの誤りを避けさせることができるだろう。寺村（1990）から学習者の誤用例をあげる。

（71）×残されていた古い物はよく保存していないから、こわられたし、さらにモダーンの型をつけた。
（72）×私は、大学時代に学問を勉強する方法が間違いました。（寺村 1990：315）

（71）は「こわれていた」に、（72）は「間違っていました」あるいは「間違えていました」にするのが適当であろう。「こわれた」は変化だが、この文脈では「こわれていた」という過去の状態を述べる必要がある。（72）では「間違いました」にすると一度の間違いをそのとき「した」という変化あるいは結果の表現になるが、この文脈では過去の自分の方法が違っていたと述べたいようなので「ていた」が適当である。

また、関係を表す動詞、性状を表す動詞、思考動詞でも、過去は「た」でなく「ていた」で表現することが要求されるということを学習者に意識させる必要があると言えよう。

本章の表５で、「ていた」は会話においても新書においても結果状態が多く、新書においては性状が多いという結果を述べた。これは、結果動詞や「ている」がつくと性状になる関係を表す動詞などが、「ていた」がついて必然的に結果状態、性状として現れたということも原因の一つであろう。

## 7　「ていた」が表す過去の状態

「ていた」が表す過去の状態は、文脈によって、過去の状態、現在と切りはなされた過去の状態、「発見」つまりある状態があることにあるとき気づいた、という意味が見られる。以下、順に見ていくが、「発見」については、ここでは扱わず、8節で詳しく論じる。

単純な過去の状態は、前節で見た必然的に「ていた」を要求する状態性述語を使った文でも見られるし、(73)から（75）のように結果動詞でも見られる。

(73) 2231　06A　あの一、図書館連絡係とゆうのは、研究室主任が一、確か自動的に兼ねる、ことになっていたと思うんですね↑(男性会話)

(74) 起きているとき、ノンレム睡眠のとき、レム睡眠のときに、同じ音を聞かせると、脳波が一秒以内に、それぞれ独特の変化をしめすことが、ふるくから知られていた。(自然科学)

(75) 子供に手がかからなくなったうえに、亭主も働き盛りでビジネスに興味を持つことが多いため、余った時間の過し方というものが問題になる時期なので、いわば需給バランスがとれる条件が成立していた。(社会科学)

これらは過去の状態を表しているが、特に現在と切りはなされている、あるいは現在とは状況が異なっているという意味は持っていないようである。過去の一定の状態を表現しているだけである。

一方、現在と切りはなされた過去の状態というのは、現在とは状況が異なっているという意味を示しているものである。森山（1988:148）は「結果の持続状態が現在を含まないという意味で過去化されると、現在は別の状態であるという含意が生まれる」と述べている。寺村（1984:88）も状態述語が「キノウ」のような「過去の時を示すことばと共に過去形で使われた場合は（現在とは切りはなされた）過去のある状態について」述べることになり、「キノウカラ」のような「過去から現在までの時間の幅を示すことばと共に使われた場合

は、過ぎ去ったことだと見ていることを表す」と述べている。以下に、現在と切りはなされた過去の状態の例を見てみよう。

(76) 獲得形質の遺伝が、再び登場するのは共産主義のソ連であった。ソ連では、遺伝学を柱として生物の主体性を否定してしまうダーウィン進化論とは違う生物観が盛んで、獲得形質は遺伝するという立場に立って、まったく別の進化論が形成されていた。(自然科学)

(77) 4963　11A　いや、そのホールの横に小さいなんですか。
4964　11A　部室にー、ぼくたちがいたときはなってたけどー、平屋みたいな、こー、ちょっと長屋みたいな。
4965　11F　あー、あったかもしれない。
4966　11A　そこがじゃー。
4967　11F　そこが寮だったのかな。(男性会話)

(76)はソ連では西側世界とは別の進化論が形成されていたが現在はその考え方は否定されているという文脈である。(77)は自分たちが学生だったころは部室だったがその後変わっただろうと述べており、それに対し、そこが昔の寮だったのだろうと変わる前の記憶を思い出している文脈である。このように「ていた」はその後、状況が変化したということを含意することがある。

## 8　「発見」の用法の成立の条件

次に「発見」の文について考えてみよう。次のような例文が採取された。

(78) ～をいっしょにくっつけて返すとゆう形になってたと思います。(女性会話)
(79) 他にも多くのバードがあり、これらは療養の役割を立派に果たしていた。(社会科学)

(78) は記憶を確かめるとこのような形になっていたはずであると述べている。(79) は老人施設を見学に行った筆者がバードを見てその役割に気づいたと述べている。このように、あることに気がついたことを述べている文や、過去とは一概に言いきれない「ていた」もある。こうした例を本稿では高橋 (1985) の用語を用いて「発見」の用法とし、それが成立する条件について考えてみたい。

### 8.1　先行研究

高橋 (1985:289) は「継続相過去形のテンス」の「恒常的な質的属性を継続相過去であらわすとき」の中で、継続相過去形は「いちばん基本的なところに発見の要素がある」と述べ

ている。恒常的な状態であるものを継続相過去形で表すということはそれを話し手が見た時点のことのように表現することであり、そこから発見の意味が現れるとしている。高橋の「発見」という考えは学習者に「ていた」を使ってもらうためには有効な考え方であるものの、発見が「恒常的な質的属性を継続相過去であらわす」という部分は疑問である。「発見」の用法は、恒常的な質的属性を表すものだけにあるのであろうか。

この発見の用法は結果状態に多いが、動作・作用の継続においてもよく見られる用法であり、「ていた」を使いこなすためにはかなり重要な用法であるということを確認したい。

藤城（1996:4）は「（気が付いたら）～ていた（が/から）」などのように表現される用法を「感知の視点」と名付けて、特に「ていた」で多いと述べている。なぜ「ていた」で多いかというと「基準となる時間に視点を移し、そこに展開されている状況を、見る、聞くなどして感知する、という態度が表れやすい」ためであるとしている。

（80）少し行くと、道は大きく曲がっていた。（藤城 1996：4）

そして、「感知の視点」が現れやすい条件を、話者や登場人物の視野に変化が起こったとき（例 81）、ある出来事を外から感知したこととして示す場合（例 82）であるとしている。

（81）ふもとに戻って時計を見ると二十分しかかかっていなかった。
（82）きょう、どっかのおじさんが公園で太極拳をしていた。（藤城 1996：8）

（81）はふもとに戻ったという表現で視点が変化したことが示され、（82）は太極拳の一部始終を見ていても「た」ではなく「ていた」で表現されるのは客観的に外から見たこととして表現するためであるとしている。

藤城（1996）の指摘は重要であるが、本稿は「感知の視点」が現れやすい条件はもっとあるのではないかと考えて例文を調査した。また、これら二つの研究は「発見」あるいは「感知の視点」の用法がどの程度重要であるかについては語っていない。そして、「発見」の用法はテクストの違いと関係があるかどうかという点も疑問である。

高橋（1985）は「発見」の用法をムード的な用法であると述べている。本稿も同様に考え、アスペクト的な用法の分類の中には含めず、別扱いして、すべての用法を対象に「発見」と読める文を選んだ。

本稿は会話・小説・新書のコーパスを使い、実際に「発見」ととれる「ていた」の文がどの程度あるかを調査した。そして「発見」の文の成立条件を探った。発見は後に述べるが、文体と関係があるということを示したいと考えた。そのため、本節では小説も用例として詳しく見ていくことにする。

## 8.2　調査結果

本稿では「発見」の「ていた」を「ある状態に気がついたことを述べる」用法とする。「ている」はある状態があることを述べる用法であるが、「発見」の「ていた」は、以前からすでにある状態が存在し、ある時それに気がついたと述べる用法である。これは「ている」にはない「ていた」独自の用法である。

本稿ではその文中に「気がついたら」または「～とわかった」「～ことを思い出した」を入れられるものを「発見」とした。また、自分のことを述べる場合は、外から見ているかのように客観的に描写しているものを採用した。そして、本稿で使っている会話・小説・新書でどの程度使われているかを調べてみた。調査を客観化するために、二人で評価を行い、食い違った場合は筆者が判断した。一致率は80%であった。表8は「ていた」全体に対する発見の割合を示したものである。

表8　「発見」の用法

| | 会話 | | 小説 | | 新書 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 発見 | 152 | 44.8% | 720 | 47.4% | 109 | 35.4% |
| それ以外 | 187 | 55.2% | 798 | 52.6% | 199 | 64.6% |
| 合計 | 339 | 100.0% | 1518 | 100.0% | 308 | 100.0% |

本稿で「発見」と分類した例を挙げる。

(83) 新しく発見された化石は、ラマピテクスがヒトでなく、オランウータンの祖先であることを示していたのである。（自然科学）
(84) へそくりがあるの忘れてた、あたし。（女性会話）
(85) 地所が、――それを仕切る煉瓦塀だけは残っていた。（小説）
(86) 気がつくと午前三時、というような時間になっていた。（小説）

新書は多少割合が低いが、会話・小説では「発見」の文は40%以上を占めており、「発見」の用法は学習者にぜひ学んでもらいたい用法であるといえる。

## 8.3　「発見」の文を支える条件

では、次に、どのような条件があれば「発見」の文ができるのか、考えてみよう。

### 8.3.1　アスペクト的観点から

高橋（1985）は「恒常的な質的属性を継続相過去であらわすとき」の「発見」について述べている。時間と関わらず一定の状態を保つものを「ていた」で表現すると、その状態を発見したという意味になるということである。今回の資料で見つかった性状の文をあげる。

(87) 女はむっくりと太っていた。（小説）

(88) 高根の顔は亀に似ているというよりも、正確にいうと亀の顔の“しぐさ”に似ていた。（小説）

(87) では女はそのときだけ太っていてその後痩せたのではない。(88) では高根の顔が亀のしぐさに似ているとその時感じた、という意味に読める。

「発見」の用法は恒常的な状態である性状だけでなく結果状態の文でも比較的多い。

(89) 原子力ステーションによる暖房が緒についていた。(社会科学)
(90) 実におびただしい人がその辺りに集まっていたからである。（小説）
(91) 粘土層ではその前後の三〇倍もの量になっていた。（自然科学）

そして次の例は「運動短期」「運動長期」「繰り返し」「完了」での「発見」である。

(92) 私がこのある部屋のドアをあけたとき、そこにいた老人たちは賭博をしていた。
（社会科学　運動短期）
(93) たとえばフランクフルトに近いノンハイムでは、心臓の弱った人たちに重曹浴をさせ、静かな雰囲気の中で運動療法をやっていた。他にも多くのバードがあり、これらは療養の役割を立派に果たしていた。（社会科学　運動長期）
(94) 3325　07Ｂ　でもあしたっからなんか変わると、しきりにいってましたけど。
（女性会話　繰り返し）
(95) 1098　03A　戻ってきて見たらー、きょうってなってたからー。
（男性会話　完了）

(92) はドアを開けたところ、賭博をしている老人たちに気がついた、と述べている。(93) はドイツではバードで運動療法が行われていたこと、そしてそれが療養の役割を果たしていることがわかったことが述べられている。(94) は駅で明日からダイヤが変わると言っていたことが表現されている。アナウンスでダイヤが変わることに気がついた、と言っているように読める。(95) は掲示板を見たら今日と書いてあったことに気がついたと述べている。どれも「発見」と読める。

(92) ～ (95) のように、性状・結果状態だけでなく、運動短期・運動長期・繰り返しでも「発見」が見られることがわかり、比較的よく使われている用法であることが理解できる。これは高橋（1985）が述べるように、状態性の事柄を「ていた」を使って表現する場合、「それを発見した」という意味が現れやすいことによるのであろう。

### 8.3.2　文中の位置と文体

「発見」は文末に多い。文末の方が発見の意味を表しやすい。

次の2例を比べてみると、（96）は若者がためらっていることに七瀬が気付いたと読める。それに対し（97）のように文中に「ていた」がある場合は「発見」と判断するより、通常の継続という理解になりやすい。

（96）七瀬の質問でバットの若者は、彼が恐れている対象を心の表層に浮かびあがらせた。だが彼はその顔を、その姿をはっきり再現させることをあきらかにためらっていた。（小説）

（97）ためらっていた少年に声をかけこちらに来させた。（作例）

それゆえ、「ていた」の「発見」の文の割合はテンスとも関係する。小説で「発見」が多くなったのは、ひとつは工藤（1995:210）が「外的出来事提示部分＜典型的かたり＞での主導時制形式は、過去形である」とするように、そもそも小説が基本的に文末を「た」で表現する文章であることによるであろう。また、文体とも関係があるであろう。表8によると、会話でも発見の文の割合が高いが、それは発話文が短い傾向がある会話の話し方によると言える。

一つ一つの文を短く表現している作品では、「ていた」で言い切る文も多くなり、必然的に「発見」と読める例が多くなることになる。

（98）蝋のように汗ばみ、融けていた。毛穴が、汗にひたっていた。時計がとまっているので、はっきりはしないが、穴の外では、まだ案外昼間なのかもしれない。しかし二十メートルの、この穴底では、もう夕暮だ。

女はまだ睡りこけていた。夢をみているのか、手足をぴくぴく、ふるわせている。いまから睡りの邪魔をしてみたところで、はじまるまい。彼でさえ、もうたっぷり寝足りていた。

体をおこして、皮膚に風をあてる。寝返りの際に、顔の手拭が落ちてしまったらしく、耳の後ろや、鼻のわきや、唇の端などに、こそげ落せるほどの、砂がこびりついていた。（小説）

（99）私は女のあとをついて歩いた。尖ったハイヒールのかかとが、カツカツという昼下がりの石切り場のような音を立てて、がらんとした廊下に響いた。ストッキングにつつまれた女のふくらはぎが大理石にくっきりと映っていた。

女はむっくりと太っていた。若くて美人なのだけれど、それにもかかわらず女は太っていた。若くて美しい女が太っているというのは、何かしら奇妙なものだった。私は彼女のうしろを歩きながら、彼女の首や腕や脚をずっと眺めていた。彼女の体には、まるで夜のあいだに大量の無音の雪が降ったみたいに、たっぷりと肉がついていた。（小説）

下線部分は本稿で「発見」として採用した例である。（98）は三人称の視点で描かれている『砂の女』、（99）は一人称の視点で語られる『世界の終りとハードボイルドワンダーランド』の一節である。（98）は融けていることに気づいた、汗にひたっていることに気づいた、女が眠っていることに気づいた、のように読める。（99）は女が太っていることに気がついたと述べている。（98）はたたみかけるような描写で追い詰められた男の気持ちを表しているように見える。（99）は周囲の事物を淡々と描写することで不思議な世界におかれたという気持ちを表現しているようである。それぞれ描写しようとしていることは異なるが、短い文を連ねる描き方により「発見」の文と読める例が多く見られた。

比較のため、『コンスタンティノープルの陥落』の例をあげる。

（100）しかし、この「新ローマ」は、西のローマと、ある一点で完全にちがっていた。東のローマは、はじめから、キリスト教を主要な要素とする帝国として生れたことである。東ローマ帝国の皇帝が公式の場でまとう大マントの色は、紫でなく紅であった。古代ローマ帝国皇帝の色であった紫を、キリスト教会は、死の色、つまり、喪の色にしてしまったからだった。

西暦四世紀の創立の頃からすでに、東のローマは西のローマよりも活気があったといわれるが、地中海世界の首都としての地位を確立したのは、やはり、本家のほうのローマが滅亡した、五世紀末からであったろう。そして、それから一世紀も経ない六世紀半ば、東ローマ帝国の勢力圏は、最大に達したのである。全盛期の古代ローマには及ばなかったにしても、ユスティニアヌス帝の時代、ビザンチン帝国の領土は、西はジブラルタル海峡から東はペルシアとの境まで、北はイタリアのアルプスから南はナイルの上流まで広がっていたのである。（陥落）

『コンスタンティノープルの陥落』は「いつ・どこで・だれが・なにを」のような要素や「どのように」という描写の要素も豊富に取り入れた文で構成され、一つ一つの文が長くなっている。こういった文体では「発見」はあまり目立たない。

一人称視点で書かれた小説のほうが「私」の視点で描かれるため「発見」の文が多いかとも考えられるが、実際の結果では、一人称小説のほうが三人称小説より「発見」が多いという結果は得られなかった。それより作品ごとの違いが大きかった (2) 。

表9　一人称小説・三人称小説における「発見」

| | 一人称小説 | | 三人称小説 | |
|---|---|---|---|---|
| 発見 | 412 | 46.8% | 270 | 42.4% |
| それ以外 | 469 | 53.2% | 367 | 57.6% |
| 合計 | 881 | 100.0% | 637 | 100.0% |

### 8.3.3　「発見」の文が表れやすい条件

次にどのような条件があれば「発見」の文になるか、見ておこう。

#### 8.3.3.1　視点の変化

高橋（1985）藤城（1990）で指摘されていることだが、視点の変化があった場合には「発見」と理解されやすい。高橋（1985:289）では条件句が視点の変化を表現する働きがあると指摘されている。本稿で調べたところ、「条件句」や「場所の移動の含意」に見られる、次のような表現が視点の変化を表現する役割を果たしていた。

（101）私が（中略）ふろしき包みをかかえて叔父の家に帰ると、大阪の生野区に住む父の兄が訪れて、私を待っていました。（小説）
（102）静かな部屋をそっとのぞいてみたら、床の上に空気が沈んでたまっていた、なんてことはない。（自然科学）

条件表現である「～（する）と～た」は初級日本語教科書で「発見の「と」」と呼ばれる形である。また、市川（2005:403）では「～たら～た」の形は文末が過去の場合は「一回きり、偶然、発見、きっかけといった意味を表す」と述べられており、「発見」「偶然」の意味で用いられる場合は視点の変化が表されるといえる。

（103）扉の外には廊下があり、廊下には女が立っていた。（小説）
（104）　秋葉原でも検問やってたもんね。（男性会話）

これらは「場所の移動の含意」である。（103）はエレベーターから外に出ると、という文脈で、視野が変化したことが表現されている。（104）は秋葉原経由で来たという文脈で、秋葉原と現在の場所との場所の違いを述べ、視点が変化したことを表し、そこから秋葉原では検問に気がついたという表現になっている。

#### 8.3.3.2　変化の表現

視点・視野に限らず変化を表す表現で「ていた」を使った場合、「発見」の意味が現れる。

（105）箆のようにつぶれた爪も、古いインクのしみのような色に変っていた。（小説）
（106）一頭たりとも残さず完全な金色の獣に変貌していた。（小説）
（107）こういう処理をうけたネズミが成長したのち、その行動を解析してみると、いろいろな異常がみつかった。まず、活動が全般的に増加したが、おちつきがなく、一貫性に欠けていた。（中略）音の刺激に対する反応性がおちていた。（自然科学）
（108）エネルギー消費はふつうのばあいにくらべて、全断眠ネズミでは二・五倍に、またレム断眠ネズミでは三・二倍にはねあがっていた。（自然科学）

（109）私に顔をすり寄せて甘い言葉を囁きかけていた際の匂うような女らしさは跡形もなく消え失せていました。（小説）

「変わっていた」「一貫性に欠ける性格に変わっていた」「音に対する反応が鈍くなっていた」「エネルギー消費量が高くなっていた」と、変化した後の状態を「ていた」で表現することで、その状態に気がついたという意味になり、「発見」と理解されやすくなる。変化を表す表現は多様である。

以下に状況の変化を表す多様な表現の例をあげる。

（110）住居はこの他にも老人向けにこまかい配慮がなされている。老人は転倒事故が多いから、階段の昇り降りをしないですむようエレベーターで上下する。（中略）また老人は嗅覚や圧覚も衰えるのでガスははやくから電気にきりかえていた。（社会科学）

（111）司法審査制が一九世紀初頭に確立され、南北戦争で大統領の指導性が発揮されたものの、一九世紀のアメリカでは、一種の議会政治が発達していた。（社会科学）

（112）一九四十年代はまだ政治と行政の二分論が力を持っていた。（社会科学）

変化は（110）（111）のように「きりかえていた」「発達していた」などと「変わった」とそれと分かるような表現を使う場合もあるが、（112）のように「昔は～だった」と変化前の状態を、それが過去であると述べることによって「発見」として表す場合もある。

#### 8.3.3.3　回想の表現

「発見」と「思い出し」は高橋（1985:295）では「モーダルな性格とテンス」という章で「発見・確認・おもいだし」と並べられている。森山（1988:155）も「結果の持続」について（113）の文をあげ、これは「思い出した」という意味であると述べている。

（113）「忘れていた！」

このような劇的な思い出し方もあるが、次の例のように「そう言っていた」「そのようなものをつけていた」「そうなっていた」と「思い出し」を表現する文もある。

（114）1741　04D　そういえばおっしゃってましたね。　司会宣言ね。　司会者あいさつが５分。　１、２分。　@＜笑い・複＞　（女性会話）

（115）1741　04D　あれ、ケープも巻いてましたよね↑（男性会話）

（116）2231　06A　えー、それからー、次ですけども、あのー、図書館連絡係とゆうのは、研究室主任がー、確か自動的に兼ねる、ことになっていたと思うんですね↑（男性会話）

以上のように思い出しながら語ることは、そのことを新たに「発見」していると見ることもできるという意味で「発見」の用法であるといえるであろう。

#### 8.3.3.4　意外性の表現

意外な出来事を述べる場合は多少の驚きが文面に現れ、それが「発見」ともとれる。

(117) まったく想像もしなかったようなことが 起きていたのだ。（自然科学）
(118) 7212　14A　これ知らないうちに 入ってたんだよー、あのー、ここのがー、だから入れ直してんの。（男性会話）
(119) 粘土の分析結果は意外なものだった。イリジウムという元素が異常に多く含まれていたのである。（自然科学）

「想像もしなかったようなこと」「知らないうちに」「意外」「ところが」「その実」などの表現が、想定していなかったことを示し、文末に述べられている状態の表現が「発見」と読みやすくなる。

#### 8.3.3.5　感覚の表現

情景や人の状態などを描写することによって「～が見えた、聞こえた、感じられた」と表すことになり、それによって「発見・気づき」が表現できる。(120) は「匂いを感じた」、(121) は「ネオンが見えた」という表現になっている。小説ではこうした描写がよく見られた。

(120) 苦みの混った強烈な芳香があたりに立ちこめていた。（小説）
(121) 重く垂れ込めた雲にネオンが反射していた。（小説）
(123) 激しい雪にすっぽりと覆いかくされてしまっていた。（小説）

#### 8.3.3.6　発見の意味を支える副詞

一部の機能語 (3) や副詞には「発見」を支えるものがある。

(124) その顔はほんの短時間のうちに怖ろしいほど憔悴していた。（小説）
(125) そして 60 年代に入るとスーパー・チェーンの急成長がおこり、その小売販売総額が百貨店を越えるのが 1974 年で、この時には全国小売販売総額の１０％を越えていた。（社会科学）

（124）の「（時間・期間）のうちに」のように、「後件に変化や出来事の生起を表す表現を要求するもの（グループジャマシイ 1998:49）」が使われると、後件に変化が起こったことが示され、そこから「発見」の意味が出てくる。このような表現としては「すでに・知らないうちに」などがある。また、（125）のように、「当時」「その時」「その頃は」などの過去の一定の時間を示す語句があれば、その当時のことと現在とが違うという意味が現れ、当時は～であった、とその当時の状況を改めて認識するということで発見の意味が出てくる。

### 8.3.4　用法上の問題

次に用法上の問題、「発見」はどのように使うかを整理しておこう。

#### 8.3.4.1　報告、描写

「発見」は自分が自分に述べる時ではなく、他者に状況を説明する時に使う。

（126）（部屋に入って）「あれ、電気がついてる」（作例）
（127）後で友達に「さっき部屋に入ったら、電気がついてたの」（作例）

上の例で見るように、独り言の場合は「ていた」を使う必要はなく、見たまま現在のこととして語る。しかし、それを他者に報告する場合には「発見」の形で「ていた」にすることも行われる。「ていた」の「発見」の用法は報告で使われる。

#### 8.3.4.2　客観視

「発見」の「ていた」は、藤城（1996）も述べているように、自分のことには使いにくい。外部から物事を見るような表現である。その中でも自分のことについて「発見」として述べる場合は以下のように、「知らないうちに」「気がついたら」のように、自分のある状態にある時気がついたというような文脈が必要である。

（128）ぼくははじめて鬱屈した気分になっていた。（小説）
（129）そしてさらに翌日五千円以上の小遣い銭を貰ってしまったので、ぼくはもうほとんど申しわけないほどの幸せな気分になっていた。（小説）
（130）　しかし私はそうするには余りにも 疲れはてていた。（小説）
（131）電車はすぐ近くまで来ていました。私は目をきつく閉じて歯を食いしばりました。電車が通り過ぎ、遮断機があがり、車や人々が動き出したとき、私は隣にいた人のまたがっている自転車の荷台をしっかりと握りしめていることに気づきました。私は無意識のうちに、自転車の荷台をつかんでいたのです。（小説）

（128）は主人公が変な上司のもとで納得できない勤め方をしなければならなくなってこのように表現している。わけのわからない時間の使い方をさせられているうちに「気がついたら鬱屈した気分になっていた」と述べているわけである。（129）は社員旅行に行って、たっぷりお酒が飲めて翌日はお小遣いが貰えて、幸せな気分になったことを表しているが、それを「私はこう感じた」と述べるのではなく「私の気持ちはこのように変わっていたことに気がついた」と表現している。（131）は主人公が電車に飛び込みそうになった場面の描写である。これも「気がついたら隣の人の自転車の荷台を握りしめていた」と表現しており、自分について述べる場合は、外側から自分を眺めるような客観的な描写となっている。

「た」と「ている」の節で、「た」は出来事の一端を直接体験できる立場にある人が使う表現であるのに対し、「ている」はそうとは言えないということを見てきたが、「ていた」でも同様に物事を外から眺めて表すような表現であるといえる。

「発見」の考え方を取り入れることにより、次のような学習者の誤用例を説明することができる。（132）ａは「間違っていたことに気が付いた」と述べているので、（132）ｂのようにするといいであろう。

（132）ａ ×私は大学時代に学問を勉強する方法が少し間違いました。
　　ｂ　私の大学時代の勉強方法は間違っていました。

## 9　間接的な表現の「言っていた」

学習者に質問されたことの一つに、誰かが話した事柄を別の人に告げるとき、なぜ「言っていた」を使うのか、という疑問がある。過去の第三者の発言を別の人に説明するときに「～は～と言っていた」と述べることが多いが、それは過去のことだから本来は過去形「た」で表現できることであろう、なぜ「ていた」を使うのか、という疑問である。

藤城（1996）も例をあげ、この状況でなぜ「言っていた」を使うのかは納得させにくいと述べている。

（133）　山下：鈴木さんは　きません。けさ　電話が　ありました。
　　ジョンソン：だめですか。
　　山下：ええ。ざんねんだと　いっていました。（藤城 1996：1）

この「いっていた」は、一言「今日はいけません」だけ言っかもしれない。そうだとすれば、必ずしも継続とは考えにくい。過去に設定時間があり、それ以前のことを述べているのでもない。

本節では、会話の中での「言った」と「言っていた」の使用状況を調査し、そこから見られる「言っていた」の特色を考えたいと思う。今回資料とした資料では、新書で「言っていた」で検索をかけたところ出現数が０だったので、以下の議論は会話に特化した。

目的は、「言っていた」と「言った」の違いは何かを明らかにすることである。

### 9.1　調査方法及びその結果

「男性会話」「女性会話」全体の中から「いった・言った・ゆった・つった」「いいました・言いました」と「いっていた・いってた・言っていた・言ってた・ゆっていた・ゆってた・言っていました・言ってました・いっていました・いってました・ゆっていました・ゆってました」で検索をかけ、主体を調べた。またその際、（134）のように、具体的に「言う」という意味にならない例は省いた。代表形として「言った」「言っていた」を用いる。

（134）あのー、そういった面では、あのー、仕事はやりやすいと思いますし、
（女性会話）

表 10 はその結果をまとめたものである。表 9 に見られるように、二つの会話の中での

表10　会話における「言った」「言っていた」の主体

| 主体 | 言った | | 言っていた | |
|---|---|---|---|---|
| 一人称・二人称 | 52 | 69.3% | 6 | 13.3% |
| 三人称 | 23 | 30.7% | 39 | 86.7% |
| 合計 | 75 | 100.0% | 45 | 100.0% |

「言った」系は 75 例、「言っていた」は 45 例と、全体的にみると「言った」が多い。なお、この調査は使用例数が少ないため、「男性会話」「女性会話」をまとめて扱う。

主体で見ると、「言った」の主体は第一人称・二人称が 70%、三人称が 30%ほどであるのに対し、「言っていた」では 90%近くが第三人称を主体としていることがわかった。

出現した例文を見てみよう。はじめに「言った」である。

（135）7795　15Ａ　［名字］さーん、ぼくこないだあのー、レジャープロテクション、やってみようと思ってるってゆったことあるじゃないですか↑（男性会話、私）

（136）593　02Ａ　え、往復に、いくらってゆったっけ、ホテルが 1 週間ついててー。
（女性会話、あなた）

（137）10869 21Ｂ　だって［ニックネーム］も土曜だめっつったじゃん。
（男性会話、彼）

「言った」は、（135）の主体は「私」、（136）は「あなた」、（137）はニックネーム氏つまり「彼」である。このようにいろいろな人を主体とする例が見られたが、70%ほどが「私・あなた」であった。

「言っていた」は90%近くが主体は三人称であった。つまり、我々は「と言った」と聞くと「私・あなた」が主体のことが多いと考え、「と言っていた」と聞くと、多くの場合、「彼」を主体とする文であると想定しながら聞くことになる。

では「言っていた」はどうして第三者主体で使われるか、9.2以下で考えてみよう。

## 9.2 「言っていた」の必然的な使われ方

「言っていた」は必然性のある使われ方をしている場合もあった。

### 9.2.1 「繰り返し」「動作継続」

(138) 3323 07B 今日、ぼくは電車で来たんですけど、あのー、30分前の7時18分というやつで、そしたらやっぱり8時半ぴったりだったもんですから、時間はじゃ変わらないわけですね、［駅名］30分前に出ると。

3324 07A そうですね。＜笑い＞

3325 07B でもあしたっからなんか変わると、しきりに いってましたけど。（女性会話）

(139) 7415 13B うん、飯島愛はやってないけど、友達がやったんだって。

7416 13C そうかしらー。

7417 13女 @＜笑い＞

7418 13B だって、すごいこといってたよねー。

7419 13B あのジャニ系のなんとか隊の、なんとかくんも、ナンパされてー、とかいって。（女性会話）

(138) は駅員が駅の放送で何度も繰り返し言っていたと話している。(139) はテレビの番組でリポーターが過激なことを話していた、と言っている。(138) は「繰り返し」(139) は「継続」の意味を持って使われているため「言った」には置き換えられない。

### 9.2.2 「完了」

(140) 5258 11A いや、えーとー、執務の手引きはなんでくれないんですかー、ってな話をぼくがしてたらー、ちょうどそんときに［名字11H］さんがいてー、そりゃーけしからんなー、ってゆう＃＃＃＃てー。

（中略）

5262 11A →次の日ぐらいに←、ぼくの机の上に［名字（11H）］さんが置いてくれたんですよ。

（中略）

5278　11H　［名字11A］さんもらってないっていってたからー、おれ渡したってゆうことなんだ、おれもうっかりしてたけど。（男性会話）

（140）は打ち合わせ時の会話の一部である。別の日に11Aさんが執務の手引きをもらっていないと話していたら11Hさんが次の日くらいに11Aさんの机の上に執務の手引きをおいてくれたという内容で、途中の省略はあいづちなどである。

11Aさんがもらっていないと言ったのは過去の「渡した」よりさらに前のことであり、「完了」と言える。このような場合は過去の「た」には置き換えにくい。完了については詳しくは9節で見る。

### 9.3　「言っていた」「言った」置き換え可能な例

では「言っていた」を「言った」に置き換えできる場合はどのような場合であるか、調査の結果出てきた文をもとに考えてみよう。

（141）5125　10C　うちのやつがかんかんに怒っちゃって。＜笑い・複＞
5126　10A　ふーん。
5127　10C　＜笑いながら＞毒殺するとかいってたから、やめてくれって。
5128　10A　＜笑いながら＞→えー、←こわい。（女性会話）

（142）9921　10D　修復不可能で、あれ、しょうがないからもう１回や、きょうはねー、Cドライブだけー、更地（さらち）にして、初期化してもう１回やり直そうと。＜間　10秒＞
9922　20E　前、うちの［名字］はなんてゆってましたっけ、［職場名］ハイフンがいいってゆってたねー。（男性会話）

（143）9197　15D　→だーから←事務局長が、先生全部そこまでいっちゃったら、ほんと本番でやることなくなっちゃうっていってた、いえてるー、てゆう感じだね。（女性会話）

（141）は飼い犬がいたずらでひどい悪さをしたことを話しており、それに対して奥さんが怒って犬を殺すと言った、と話している。（142）はコンピュータの不具合について話している。（143）は講師の話す内容について事務局長が語ったことを職員が話している。それぞれ「言った」をいれてみよう。

（141）’うちのやつがかんかんになって毒殺するとか言ったから、やめてくれって。
（142）’前、うちの［名字］はなんて言いましたっけ、［職場名］、ハイフンがいいって言ったねー。
（143）’事務局長が、先生全部そこまでいっちゃったら、ほんと本番でやることなくなっちゃうっていった、いえてるー、てゆう感じだね。

（141）から（143）は「言った」でも表現できるようである。しかし、「言った」にすると、その発言をそばで聞いていたように感じられる。「た」は直接体験である（井上2001）あるいは「た」を発言する権利は「一部の話し手だけに許された特権的行動」（定延2010:6）という先行研究で述べられている「た」の性格が表面化するのであろう。（143）については「毒殺するとか言ったから」は「毒殺すると言った」と述べているのに対し、「毒殺するとか言ってたから」にすると、「毒殺する、のようなことを言った」のように、他の表現をしたかもしれないという含みが感じられる。

多少のニュアンスの相違はあるにしても、これらの文は一応「言っていた」「言った」の置き換えが可能といえる。どうしてこれらの文は置き換えが可能なのだろうか。これらの文には主格が明確に表されている。（141）は「うちのやつ」、（142）は同僚の「うちの［名字］」さん、（143）は事務局長というように誰が語ったかがはっきりしており、「あなた」「私」と誤解される心配のない状況だからであろう。

## 9.4　「言った」に置き換えられない「言っていた」

それでは「言った」に置き換えできない例はどのような性質をもっているであろう。次に置き換えできない文を見てみよう。

### 9.4.1　発話者のあいまいさ

「言った」に置き換えが可能な例と違い、「言っていた」が適当な例では、しばしば発話者があいまいだったり、文面にでていなかったりする。

（144）95 01D　５枚。＄＃＃＃＃ですよね↑
　　97　01A　なに↑
　　98　01D　１メーターガーゼ５枚ってゆってたでしょ。（男性会話）

（145）4901　11C　あれ、いつから、でもあそこにあんの、カミイタ（上板）に行ったの↑、［建物名］寮って。
　　4902　11C　うちー、父も高等師範、実はー。
　　4903　11A　［建物名］寮って、いや、［建物名］寮ってさー。
　　4904　11C　→昔、［庭園名］のそばにある、←あったってゆってたよー。
　　（男性会話）

（146）9849　20E　なんか、生徒がゆってたんだよ、前。
　　9850　20D　キックボードほしいって。（男性会話）

（144）では誰が言ったのか、話している当人は分かっているが、文面には出ていない。（145）ではその寮が話題の庭のそばにあったと話している人は4902で出てきている「父」

であるが、4904 行で「そこにあったってゆってたよー。」と述べて、お父さんから聞いた事であるとはっきりさせている。会話の参加者にはわかっているのであろうが、文面には現れないまま話がしばらく進む。（146）では「生徒が言っていた」と述べているが、どの生徒であるかははっきりはしない。このように、話の出所の人が明確でなかったり特定しにくい場合「言っていた」が使われやすく、このような状況で「言った」を使うと、（148）は別だが、主題が省略された場合に最も復元されやすい人物である「私」「あなた」と解釈される可能性があることも影響しているであろう。

### 9.4.2　情報の正確さとあいまいさ

（147）3350　08A　いや、ポラロイドとか、ゆってませんでした↑
　　3351　08B　いや、あいつはー、結局デジカメにしたいとかなんかゆってた。
　　（男性会話）
（148）829　02H　でー、中国、あの中国の大学の場合はー、えー、時間数は十分でいちおうつめてやるような、てゆうふうにゆってました。（男性会話）

（147）は話題の人物がデジカメを買うかポラロイドにするか、どちらを選ぶかということについて話している。（148）は中国の大学では授業の時間をどのように調節するかの話をしている。どちらも人から聞いた話、それも多少ぼかした話をしている。ぼかした表現というのは「とか何とか言っていた」「やるような、ていうふうに言っていました」のようなあいまい表現がつかわれていることからわかる。これらに「言いました」をいれて表現してみよう。

（147）’？いや、あいつはー、結局デジカメにしたいとかなんかゆったよ。
（147）”　いや、あいつはー、結局デジカメにしたいってゆったよ。
（148）’？中国の大学の場合はー、えー、時間数は十分でいちおうつめてやるような、てゆうふうに言いました。
（148）”　中国の大学の場合はー、えー、時間数は十分でいちおうつめてやるって言いました。

（147）’のようにあいまい表現を残して「言った」を入れるより（147）”のように直接的な表現にするほうが適当と感じられる。「言っていた」は伝聞あるいは間接的に聞いた話であると述べているように見える。そこで、情報が正しいかどうかを多少ぼやかしても許容されると話し手が感じて表現しているようである。一方「言った」を使った（147）”（148）”は断言している。

## 9.5　「言っていた」と「言った」の違い

会話資料の調査の結果、「言った」の主体は 70%ほどが第一人称、第二人称であった。それに対し、「言っていた」は 90%ほどが三人称を主体として使われていた。現実の文脈

でこのように使われていることから、我々は、「言った」と聞くと「あなた」「私」が主体、「言っていた」と聞くと、多くの場合、第三者が主体と予想して聞くのであろう。

過去の第三者の発言を「言っていた」で述べるのは、直接的でない伝聞、発話者が不明確あるいは不特定な人の発言などで見られた。また、特定の人物の発言であっても、ぼかして伝える場合によく用いられる。つまり、日常会話のおしゃべりなどで、細かく証拠を出したりせずに流れにのって話をする場合などは、直接的な明確な「言った」より、多少あいまいな「言っていた」がより好まれる傾向があるといえるであろう。

前節で、「発見」の「ていた」は報告であり物事を外から眺めるような場合に使うと述べたが、「言っていた」も自分は外部の人間であり、聞いた話だが、と表現しており、「発見」と表現方法に共通点がある。「言った」がその話に直接関わり自分も関係者であると述べるのと対照的である。

本稿では、「言っていた」は彼がこのようなことを発言したがあなたはそれを知っているか、と尋ねる文脈もあるところから、広義の「発見」と捉え、「発見」の節の後で扱った。

## 10　完了の「ていた」

### 10.1　完了の「ていた」についての疑問

寺村（1984:146）は「ていた」の用法について次のような例をあげ、「時計を見た」のが過去のことで、「二十分しかかからなかった」のは、その時点より前のことであるから、「かかっていなかった」とすべきだ」と述べている。

（149）「歩いておりましょうか」と于栄勝が提案した。「よし、その方がいい」とまず私が手をあげて賛成した。皆の意見が一致して歩いておりることになった。「どれぐらいの時間がかかるか」ときくと、四十分ぐらいという。曲がりくねった道にそっておもしろい話をしながらおりてきた。ふもとにもどって時計を見ると、二十分しかかからなかった。実は走っておりたのだった。（寺村 1984:144）

本稿はこれに対し、過去と完了の「ていた」がある場合、過去より以前のことであれば何でも「ていた」で表現できるのか、という疑問をもった。たとえば、上の例でいうと、「賛成した」を「ていた」として「歩いて降りることになった」を「た」とする文を作ってみると（150）は許容度が低い。

(150)？歩いておりることになった。皆が賛成していた。

本稿はこの、過去より更に前に起こった事態を表す「ていた」を「完了」の「ていた」と名付けてその成立の条件を考える。

### 10.2　先行研究

二つの時が関係する文章中での「ていた」について先行研究がどのように述べているか見てみよう。

町田（1989）は二つの文が連続した場合のテンスについて述べている。

非状態述語を用いた二つの文が連続して述べられる場合、通常は第一の文が先、第二の文がその後で起こったと理解される、そして状態述語と非状態述語の組み合わせである場合は2つの事象が真である区間が重なり合い、一般的には状態述語の文が示す事象が真である区間内に非状態述語の事象が成立したことを表す。二つの事態・状態が重ならずに成立することを表すには、状態述語同士の場合、非状態述語同士の場合は接続詞によって示すことができる。状態述語と非状態述語の場合も副詞や接続詞によって示すことができる。

（151）昨日花子は病気だった。今日彼女は学校に行った。
（152）花子は走った。それから花子の妹も走った。（町田 1989：97）

（151）（152）では二つの文は重なり合わず、はじめの文が先にあり、次の文が続いて起こった事が示される。もしその関係が逆で、第二の文が先に起こった事を表すには、非状態述語を使った文は、第二文に「ていた」形を使うことによって示すことができるとしている（町田 1989:96-97）。

（153）花子は走った。花子の妹は走っていた。
（154）太郎は死んだ。次郎は死んでいた。（町田 1989：96）

（153）では花子が走った時、その妹はすでに走っていたことが表される。（154）では太郎が死んだ時、次郎はすでに死んでいたと述べられている。

そして町田(1989:98)は「「テイタ」形の述語は「タ」形の述語で指示されている時点以前に成立した事象を指示するための形式、つまり「過去以前」」であると結論付けている。

寺村（1984）は従属節を、述語が後に続く活用形をとる節、引用節、接続節、連体（修飾）節、名詞節と 5 つに分類している。そして、接続節内でＰに状態性述語が来る場合について、ル・タの使い分けはテンス的であるとし、Ｐの従属度の高低によってＱのテンスに同化するかどうかが決まると述べている。たとえば、ＰとＱが同じ時の場合、Ｑが過去形ならばＰは基本形でも許容される。

（155）小サイ店 { ダ / ダッタ } { ガ / ケレドモ } ヨク繁盛シテイタ。

（寺村 1984：192）

それに対し、Ｑが過去の時Ｐも明確に過去になるのはＰの事態がＱの事態よりも先に起こった場合であるとして、次のような例文をあげている（寺村:185－192）。

（156）ドアノ前デシバラク立ッテイタガ、誰モ出テクル気配ハナカッタ。
（157）父ハ医者ダッタガ、清子ガ五歳ノ時他界シテイタノデ、清子ハホトンド父ノ顔ヲ記憶シテイナカッタ。（寺村 1984：192）

接続節内で状態性述語がタ形で使われるのは上のように節内の状態と主節の事態の間に時間的な差がある場合である。これは、過去を基準点としてそれより前に起こったことが表現されるという「完了」を別の表現で述べているものといえるであろう。

江田(2011ａ)は「完了」の「ていた」について、「た」節以前に「ていた」節があるものとしてその成立の条件を述べている。しかし、江田(2011ａ)は「た」節に状態性述語が来る場合のことを見落としており、考察に不十分な点がある。

本稿は、庵・清水(2003:34)の「基準時が未来・過去であり、それ以前に起こった事柄あるいはその結果が「ている」「ていた」で表現されているもの」を「完了」とするだけでな

く、「ていた」と状態性の「た」が同時に存在することを意味する例を「同時」として、そこまで対象を広げてその成立の条件を考える。

庵(2001ａ，ｂ)は「基準時が未来・過去」の場合を想定しているが、今回は基準時が未来の例をとりあげず、基準時が過去であり完了が「ていた」で示されているもののみ扱う。

本稿の疑問は基準時が過去の「完了」の「ていた」は、どのような条件があれば使えるか、ということである。本稿の分類の一つである「同時」の用法にも触れながら考えていきたい。

## 10.3　調査方法

コーパスを用いて抽出した例を分析した。同時に外国人学習者に文を作ってもらい、その文を検討した。学習者は上級で国籍は台湾・トルコであった。調査時期は 2009 年 6 月から 10 月までであった。

＿＿＿ていたから＿＿＿＿た

という文を示し空欄に適当と思う語を入れて文を作るよう、依頼した。

## 10.4　「ていた」の節間の時間的な関係

### 10.4.1　継続過去・状態過去・繰り返し過去・性状過去

「継続過去」「状態過去」「繰り返し過去」「性状過去」は動作や作用が過去に継続すること、結果状態が過去にあったことなどを述べ、「た」で表現された他の節と時間的な関係が読めないもの、または現在・未来と関係するものとする。

### 10.4.2　同時

「同時」は「ていた」で表現される事柄と別の事態が時間的に重なる場合とした。これは①Ｑが一定の状態を示す場合と、②Ｐの継続期間の間に別の事態が重なる場合がある。

（158）（159）はＱが一定の状態を示す場合である。

(158) 有機物は，植物や動物など生命のあるものから作られると昔は考えられていた。つまり，生命力というものが関係して初めて有機物が作られると信じられており，19 世紀初めの大化学者ベルセリウスさえそう信じていたのである。（自然科学）

後件が否定の文では「なかった」だけでなく「ていない」も考慮の範囲に含める。「た」の否定が「ていない」であることはザトラウスキー（1979）、松田（2002）、王（2003）などで述べられているためである。

(159) アインシュタインは、空間についてはそれなりの考えを持っていただろうが（中略）、時間については具体的には何も述べていない。(自然科学)

(159) はアインシュタインは空間について一定の考えを持っていただろうが、時間についてはその著書では何も述べていないと言っている。著書に何も示さなかった、と過去の事態と読めるため、この例は「同時」の例として採用した。

「同時」には、「ていた」節の表す期間中に別の事態が起こることを表現する例も含む。(160) のような例である。

(160) 5290　12B 先週ーになってしまったんですがー、（中略）あの、旅行に行ったんですがー、そのときに、なんか、あの、散歩していたときに、あのー、青蛇っていうんですかねー。青大将を目撃してー、で、初めて、間近で見た、見てしまってー、でも、逃げ出しちゃったんですが＜笑い＞。（会話）

(160) のような例は、Ｐの継続時間内に別の短い事態が発生する。７章 3.2.4 で「同時」の中のＰの継続期間内に別の事態が発生する例は、会話ではある程度見られるが、新書では非常に少ないということはすでに述べた。

### 10.4.3　完了

基準時が未来の「完了」はここでは扱わない。本稿では「ていた」節が「た」節より以前を表す「完了」を扱う。

(161) 科学的には過去への旅は夢物語だと思われていた。ところが驚いたことには、1988 年暮れ、アメリカの物理学者(中略)が驚異的な説を発表した。(自然)科学)

中には「た」節が変化の結果を表すものも含まれる。

(162) 331　01A　あのー、きょう来ちゃったんですよー。
332　01Ｅ あ、はい、ごめんなさい。
333　01A　だから、ほかのもんが頼めなくなっちゃってー。＜笑い　複数＞
334　01A　これと一緒に頼もうと思ってたんでー、★きょう話聞いてから。
（男性会話）

(162)は注文しようと考えていたが、今日何かが来たので頼めなくなった、と変化の結果を述べている。

先に第７章３節で述べたように、「同時」「完了」をあわせたものは会話では約 20%、新書では 45%であることが分かった。

ここで再び「完了」と効力持続の違いについて考える。工藤(1995)は基準時と出来事時が別の事態をパーフェクトとし、過去パーフェクト、現在パーフェクト、未来パーフェクトとした。本稿はそれに対し、基準時が現在のものを効力持続と完了、過去と未来のものを完了として別に扱う。基準時が過去の完了について、効力持続とどのように違うか、再度確認しよう。

(163) 工業化が進展する人的な土壌としては十分すぎる条件がそろっていたといえる。そこへ、まず朝鮮動乱によって特需がおき、日本経済は息を吹きかえした。(社会科学)
(164) 暇をもて余した主婦の片手間仕事のように扱われていたが、いまではこの仕事の重要性が認められ、地方公務員の資格をもつまでになった。 (社会科学)

(163) は、人的な条件がそろっていたところへ特需が起きて日本経済は復活した、(164) は、以前は介護の仕事は主婦の片手間仕事と考えられていたが、現在は公務員として認められるようになったと述べている。どちらも主節と従属節の間に関係は存在するが、その関係性は接続詞あるいは接続助詞によって担われており、「ていた」自身が「た」節に対して何らかの関係を持っているとは言い切れない点が効力持続と異なるところと言えよう。

(165)ただこれね、あの、あれの時にゆってるねー。(女性会話)(＝29)

(165)はこの文だけで、この内容はすでに話したことがある、と述べていることが分かる。それに対し、(165)’(166)’は「ていた」だけでは過去の一定の状態を表すことはわかるが、それがほかの時とどんな関係を持つか、何を意味するかは読み取りにくい。

(163)’ 工業化が進展する人的な土壌としては十分すぎる条件がそろっていたといえる。
(164)’ 暇をもて余した主婦の片手間仕事のように扱われていた。

以上のように、「ていた」は「た」との間に関係を構成するかどうかが不明であるため、時間的な関係だけをとりあげ、完了とすることにする。

## 10.5 完了の「ていた」の成立の条件

「完了」「同時」両者についてまとめて完了として検討する。

### 10.5.1 話題の焦点

町田（1989）は非状態述語を用いた二つの文が連続する場合は、通常は第一文が先、第二文が後と理解されるが、もし第二文が先に起こったことを表すには第二文に状態述語を使うと述べている。

（166）太郎は死んだ。次郎は死んでいた。（町田 1989：96）

そして、「成立した時間順に並べればすむところを、わざわざその時間を逆転させて並べているのは、(中略) S1 が何らかの意味で談話的には重要な情報をもたらし、S2 はそれに付随する情報を与えるにすぎないからである(町田 1989:98)」と説明している。

つまり、焦点が「ていた」の節ではなく「た」節にある、という文脈が必要なのである。

10.1 であげた(149)を再度掲載しよう。

（167）「歩いておりましょうか」と于栄勝が提案した。「よし、その方がいい」とまず私が手をあげて賛成した。皆の意見が一致して歩いておりることになった。「どれぐらいの時間がかかるか」ときくと、四十分ぐらいという。（寺村 1984：144＝(149)）

本稿の疑問は、(167 a )を(167 b )にした場合おかしいのはなぜか、というものである。

（167） a 皆が賛成した。歩いておりることになった。
　　b ？歩いておりることになった。皆が賛成していた。（＝150）

これは(168)のようにすると許容度が増すといえよう。

（168）歩いて下りることになった。<u>下りる前には</u>皆が<u>賛成していた</u>。

(168)の「下りる前には」のように、とりたてて過去を振り返る文脈が必要といえる。つまり、まず「歩いておりることになった」ことを述べ、その背景の状況が「ていた」で表現されるような文脈である。「た」節が重要であり、「ていた」節はその背景を示すわけである。単純に(167 b )のように順を変えるという操作では不十分なわけである。

寺村（1984）の学習者の文(169)も同様の理由で認めにくさが感じられるのであろう。

（169）その夜、山ノ上旅館で<u>泊まっていた</u>。翌日の朝、早く起きて、山にのぼった。
　　（寺村 1984：144　一部抜粋）

寺村（1984）はこの文を正しい文にするには「泊まった」と「た」を使うように、とし、その理由としてまるごとの事態は「た」で表現するべきであると述べている。その説明も可能であるが、事柄の起こる順序と「ていた」の関係での捉えなおしも可能なのではないだろうか。

この文の「山の上旅館に泊まっていた」ことと「山に登った」ことは、次のように言える。

1）事態の表現が発生時間の順に並んでいるため「泊まる」ことを「以前」として表現する必要がない。
2）「山に登った」ことを基準時とする必然性がない。

「完了」の「ていた」は、それを使う必然性がある文脈が必要と説明することで、まるごとの事態、という説明で納得しにくいと学生が言った場合に別の視点から説明することができるのではないだろうか。

### 10.5.2　二つの節の間の時間的・意味的な切れ目

基準時である「た」節に対して「ていた」節の状態が以前にあることを表現するのが「完了」であるが、「完了」の「ていた」節は状態が存在していたことを述べるだけでなく、視点の変化、状況の変化が「た」節によって続く構成になっている。

（170）医師のポスト2つともがヨーテボリ市の老人科医に占められていた。 そして私はこれらの方にお世話になることになった。（社会科学）
（171）こうした事実はかなり古くからわかっていたが、このことに注目したエルドリッジとグールドの断続平衡説によって、もう一度光が当てられるようになった。（自然科学）

「た」節が事態を表す場合と変化を表す場合がある。以下の例は「た」節が事態を表す場合である。

（172）江戸幕府もはじめは商教分離政策をとっていたが、（中略）イギリスやオランダは、幕府に対して機会をみては布教は領土占領の前提であると宣伝した。（社会科学）
（173）5882　10G　誰もの、もう乗る人がいなくて放置されてた自転車をもらったんですよ。（女性会話）

（172）は江戸時代初めの商教分離政策をとっていたという状態に対し、「た」節はイギリスやオランダの働きかけが表現されている。（173）は放置されていた自転車をもらったと述べている。
これらの「ていた」節と「た」節の関係に共通することは、「ていた」節の状態が一定の時間継続し、「た」節で別の事態や意外性が表現され、状況が変わったということが表現されていることである。

（174）日本人からみると、アメリカの老人は老いてもたいへん若々しく装っていて、私などもその方が好ましいと感じていた。しかし、やがてわかったのは、アメリカの社会では、あくまで若さが要求されているということであった。（社会科学）

（175）古典的な理論では、この白色矮星を星の一生の終端場としていたが、核物理学が発展して、さらに中性子星にまでなることが明らかにされた。（自然科学）

（174）は、以前はアメリカ人の老人が若々しいことを好ましいと感じていたが、その後、なぜ若さが要求されるかわかって現在は違う感情を持っていることが示されている。（175）は古典的な理論とその後の発見とが対比されている。次の例を対比させてみよう。

(174) a　アメリカの老人は若々しくて、好ましいと感じた。そこで、私も見習って明るい色の服を着るようにした。

b　アメリカの老人は若々しくて、好ましいと感じていた。そこで、私も見習って明るい色の服を着るようにした。

(174)はaとbを対比してみた。aは「感じた」から「見習った」と因果関係はスムーズに流れる。それに対し、bは以前から「感じていた」から「見習った」。「しかし、どうも明るい色は私には似合わないと感じた」などのように、次の話が続くように感じられる。

次の例はどうであろう。

（176）暇をもて余した主婦の片手間仕事のように扱われていたが、いまではこの仕事の重要性が認められ、地方公務員の資格をもつまでになった。（社会科学）

(176)も「ていた」節に対して「た」節は状況が異なることを述べている。(176)の「ていた」節に「だから」を接続してみよう。

(176) a　主婦の片手間仕事のように扱われた。だから、求人広告を出しても応募者は少なかった。

b　主婦の片手間仕事のように扱われていた。だから、求人広告を出しても応募者は少なかった。しかし、次第にその重要性が認められるようになった。

(176) aはこのままで文が充足していると感じられる。それに対し、bは上にあげたような第3の文がつながるように感じられる。つまり、「完了」の文では、「ていた」節で状態を表現し、その後状況が異なることを表すのではないか。そして、異なった状況が表現されるということは、多くの場合「ていた」節と「た」節の間に時間的な切れ目があることになる。

「完了」では、「ていた」節に対して「た」節が状況が変わったことを表現する必要がある。また、「ていた」節と「た」節の間には時間的な切れ目が存在すると許容度が高くなる。上の例でいうと、（174）では「以前は～と感じていた」が「しかし、やがて」別のことが分かったと述べている。（175）は古典的な理論がはじめに述べられ、核物理学が発展した結果新しい考え方が明らかにされたとしている。

もし時間的な切れ目がない場合は「同時」または「期間中の出来事」となる。「同時」の文では「た」節も状態性である必要がある。「期間中の出来事」の文は「ていた」節の期間に別の事態が起こったことが述べられる。この場合は二つの節の時間には切れ目はないが、「た」節は「ていた」節とは別の事態であるという点では「完了」と共通している。

時間的な切れ目、状況の変化については、学習者の例文を見るとわかる。次の例は「ていた」節と「た」節の間の変化を表現していないための誤用といえる。

(177) ×本を読んでいたから出かけました。(トルコ)

これは、学習者は、読み終わったから、という意図で作ったそうである。この文では読み終わったということは示されておらず、不適格な文となった。文脈によって「ていた」節と「た」節の間の変化が示せない場合は、「昨日は、今日は」、「さっきまで」のような時の副詞などを用いて時の切れ目を表現する方法もある。

(178) さっきまで本を読んでいたから、疲れたので出かけた。
(179) 昨日は一日中家で本を読んでいたから、今日は出かけました。

完了の「ていた」は、過去は一定の状態であったが、その後状況が変わったと述べる文で用いられる。過去にある状態があったと述べるだけでなく、現在は状況が異なるという文脈を設定すると許容度の高い文ができる。また、二つの節の間に時間的な切れ目を作ると許容度が増す。時間的な切れ目を作るには時の副詞を使うなどの方法がある。

### 10.5.3 「完了」と「発見」の関係について

前節で「完了」では別事態の発生、状況の変化が表現されると述べたが、「～ていた」ところ「た」の事態が起こった、それは状況が変化したことと感じられた、と述べる表現のしかたは「発見」の表現方法に近い。「完了」では「発見」の意味が含まれると許容度が高くなるといえよう。

(180) 高度成長の末期というのは、(中略)ニクソンショックや、(中略)変動相場制への移行、(中略)そして輸入物価上昇などですでにインフレは進行していた。
この高度成長末期のインフレに石油危機は決定的な追い打ちをかけることになり、消費者物価は(中略)物によっては倍以上になるものも少なくなかった。(社会科学)

(181) 1096 03A 電話しましたよ、きのう。
1097 03A えーって、戻ってきたよ。
1098 03A 戻ってきて見たらー、きょうってなってたからー。(男性会話)

（180）は、高度成長の末期はすでにインフレは進行していた。と当時の状況述べ、そこに石油危機が追い打ちをかけ、物価は急上昇したと述べている。（181）は「きょう」と書いてあったことに気づいたので、電話した、と言っている。どちらも「発見」あるいは気づきの意味が含まれている。

学習者の例文は以下のようであった。

（182）×電話がこわれていたから、電話ができないようになった。（トルコ）
（183）×事故で人が死んでいたから、この辺は空き地になってしまった。（台湾）

（182）では「電話がこわれたから連絡できなかった」の前件と後件をそれぞれ過去にした、とのことである。(182)(183)ともに、従属節では「た」節より以前の過去完了にあたる表現を使いたいと考えた可能性がある。以前このような事態があった、と表現しようとしたと推測できる。しかし、日本語の「ていた」の完了は、前にある事態が起こったというより、ある状態があったと捉えたほうが理解しやすい可能性がある。そして、「ていた」節と「た」節との間には、別事態あるいは状況の変化を表現すると許容度が高まる。そして、「発見」の意味が加わるとさらに安定する。

これらの文を、学習者の意図とは異なるが、許容度が高い文にしよう。

（184）電話がこわれていたから、なんとか直せないかといろいろやってみた。（作例）
（185）事故が起きて人が死んでいたから、あわてて 110 番に電話した。（作例）

上のように、「ていた」の部分を、それぞれ「～に気が付いたので」を意味する文にすると、すわりのいい文になる。（182）（183）共に、学習者の言いたい状況は「ていた」を使わないほうが適当である。

### 10.5.4　「ていた」節の表す内容と「た」節の関係

次に「た」節と「ていた」節の意味的なつながりと時間的な関係について考えよう。

（186）×髪を染めていたから、黒くなった。（トルコ）

「ていた」で難しいのは、当該の動詞の「ていた」で文を作った場合、文脈によって動作・作用の継続、結果状態、繰り返しの意味が出てくるが、そのどれに相当するかを共起する文脈とともに想定する作業であろう。

(187)その時私はちょうど髪を染めていたから電話に出られなかった。
（作例　動作継続）

(188)久しぶりに高校時代の友人に会ったが、彼女は髪を染めていたから、はじめ、彼女だとわからなかった。（作例　結果状態）
(189)ここ 10 年ほど髪を染めていたから髪が傷んでしまった。（作例　繰り返し）

(187)の「ていた」節は「その時私は髪を染める作業をしていたから」という意味である。その意味であるなら、(186)のように「黒くなった」をつけるのは時間的におかしく、これは「ていた」ではなく「髪を染めたから黒くなった」とするのが事柄の接続関係としてふさわしい。そして「その時髪を染めていたから」ならば、その後には「期間中の出来事」の文が成立するであろう。「完了」としての文は作りにくい。また、「髪を染めていた」が結果状態の意味であれば、(188)のように「発見」の意味を含めると許容度の高い文になる。繰り返しの意味で使っているならば、その後どうなったかを続けなければならない。「ていた」がどのような意味になるかによって主節は変わるのである。実際の学習者との関係では、「ていた」の状況をともに考えることによってある程度は意味的な面の理解が可能であろう。

### 10.5.5　外部からの描写

外部からの描写の文にすることによっても許容度は高まる。(195ａ)は学習者の作った文であるが、(195ｂ)(195ｃ)のように、第三者のことを描写する表現にしたり（187ｂ）のように自己のことを外部から見て描写する文にしたりすることによって許容度が増す。

（190）ａ ×5 時に起きていたから、まだ寝られなかった。(トルコ)
ｂ（私は）5 時に起きていたから、お昼には居眠りをしていた。（作例）
ｃ　妹は 5 時に起きていたから、お昼には居眠りをしていた。（作例）

（190）ｂより（190）ｃのほうが許容度が高い。「ている」「ていた」は客観的な描写で用いられ、自分のことを表現する場合にも外部から描写するような姿勢で表現すると指摘されている（藤村 1996）。「ていた」の文はすべてではないが、外から描写するような表現にすると落ち着きがよいといえる。

## 11　まとめ

### 11.1　継続相と完了相の関係

継続相と完了相の関係は、「る」「ている」間、「た」「ていた」間、どちらにおいても理解させる必要がある。多くの研究が、まるごとの事態は完成相、持続過程をなす局面にあるものとして表現する場合は継続相を使うと説明している。完成相は俯瞰的、継続相は事象の内部の様相に着目する表現であるという指摘もなされている。教育においては、「た」を

過去とするだけでなく、まるごとの事態として把握するよう指導する必要がある。そして、どのような文脈でまるごとの事態が使われるのかの認識も必要である。

そしてそれと同時に、本稿では、動詞の示す時間幅と文の表す時間幅についても考察を行った。動作継続の場合は動詞あるいは動詞句の要求する時間と、文の示す時間幅が合っている必要がある。内的限界動詞はそれぞれの動詞の示す達成限界に達するのに必要な時間と文の意味する時間幅が合っていなければならない。達成限界に対して長すぎる時間幅、短すぎる時間幅が示された場合は認めにくくなる。非内的限界動詞を使う場合は、文の示す時間幅をその動詞の動きが満たす必要がある。それができない場合は許容度が低くなる。

許容度を高める方法は、基準時間・開始時点・終了時点を示す、時間幅を表現する、複文にするなどの方法がある。

### 11.2　動詞の性質と「ていた」の関係について

関係性を表す動詞は「た」で過去が表わせない。過去を表現するには「ていた」にしなければならない。

結果動詞を「た」で表現した場合は状態の変化を表し、テンス的には必ずしも過去を表すとは言えない。過去を状態として表す場合には「ていた」を使う必要がある。

### 11.3　「ていた」が表す過去の意味

「ていた」で過去を表す場合は、文脈によって、過去、現在と切りはなされた過去、「発見」といった意味が現れる。

### 11.4　発見の用法

「発見」は今回資料として使った３種のテクストいずれにおいてもよく使われていることがわかった。「発見」は結果状態・性状を表す文の文末に出現しやすいが、動作継続の文でも見られた。変化の表現、感覚で捉えたことの表現、思い出しなどを表す場合に現れやすい。文末で多く見られる表現である。

日本語教育で、「ていた」を教えるときには、「発見」の意味がある文で使うと適格な文ができやすい、と学習者に伝えるという方法が考えられるであろう。

### 11.5　「言っていた」について

「言った」と「言っていた」の主体を調査したところ、「言っていた」は 90%ほどが三人称を主体としていた。我々はこのような使用実態から、「言っていた」と聞くと第三者の発言と理解するのであろう。

「言った」は発話者が明確な場合、「言っていた」は直接的でない伝聞、発話者が不明あるいは不特定の人の場合に見られた。会話ではある程度ぼかした表現が好まれるところから、短い発話であっても、直接的な「言った」より「言っていた」で表現することが好まれる傾向があるのであろう。

### 11.6　「完了」の「ていた」

「完了」の「ていた」は基準時点を示す節より以前の事態を表現する。本章では基準時を過去とする「完了」の「ていた」を取り上げた。

「完了」では、「た」節に焦点があり、「ていた」節はそれ以前の状況を示すような文になる。

完了の文は、ある状態が存在していたところ、「た」節によって状況が変化したことが示される。「ていた」節は「発見」の意味を含む場合、許容度が高くなる。

学習者にとって難しいであろうことのひとつは、「ていた」が文脈によって動作継続・結果状態・繰り返しなどいろいろな意味を表すことができることであり、複文にする場合は、それらの節の意味を考えて文全体を構成しなければならないことであろう。

「た」節が状態性の文である場合は上の制約がゆるくなり、比較的いろいろな文が可能となる。

寺村(1984)でも「ていた」の文の用法として「期間中の出来事」が挙げられているように、我々の日常的な言葉の感覚では、「ていた」の用法というと、「完了」というより「期間中の出来事」の例文が出てきやすいように思われるが、実際の例では「期間中の出来事」は少なかった。日常的な例文の作りやすさと使用実態との乖離をどう説明するか、は明確にできなかった部分である。

## 12　会話と新書における「ていた」

以上の「ていた」の用法を踏まえ、本節では会話と新書で「ていた」の使われ方のどのような点が共通で、どのような点が異なるかを考えたい。

「ていた」のテクスト中での機能について、工藤（1995）は、小説では、「た」によって記述される時間軸に沿った事柄の連続がパーフェクトの「ている・ていた」によって一時逆戻りし、それによって「た」によって示される事柄との間に同時進行性が表現されるとして以下の例を挙げている。

（191）栄叡は崖州へ着くと、そのまま病床に伏した。痩せは一層ひどくなっていた。
（工藤 1995：111）

また、論述的な＜非体験的ノンフィクション＞のテクストでは現在パーフェクトは意見の理由・根拠を説明するとしている（工藤 1995：116）。

（192）ヴィルヘルム・フルトヴェングラーは途方もなく純粋な人間であった。この純粋さは、芸術の神聖さを信じ、これをどこまでも貫こうとする彼の一徹な心情にもつながる。1937 年の夏ザルツブルグにおいて、彼はトスカニーニの「ナチの国で指揮する者はすべてナチだ」と決めつける攻撃に対し、毅然として「芸術は政治に支配されない」と反駁している。（工藤 1995：116）

工藤（1995）は「パーフェクト」について論じているが、「ていた」は会話・新書などのテクスト内でどのような機能を果たし、どのように使われているのか。「ている」とは違う面があるのではないか。以下に見ていく。

### 12.1　テンスについての先行研究

工藤（1995）は小説の文末テンスについて、「た」が基本であり、「た」はタクシス的に、事柄を先へ先へと進める働きをすると述べている。

一方会話は話者と相手の存在する現在があり、「る」「た」は現在を基本として使われる。これに対し、新書では、過去の事態や実験などは「た」で説明されるが、そこから導き出される結論、話者の判断などは「る」で示され、「る」が基本であるといえる。

以上のように、小説・会話・新書はテンスの使われ方が異なることから、工藤（1995）の「ている」の機能についての議論を会話・新書にあてはめることができないことが分かる。

### 12.2　「ている」の文中の機能についての先行研究

会話の中での「ている」については、ザトラウスキー（1982）は電話の会話での日本語母語話者の「何々したか」に対する否定の答えで「していない」がよく使われることを明らかにした。そして、「見ていない・読んでいない」というのは、その事実を今の会話と結びつける協力的な態度であり、「ている」には一種の待遇表現があるとまとめている。

谷口（1997）は「テイル」形にはムード的な側面があるとして、以下の 4 つの用法をあげている。

①「待ち合わせ」　②「心理的な現在」　③「儀礼的な表現効果」　④「客観的な機能」

本稿の第４章では「ている」の会話の中での機能を「効力持続」の用法に着目して、「現在との関係」と説明した。効力持続は過去の出来事を現在と関係のあることとして述べるものである。それゆえ、何を現在と関係あることとして表現するかによって、場合によっては

配慮のような意味が出てくるとし、ザトラウスキー（1982）谷口（1997）と同様に、「ている」には待遇的な意味があることを指摘した。

また、「ている」の新書での機能を、「運動長期」「効力持続」に注目して調査し、「ている」は「話題提供」「結論」を示す機能を持つと述べた。

新書で「運動長期」「効力持続」が話題提供、結論の表示に用いられるのは、運動長期が社会現象・自然現象、科学者の考えや主張を表すことができるためであり、効力持続が引用を示すのに用いられることによる。効力持続の用法では統括主題の存在（井上 2001）が話題・結論の構成と関わっている。

これに対し、「ていた」では「発見」「完了」などの用法があり、これらは「ている」にはないものである。「ていた」は会話、新書ではどのような機能を果たしているであろうか。

### 12.3　会話における「ていた」

会話の流れについて高崎(2008:75 - 77)は「日常会話のような自然談話では構造のようなきちっとしたものを見出すのは難しい」が、「注意深く観察してみると、とこどろどころに、会話のゆるやかな構成の断片となる部分が見つかる」と述べている。会話の役割分担も、一方が説明し、他方が相槌的な表現をはさむものや、役割交代をして、これまで聞き役だった側が話す側にまわる場合も見受けられ、「まとまり」のようなものも、「だんだんはっきりしてきたり逆にぼやけてきたりするのが自然談話の様相」としている。つまり、会話では新書のように一人の著者が論理を組み立てるのとは違った構成となっているわけである。

その中での「発見」の「ていた」は 1）話題提供（11.3.2）、2）丁寧さの表現（11.3.3）としてよく用いられている。以下にみていこう。

#### 12.3.1　過去の状態

本章では過去が「ていた」の形で表現されるものについて見てきた。結果動詞、状態動詞、思考動詞など、過去を表す場合、「た」ではなく「ていた」を使わなければならない動詞群がある。会話でよく見られたのはこれらの動詞群であった。

(193) 675　02K　4 月の時点でみんな知ってたんですかねー、ほかの人―。(男性会話)
(194)798　03A　それで、その、初校の、と、英文のボウウチの戻し、をいっしょにくっつけて返すとゆう形になってたと思います。(女性会話)
(195)7445　13A　あっ、いえ、あのー。
　　7446　13G　違ってた↑(女性会話)

また、会話では「運動短期」が 143 例見られたが、そのうち 42 例、約 30%が「ゆってた」「いってた」「つってた」であった。

(196) 7302　13Ｂ　出るわよ、ほんとに、いやーだったのよ、★毎日。
7303　13Ａ　→銀行←でしょ↑
7304　13Ａ　なに↑、１日（いちんち）ごとに交替って意味↑、あれ。
7305　13Ａ　★意味がよく。＜言いさし＞
7306　13Ｂ　→１週間ごと←だったっけ。
7307　13Ａ　あっ、１週間か。
7308　13Ｂ　１カ月だっけ。＜間＞
7309　13Ｊ　なんか今月はー、みたいなこと★いってましたよ。
7310　13Ｂ　→そうだよねー。←
7311　13Ｂ　★今月ーとかいってたよね。
7312　13Ａ　→うおー、←１ヶ月か。
7313　13Ｄ　なにが↑
7314　13Ａ　なんか、銀行回り。（女性会話）

（196）は銀行回りに行く話をしているようだが、話としてまとまりがあるといえるかどうかよくわからない。このような例を高崎(2008)はまとまりが不明確な談話と表現したのであろう。このような会話の中では「ていた」は過去を表現するといえる。

### 12.3.2　話題提供

「発見」はあることに気付いたこと、思い出したことを表現する。これは、あることに気付いた、あるいは思い出したから、それについて語りたいと話を続けることが可能となり、その意味で話題提供の機能を果たすといえる。

（197）3714　09G　あとー、ＣＫの６番なんですけどもー、さきほど、まーちょっと重複するんですけどもー、えーと缶、山積みになってたんですけども、今分別ってゆう形で行われてるんでー、あのー、缶とビン、いっしょになってたんでー、その一分別をー、まー、されたらいいかなと。（男性会話）

（197）は職場の会議で、担当の部分を点検した人が気がついた点を述べ、改善を促している。このように、ある状態があったと気がついたということを「ていた」で表現している。何かを見たり聞いたりする、つまり感覚で捉えた事柄を示し「発見」の情報を提供して、そこから話を続けていくことは会話ではよくおこなわれることであろう。

次の例のように、過去の発言や情報を記憶から引き出し、それをもとに話を進める場合には、思い出しという機能はかなり有効な手段である。

（198）3791　09M　きのう、サッカー途中まで見たんすけどねー。

3792　09A　どれ↑、どれ↑
3793　09M　ペルージャ対（たい）
3794　09A　ペルージャなんかやってた↑
3795　09M　ペルージャってどこでしたっけ。
3798　09A　えっと、ベネチア↑
3799　09M　ベネチア。
3800　09A　あ、テレビでやってたー↑
3801　09M　起きてんなっちゅうの、酔っぱらいが＜笑い＞。
3804　09A　あ、だけど名波ベンチにも入ってなかった。
3805　09M　うん、なんかスタメン出てませんでしたね。
3806　09M　スタメンにはでて、出てなかった、なー。
3807　09A　→いや、←きょうさー、きょうなんかニュースでやってたらさー、なんか、ベンチにも入ってなかった。
3808　09M　あ、そーなんすか。
3809　09M　セリエビー（B）に落ちるかもって。
3810　09M　どっちも危ない、危機だっていってましたよ。（男性会話）

（198）はサッカーの話である。Aがペルージャの試合をやっていたかとMに聞き、Mはやっていたことを述べ、それから選手の話に発展している。3794の「やってた？」は「やっていたことにあなたは気がついたか」という意味になるため、「発見」として採用した。3804・3806・3807には、今回は対象としていないが、「ていなかった」と「ていた」の否定形が現れ、ここでも広義の「ていた」が使われている。この会話での「ていた」は認識したできごとが情報として扱われ、話を広げている。

これらの例では「ていた」で、あることに気がついたことが述べられ、そこから話題が広がっており、「発見」の「ていた」は話題提供の機能を果たしているといえよう。

### 12.3.3　丁寧さの表現

次の例は「発見」つまり思い出しの「ていた」が使われている例である。

（199）1340　04J　司会がなんとなく５分とかおっしゃらなかったですかねー。
1341　04G　そういえばおっしゃってましたね。
1343　04J　司会者あいさつが５分。
1344　04J　１、２分。（女性会話）

（200）2231　06A　えー、それからー、次ですけども、あのー、図書館連絡係とゆうのは、研究室主任がー、確か自動的に兼ねる、ことになっていたと思うんですね↑（男性会話）

（199）では「おっしゃっていましたね」と「発見」の形で使われている。（200）では「確か～ことになっていたと思うんですね」のように、少々あいまいな表現で使われている。これらについて寺村（1984:109）は「過去に起こったこと、存在した状態に対して、現在、主観的判断を加える」ムード的な思い出しの「ていた」としている。（205）は会議の席で図書館連絡係を決める話をする場面である。不確かな記憶であると表現することで、もし該当の人が断りたければ断ることもできるように述べており、その意味で丁寧さ、配慮の表現となっている。

### 12.3.4　「完了」による時間的な順序

会話では過去の状態を表す例が多いが、「完了」によって過去以前を表現する例も見られた。

（201）2600　06Ａ　［名字］がやってた［中国の大学名］とのあの、あれはどうなったんだろうねー＜笑い＞。（男性会話）

（202）6502　11Ａ　さらにー、そっから、まー、１年、もうちょっと近い、保証を要求されておりまして、うちとしては、もう受注するときに、もうそれはのまなきゃいかんとゆうことで、のんでしまったんです。（女性会話）

（201）は以前ほかの人がやっていた中国の大学との交流はその後どうなったか、と話している。（202）は長い保証をつけるように要求されていたので、受注するときにその要求を呑んだ、と述べており、どちらの例も過去とそれ以前の例といえる。

### 12.3.5　「完了」による事態の変化の表現

「完了」は前節で述べたように状況が変化したときに現れることが多い。それは会話でも例の数は少ないが見られた。

（203）3918　08Ａ　今までほら、（うーん　他者(女)）あのー、平均的できてたんじゃなくて、こう上がってきてたから。

3919　08Ｇ　ええ。

3920　08Ａ　それで下がるってのはプラスマイナスの差が大きいでしょ。

3921　08Ｇ　ええ、そう★です。

3922　08Ａ　→それを←ストップしただけじゃなくて、（ええ　他者(女)）それがマイナスの方に動いたんだから、がんばったわねーって★［名字］先生もびっくりしてー。（女性会話）

（204）4102　10Ｂ　で、今、あの、みんな今までの本業の自動車に関連する企業ってゆうのは、ま、［社名］の今回のリストラじゃないけどもー、どう

ゆうメーカーさん、みんなもー、リストラしないとやってけないとー、で、もー、［名字２］さんはもう早くからそれを考えてたわけよ。

4103　10Ｂ　もー、塗装ブースはもうあたまうちと、もう需要そんなに＃＃でないと。

4104　10Ｂ　そんで、どこに入るかってゆうんで、その乾燥装置を、開発したわけ。（男性会話）

（203）は体重が増加していたのを止めただけでなくマイナスのほうに進めた、（204）は名字２さんが自動車関連企業はこのままではいけないと考えていて乾燥装置を開発した、と述べ、どちらも状況が変化したことを表現している。

しかし、会話では先ほどから述べているように、このように時の流れや論理の流れが明確に見える例もある一方で、話が前後したり省略されたり、途中で別の話がはいってきたり、あいまいになったりする例も多く見られた。

（205）1605　04Ｂ　あの今年ーの春から、実は、（はい　Inf(女)）あの婦人少年問題審議会の婦人部会とゆうところで、ま介護だけじゃなくて、（はい　Inf(女)）ほかの問題も含めて、あのー検討課題とゆうの議論していただいてたんですが、（はい　Inf(女)）介護休業の法制化については、その、法制化の前に、（はい　Inf(女)）えー、まあたとえばその、介護を要する状態にある（うんうん　Inf(女)）、ま、家族抱えてるって（うんうん　Inf(女)）ゆったって、実際にその、介護を要する状態ってゆうのは、線引きができるのか、とかですね。

1606　04Ｂ　まあ、そうゆうその専門的あるいは技術的な問題があるんじゃないかと。

1607　04Ａ　なるほどね。

1608　04Ｂ　それで、あの、法律ーに詳しい方ーでも、その、例えば、権利規定にするとゆうようなことになった場合に、あの、ほんとにそのーこう厚生保険みたいなものちゃんとかけるのかとか、（うんうん　Inf(女)）ちょっと育児よりはむずかしいんじゃないかってゆう★ご意見もあってですね。

1609　04Ａ　→そりゃ、そうですね、←そうですね。

1610　04Ｂ　だから、まあ、その、そうゆう専門家による検討会議をやって、その検討結果を踏まえて（うーん　Inf(女)）また審議会のほうで★議論しようじゃないかってゆう話になりまして。（女性会話）

（205）は婦人部会で議論してもらっていたが、議論の過程で様々な疑問が出てきて、結論が出せるのではなく専門家会議で議論しようという話になった、ということを話している。議論してもらっていたということと専門家会議の話の間に別の問題の話が入り込み流れがたどりにくくなっている。

（206）7481　15Ａ　でまー、この対物の部分はですねー、大きい事故によるのは確かに問題はないんですがー｛うん｝、あのー、最近の事故ーってゆうのはあのー、やはり我々、毎日事故から、あのー、はい、社内を飛び回っているものですからー、あまりないようなお話でもですねー｛うん｝、鮮魚を運んでいる車ですとかー｛うん｝、そういった車をぶつけて、ちょっととまらせてしまったときにですねー、中のー、鮮魚の値段がー、やはり、かなり高額な金額になるケースが多くてですねー、あのー、我々もー営業のときにー、いや、今いった1000万円以上の車はない、あまりないですからねー、といっていたんですがー｛うん、うん｝、ある意味で、ない部分のですねーえー対物費用とゆうのが、かなりかかるケースが多くといいますかー、その基本的にはーといいますかー、わたくしあのー、お客さまがた（方）にはですねー、あのーここには実際、＃＃円ぐらい、えー、そうですね無制限にするとー6000円違いですね｛うん、うん｝↑、はい。

7482　15Ａ　えーまー、ここの部分のー、まーそういった調整の部分なんですが、あのーこちらでも。

7483　15Ａ　ま、でもあのー、ごかく、内容のご確認だけしておいていただければですねー。（男性会話）

（206）の例は、車の保険の話で、1000万円以上の車はないと言っていたが、物を輸送する車の場合は内容物を加えると1000万円になるケースもあるということがわかったという内容の話をしている。話の流れからはどのような結論になるか、想像はできるが、言葉として「わかった」という結論はなかなか現われない。

（205）（206）のように、会話は「完了」が時の流れの順に事柄を並べる、あるいは「完了」によって変化を表現するということは、言える例もあるがそうした構成が読みにくい例もかなりある。

### 12.4　新書における「ていた」

新書と会話の違いをあげてみよう。会話は話者がいて聞き手がいる。話者は現在の時間を基準にして過去を表現する。これに対し、新書は、社会的な構造、事象の性質を追求することを目的とするため、それに必要な表現を用いる。第2章で述べたように、新書で多いテンスは一般的な事象を示す「る」や解説的な「る」である。今回使った自然科学、社会科学の

入門書では、歴史的記述、学説の進展は「た」で、時間を超えた性状、社会体制の記述などは「る」で表現されていた。

新書での「ていた」は1）発見、2）時間的な進展の表現、3）過去の状況、4）変化、などを表現するときに用いられているようである。

### 12.4.1　「発見」

「発見」は新書では、実験の結果や調査の結果などを表す形で用いられていた。

（207）だが，問題はこの主反応ではない。同じ反応槽の中で，一部のアセチレンと水銀化合物が反応して，有機水銀化合物ができていたのである。それを廃液として海に流したため，それが魚介の体内にたまったのだ。

この水俣病の原因究明経過や会社側との交渉などは一大社会問題であったから，関心のある人はその方面の記録を読んでもらうとして，このように，水俣病には，酢酸を作る工程が深くかかわっていたのである。（自然科学）

（208）ところがいってみておどろいたのは、世界的に福祉国家として鳴りひびいているこの国がその実老人問題ではほとほと困っていた。私は留学の名目とは別に“老年問題”を研究したいと申し出たところ、「いまその対策をいろいろ詮索しているところだから、どういう試みと難しさがあるかを関係者と接触して勉強してもらいたい」ということであった。

当時、スウェーデンにはナショナル・レベルでの老人委員会というものがあって、ここに二つの医師のポジションがあったが、その二つともがヨーテボリ市の老人科医に占められていた。そして私はこれらの方にお世話になることになった。ヨーテボリはストックホルムに次ぐスウェーデン第二の都市で西海岸にある。工業、商業とも盛んな活気にあふれた街である。そこで私は大学付属の慢性病院（その病床の大半は老人が占領していた）をはじめ様々な施設を訪ねて、臨床にたずさわりまた家庭訪問をして、この国の老人対策をつぶさに知ることができた。（社会科学）

それぞれ下線部が「発見」の「ていた」である。（212）は実験結果、（213）は調査に行って経験したことが述べられている。

それぞれについて、会話と同様に、「発見」から新たな話題への展開があるかどうか見てみた。

(207)は有機化合物ができていた、それが魚介類の体内にたまった、だから水俣病には酢酸を作る過程が関わっていた、と説明しており、状況を示して新たな話題を展開するというより、ある事象のもととなる状況にさかのぼって述べているようである。(208)は福祉国家として有名なその国は実際には困っていたことを発見したと述べており、「発見」から話題に続いているようである。第２段落では、医師のポジションが老人科医によって占められていることがわかった、という発見からその医師のお世話になった、というように話は展開し

ている。しかし、話は続いているが、「ていた」が明確に話題提供とまでいえるかどうかは少々疑問が残る。

### 12.4.2　時間的な進展の表現

過去よりさらに以前の状況について述べる場合に「ていた」が用いられている。

(209)大学院で知り合ったジェーン・イルドと結婚した。1965 年のことであり、もちろん彼女は、ホーキングが不治の病に冒されていることを充分に承知していた。そうして現在、ふたりの間には三人の元気な子どもがいるのである。(自然科学)

(210)このような産業構造変化の流れの中で、石炭に次いで最も早く多角化戦略に着手したのは、戦前以来の日本の代表的輸出産業であった繊維・紡績産業である。この産業にあっては、天然繊維の紡績は、東洋紡、鐘紡など六大紡が中心となっていたが、他方では、大正期以降人絹その他合成繊維メーカーも台頭していた。

戦後この産業では、(中略)新しいタイプの合成繊維がブームを呼んだ。

紡績関係も戦争直後は輸出産業として重要な位置を占めたが、やがて（中略）紡績メーカーは、（中略）海外生産を始めたり、（中略）化粧品などの新事業に多角化する戦略をとるようになる。（社会科学）

（209）は結婚し、その時には彼女は彼が病気であることを知っており、そしてその後、彼らには子どもができた、と時間の流れに沿って「ていた」「た」「る」が使われている。その場合、過去以前の事柄には「ていた」が使われる。（210）では産業構造の変化と繊維産業が話題である。第一文では話題が何であるかが述べられている。第二文ではその時代の繊維産業の状況が、第三文では戦後の合成繊維ブーム、第四文ではその後の変化が述べられている。つまり、時の移り変わりを述べる場合、過去よりさらに以前の状況を示すために「ていた」が用いられる。時間的な進展を表現する場合には「ていた」は効果を持つといえる。

（211）一般相対論が発表された頃の１９２０年前後(中略)には、人々の宇宙観は、まだまだ単純なものであった。相対論とは元来、三つの方向の空間と一つの時間とを、同等の立場で数式化する学問である。(中略)アインシュタインは、空間についてはそれなりの考えを持っていただろうが(中略)、時間については具体的には何も述べていない。ということは、まだ１９２０年頃の考え方としては、時間は過去から未来にかけて、一方的に、永久に続くものというように考えられていたのではなかろうか。(中略)

アインシュタインの一般相対論の式は、ニュートンの力学の式などと同じように微分方程式というもので与えられている。(中略)こんなわけで、一般相対論の式を基礎として、多くの学者が様々な宇宙の模型を提案した。

オランダの天文学者ド・ジッターは、物質の存在しない宇宙を仮定して一般相対論の式を解いた。(中略)

ソ連のフリードマンという数学者は、アインシュタインの宇宙項をないものとして計算してみた。ド・ジッターと違い、フリードマンのモデルでは空間に天体がある。つまり宇宙の平均密度というものが零ではなく、なにがしかの値をもつとして計算がなされた。(中略)彼の解は今日でも宇宙模型の基本になっている。(自然科学)

(211) はアインシュタインが発表した一般相対論とそれに影響を受けたド・ジッター、フリードマンの考え方が紹介されている。オランダ・ソ連の研究以前のアインシュタインの考え方には「ていた」が用いられており、以前の考え方という位置付けである。科学的な考え方が歴史的に進んできていることが表現されている。

工藤 (1995) は小説での「た」と「ていた」について、「た」が事態の進行を表すのに対し、「ていた」は時を逆戻りし、以前の事態との同時性を表すと述べたことは先に記した。小説では「ていた」は逆戻りを表すようだ。しかし新書では「ていた」が「た」より以前であることは明らかだが、「ていた」は必ずしも逆戻りとはいえない。「ていた」が「た」以前であるということが新書における「ていた」と「た」の関係と言える。

### 12.4.3 前提―話題以前の状況

「ていた」は、「ている」につながる文脈では、次のように、話題以前の過去の状況を示すように用いられていた。

(212) アルコールを自由に飲ませると、正常ネズミよりたくさん飲んだ。水中に入れると、(中略)正常ネズミよりも根気がなく、「あきらめ」が早かった。音の刺激に対する反応性がおちていた。性行動が減少した。(中略)

こんな結果から、幼児期のレム睡眠は、脳、とくに感覚系の成熟とか神経回路の柔軟性を促進することに重要なはたらきをしているのではないか、と考えられる。しかし、問題がないでもない。(自然科学)

(213) この病気は、現象としては「ウンディーネの呪い」とか「ピクウィック症候群」としてふるくから知られていた。しかし、(中略)ごく最近になってにわかに関心がたかまってきたものである。とくに、一見したところ、健康そうな乳幼児の突然死の原因としても、この疾患が注目されている。

患者は睡眠中に、呼吸がとまって酸欠状態になり、その結果自動的に覚醒するのだが、ほんの短期間なのでめざめた、という自覚はほとんどない。しかし、睡眠がしょっちゅう中断されるので熟睡できず、昼間に眠気におそわれたり、居眠りしたりすることになる。(自然科学)

（212）（213）は「ていた」と「ている」が比較的近いところで用いられている例である。（212）では断眠させたネズミの行動を観察したところ、音の刺激に対する反応が落ちていることなどがわかった、と「発見」の形で述べている。そして、それらの観察から幼児期のレム睡眠が脳の成熟に関係しているのではないかと仮説を提出している。レム睡眠についての仮説が「ている」の話題提供の例である。それに対し、「ていた」はその仮説のもととなる状況を提示しているといえる。（213）は「ウンディーネの呪い」として知られていた現象が最近注目されている、と話題を提供し、その後、その疾患の内容を説明している。この例においても「ている」は話題を提供し、「ていた」はその前提となる状況を提示している。

「ている」と共に使われる「ていた」は「完了」の用法が作用して、「話題提供」というよりそれ以前の状況を表すようである。

「ている」の機能（第5章5.2）で、「ている」には話題となる状況に対する前提を提示する例があると述べたが、「ていた」もそれと同様のはたらきをしていることが見られる。

### 12.4.4　変化

10.5.2で、「完了」は「ていた」節と「た」節の間に時間的な切れ目、あるいは変化が表されると述べたが、テクスト中での「ていた」も変化を表現している例がよく見られた。

（214）ここで強い力が分離する。これまではクォークと軽粒子が全くばらばらに飛び回っていたが、次第に両者が区別されてくる。そうしてインフレーション膨張が起こり、粒子と反粒子は衝突してエネルギーと化す。この際、反粒子よりも　普通の粒子の方がわずかに多かったため、後に、通常の粒子からなる世界が形成されることになる。（自然科学）

（215）桃山時代から江戸時代初期にかけては海外交通が開け、日本人の地理的視野も一時は世界的に拡大された。しかし政権を獲得した江戸幕府にとってなによりも必要なことは、その中央集権的な封建支配体制を確立することであった。したがって江戸幕府もはじめは商教分離政策をとっていたが、キリスト教が普及し、（中略）その勢力が強大となることは、幕府の国家統一事業に大きな脅威であると考えられ(中略)た。そこで幕府は慶長十八年（一六一三）に禁教令を発して、キリスト教勢力の一掃をはかることになり、（社会科学）

（214）はクォークと軽粒子がばらばらに飛び回っていた状態から両者が区別される状態への変化、（215）は江戸幕府のキリスト教への姿勢の変化が述べられている。このように「ていた」の「完了」の表現は文脈を変化という形に展開させる役割を持っているといえる。

会話は考えたことをそのまま話すために整理されていない部分があるのに対し、新書は著者が論理の構成を考えて文章を作るため、「過去以前」→「過去」という時間の流れや、「完了」

による状況の変化が文面に表現される。「ていた」のもついろいろな機能が会話より新書のほうに明確に出ているといえるようである。

### 12.5　会話と新書における「ていた」の用法についてのまとめ

「ていた」は「発見」「完了」の用法がある。これらがあることにより、「ている」とは文章中で果たす役割が異なっている。

会話では思い出したこと、気がついたことを述べ、そこから話題へと展開していることが見られた。また、「ていた」は「思い出した」つまり忘れていないという意味を表すことができ、それによって丁寧さが表現できる。「ている」の効力持続も配慮が表現できることを述べたが、「ていた」も、きっかけとなる用法は異なるが、同様の性質をもつ。

会話では完了の用法は今回採集した「ていた」文の 20%ほどとあまり比重は高くない（第 5 章）。会話では過去と関係を持つ完了より、過去の状態を表す例、過去が現在と関係を持つ例が多かった。

また、会話は相手との関係で話が進んでいく、考えたことをそのまま整理せずに口にする場合がある、などの特徴があるため、完了のようなほかの節との関係を問題にする用法が読み取りにくい例もある。

新書では、発見の「ていた」は過去の実験や調査の結果、過去の体験などを表現するために用いられていた。発見から話題へとつながる例も少しだが見られた。科学的なテクストで時間軸に沿って物事を述べる場合、「ていた」は過去以前の事態や状況を表現できる。また、「ている」が話題を提供したり結論を示したりするのに使われるのに対し、「ていた」は提供される話題意以前の過去の状況、つまり前提を示すためにも用いられていた。そして、完了の用法により、「変化」を表現することもできることがわかった。

「ていた」は「ている」の過去になったもの、という捉え方だけではなく、「ていた」の持つ性格を把握することによってより豊かな文章表現ができるであろう。

注

(1) 学習者の誤用例は、特に説明がないものは、これまで筆者が日本語を教える中で少しずつ集めたものである。

(2) 小説における「発見」の出現状況を簡単にまとめた。「ていた」の文に占める「発見」と読める使い方の割合をあげた。

本文で取り上げた「砂の女」と「コンスタンティノープルの陥落」では「発見」の占める割合が異なる。「世界の終わり」「砂の女」「一瞬の夏」は一文が短い傾向がある。

一人称小説における「発見」

| | 錦繍 | | 一瞬の夏 | | 新橋烏森口 | | 世界の終わり | | 合計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 数 | 割合 | 数 | 割合 | 数 | 割合 | 数 | 割合 | 数 | 割合 |
| 発見 | 67 | 36.8% | 134 | 53.2% | 106 | 39.1% | 105 | 59.7% | 412 | 46.8% |
| それ以外 | 115 | 63.2% | 118 | 46.8% | 165 | 60.9% | 71 | 40.3% | 469 | 53.2% |
| 合計 | 182 | 100.0% | 252 | 100.0% | 271 | 100.0% | 176 | 100.0% | 881 | 100.0% |

三人称小説における「発見」

| | 砂の女 | | コンスタンティノープル | | エディプスの恋人 | | 楡家の人々 | | 合計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 数 | 割合 | 数 | 割合 | 数 | 割合 | 数 | 割合 | 数 | 割合 |
| 発見 | 82 | 62.1% | 47 | 31.3% | 59 | 33.1% | 82 | 46.3% | 270 | 42.4% |
| それ以外 | 50 | 37.9% | 103 | 68.7% | 119 | 66.9% | 95 | 53.7% | 367 | 57.6% |
| 合計 | 132 | 100.0% | 150 | 100.0% | 178 | 100.0% | 177 | 100.0% | 637 | 100.0% |

(3) 『日本語能力試験出題基準』では文法的な助詞・助動詞を終えた段階の 1 級 2 級における「助詞・助動詞そのものではないが、これに類するもの」を「機能語」として「…に関して」「…に至るまで」「…を通して」などの例を挙げている。

# 第８章　学習者の「ていた」の使用状況

## 1　学習者コーパス

学習者コーパスを用いて学習者の使用例を集め、分析した。

話し言葉は『KY コーパス』、『I-JAS』のストーリーテリング１・２（ST1・ST2）、状況の描写（D）、ロールプレイ１・2（RP1・RP2）、インタビュー（I）、書き言葉は学習者『作文コーパス』、『I-JAS』のストーリーライティング１・２（SW1、SW2）を用いた。

それぞれ、文字列検索で「ていた」「てた」「ていました」を検索し、不要なデータを削除して用いた。

それぞれのタスクの分量が出ていないので明確なことは言えないが、タスクによって「ていた」が使いやすいものとあまり使わずに済むものがある。

## 2　タスクによる使用数の異なり

「ていた」の使用数の多かったタスクはインタビュー、SW2、『KY コーパス』であった。インタビューは子どものころの誕生日のこと、学校時代の思い出など過去のことを述べる活動があるため、SW2 は「ケンさんが家に帰った時、マリさんは寝ていた」などのように、その場の状況を述べる必要があるため、「ていた」が多い。一方、絵を見て目の前にある状況を述べる D では過去形を使うと、（1）のように不適当な例となる。

表1　学習者による「ていた」の使用数

| | コーパス | 合計 |
|---|---|---|
| I-JAS | ST1 ピクニック | 42 |
| | ST2　はしご | 66 |
| | D　状況の描写 | 17 |
| | RP1　アルバイト変更依頼 | 14 |
| | RP2　アルバイト変更断り | 5 |
| | I インタビュー | 208 |
| | SW1　ピクニック | 80 |
| | SW2　はしご | 108 |
| KYコーパス | | 116 |
| 作文コーパス | | 61 |
| 合計 | | 717 |

（1）×バス停があります#肉屋と、カフェ店があります#後、倒れていた木が一個あります。（CCT10　D　2780　310）

アルバイトの日数を減らしてもらうよう交渉する（RP1）、アルバイトで調理の仕事をしてもらえないかと頼まれ断る（RP2）という、これからどうするか交渉したり相談したりする RP では「ていた」は少ない。ST１と SW1、ST2 と SW2 はそれぞれ同じ内容を表現しているはずであるが、使用数は ST１が 42 例に対し SW1 では 80 例、ST2 で 66 例に対し SW2 では 108 例と、どちらも、書くタスクの方が「ていた」の使用が多かった。

## 3　タスクと正誤の関係

次にタスクと正誤の関係を見てみよう（表 2）。全体で見ると、31%ほどが誤用となっており、全体の誤用率が 18%であった「ている」より誤用率が少々高いようである（6 章 2.1 参照）。

誤用率が高いのはD（描写）、RP、作文であった。

D では誤用率が非常に高い。データの数が少ないので過度に一般化するのは危険であろうが、傾向として見ておこう。

D では絵を見てその情景を描写するタスクが与えられているが、以下のような誤用が見られた。

| 表2 | 学習者による「ていた」の使用状況　正誤の関係 | | | |
|---|---|---|---|---|
| | コーパス | 正 | 誤 | 計 |
| | ST1・ST2 | 71 | 37 | 108 |
| | | 65.7% | 34.3% | 100.0% |
| | SW1・SW2 | 129 | 59 | 188 |
| | | 68.6% | 31.4% | 100.0% |
| I-JAS | RP1・RP2 | 9 | 10 | 19 |
| | | 47.4% | 52.6% | 100.0% |
| | D | 4 | 13 | 17 |
| | | 23.5% | 76.5% | 100.0% |
| | I | 151 | 57 | 208 |
| | | 72.6% | 27.4% | 100.0% |
| KYコーパス | | 97 | 19 | 116 |
| | | 83.6% | 16.4% | 100.0% |
| 作文コーパス | | 34 | 27 | 61 |
| | | 55.7% | 44.3% | 100.0% |
| 合計 | | 495 | 222 | 717 |
| | | 69.0% | 31.0% | 100.0% |

(2) ×あのー、あーお茶が入っていたところでしたから、あのー、皿ーんー、おも落ち落ちて壊れてしまいました（入った）（SES16　D　1760　160）

絵を述べるだけのタスクなので、時間的な変化は考えにくい。D は前後の絵があるわけではないので、状況が変化したとは考えられず、誤用とした。

RP1 はアルバイトの日数を減らしてくださいと店長にお願いするというタスクであった。

(3) ×うーん、友達に、頼んで、あー、私の代わりに、友達が、仕事を、仕事してもらっていたら、どうですか？（仕事してもらったら）（ TTH04 RP1　　4270 300）

自分がアルバイトの日数を減らす代わりに友人に働いてもらうように頼むという状況である。仮定の話なので過去の状態を使う必要はなく、誤用となる。

『作文コーパス』では「効果的な外国語学習法」「インターネット時代に新聞や雑誌は必要か」というテーマで論述文を書いているが、このテーマでは過去の状態を述べる必要性が低く、「ていた」を使うと誤用になったのであろう。

(4) ×ネットの便利性はもうよく分かっていたが、だんだん新聞などは必要だと思ってなった。（わかったが）（CG107）

逆に、インタビューの中で過去のことを話してくださいと要求される I では誤用率は比較的低い。

(5) やはり、プレッシャーがある、プレッシャーが溜まっていたからだと思います、その時は#<C>うんうんうんうん、なるほどね、（CCM15　I　51730　4600）

以上見たように、過去のことを述べる必要がないタスクでは「ていた」の誤用の割合は高くなる傾向がある。

## 4　節間の関係による分類

第７章３の表にならい、継続過去、状態過去、繰り返し過去、同時、完了、誤用と分類した。継続過去、状態過去、繰り返し過去は「ていた」が他の過去の節と時間的な先後関係を持たないもの、あるいは「ていた」が現在や未来と関わりを持つものである。同時は「ていた」の示す事態の継続と同じ時に一定の状態が存在するもの（例６）、または事態の継続の期間中に別の事態が発生するもの（例７）である。

(6) 数学の先生は、厳しい<C>〈うん〉<K>、厳しかった、が、あの知識がいっぱい持っていたので〈うん〉、（中略）、それで試験の時は〈うん〉簡単だった（JJC40I　29260　1060）

(7) あのマリさんとケンさんが、あのどこに行くか地図を見ていた時、んー犬、犬が、こっそりとバスケットに入り込んでしま、しまって、（EUS02　　ST1　490　30）

完了は「た」で表現される事態以前に、それと関係のある事柄や状態が「ていた」節で表現されるものである。

(8) 呼びましたが、その時はもう１２時になりましたので、マリはもう寝ました。#よく眠っていたので、ケンの声が聞こえなかった。（CCM48　SW2　74040）

表３を見ると、誤用が31%、正用が69%であり、全体の約三分の一が誤用という結果になった。正用では、同時13.6%、完了25%と、「た」節と関係のある「ていた」節が38%を占めており、比較的「た」節と関係のある「ていた」が使えていることがわかる。

今回のタスクには「た」節との関係が深いものがある。ST１・２、SW１・２である。これらは物語的に「た」を基本テンスとして述べるタスクである。D、作文はどちらも基本テンスが「る」であることから、「た」との関係性は低い。。

同時と完了の割合は、母語話者の「ていた」の使用（第７章 3.2.4）より高い。母語話者の会話と KY、I は似た結果になっている。新書と『作文コーパス』も似た傾向を示している。しかし、小説と ST、SW はかなり異なり、ST、SW どちらも同時・完了ともに割合が高い。

表３　学習者の「ていた」の意味・他の節との関係による使用状況

| | コーパス | 継続 | 状態 | 繰り返し | 同時 | 完了 | 誤用 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| I | ST1・ST2 | 5 | 2 | 0 | 20 | 44 | 37 | 108 |
| | | 4.6% | 1.9% | 0.0% | 18.5% | 40.7% | 34.3% | 100.0% |
| J | SW1・SW2 | 2 | 0 | 0 | 50 | 77 | 59 | 188 |
| | | 1.1% | 0.0% | 0.0% | 26.6% | 41.0% | 31.4% | 100.0% |
| A | RP1・RP2 | 7 | 2 | 0 | 0 | 0 | 10 | 19 |
| | | 36.8% | 10.5% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 52.6% | 100.0% |
| S | D | 3 | 0 | 0 | 0 | 1 | 13 | 17 |
| | | 17.6% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 5.9% | 76.5% | 100.0% |
| | I | 67 | 32 | 8 | 19 | 25 | 57 | 208 |
| | | 32.2% | 15.4% | 3.8% | 9.1% | 12.0% | 27.4% | 100.0% |
| KYコーパス | | 46 | 18 | 5 | 5 | 23 | 19 | 116 |
| | | 39.7% | 15.5% | 4.3% | 4.3% | 19.8% | 16.4% | 100.0% |
| 作文コーパス | | 8 | 10 | 5 | 3 | 8 | 27 | 61 |
| | | 13.1% | 16.4% | 8.2% | 4.9% | 13.1% | 44.3% | 100.0% |
| 合計 | | 138 | 64 | 18 | 97 | 178 | 222 | 717 |
| | | 19.2% | 8.9% | 2.5% | 13.5% | 24.8% | 31.0% | 100.0% |

## 5　誤用のテンス・アスペクトによる分類

表 4 は誤用例だけ集め、それぞれのコーパスごとに、訂正した場合「た」「ている」「る」その他のどれに分類されるかで集計したものである。

表4 「ていた」誤用例のテンス・アスペクトによる分類

| | た | ている | る | その他 | |
|---|---|---|---|---|---|
| I-JAS | 117 | 31 | 16 | 12 | 176 |
| 割合 | 66.5% | 17.6% | 9.1% | 6.8% | 100.0% |
| KY | 12 | 4 | 1 | 2 | 19 |
| 割合 | 63.2% | 21.1% | 5.3% | 10.5% | 100.0% |
| 作文 | 14 | 8 | 5 | 0 | 27 |
| 割合 | 51.9% | 29.6% | 18.5% | 0.0% | 100.0% |
| 合計 | 143 | 43 | 22 | 14 | 222 |
| 割合 | 64.4% | 19.4% | 9.9% | 6.3% | 100.0% |

全体的に「た」との誤用が多く、約 65%を占めている。そして「ている」との誤用が 20%程度であった。「る」との誤用は全体で見るとそれほど多くないように見えるが、作文だけは誤用の 20%ほどを占めている。

以下に正用と誤用を順に見ていく。誤用については例をあげつつ見ていこう。

## 6　正用

### 6.1　よく使う動詞のよく使う活用形

よく使う動詞の動作継続はあまり間違いなく使うことができていた。

(9) マリさんは寝ていたので、ケンさんはどんなに大声で呼んでいても、無駄でした。
　　(CCM50　SW2　70 10　)

(10) ま、マリさんは寝ていたあー、寝ていた、だからんー、んー、あー、じゃあどうしようかな#あーケンさんはうー、はしご、はしごを見つけ、はしごを見つかった (CCM37-ST2 CCM37　ST2　　820　　50)

(9)　(10) 共に、ケンが家に帰ったらマリさんが寝ていた、という状況を述べている。
次に「見る」を使った例を見てみよう。

(11) ケンとマリはサンドイッチを作った後、地図を見ました。#ふたりは地図を見ていた時、犬がバスケットに入りましたが、二人はそのことは分かりませんでした。(CCM19 SW1 240　　20)

(12) 警官は、ケンを見ま、あ見た#あー、そして、警官は、ケンに、怒っていた<K>でも、その時マリは起きま、起きた#あ、起きて、窓に、歩いて、き、警官に、説明しました (EAU11　ST2　　1010　　50)

(13) ケンをマリは公園に届いたとき、散歩してきれいな景色を見た。#その時、お腹が空いていたので、座っている所を探した。バスケットを開けた瞬間に、丸が突然飛んできた。(EAU18SW1　　1140　　60)

(11) の「見ていた」は犬がバスケットに入った時のケンとマリの状況を「地図を見ていた」と正しく表している。(12) では「警官が見た」「マリは説明した」と発生した事態の順で述べ、(13) も「見た」「探した」「犬が出た」という順になっており、動詞の「た」の事柄がひとつずつ終わって次へ進むことができるという使い方ができている。「見る」については、「た」は終わること、「ていた」は動作の継続という使い分けができているようである。しかし、「怒る」は「怒っていた」になっており、ここでは「た」の連続ができていない。(12) のように、「怒る」に関しては、10 で述べる固定化した活用形になっている可能性もある。「怒る」「怒らない」「怒った」のような活用ができず、「怒っている」と固まりで覚えている可能性があるのではないだろうか。

以上、よく使う動詞は正しく活用できる可能性を指摘した。

### 6.2　期間中の出来事

ある動作・作用の継続期間中に別の事態が起こるという形は理解しやすいようで、間違いなく使えている例が見られた。

(14) 「私の家です」と伝えましたが、警官はあやしいと思いました。#ところが、警官がケンのＩＤを確認していたところ、マリが起きて、二階の窓から顔を出しました。#マリは警官に「あの男は夫です」と言いました。（EUS02 SW2　　1770　　70）

(15) 授業中、インターネットについての話題を討論していた。そして、このような会話があった。（CG111 中国語　　中級）

上の（14）（15）は「ていた」が表す期間中に「た」で別の事態が起こったことが表現される。この形は、母語話者の使用中では会話に多少見られる程度で、それほどよく使われるわけではないが、学習者には楽に使える構文のようである。

## 7　「た」の誤用

### 7.1　まるごとの事態

何度も述べてきたことだが、まるごとの事態は「た」で示す。学習者は動作・作用に時間がかかる場合、それをまるごとの事態として表現できず、「ている」「ていた」を使うということがよく起こる。

(16) ×天気がよくて晴れた日でした。#ケンとマリは気持ちよくてゆっくりと散歩していた。#しかし公園に着いて、バスケットを開けた途端、中にいた犬がジャンプして、サンドイッチを持って逃げてしまった（散歩した）（HHG03　SW1　810　50）

(17) ×人は興味があれば考えていたことを行動で移すものだ。（考えたこと）（KG069　韓国語）

(16) は散歩して、公園に着いた、と事態の連続として捉え、「た」で表現する必要があるが、学習者は散歩には時間がかかると考えて「ていた」で表現した可能性がある。しかし、事態の連続の表現では、動きの時間の長さに関係なく、一つのことをした、そして次のことをした、のように描写しなければならない。(17) は「考えたこと」のように「考える」こと全体を一つの事態として表現する必要がある。

そして、まるごとの事態としての表現は結果動詞の場合も同様である。

(18) ×ピクニックのスケジュールをはい、作りました#で、その後では、一匹の、ペット、あー彼ら達が飼っていたペットの犬ちゃんがあの不注意に、彼らのバスケットの中に入ってました（入りました）（CCT15　　ST1　　750　　50）

(19) ×入るつもりだ。#それを警官に見つけられた。#ケンが泥棒にあやまった。#幸い、マリが外の声で起きていた。#ケンが鍵を忘れることが分かった。（起きた）（ CCM16　SW2　　630　　60）

（18）はピクニックに行った、そして犬がバスケットに入った、と事態の連続で表現する。（19）は警官に見つかった、泥棒と間違えられた、その声でマリが起きてきた、のように事態が連続する。

節の中でも「た」を使うことは同様である。

（20）×<K>そうですね、すごく印象に残っていたのは〈うん〉、やっぱり最近あるー映画を見ました、でも昔はやっぱり『ーリットルの、なみ、涙』（印象に残ったのは）（CCT15　　I　19250　1540）

（21）×今はあ、四、二、二時間目も四時間目も<C>〈うん〉<K>あるのかな<C>〈えー〉<K>という授業が増えていたから、〈あー〉店長にそうお願いします（増えたから）（CCT16　　RP1　4280　240）

（20）は「印象に残った」、（21）は「授業が増えた」のように変化・結果を表す「た」を使う。

結果動詞の過去の状態は「ていた」を使うと7章5.3で述べたが、「ていた」を使う例は次のような場合である。

（22）何て言うかなー、遊園地かな#<C>はえー#<K>遊園地も、新しくなっていたのでー〈ふーん〉、すごくーおもしろっ面白くなっていましたねー〈へー〉昔はね、あのシンガポール人はあんまり、セントーサに行かないやはり（EAU18　　I　27450　1100）

（23）を持って楽しくピクニックに行きました#ですが、バスケットを開けたら中から犬が飛び出してきて、中に入っていたサンドイッチや果物も犬に食べられました（CCM51　ST1　840　60）

（20）（21）と（22）（23）を比較すると、（20）（21）は変化、（22）（23）は過去の状態であることが分かる。

（24）はすわりが悪いが、例えば下の（25）のようにすれば落ち着く。

（24）×ネットの便利性はもうよく分かっていたが、だんだん新聞などは必要だと思ってなった。（分かったが）（CG107　　中国語　中級）

（25）ネットの利便性はわかっていたが、今回の新聞の報道に接して、新聞の必要性を強く感じた。（作例）

（24）は（25）のように完了の文にすると問題がない。つまり、過去の事態とそれよりさらに前の時を表現するのである。そして「ていた」節と「た」節の間に状況の変化、時間的な切れ目が表現されると許容度が増す。（24）は「だんだん必要だと感じた」のような表現

になっており、「ていた」節と「た」節の間に明確な切れ目が読み取りにくいため、誤用と感じるのであろう。完了については7.4で述べる。。

### 7.2　連体修飾節中の形

上の「た」の問題は連体修飾節内でも起こる。

(26) ×犬がその時、外に走り出し、中にある食べ物を半分以上食べきってしまいました。犬ちゃんの満足していた表情を見ながら、仕方はなくて、食べ物のない一日のピクニックデーに過ごしました。（満足した表情）（CCT15　SW1　1600 ）

(27) ×フタを開けたら突然犬が飛び出しました。そして、マリがお弁当見たら全部犬に食べられました。困っていた二人が今からお弁当はないからどうしましょうか　悩みました。（困った二人）（JJN05　SW1　930）

(26)（27）は文末では「犬は満足していた」「二人は困っていた」と「ていた」の形でも許容されるるが、それを連体修飾節内にいれると「た」が出現する。このような結果状態の「た」も使えるようになるといい形である。
「ている」の誤用のところでも触れたが、「主文成立時を基準として以前」（日本語記述文法研究会2007）なので「た」という説明も可能である。

### 7.3　過去を「ていた」で表す動詞―特に思考動詞―

第7章5節で過去を「ていた」で表す動詞群があるということに触れた。思考動詞・状態動詞・関係を表す動詞などである。これらの動詞では「た」は過去の変化、過去の状態は「ていた」で表現する。今回の例でどのようになっていたか、思考動詞の「思う」を例に、見てみよう。

(28) マリとケンはピクニックに行こうと思っていたので、ピクニックのところを地図で確認しに行きました。#ところが、ケンとマリは犬がいました。（EUS02　SW1　12）

(29) 二階の窓から入ろうと二階へ上がっていた時警官に見られました。#警官はケンを泥棒と思っていたのでケンは何回も説明してもわかってくれませんでした。#その時マリが出てきたのでケン（JJE69　SW2　　740）

(30) 最初日本語がやさしくみにつくと思っていたが、もっともっと難しくなる。（CG024 中国語 上級）

これらの例ではどれも、「思う」ことが過去であるということが表現されている。しかし、次の例は許容しにくい。

(31) ×それはもう、夜十二時だったので、ケンさんは、どうしようかなーと思っていた時に、警察さんに、電話をかけました。それで、警官さんが来てって、（思って電話しました）（EAU18　　ST2　　1010　　40）

(32) ×梯子を使って家に入ろうと思いましたが、梯子を上がる時、警官がこれを見て、泥棒と思っていたケンに話しかけました。マリはこれを聞いていたか起きて、出て警官に説明して、ケンは助かりました。（泥棒と思って）（TTR56　　SW2　　640　　20）

(31) はどうしようかと考え、結論をだして警察に電話した、(32) は警官はケンを泥棒と思って話しかけた、ということが書かれている。ここでは一つの事態の結論を出したことになるため、変化を表す「思って」となる。

(33) ×どの方法は外国語がうまくなりますか、私の考えに両面ありますと思っていた。一面は勉強の興趣を育つ、他面は生活の中で活用する。（思う）（CG056　中国語　上級）

(33) は外国語が上達する方法について述べている。外国語学習法についてのこの人の考えを述べており、(32) のように何かのきっかけで考えが変化したわけではないので、「る」つまり「思う」で十分であろう。

一方、(34) は正しい。

(34) 二人は、一緒に、ピクニックしに行って、着いたら、楽しくピクニックしようと思っていたが、「えーなんでピクニックの、す、なんで家で用意したピクニックの食べ物が、全部無くなったの？」と驚きました。（CCT18　ST1　　850）

(34) は、ピクニックしようと思っていたが状況が変化した、と述べており、完了の文の条件に合っているため、この「思っていた」は正しい。

「思う」は過去の変化は「た」で、過去の状態は「思っていた」で表現する。「ていた」が安定するためには完了の文にするとよい。

## 7.4　完了

第 7 章 10.5 で完了について述べ、完了の文が安定する条件として以下の 4 点をあげた。

1) 話題の焦点が「た」節にあること。
2)「ていた」節で表現されている状況と「た」節で表現される事態が状況の変化を示すものであること。「ていた」節から当然考えられる事態を「た」節で表現した場合は許容度が低くなる。
3)「ていた」節と「た」節の間に時間的な切れ目が存在すること。

4)「発見」の意味を含むこと。
5）外部からの描写の文にすること。

学習者の文を見ながら上の条件について考えよう。

(35) インターンシップ、あのこ、こ、あの十二年、十す、二千十三年の夏、その二か月間のインターンシップをやっていた　　とも、もう話したんですが、〈はい〉あの私がその会社で、あの働くことになりました（EUS02　I　　62070　3080）
(36)「私の家です」と伝えましたが、警官はあやしいと思いました。ところが、警官がケンのＩＤを確認していたところ、マリが起きて、二階の窓から顔を出しました。マリは警官に「あの男は夫です」と言いました。（EUS02　SW2　1770）
(37) その名前は、はい<C>市場？何？何え、違うな<K>んー、クリスマスの、あ、知っていたけど 忘れてしまいました（FFR40　I　　29560）

(35) はインターンシップをやっていた、そして、その後その会社で働くことになった、(36) は ID を確認していた、そこへマリさんが顔を出した、(37) は知っていたけれど忘れた、のように、「ていた」節と「た」節の間で状況の変化が起きている。そして、(35) では「もう話したんですが」、(36) では「マリが起きて」、(37) では「けど」などで、前の節と後ろの節の間に切れ目を表現している。このような形をととのえ、上の 4 つの条件を活用することで、「ていた」節の完了は作りやすくなるといえるであろう。

## 8　「る」の誤用

「る」になるのは習慣・繰り返しを表すもの、属性を表現するもの、一般的なことを述べるものである。『作文コーパス』では一般論の誤用が多かった。

(38) ×できれば周囲の外国人と交流して、付き合っていたら、知らず知らずうちに、外国語が上手になっていた（CG026　　中国語）
(38)’外国人とつきあうと、外国語が上手になる。

(38) は一般的な語学の勉強の仕方を述べている文章の一部である。自分の経験を述べているわけではない。一般論を述べる場合は、(38)’のように、「と」の方が個別的な経験でない一般的な因果関係を表しやすい。「たら」は個別的な条件であり会話的である（市川 2005：404）。そして「と」の文の前件の述語は「る」である。また、結果についても「上手になる」と「る」で表現することによって個別的でない必然的な結果が表しやすくなる。

(39) ×これにしたがって、私たちの生活の中で新聞や雑誌が点めていた比率が大きく変わってきている。（KG121　韓国語）

(39)’私たちの生活の中で新聞や雑誌の占める割合が大きく変わってきている。
(40) ×インターネットが速く発展していた今、いろいろな資料とエンフォーメーションは易しく手に入れる。そのため、もう新聞や雑誌はいらない、と言っていた人もいる。（CG121　中国語）
(40)’インターネットが発展する現在、もう新聞はいらないという人もいる。

(39)（40）は一般論を述べている。「生活の中で新聞が占めている割合」「発展している今」「言っている人」のように「ている」で表現することもできるが、論述文では（39）’（40）’のように「る」のほうがより適当な形と言える。
過去の文脈の中で物事を述べる場合、例が過去の場合などでは、学習者は過去にひかれて「ている」の過去を、と考える可能性がある。しかし、一般的なことは時制に関わらない「る」で表現できた方がいいであろう。

## 9　「ている」の誤用

現状を表現する場合は「ている」であり、「ていた」を使う必要はない。

(41) ×ツリーがあります。そのツリーは、倒れて、ツリー、上、ツリーの上の、りんごも、んー、落ちていた（落ちている）（JJC46　D　3620　140）
(42) ×あのーここに一皿も壊れていますねー<C>うん<K>ん、どこからこ、あのーこぼれていたみたいで#でええとそのーあのー死んでいる人のそばに、ええと何か書いてあるーええと紙がありますが、（こぼれている）（EUS14　D　2590　130）

上の例は「落ちている」「こぼれている」で十分であろう。しかし、過去の文脈がある場合、学習者は過去のことを考え、「ている」を「ていた」にしたのではないかと類推される例もある。

(43) ×大学に入ってから日本語を勉強していた，いまうまくなるのはまだ言えないけども，勉強の心界が色々迷っていた。（CG079　中国語）
(43)’大学に入ってから日本語を勉強している。勉強についていろいろ迷っている。
(44) ×韓国人は日本語を勉強するのがほかの国のことばよりやさしいと思う　韓国語と日本語は、以ている点がたくさんあったからた。（中略）またかんじごのはつおんもほどんど以ていた。（KG001　韓国語）
(44)’かんじごのはつおんもほとんど似ている。

（43）は大学に入ってから今まで日本語を勉強している学習者の文章である。途中迷っていた時期があった、と述べているところから、過去に迷ったことに意識がいき、日本語学習についても、過去の一定の時期までであるかのような表現になってしまったのであろう。し

かし、この学習者の場合、現在も勉強を続けているので、（43）’のように「勉強している」と「ている」で表現するのが適当であろう。（44）も同様に、「韓国語と日本語は似ている点があった」と述べたために、「発音も似ている」と韓国語と日本語の性状を述べる「ている」を使うべきところで「ていた」と過去になってしまったのであろう。しかし、こちらの例も、発音が変化するわけではないので現状と関係する「ている」を使うべきであろう。

従属節の状態性述語が主節のテンスと同化するという点ができていない誤用も見られた。

（45）×そうですね、すごく印象に残っていたのは〈うん〉、やっぱり最近ある一映画を見ました、でも昔はやっぱり『一リットルの、なみ、涙』（残っているのは）（CCT15　Ｉ　19250）

（46）×入りたいでした、でも、その時は警官が見ていました。警官が、あの彼は何をしてたと聞いていました。その後、ケンは「あの私は鍵が持っていませんでした、（何をしていると聞きました）（CCT28　　ST2　　1260）

（45）（46）は学習者が、述べている内容は過去のことであると意識して「ていた」を使った可能性もある。話の内容が過去、警官の質問は過去のことと考えたのであろう。しかし、状態述語の「る」は文末のテンスに同化し、「た」を使うのは文末の事態と時制上差がある場合、と説明されている（寺村 1982）。（45）は「印象に残っているのは～だ」にする、あるいは連体修飾節内では「ている」が「た」に変化する、という規則を用いて「印象に残ったのは」とするのが適当であろう。（46）は「何をしていると聞きました」で「ている」が過去の時制に一致できる。

結果状態にひかれた間違いかと類推される例も見受けられた。

（47）×　後、着物一着ている人は一人います。バス停があります。肉屋と、カフェ店があります。後、倒れていた木が一個あります。後カップルが、ベンチに座っています。二人の子供は川で水を遊んでいます。（倒れている／倒れた）（CCT10　D 2780　　310）

上の例は、「着ている」「座っている」「遊んでいる」と他の語はすべて「ている」で使えているのに「倒れている」だけは「ていた」になっている。「倒れた」と結果を表現したかったのかもしれない。これは「倒れている木」あるいは「倒れた木」になる。

## 10　固定化した活用形

学習者が使い慣れた活用形が固定化しているのではないかと思われる文が見られる。これは正用が「る」「ている」「た」のどの形においても見られたので、別に節をたてる。

(48) ×あの、例えばお、兄、兄がね免許？、運転ー<C>〈うんうん〉<K>その免許を持っていたとき、どこに、え、来たいですか？とか（免許を取った時）（EAU18　I　38940　1500）

(49) ×ケンをマリは公園に届いたとき、散歩してきれいな景色を見た。#その時、お腹が空いていたので、座っている所を探した。#バスケットを開けた瞬間に、丸が突然飛んできた。（お腹がすいたので）（座るところ）（EAU18 SW1　1140　60）

「持つ」は初級では「持つ」「持たない」の形でなく「持っている」の形で教えられる(1)。「お腹がすく」「座る」も、単語レベルでは辞書形も触れるであろうが、授業中は「〇〇さんはお腹がすいていますか」「いすに座っています」などのように「ている」の形で取り上げられる。その影響であろうか、他の活用形が使いにくいように見受けられる。上の文では「免許を取った時」「お腹がすいたので」「座るところ」としなければならない。活用形の固定化をほぐし、一つの活用形だけでなく、テンスもアスペクトもいろいろ使えるということは中級以降、学ばせなければならない。つまり、固定化が起きやすい語(2)は教師が意識的に様々な活用形に触れさせるようにしなければならないであろう。

## 11　まとめ

学習者の「ていた」の誤用をみてきた。

学習者が「ていた」を使う時に間違えるのは「た」が最も多く、続いて「ている」「る」の順である。

テクストによって誤用の種類は異なり、事態の連続を表現する文章では「た」との誤用、論述文では「る」との誤用が目立った。

誤用の原因は以下のようである。

・まるごとの事態が使えず、事態の連続の「た」で表現すべきところを、過去の継続と考え「ていた」にする。

・文末ならば「ている」「ていた」になる形が連体修飾節内では「た」になるのが難しいようである。

・完了の形が使えれば正しい文になる例が見られた。完了の文が安定する条件は以下のようである。

1)「ていた」節で表現されている状況と「た」節で表現される事態が状況の変化を示すものであること。「ていた」節から当然考えられる事態を「た」節で表現した場合は許容度が低くなる。

2)「ていた」節と「た」節の間に時間的な切れ目が存在すること。

3)「発見」の意味を含むこと。

4) 外部からの描写の文にすること。

・活用形を固定化して記憶していることによる誤用が見られた。

注

(1) 「持つ」の扱いを 2 種類の日本語教科書で見てみよう。

『みんなの日本語』では巻末の単語リストには「持つ」はなく、「もっていきます」「もってきます」と出ている。文型練習では第 15 課で「知っている」「結婚している」「住んでいる」の「ている」を学ぶ時、文型練習として、

- 車を持っていますか
- 自転車を持っていますか。

の文があげられている。

また、17 課で「なければならない」を学ぶ文型練習で

- パスポートを持っていかなければなりません。
- あしたも保険証を持ってこなければなりません。

のように、「もってくる」「もっている」の形で提出されており、「持つ」「持った」「持たない」のような形はリストの上では紹介されていない。

『大地』では、13 課の単語リストに「もつ」があげられており、文型練習では「ましょうか」のところで、「荷物を持ちましょうか」という文があがっている。

『大地』で学ぶ学習者は「持つ」という動詞は特に「ている」と共に使う、という印象は持たずにすむ可能性があるが、『みんなの日本語』で学ぶ場合、教師が気をつけなければ、学習者は「持つ」は多くの場合「持っている」「持ってくる」「持っていく」のように「て」の形で使うと理解する可能性がある。

(2) 第 7 章でも述べたが、山形大学の黒沢晶子氏、筑波大学の堀恵子氏による指摘である。両氏は活用の固定化が起きやすい語として「持つ」「知る」をあげた。

# 第９章　「ていない」の用法

「ていない」の研究では早くから「なかった」と「ていない」の問題が取り上げられてきた。

寺村（1984）は動作・出来事を表す「た」には過去と完了があり、完了の否定は「ていない」が使われると述べている。

（1）モウ昼飯ヲ食ベタカ。
　　イヤ、マダ食ベテイナイ。
　×食ベナカッタ。（寺村 1984：332）

日本語教育の初級教科書でもこの考えがとりいれられている(1)。

これに対し、工藤（1996）ザトラウスキー（1982）などは完了という特定の用法の否定だけでなく、もっと広範囲で「ていない」が使われると述べている。

本章では「ていない」がどのように否定を表しているか、検討する。

## 1　「ていない」についての先行研究

高橋（1994:203）は「しない」「しなかった」「していない」「していなかった」の使い方について、「「していない」は、現在までに運動がないことをあらわす。前過去というテンス的な意味をもつものから、そのテンス性をよわめて、過去にそういう運動がないという（中略）経験・記録的な意味をもつものにかわり、それからさらに、過去に運動がなかった事実をあらわすという過去形相当の意味をもつものにいたる道すじをあゆんでいる」と述べ、「していない」の使用は歴史的変遷の中にあるとしている。

しかし、上の議論は会話や新書においても同様なのであろうか。会話、新書を用いて「ていない」を再度検討する必要があるといえる。

工藤（1996）は否定と肯定の表現の違いについて、否定の発話は肯定的想定が前提になければ成立しないとして、例えば以下のような発話は、この人が映画を見に行くことになっていたという肯定的想定がなければならないと述べている。

（2）「ぼく、今日映画を見に<u>行かない</u>」（工藤 1996：84）

否定のアスペクト・テンス形式は表１のような関係であり、括弧内は一定のコンテクストで過去の肯定的想定を否定しうるとしている。

一定のコンテクストとは、①先行発話において肯定的想定が言語化されているか否か、②肯定的想定は強いか否か、③発話時において肯定的想定のアクチュアル化の可能性が残されているか、である。以下工藤（1996:88-94）の説明に従って内容を見ていく。

表1　否定のアスペクト・テンス体系(工藤1996)

| | 完了相 | 継続相・パーフェクト相 | 反復相 |
|---|---|---|---|
| 非過去 | シナイ | シテイナイ | シナイ・シテイナイ |
| 過去 | シナカッタ<br>（シナイ） | シテイナカッタ<br>（シテイナイ） | シナカッタ・<br>シテイナカッタ |

先行発話において肯定的発話が言語化されていれば、過去の文脈においても「しない」「していない」の使用が許される。

(3)「おとといの夜、先生は当直だったんだがね、君は学校に来なかったかい。」
「学校になんか来ません/来ませんでした。」（工藤 1996：91）

しかし、肯定的想定の言語化がなければ「しなかった」「していなかった」の使用は義務的になる。

(4) 日曜の夕方、夜の勤めに出て行く姿をして、坂本さんが扉を叩いた。
「わたしね、名古屋へ行かなかったの。」（工藤 1996：92）

発話時における肯定的想定の強さと否定のアスペクト・テンスの関係は、まず、アクチュアル化の期待が強い場合は「しない」が用いられるとしている。

(5) もう 10 時だ。まだカペーの妻は出てこないぜ。なにをしてやがるんだ。
（工藤 1996：95）

次に、「既に実現済みであると想定された出来事の、現在における非アクチュアル化」は「していない」（現在パーフェクトの否定）であるとしている。

(6)「伯母さんにつかまるぞ。」
「伯母さんはまだ帰っていないんだ。」（工藤 1996：94）

発話時において肯定的想定のアクチュアル化の可能性が残されていない場合は「しなかった」が用いられる。

(7) なぜ結婚しなかったの。（工藤 1996：94）

また、具体的に小説の会話文の中で「しない」「しなかった」「していない」「していなかった」はどのように使われるか分類している。その中で「していない」は継続相現在の否

定、パーフェクト相現在の否定、継続相過去の否定、反復相現在の否定で使われるとし、頻度の高いものはパーフェクト相現在の否定であるとしている(工藤 1996:116-125)。

以上は小説の会話文の分析である。小説の地の文では、過去形（「しなかった」「していなかった」）と非過去形（「しない」「していない」）がテンス的に対立しなくなるが、完成相（「しない」「しなかった」）と継続相・パーフェクト相（「していない」「していなかった」）の対立はくずれない(工藤 1996:128)と述べている。

工藤(1996)は、否定が肯定的想定との関係で用いられるとしたうえで、どのような条件で肯定のテンス・アスペクト形式と異なった形が用いられるかを整理した点が非常にわかりやすい。一定のコンテクストがあれば否定のテンス・アスペクト形式は肯定とは違うものが用いられるということを明確に示し、肯定と否定でテンス・アスペクト形式が違うことを整理した点が大きな前進であろう。

なお、表 1 に関して言えば、完了相、継続相、反復相、パーフェクト相と分類して肯定否定の形をあげているが、それは完了相の否定は完了相が担うということを意味していない。工藤（1996）では完了相の「た」の疑問に対して継続相「ていない」で答える例が多々挙げられている。

工藤（1996）は否定の現在パーフェクトが使われる条件は①先行発話に肯定的発話が明示されていること、②現在においてまだ肯定的想定が実現していないこと、③発話時において肯定的想定の実現の可能性が残されていること、としている。これをそのまま認めれば、上の条件を満たす場合は過去の文脈においても「ていない」で応答することが可能と考えられる。つまり、過去の否定的な事態でも、実現の可能性がなくなっていない事態は「ていない」で表せることになる。従来、完了の否定は「ていない」、過去の否定は「なかった」で示されるとされてきたが、工藤（1996）により、「ていない」の用法はかなり広がることになる。この理解は正しいのだろうか。また、小説の地の文では完了相と継続相の対立は崩れないとしているが、否定の場合はそのように言っていいのだろうか。

ザトラウスキー（1982）は、外国人の目から見て日本人の否定の答えが文法的なテンスと合っていない点に疑問をもち、日本語母語話者の否定表現の調査をした。「過去に何々したか」という質問に対する答え方を、500 名の日本語母語話者を対象に電話で質問し、その結果をまとめている。それによると、「『徹子の部屋』を見ましたか」という質問に対しては、「見ていない」が 50%「見ない」が 20%、そして「見なかった」は 13%であったと述べている。日本語母語話者は過去を表す「～したか」に対する答えで「ていない」を使うことがかなり多いということが実証された。しかし、ザトラウスキー(1982)は「していない」と「しなかった」の使い分けについてはまだ述べていない。

井上（2001）は「た」と経験・記録用法の「ている」の違いについてまとめている。

井上（2001:120）は過去を表す表現に「た」と「ている」があるのは、事態に対する筆者の捉え方の違いによるとしている。「た」は「実現の経過（少なくともその一端）が把握できている過去の出来事を、特定の統括主題に従属しない独立の出来事として述べる」のに対し、経験・記録用法の「ている」は「過去の出来事を、発話時において有効なある統括主題

（複数の類似の出来事の背後にある一つの状態）に従属する一事例として述べる」としている。

また、「た」には、「発話時までに出来事が実現済み」という意味をもつパーフェクトの「た」と、過去的な「た」があり、井上（2001）はパーフェクトの「た」を「（モウ）シタ」、過去的な「た」を「（＊モウ）シタ」と表記してその違いを論じている。「（＊モウ）シタ」は実現の経過の一部が把握できている場合に使われ、当該の事態を統括主題に属さない独立した出来事として述べる。一方「（モウ）シタ」は一定時間内にそのことが完了するという実現想定区間が存在するとしている。そして、文脈上「発話時は当該の実現想定区間内にある」と解釈できる場合は自動的に「もう」の意味が読み込まれる」（井上 2001:129）とし、実現想定区間は文脈が左右されるとしている。

否定との関係では、「（＊モウ）シタ」、つまり過去であり実現想定区間が存在しない「シタ」の否定は「（結局）シナカッタ」になり、完了的な「（モウ）シタ」の否定は「（マダ）シテイナイ」（井上 2001:132）になると述べている。

また、実現の時の経過の問題を取り上げ、「出来事が実現されないまま終わった経過が把握されていな」い場合は「シナカッタ」でなく「（＊マダ）シテイナイ」つまり「まだ」の意味を伴わない「シテイナイ」が用いられるとしている（井上 2001:134）。

井上（2001）は三つの問題を取り上げているようである。一つめは独立的な事態は「シタ」、統括主題が存在する場合は「シテイル」になる問題、二つめは実現想定区間が存在する「（モウ）シタ」「（モウ）シテイル」と「（マダ）シテイナイ」の問題で、実現想定区間が想定できれば肯定は「（モウ）シタ」、否定は「（マダ）シテイナイ」になる。三つめは時の経過が把握できるかどうかを取り上げる「（＊モウ）シタ」「（＊モウ）シテイル」と「（＊マダ）シテイナイ」の問題である。実現の時の経過が把握できる場合の肯定は「（＊モウ）シタ」、否定は「シナカッタ」になるのに対し、把握できない場合は、肯定は「（＊モウ）シテイル」否定は「（＊マダ）シテイナイ」つまり「もう」「まだ」の意味を持たない「している」「していない」になる。

井上（2001）は「統括主題が存在するか否か」、「実現想定区間があるか否か」、「実現の過程を把握できるか否か」、という三つの問題と「た」「ている」「ていない」を関係させて論じ、それぞれについて、「た」と「ている」の使い分けが存在するとしている。本稿もこれらの問題を取り上げる。

松田（2002）は実際の言語使用では「過去に何々したか」に対する否定の答えとして「しない」「していない」「しなかった」の三形式が観察されるが、その中でも「していない」に注目し、「過去に何々したか」に対してなぜ「していない」が使えるかを考察した。

松田(2002)は、「開始結果」に「ている」が結びついた場合は「動作の持続」、「終結結果」に「ている」が結びついた場合は「結果の持続」と解釈できるとし、従来動詞の意味との関係で考えられてきた「している」すべてを「～した結果がある」と表すことができると述べている。そして「して」は根本的には「した」であると考え、「している」「していない」については下のようにまとめている。

| | ＜過去時に/今までに＞ | ＜発話時判断＞ |
|---|---|---|
| シテイル・シテアル | ＝何々シタという事実(結果)が | アル |
| シテイナイ | ＝何々シタという事実(結果)が | ナイ(松田 2002：38) |

松田（2002:39）はまた、工藤(1989)のパーフェクトを取り上げ、＜ある設定された時点においてそれよりも前に実現した運動がひきつづき関わり効力をもっていること＞という規定は、肯定形シテイルには有効であっても否定形シテイナイには当てはまらないとし、それは、否定形はそもそも効力がないことを述べている形だからであるとしている。

そして、ザトラウスキー(1982)の「ていない」のアスペクト性は「－完成＋継続」であるという考え方を批判している。「ていない」が「状態の継続」を表すとするならば「いずれその状態が終わる」ことが想定されるはずであるが、実際の「していない」には以下のような例があり、（8）ａではこれからパーティーに出ることはできない。

（8）昨日のパーティーに出た？
　ａううん、出ていない。（→「これから出る」ことは不可能）
　ｂううん、出なかった。(松田 2002：35、（　）の説明も松田)

この例では事態の実現が発話時以降は不可能であり、「状態の継続」と捉えることができない。そこで松田(2002:40)は「していない」の基本的意味は過去に何々したという事実(結果)がナイとすることを提案し、「していない」の語用論的意味を「発話時の判断として事実を提示する」　と述べている。そしてその根拠として Inoue(1975) が「している」に報告―証拠的な意味があると述べていることをあげている。これに対し、「シナカッタ」は事実説明などを付加して回想的に述べる表現形式であり、文脈によっては意志による判断という意味を表すとしている。

松田(2002)は「していない」の意味を「過去に何々したという事実（結果）がない」ということであると一般化し、井上（2001）の「なかった」「ていない」を別のものと捉える考え方と対立している。

工藤（1996）では先行発話でのテンスが表現されていることが「ていない」と関わると述べられ、井上（2001）では話者が事態を直接把握できるか否かの関係、統括主題の存在、実現想定区間の存在が取り上げられた。松田（2002）は「していない」は「過去に事実（結果）がない」こと、と一括して論じている。本稿はこれらの論をどのように理解すればいいか、例文を分析する中で考えてみたい。

迫田・家村・川根・崔(2008)は、アスペクト習得仮説が「ている」だけでなく「ていない」にもあてはまるのか、という目的でサコダ・コーパスを用いて縦断的に観察・分析した。その結果、「ている」は多くの学習者でアスペクト習得仮説に当てはまる出現傾向を見

せたが、「ていない」はアスペクト習得仮説に当てはまらない使用傾向が見られた。そこから、「ている」と「ていない」の習得は異なる可能性があると述べている。

迫田ら（2008）によると、「ていない」は必ずしも「ている」が出現した後に、またはそれと同時に出現するとは限らない。むしろ、「ていない」は「た」が出現した後に、または、それと同時に出現する、という興味深い報告をしている。本稿はこの報告は貴重なものであると考える。

日本語記述文法研究会（2007）は、肯定否定の非対称について述べる節でテンス・アスペクトの表現に関しても非対称が見られるとして、以下のような例文をあげている。

(9) A　「昨日、先生に会った？」
　B1　「うん、｛会った／＊会っている／＊会う｝よ」
　B2　「いや、｛会わなかった／会っていない／会わない｝よ」
(10) A　「もう、開始時間になった？」
　B1　「うん、もう｛なった／なっている／＊なる｝よ」
　B2　「いや、まだ｛＊ならなかった／なっていない／ならない｝よ」
（日本語記述文法研究会 2007：216）

(9)（10）によると、「ていない」が使用できる範囲は、「もう～か」に対する「まだ～ていない」よりもっと広いようである。

以上、先行研究の検討から以下のような疑問が出てきた。

- 「た」と「ている」は事態の捉え方が異なり、「なかった」と「ていない」も異なっているという考え方と「ていない」は「ある事態（結果）がない」と一般化する考え方があるが、「ていない」をどのように捉えればいいのであろうか。
- 過去の出来事を否定する場合に「ていない」を使うことの条件として、①先行文脈で過去が明示されていること、②事態を直接把握する立場にないこと、③統括主題が存在すること、④実現想定区間が存在すること、⑤意図的否定でないこと、があげられている。これらはどの程度有効な条件であるか。
- 「ていない」はテクストの違いによって違う使い方がなされているか。工藤（1996）の議論は多くは小説の会話の文を使っている。そして、小説の地の文では完了相と継続相の対立は維持されるとしている。ザトラウスキー（1982）は電話のインタビューである。本稿で用いている会話文と新書での「ていない」は従来の研究と同じ傾向を見せるであろうか。

## 2　「ていない」の分類方法について

### 2.1　工藤（1996）の分類

「ていない」の意味を分類してみよう。

工藤(1996)の分類を詳しく見てみる。工藤(1996:116-125))は否定のテンス・アスペクト形式の意味として以下のような項目を挙げている。

・ 完成相未来/現在/過去の否定
・ 継続相現在/過去の否定
・ パーフェクト相現在の否定
・ 発話時におけるアクチュアル化の可能性の過ぎ去り (2)
・ 発話時における非アクチュアルな事態の過ぎ去り (3)
・ 反復相現在/過去の否定
・ 特性の否定

そして、小説の会話部分の「していない」の用法について、①継続相現在の否定、②パーフェクト相現在の否定、③継続相過去の否定、④反復相現在の否定で使われるが、頻度の高いものはパーフェクト相現在の否定であるとしている。

#### 2.1.1　継続相現在の否定

工藤（1996）は現在の動作継続も結果継続もどちらも「継続相」と一括して扱っている。以下のような例が見られた。

（11）「酔ってるな、亜紀」
　「酔ってなんかいないわ」
（12）「あれ、しゃれたことを言う奴だな。お前、シャツを着ていないのか」
　「着ていませんよ。そんなもの」
（13）「母さん、泣いてはだめよ」
　「泣いてはいませんよ。ちょっとも泣いてはいないでしょう」
　（工藤 1996：117-118）

（11）（12）は結果継続だが、（13）は動作継続の例である。上の例は現在の否定である。

#### 2.1.2　パーフェクト相現在の否定

工藤（1996:119 - 120）は「発話時までの時間帯における肯定的想定＜現在パーフェクト性＞の非アクチュアル化を表す」を表すものはパーフェクト相現在の否定であり、これらは「しない」「しなかった」には言いかえることができないとして以下の例文をあげている。

(14) 「陽子、ドライブに行こう」
「あなたの名前は聞いてないわよ」
(15) 「朝食を食っていない。飯を食べよう」

＜記録的パーフェクト＞＜経験的パーフェクト＞の否定もあり、これらもシナイ・シナカッタにおきかえできない。

(16) 「瀬沼さん」と専務が弁護士に言った。関野の耳には遠く聞こえた。「銀行を調べたら、その男は割引の現金を受け取っていませんよ」
(17) 「空港警察の者ですが、ちょっと署まで御同行願えませんか」
「け、警察って、俺、なんにもしてないよ」

「過去の特定時点を明示する形式と共起」し「現在との関わり（完成的出来事がアクチュアル化しなかったことによる効力・影響の存在）を明示する」場合も「していない」が使われる。この場合は「しなかった」に置き換えできるが、そうすると現在との関わりが焦点化されない、としている。

(18) 「とにかく、今朝早いんで、二人とも昨夜は殆どねていないんだ。夜まで休ませてください」

「まだ」あるいは「しばらく・ずっと」のような副詞と共起する場合は「していない」が基本的だが、「しない」も使える場合があると述べている。

### 2.1.3 継続相過去の否定

工藤（1996:124）は、「先行発話で明確に言語化されている＜肯定的想定＝過去の継続性の否定＞はシテイナイの使用が可能である」としている。

(19) 「私はどれくらいウトウトしたのかな」
「20 分くらい」
「20 分か。2 分かと思ったがなァ。君は何を考えていたね」
「何も考えていない」
「何か考えたろう」
(20) 「昔ははるか年上の、手の届かない大人という印象でした。たった 5 つしかちがってなかったのね。だまされてたみたい」
「だましてなんかいないよ」（例文、下線　工藤 1996：124）

2.1.1 でみた継続相現在と同様、動作継続も結果継続も継続相として一括している。
（19）は動作継続、（20）は結果継続である。
次の例は「肯定的想定を示す先行発話がないにも関わらず過去を示すシテイナイが使えるが、それは＜歴史的現在＞のシテイナイである」（工藤 1996:124）と述べている。

（21）「もうかなり経ったろうと思って腕時計を見ると、ほとんど動いていないんだ。俺はもうフトアゲハなんぞ来なくていいから、早く夕方になってくれればいいと思ったよ」（工藤 1996：125）

### 2.1.4　反復相現在の否定

反復相では「しない」と「していない」の対立は中和する。つまり、意味を変えることなく、「しない」と「していない」の入れ替えが可能である。
否定形式についての工藤（1996）の分類は、パーフェクト相現在の否定について用法の定義を明確にしているところが分かりやすい。一方、パーフェクト相現在の否定と継続相過去の否定の違いが理解しにくいと感じた。
王(2003:181)は「しない」「していない」「しなかった」「していなかった」が未来・現在・過去において「実現性」「継続性」「パーフェクト性」「反復性」「特性」の否定になりうるかどうかについて一覧表を作成している。本稿で関係する部分を取り上げると、「していない」については「現在の継続性の否定」「現在のパーフェクト性の否定」「現在の反復性の否定」「特性の否定」が可能とのことである。それに対し「しなかった」では「過去の実現性の否定」「過去の反復性の否定」「実現性の可能性の過ぎ去り」「実現性の時間的な過ぎ去り」が多いと述べている。
工藤(1996)王(2003)は「ていない」についてパーフェクト性の否定が多いと述べているが、松田(2002)はパーフェクトの否定は考え方としてありえないと述べている。両者の関係はどのように考えればいいのであろうか。肯定と否定でパーフェクト性は同じように考えていいのであろうか。また、否定された文がどんな内容を意味しているか検討する必要があるであろう。
ここまでは先行研究の紹介であったため、パーフェクトという用語を使ってきたが、以後は、本稿の用語である「効力持続」を使う。

## 2.2　本稿での分類

本稿は松田（2002）の提起した「何々シタという事実(結果)がナイ」を表す「ていない」、工藤（1996）の「発話時までの時間帯における肯定的想定＜現在パーフェクト性＞の非アクチュアル化を表す」否定が、どの程度使われているか、その使用実態を知りたいと考える。そこで、本稿の分類は、現在の否定の状態を表すものと、過去に端を発し現在にその影響があるものとを区別できるものにする。2.1.3 でみた「継続相過去の否定」（工藤 1996）という分類のしかたは採用しない。

本稿は「していない」を「継続性の否定」「効力持続の否定」「繰り返しの否定」「性状の否定」と４つに分類する。

### 2.2.1　継続相の否定

「継続相の否定」には工藤（1996）にならって動作継続も結果継続も含めた。動作継続について言えば、「ある動作をしないでいる」という動きを否定するものを「継続相の否定」とした。「ている」で動作を否定しており、これは現在の否定である。

（22）4902　09Ａ　辞書のひきかたも下手になるんですよね、勉強してないと、あった。（女性会話）

（23）1309　03A　でー、［社名］さんってけっこう上の、エヌエー（ＮＡ）とかも、ちょっとやってるじゃないですかー↑

1310　03A　頼まれてたりとかー。

1311　03A　やってないですか↑

1312　03C　えっ、やってないですよー。（男性会話）

（22）は「勉強し続けていないと」と読める。（23）は長期的にそのような仕事はしていないと述べており、継続的な仕事の話をしているので、このように継続性のあるものを「継続相の否定」とした。

また、（24）（25）のような結果状態を示す例も継続相の否定としてまとめた。

（24）2997　06Ｄ　え、三稿目、これ、注、注だけあのまだ入ってないけど、ほとんどもう、本編はもう完成です。（女性会話）

（25）2369　06A　あっ、おっきい部屋は、ぼくの知ってる限りではついてないですね。（男性会話）

（24）は印刷会社での会話である。原稿の注はまだできていないということを述べている。発話時点での結果状態の否定である。（25）は大教室にはクーラーがついていないと話しており、現状を問題にしているので、これらは結果状態の否定であり、現状を述べているので継続性現在の否定とした。

### 2.2.2　効力持続の否定

工藤（1996）は「発話時までの時間帯における肯定的想定＜現在パーフェクト性＞の非アクチュアル化を表す」ものをパーフェクト相現在の否定としている　。

本稿も工藤（1996）の考え方を参考にし、発話時までにある肯定的事態が起こらなかったこと、とする。

(16) 「瀬沼さん」と専務が弁護士に言った。関野の耳には遠く聞こえた。「銀行を調べたら、その男は割引の現金を受け取っていませんよ」
(17) 「空港警察の者ですが、ちょっと署まで御同行願えませんか」
「け、警察って、俺、なんにもしてないよ」（工藤 1996：120）

たとえば工藤（1996）の例文として前に挙げた例は（16）（17）ともに「しなかった」ことを表しているが、（16）は「受け取ったはずだ」という相手の想定に対し、「受け取らなかった」と非実現を述べている。（17）は「なにもしなかった」から警察に呼ばれる必然性はないと述べており、「したはずだ」と警察が考えていることが起こらなかったと表現している。

時との関係では、過去の事態、あるいは過去から現在に至る事態が関係する。

(26) 突然変異は一九〇一年、ド・フリースが提唱した概念で、ダーウィン自身はまだ突然変異という言葉は使っていない。（自然科学）
(27) ほんとうに特異的な「睡眠ホルモン」があるのかどうかについても、はっきりしたこたえは用意されていない。将来の研究に期待がかけられるゆえんである。（自然科学）

（26）は 1901 年以前にはダーウィンは突然変異という言葉を使っていない、と過去の事態を述べている。（27）は過去から現在に至るまでの時間を問題にしている。肯定が過去の事態で現在に影響があるもの、と時について明確にできるのに対し、否定はあることが「ない」と述べるため、いつの時点を取り上げるかについても明確にはしにくい。

結果状態との関係は結果状態が現在の状態を述べるのに対し、効力持続は過去から現在に至る時間を取り上げる点とする。

(28) わが国ではまだこのような施設がととのっていない。しかし、睡眠障害を専門とする医者は、日本にはかなりたくさんいる。（自然科学　結果状態）
(29) グールドがいうように、少なくとも形質の変化を起こすような進化に、静止した状態があることを認めてみよう。あるいは、今西錦司がいうように、現在の地球では理由はともかく進化が停滞していると考えてみよう。そうすれば、中間型化石が見つからないとか、有利な突然変異が起こっていないといった、ダーウィン進化論が抱えている矛盾のいくつかは、一気に解決してしまう。（自然科学　効力持続）

(28) は現在の状態を述べているため結果状態、つまり「継続性の否定」とした。一方
(29) は過去に突然変異が起こらなかったことを述べているため、効力持続とした。

松田(2002)は否定の文では「効力」を問題にすることは意味がないとし、パーフェクトという捉え方を否定に使うことを批判している。

（30）イタリアには一度も行っていない。（松田 2002：39）

たとえば（30）は「「イッタという効力が今、持続していない」とは解釈しにくく、また、「イカナカッタという効力が持続している」と考えてみることは、形態的にさらに難しい」としている。

本稿の「効力持続」の考え方は、肯定的想定が実現しなかったこと、であるため、（30）は「行く」ことが実現しなかった、という意味となり、効力持続として考えることが可能と判断する。

本稿で効力持続の否定として採用した例をあげる。

（31）宇宙のどこかで、ミニブラックホールが現在蒸発（中略）した、ということが全く無いともいえない。
　残念ながら、天体望遠鏡や電波望遠鏡でたえ間なく観測しても、そのような報告はまだなされていない。（自然科学）

（32）第二作目か三作目か、いずれにしても私の見ていない作品を放映していた。
（小説）

（31）は「たえ間なく観察しても」と述べていることから、過去から現在に至るまでの時間について観察し続けたがその状態がまだ発見されていないことを述べている。過去に発見があったことを述べるのであれば「発見された」と過去形が出てくる可能性がある。（32）は「見たことがある」という過去の経験を否定している例である。

「効力持続」の肯定が動作継続、結果状態どちらにおいても可能であるのと同様、「効力持続」の否定も、結果動詞を使った例でも可能である。結果動詞を使ったものであっても、過去から現在までの時間での肯定的想定の非実現を表し、過去の事態において結果がでなかったことが何らかの意味で現在に影響がある場合は効力持続の否定とした。

（33）1220　03Ｂ　だって、全額払ってないのに、全額分書いちゃいけないよ。
（女性会話）

（33）は過去の精算について話している。まだ全額払い終わっていない状態を語っており、肯定に置き換えた場合は「払った」と「た」が現れる例だが、これは過去と現在が関係するので効力持続とした。

### 2.2.3　繰り返しの否定・性状の否定

（34）は「繰り返しの否定」、（35）は「性状の否定」を示す例である。

（34）10509　17Ｂ　ああ、これ、ほんとに、新宿、すごいねー、おじさんたち。

10510　17A　あっ、そう、増えてますか↑

（中略）

10523　17A　最近増えたのかなあ、あたし、最近あのへん行ってないな。

（女性会話）

(35) 日本国憲法はそのように一貫していないで、アメリカ革命の思想と、ニューディール政策の思想とがともに流れこんでいる。（社会科学）

## 3　「ていない」の使用状況概観

2.2 で分類した結果を表 2 で示す。

表2　会話・小説・科学的入門書における「ていない」の用法

| | 会話 | | 小説 | | 科学的入門書 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 継続性現在の否定 | 108 | 43.5% | 27 | 40.9% | 32 | 29.6% |
| 効力持続の否定 | 126 | 50.8% | 24 | 36.4% | 50 | 46.3% |
| 繰り返しの否定 | 7 | 2.8% | 1 | 1.5% | 0 | 0.0% |
| 性状の否定 | 7 | 2.8% | 14 | 21.2% | 26 | 24.1% |
| 合計 | 248 | 100.0% | 66 | 100.0% | 108 | 100.0% |

「ていない」に関しては、会話が多く、小説が目立って少ないのが注目される。

用法について見ると、会話・小説では継続性の否定と効力持続の否定の出現割合があまり大きく変わらないのに対し、新書では継続性の否定はやや少ない。小説・新書では性状の否定が 20%以上あるが、会話では性状は非常に少ない。

以下に新書での継続性の否定の例を示す。

(36) イギリスでは、実際のところ理想と現実のギャップで悩んでいる面も少なくない。例えば若いイギリス人のドクターやナースの多くは、老人医療に携わることを嫌い、またイギリス人のソーシャル・ワーカーも老人の相談相手としては十分な働きをしていない。以前私はその理由をたずねてみたことがある。（社会科学）

(36) は「十分な働きをしていない」という動作的な意味が読み取れる。

効力持続の否定は、会話・小説・新書のどのテクストにおいても 30%を超え、これが「ていない」で大きな役割を果たしている用法であることがわかる。否定を「ていない」で表現する場合は、あることが起こり続けないという状況は少なく、多くの場合はある事柄が実現しないことを表現している。松田（2002）が「ていない」は「何々シタという事実（状態）がない」とまとめているのは的を射た分析であるといえる。

次に、「ていない」と「なかった」のことを考える。小説ではなぜ表 2 のように「ていない」が少ないのだろうか。それを考えるために 3 種のコーパスで「なかった」を検索し、「効力持続」の「ていない」と比較した。「なかった・ませんでした」で検索した結果が表 3 である。参考のために「ていなかった」の状況も一緒に出した。

| 表3 「なかった」「ていない」の出現状況 | | | |
|---|---|---|---|
| | 会話 | 小説 | 新書 |
| なかった | 137 | 716 | 245 |
| ていない | 248 | 66 | 108 |
| ていなかった | 48 | 49 | 5 |

「動詞＋なかった」の出現状況は会話が 140、新書が約 250 程度なのに対し、小説では 700 を超えており、小説では「動詞＋なかった」がよく使われることがわかる。

「なかった」対「ていない」の割合は、会話では約 1：2、小説では 10：1、新書では 2.5：1 という結果になった。

小説では「なかった」という過去形で多くの過去の否定が表されているのに対し、会話・新書では「なかった」という過去の否定だけでなく「ていない」という形での否定も比較的よく使われていることが分かる。特に会話では「ていない」の否定が「なかった」より多いという特色がある。

会話では現在を基準として話が進み、新書での基本的なテンスは「る」であるということを第 3 章で述べているが、そういったことも「ていない」の多さ、「なかった」の少なさに関係するであろう。しかし、「ていない」を「まだ～ていない」と教えるだけではこのように多くの「ていない」が使われている状況を説明しきれないということはいえるであろう。

小説ではない、現実の会話あるいは大学生が読む本あるいは書くレポートについて考えるならば、否定は「ない」「なかった」と同時に「ていない」を学ぶ必要があるといえる。会話や新書において「ていない」はどのように使われているのだろうか。先にあげた以下の疑問を順に見ていこう。

1) 「ていない」の中で「未実現」「非実現」を表す例はどの程度あるか。
2) 「ていない」を使う場合、過去の文脈が必須であるか。それはどのテクストでも共通か。
3) 「た」は事態を直接把握する立場にあるのに対し、「ている」は間接的な立場の場合に用いられる。では「なかった」と「ていない」に関しても同様のことが言えるであろうか。それはどのテクストにおいても共通であろうか。
4) 「ている」は事態を統括主題のもとにある事柄として描くとされるが、「ていない」についてもそれはいえるか。
5) 「ていない」にはどのテクストでも実現想定区間があるか。
6) 「なかった」は意図的否定、「ていない」は非意図的な否定であるか。

## 4 「ていない」の使われ方

先にあげた「ていない」についての疑問に対し、会話・小説・新書での「ていない」の用法を見ることによってどのような使われ方をしているか検討する。

### 4.1　「ていない」の非実現と未実現

「ていない」には、「まだ」と共に使う、寺村(1984)の用語でいう未完了と、より一般的な、松田（2002）が「何々シタという事実（状態）がない」という意味の否定が共に使われている。

ある事態が実現しなかったという否定を「非実現」、まだ実現していないが実現の可能性のある例、特に「まだ」を文中に含む例を「未実現」として、それぞれがどの程度あるか、調べてみた。結果状態、効力持続の否定の中に「まだ」を使う例が見られたので、結果状態・効力持続の文を、「まだ」を入れられるかどうか調べてみた。

つまり、（37）のように、「まだ」を入れることができる未実現と、（38）のように「まだ」がいれられない非実現の文に分けたのである。

「まだ」が入れられるものというのは、これから実現する可能性があると読めるもの(未実現)、「まだ」が入れられないものというのはすでに否定的な結論が出ていて、否定的な結論が事実となっており、実現の可能性が無いので「非実現」とした。井上（2001）の用語でいえば「（＊まだ）ていない」である。

（37）576　02A　留学志願書は<u>来てないの</u>↑（男性会話　未実現）

（38）放棄されたのは、侵略目的の戦争・武力の行使等であり、自衛や制裁のための戦争・武力の行使等は含まれない。したがって、侵略のための戦力は保持できないが、自衛のために戦力を保持できるかどうかについては、なにも<u>定められていない</u>。（社会科学　非実現）

（37）は、願書がこれから来る可能性が読めるので「未実現」とした。（38）は戦力の保持について定められていないと述べており、これから定められるかどうかはわからないので非実現とした。

なお、文中に「まだ」という語が入っていれば、実現の可能性がいささか低く見える例も未実現として分類した。

会話は書いてある文を読んだだけでは未実現の意図なのか非実現のつもりなのか、判断に困る例もあった。

（39）5961　12Ａ　セールスとして一番、大切なー、だれに対して情報を発信するんだと、そのだれって相手は、ただ会社として↑、全体で、<u>把握できてない</u>とゆうこと、だけじゃないのかな↑、（男性会話）

（39）の例は把握てきていないことは述べられているが、これから会社全体で把握する方向に行くかどうかはわからない。本稿では非実現としたが、未実現と考える可能性もあるように感じられた。

表 4 によると、結果状態と効力持続の文について言えば、会話では 30%、小説では 50%、新書では 45%が未実現の「ていない」であり、非実現の「ていない」が会話では 70%、小説で 50%、新書で 50%であった。この結果から「ていない」は未完了あるいは未実現という捉え方は一面しか見ていないということがわかった。

表4 結果状態と効力持続の例中の非実現と未実現

| | 会話 | | 小説 | | 科学的入門書 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 未実現の「ていない」 | 52 | 30.2% | 21 | 50.0% | 33 | 45.8% |
| 非実現の「ていない」 | 120 | 69.8% | 21 | 50.0% | 39 | 54.2% |
| 結果状態＋効力持続 | 172 | 100.0% | 42 | 100.0% | 72 | 100.0% |

非実現の例を再度あげる。

(40) たしかに、自国の安全を保持するための手段としての戦争については触れられていないのであるから、第一項が禁止しているのは、侵略戦争や侵略目的のための武力行使等である。（社会科学）

(41) 3350　07Ａ　いただきもんで小さいんですけど。＜笑い＞
　　3351　07Ａ　でも、なんの農薬も使ってないやつだからね。（女性会話）

(40) の「ていない」は憲法の条文で自国の安全を保持するための戦争について書かれていないと述べている。(41) は育てるまで農薬を使わなかったという意味である。両者ともに否定は確定している。

### 4.2　「効力持続」の否定と過去の文脈

工藤（1996）によれば、現在パーフェクトの否定が使われる条件は、先行発話に過去の肯定的発話が明示されていること、現在においてまだ肯定的想定が実現していないこと、としている。この節では、先行発話に過去の肯定的発話が明示されているかどうか、という点について検討する。

本稿は以下の例のように、「なかった」と言い換えられるものを「効力持続」の「ていない」として採用した。それが会話、新書という違ったテクストの中でどのように表現されているか文脈の中で見ていこう。

(42) 4374　09Ｆ　部活は入ってなかったの。
　　4375　09Ｃ　部活はやってません。（女性会話）

(43) 6972　13Ａ　どうーもー、楽しかったー↑、旅行は。
　　6973　13Ｂ　旅行↑、それがもう。
　　6974　13Ａ　ふなもり食べた↑、ちゃんと。
　　6975　13Ｂ　えっ↑
　　6976　13Ａ　→でも←焼けてんじゃない↑

6977　13Ｂ　ふなもり食べてないわ。
6978　13Ａ　食べてないのー。（女性会話）

（42）は 4374 行、（43）は 6972、6974 行のように過去のテンスが表示されており、「部活はやらなかった」「ふなもり食べなかった」の意味で「ていない」が使われている。これらの例では過去の文脈が明示されている。

しかし、次のように過去の文脈が明示されていない場合も見られた。

（44）842　02H　台湾の大学は授業でなくて、ほとんど討論。
843　02H　えー、こちらの、＜笑いながら＞ちょっと中国のほうは、い、行ってないんで、わかりません。
844　02H　内容ちょっと聞きそびれましたが。
845　02H　授業を見分ける＃あるんじゃないかなーとゆうふうに思うんですがー。
846　02H　そんなわけで、いろいろ条件が違いますけれども。（男性会話）

（44）は会議で、状況を知っているある教員が中国と台湾の大学の条件を比較している場面である。両者の授業形態を比べてそれぞれの大学の特色について学生にどのように情報を伝えるか相談している文脈である。その中なのでH氏が中国に「行っていない」といえばそれは「行かなかった」と理解できる。つまり知識レベルでの文脈が存在すると考えることができる。上のように、会話においては話し手聞き手の間で過去の事柄であることが情報として共有されている場合があり、そのような時はテンスが明示されなくても効力持続の「ていない」であることが理解される。これは場面があり話し手聞き手がある会話の特色といえる。

次に新書の文脈を見てみよう。新書では過去の事例をもとに議論を展開する場合でも、一般論や著者の判断などを述べる場合は「る」になるというテンス的特徴がある。その場合は、過去の文脈は明示されているといえるだろうか。

（45）突然変異は一九〇一年、ド・フリースが提唱した概念で、ダーウィン自身はまだ突然変異という言葉は使っていない。（自然科学）

（46）「ああ、自分の５年まえの姿はあれか。若いなあ、（中略）」と感心して眺めているぶんにはかまわない。人間には自己嫌悪という傾向があり、「いやだ、いやだ、（中略）」とばかりにナイフでぶすっとやったら、どうなるか。これこそ、タイムマシンで過去に旅した場合の最もむずかしい課題である。どう考えても矛盾は避けられない。（中略）ではキップ・ソーンの論文にはどう書いてあるか。残念ながら、何も書いていない。人間が通過できるワームホールを全くのナンセンスではないとしながらも、この因果律の破壊については一言も触れていない。（自然科学）

新書では（45）（46）のような引用的な文脈で効力持続の「ていない」が使われることが多い。これらは過去の著作や過去の視察などについて述べており、過去ということが文脈で示されているといえる。

また、過去の実験、過去の観察など、過去の事例をもとに物事を述べる場合がある。

（47）最近では、だいぶ改善されているようだが、日本と同様、高度な工業化を進めた国のつねとして国民の老齢化の度合は高い。しかも平均寿命は日本ほど改善されていない。（社会科学）

（48）何日も起きつづけていたところで、眠らなかったぶんだけ眠る必要はない。さきにふれた世界記録のばあい、一夜八時間として一一夜ぶん八八時間の睡眠がうばわれたことになる。しかし、この高校生の回復第一夜の睡眠は(中略)だった。(中略)一週間後になると、もはや七時間四分しか眠っていない。（自然科学）

（49）また忠敬の測量の基本となったのは、道線法といって、一地点から次の地点へとつぎつぎに方位と距離をはかっていく方法であり、（中略）ヨーロッパですでに実用化されていた近代的三角測量法の技術はまだ全然用いられていない。したがって伊能図では、実測された沿岸や測線に選ばれた道路に沿った部分のみが詳しく記載されているにとどまり、それ以外のところは空白のままとなっている。

（47）はドイツの高齢者対策を視察して書いた文章である。ドイツではこのようだったと書かれている。（48）は過去に行われた断眠実験の内容である。「さきにふれた実験の場合」と、過去の実験を取り上げていることが示される。（49）は伊能忠敬の地図について述べており、過去の文脈がそれによって示されているといえよう。これらの文脈においても否定は「ていない」で示されている。

会話では話者と聞き手の間の共有知識で過去の文脈が存在することがあり、その場合は文の中に形として明示されていなくても過去という了解があるといえる。

新書では引用であること、過去の事態をもとにして議論していることなどによって過去であることが明示されているといえる。

### 4.3　非実現の「ていない」と事態の把握のしかた

肯定的事態の実現過程の把握について、井上（2001）は、事態の一端を直接的に把握できる場合は「た」、間接的把握の場合は「ている」であると述べている。否定でも同様に、直接的把握であれば「た」、間接的把握であれば「ている」になるだろうか。直接的把握、間接的把握について、会話では以下のような例が見られた。

（50）862　02H　詳しいことは聞いてないんですが。（男性会話）

（51）2281　06H　あのですねー、わたしが去年出したんですがー、実はその前も通っていないんですよ。（男性会話）

(52) 9362　16Ｂ　あたしは少なくとも会ってませんね。（女性会話）
(53) 9594　16Ｂ　あたし、ねんこう、［名字］さんとこに。
9595　16Ｂ　頼んである。
9596　16Ａ　ほんとう↑
9597　16Ｂ　［名字］さんがー、１回も行ってないからー。
9598　16Ａ　うんうんうん。
9599　16Ｂ　だから２人（ふたり）で。
9600　16Ａ　２人（ふたり）で行くって。（女性会話）
(54) 7765　15C　ね↑、それを払うのはいいっつってるわけ。
7766　15C　払うのはいいんだけどー。
7767　15C　実はこの事故がこっち側の車両ー、修理代って請求してないんだよー。（男性会話）

(50) から (52) までは話し手が主体の文で、自己の体験を語っている。一方 (53) は「［名字］さんが」と述べているように第三者である。(55) は「こっち側」といっており、話者を含む自分側とも考えうるし、会社の他の人として第三者扱いすることも可能な例である。以上を見ると、直接の体験を述べる例も間接的な例も「ていない」で表現されていると言える。

肯定では自分が関係する事態は「た」他者の関係する事柄は「ている」で客観的に述べるようだが、否定は直接体験であれば「なかった」間接的把握であれば「ていない」ときれいに分かれにくく、肯定と違う傾向が見られるようである。

「ていない」と「なかった」が、会話の中で直接体験を述べているか、間接的な知識を述べているかについて、分類してみた。「なかった」は用法を分類していないので、「なかった」「ていない」の全例について、直接体験か間接表現かを区分した。

直接体験とは自分が直接的に体験したこと、見たこと、関わって知っていることとする。以下のような例である。

(55) 634　02Ａ うん、ぼくぴんときてないんだ、まだ。（男性会話）
(56) 1309　03Ａ　でー、［社名］さんってけっこう上の、エヌエー（ＮＡ）とかも、ちょっとやってるじゃないですかー↑
1310　03Ａ　頼まれてたりとかー。
1311　03Ａ　やってないですか↑
1312　03Ｃ　えっ、やってないですよー。（男性会話）
(57) 2997　06Ｄ　え、三稿目、これ、注、注だけあのまだ入ってないけど、（はい　Inf(女)）ほとんどもう、（はい　Inf(女)）本編はもう完成です。（女性会話）

（55）は自分の感覚、（56）1312 は自分の体験、（57）は自分が直接的に見たこと、このような例を直接体験とした。

間接的な知識は他者の体験、類推、一般的な事柄などを入れた。

（58）1220　03Ｂ　だって、全額払ってないのに、全額分書いちゃいけないよ。（女性会話）

（59）2632　06Ａ　けっこうねー、あの人、じぶ、いちおう自分の書いた本をさー、いろんなとこに寄付してるじゃない。

2633　06Ｄ　自分で書いてないような気がするんだけどさー。（男性会話）

（60）1638　04Ｂ　ですから、まあ、そうゆう介護を要する状態、どうゆう状態なのか、（中略）、えーたとえば、まあ施設に入ってる入ってない、によっても違うと思うんですが、家族として必要な介護とゆうのはどうゆうものなのか。（女性会話）

（58）は「あなたが払っていない」ということで他者の体験、（59）は「あの人」が書いていないことを類推しているので、他者である。（60）は一般的な話題なので他者とした。このように分類した結果が表 5 である。

表5　会話の中の「ていない」「なかった」 直接体験か否か

| | ていない | | なかった | |
|---|---|---|---|---|
| 直接体験 | 144 | 59.5% | 91 | 65.9% |
| 間接表現 | 97 | 40.1% | 42 | 30.4% |
| 不明 | 1 | 0.4% | 5 | 3.6% |
| 合計 | 242 | 100.0% | 138 | 100.0% |

「ていない」では直接体験が 60%で、間接的な表現が 40%で、「なかった」では直接体験が 66%、間接的な表現が 30%あった。「ていない」と「なかった」で直接的なことを述べているか否かはあまり大きな違いがあるとはいえなかった。

否定はある体験がなかったことを述べるので、直接的体験であれ間接的体験であれ、当該の事態がない、なかった、という観点からは同一レベルで扱うことができるため、自己の体験も他者の事柄も同じように「ていない」で表現するのであろう。

新書では個人的な体験を語る文脈が少ないので直接体験かどうかという基準を使える文脈は限られている。

（61）この文章をよく読んでみるとわかるように、グールドはダーウィン進化論にも、中立進化説にも全面的な同意はしていない。このことは、断続平衡説がダーウィン進化論に対して、どちらかというと批判的な面をもっているためであろう。（自然科学）

（62）その一つは人種差別問題、すなわち「レイシズム」である。白人が黒人奴隷を連れて大陸へ渡ってきて開拓に携わった。そのころからまだ二百年余りしか経っていない。（社会科学）

（61）はグールドの考えを「ていない」でまとめている。一方（62）は人種差別の歴史から現代は200年しかたっていないと述べている。新書では筆者が個人的な体験を述べる文脈は限られている。

以上、事態の推移を直接把握できる場合は「た」できない場合は「ている」という分類は、会話においても新書においてもあてはまらないといえる。会話では直接体験も間接的な体験もどちらも「ていない」で表すためであり、新書では筆者が個人的な体験を述べる文脈が限られているためである。

### 4.4　「ていない」と統括主題の存在

「ている」が独立的な事態を表現するか、あるいは統括主題が存在するかという問題は5章3.2.5で検討し、会話では統括主題の捉え方で説明するのは難しいが、新書ではこの基準は有効に働いているという結論を得た。否定では統括主題はどのように関係するのであろうか。

（63）8951　15Ａ　えー、［地名］の、えー講座のほうの、内容つめ、のミーティングに入ります。
8952　15Ｂ　はい。
8953　15Ａ　コピーはなにもとってませんので。＜笑い＞
8954　15Ｂ　はい。
8955　15Ａ　この、これ、社長お持ち、お持ちですか。
8956　15Ｂ　もってくる。
8957　15Ａ　あ、すいません。＜笑い・複＞
8958　15Ａ　これを見ながら、やりまっしょう。（女性会話）

（64）829　02Ｈ　でー、中国、あの中国の大学の場合はー、えー、時間数は十分でいちおうつめてやるような、てゆうふうにゆってました。
で、台湾の大学はそんなに時間ならないんですね。（中略）おー、書画骨董みたいなものでー、（中略）適宜取らないと、たぶん満たせないんじゃないかとゆうようことを心配しておりますがー。（中略）
ここに書いてある、このー、（中略）セーアン（西安）、それからシャンハイ（上海）ふたつの大学は、（中略）これもこのクラスにしたいんだけれども、これは実際に学生が応募してないような、（男性会話）

（63）は会議の資料の話をしている。「（資料の）コピーをとっていない」がこの発話の後も「これ、お持ちですか」「持ってくる」と同一資料について言及がある。（64）では学生の留学先の話題であり、大学の状況が説明され、それに対して学生が応募していないと現状

が続き、統括主題がある。「ていない」は会話でも（63）（64）のように統括主題のもとに話されている例が多く、「ている」とは違った傾向が見られた。

次に新書を見る。

（65）第四に、生物の種がどうしても何らかの変化をしなければならないときには、（中略）種全体が同時に変化するという。（中略）しかし、残念なことに、今西は肝心の変化のメカニズムについては何の説明もしていない。

今西進化論は、このような点でダーウィン進化論と根本的に違う進化論である。そのために多くの学者から、異端とされているようである。（自然科学）

（66）また、ソ連にはものすごい長寿者のいる地方もあるようだが、それを含めても全体の平均寿命は日本と比べはるかに低い。老人対策については、くわしく見たわけではないから何ともいえないが、特定の人は別にして一般国民のレベルでは必ずしもうまくいっていないのではないかと思う。

女性は堂々と暮らしていけるが、男性にとっては必ずしも愉快な社会ではないのではなかろうか。そして、そのことが十歳という平均寿命の差になってあらわれているのではないかと私は思うのだが……。（社会科学）

（65）は二つの段落にわたって今西進化論について述べており、はじめの段落では生物の種が変化しなければならないときには種全体が変化すると述べるが、しかし今西は変化のメカニズムについては述べていない、と統括主題のもとに話を続けている。（66）はソ連に高齢者対策がどのようになっているかを述べている。（66）も二つの段落でソ連の状況を述べているが、どちらの段落においても、ソ連の高齢者対策はうまくいっていないということを表現しており、老年問題への対応という統括主題のもとに話が進んでいる。新書でも統括主題のもとに「ていない」が使われているといえるであろう。

会話においても新書においても「ていない」は統括主題のもとに使われており、会話では「ている」と違う結果になった。これは、否定表現が肯定の想定を前提に用いられる（工藤1996）という否定の性質によるのではないだろうか。肯定の想定が文脈で与えられ、そのうえで否定を必要に応じて使うということから肯定の想定との間に統括主題と読めるものが現れることになるのであろう。

### 4.5　未実現の「ていない」文における実現想定区間

ここで実現想定区間について考えよう。井上(2001)は「（まだ）～ていない」には実現想定区間があり、実現想定区間がある文脈では、一定の時間が経過すれば話題の事柄は実現される可能性があると述べている。本稿では実現想定区間が実際の文脈でどのように表れるかを見てみる。井上（2001）に従い、この節では未実現を表す文、特に文中に「まだ」が表現されている文を対象にする。

はじめに会話である。

(67) 3095　06Ａ　そんで、くやしいから買わなかった。
3096　06Ｍ　→ガーディアン・エンジェル。←
3097　06Ｉ　買ってないの、まだ。
3098　06Ａ　文庫になるまで待ってやろう。(女性会話)

(67) のように「文庫になるまで待つ」から「まだ買っていない」と実現想定区間が明確な例もある。この文では文庫本が出版されれば買うことが考えられる。
一方、下の様な例も見られた。

(68) 1072　03Ｈ　けっこう混むんですか、バスって。
1073　03Ａ　うちからはね、まだ 乗ってないの。
1074　03Ｈ　@＜笑い＞
1075　03Ａ　途中から乗ってる。＜間＞(女性会話)
(69) 1013　03A　ちょっとまあ、これまだ、ちょっと［社名］にもまだ 話してないんだけどー。
1014　03A　そのー、＃＃＃＃につくじゃないですかー。
1015　03A　で、告知ポスターも、３種類ぐらいあるじゃないですかー。
1016　03A　でー、たとえばー、モーニング娘とかでやってるようなー、パネル展とかってできないかなー。(男性会話)

(68) は、バスは混んでいることが問題だが、うちからはまだ乗ったことがなく、これまでは途中から乗っていると話している。「まだうちから乗っていない」ということは「いつかうちからバスに乗る」と考えることはできるが、この例ではこの後、子供の保育所の話に移り、いつかうちから乗ることになるかどうかは話題にのぼっていない。いつか乗るようになるだろうと考えているとしたら、その場合は実現想定区間はあると言っていいのだろうか。井上 (2001) で例としてあげられたレポートを期限までに出すような期限のある出来事とは違い、世間話ではこのようにあいまいな形で「まだ～ていない」と現状を語ることはよくあるであろう。

(69) は電話での話である。音楽関係の営業の社員がタレントの宣伝の形について打ち合わせをして案を出している。「これまだ、［社名］にもまだ話してないんだけどー。」と前置きして一つの案を出しているが、これは社内あるいは相手企業に必ず話すということではなく、話として出してみて相手の反応を見ようとしている表現である。相手の出方によっては「それじゃ、今回は見送ろうか」という結果になることも考え得る。このような例の実現想定区間はどう考えるといいのであろうか。

(68) (69) のような、実現想定区間があいまいな例は、実現するかどうか不明だが、「まだ話していない」とすると「いつかは話すかもしれない」という含みが示され、話し手

の、その話題に対する前向きな姿勢を表現できる。4.1 で非実現と未実現が区分しにくい場合があると述べたが、未実現と分類可能な「まだ」を含む文においても、実現想定区間が明確とはいえない例があるということである。我々は会話の流れの中で、相手の気持ちを読み判断しつつ話を続ける。実際の会話では、この不明確さを逆に上手に使い、含みをもたせて表現することで会話をスムーズにしているといえよう。つまり、会話の中では非実現文と未実現文で明確に意味が違うとは言い切れない文があるといえるだろう。

このような実現想定区間が考えにくい例は今回の例の中では「まだ」を含む文の 1/4 ほどであった。

次に新書の例を見てみよう。

（70）しかし、当時は老年問題への対応はずいぶん遅れていたし、慢性の疾患に対する施設も未整備だった。最近では、だいぶ改善されているようだが、日本と同様、高度な工業化を進めた国のつねとして国民の老齢化の度合は高い。しかも平均寿命は日本ほど改善されていない。ということは、やはり老人にとってはまだそれほど良い環境が整っていないといえるのではないだろうか。なお、西ドイツの繁栄もこのところ、周辺諸国の若い力に支えられている傾きが強いので、その将来が危ぶまれる。（社会科学）

（71）最近の総合進化説では、化石の研究よりも遺伝学、特に集団遺伝学が主流である。そうした中で、進化論は、突然古くさい古生物学の分野から、新しい考えを突きつけられたことになる。正統進化説から断続平衡説への批判といえば、例によって化石にみられる断続平衡現象というギャップは、まだ中間の化石が発見されていないからだとか、化石になりにくかったからだといったことになる。（自然科学）

（70）は、この著者が西ドイツを訪れて老人関係の施設を観察したことを述べている部分である。筆者によると西ドイツは老人にとってまだいい環境ができていないように見えたと述べているが、条件が整うということはどんなことか、どこまでいけば条件が整ったといえるのかということは明らかではないだろう。社会に関する事柄では多くの要素が関わるので、日常的な一つの事柄を取り上げて述べる状況とは異なる。時代・文化・価値観などが関わる社会科学では一定の方向性や到達点などは表現しにくい。実際に、引用した段落の最後の文では「将来が危ぶまれる」という予想もあげられている。そこで到達点に至るという単純な実現想定区間を明確にすることは難しいといえよう。

（71）は「まだ中間の化石は発見されていない」と述べているが、あるいは中間の化石は発見されないかもしれない。こうした議論は重要視されず、別の議論に研究の主流がいくかもしれない。この例でも実現想定区間はあいまいといえる。自然科学で「まだ～ていない」の形は学説史を述べる場合によく使われていた。学説は批判し合いながら進んでいくもので、単純に一つの結論を認めて話を進めるものではないであろう。そのような文脈においては明確な実現可能性というものは想定しにくく、実現想定区間も考えにくい。

会話においてはあいまい表現的に「まだ」が使われる場合がある。「まだ～ていない」と述べることで、実現するかどうかは不明だが、実現の方向に気持ちが向いていることが示せるという意味で、この形は一種の配慮表現として使われる場合があるといえよう。

新書においては、多くの要素が関わるため、一つの方向、一つの結果、一定の成果の実現が想定しにくいということ、学説は批判しあい、対立する説を組み換え乗り越えて進むことから、実現想定区間は捉えにくい場合がある。

以上のように実生活の場で行われる会話においても科学的な議論の中でも「まだ～ていない」には必ずしも実現を前提にしていてそれが果たされていないということを述べるとは言い切れない例がある。

### 4.6　意図的な否定か否か

ザトラウスキー（1982）、松田（2002）は「なかった」を使う否定は意志的にそれをしなかったというニュアンスが含まれると述べている。意図的な否定であるかどうかの問題を検討しよう。

（72）846　03Ａ　このへんはデサイナー（はい）の人がつけてくれています。
（中略）
849　03Ａ　このへんはうっていただいてました。
850　03Ｃ　そうですね。
851　03Ｃ　そんな変なものは扱ってないですね。（女性会話）
（73）7765　15C　ね↑、それを払うのはいいっつってるわけ。
7766　15C　払うのはいいんだけどー。
7767　15C　実はこの事故がこっち側の車両ー、修理代って請求してないんだよー。
（男性会話）

（72）は原稿の校正の相談の場面である。A が持ってきた原稿のある部分はデザイナーが担当し、ある部分はそちらの会社でタイプを打ってもらっていた、と述べている。それに対し、C はそれほど変なものはやっていなかったと答えている。（73）は保険の請求の話の中で当該の男性が修理代を請求しなかったことを話している。

上の例を「なかった」にして考えてみよう。
（72）’それほど変なものは扱っていないですね。
（72）”　それほど変なものは扱わなかったですね。
（73）’実はこの事故、うちは修理代って請求してないんだよー。
（73）”実はこの事故、うちは修理代って請求しなかったんだよー。

（72）’は、今まで変なものは扱っていないと事実を述べているようだが、（72）”は意志を持って扱わなかったと話しているように感じられる。（73）’「請求していない」ことが現在と関係があるように感じられるのに対し、（73）”はすでに請求しないで処理が終わった、それはこちらが納得して請求しなかった、つまり意志をもって請求しないことを選んだように感じられる。

会話では「なかった」は意志的表現、「ていない」は意志が感じられない表現といえるであろう。

新書では話者の意志を述べる文脈が非常に少ないため、「なかった」が意図的であるかどうかは確認しにくい。

## 4.7　「ていない」と「なかった」

ここまでは「ていない」に焦点をあてて用例を見てきた。ここで「なかった」の出現状況を簡単に見てみよう。

「なかった」で検索をかけ、「ていなかった」は別に検討することとして省き、「ていない」に置き換えの可能性があるか否かを調べた。

まず、述語が状態性であるか動態性であるかで分類した。「名詞/な形容詞で（は）なかった」「名詞（が）なかった」「形容詞＋くなかった」「動詞の可能形＋なかった」「にすぎなかった」「せずにはいられなかった」「なければならなかった」などのような状態性の述語の否定はそもそも「ていない」への置き換えると意味が変わってしまう。このような例と動態性述語の否定とを分類したわけである(4)。述語部分が＃＃のようになっていて判断できなかったものは「不明」とした。

すると表5のように、「なかった」は会話では42%、科学では60%が状態性述語についていた。つまり、「なかった」の例の40%から60%は「なかった」で表現する必然性のある例であった。

表5　会話と科学的入門書Ⅰおける「なかった」の述語の性質

| | 会話 | | 科学的入門書Ⅰ | |
|---|---|---|---|---|
| 状態性述語 | 58 | 42.3% | 146 | 59.6% |
| 動態性述語 | 77 | 56.2% | 99 | 40.4% |
| 不明 | 2 | 1.5% | 0 | 0.0% |
| 合計 | 137 | 100.0% | 245 | 100.0% |

必然性のある「なかった」は、(74)(75)のように、「なかった」では表現できるが「ていない」では表わせない。過去を表現するには「なかった」の形にしなければならない。

(74)一九七五年までは、アメリカでも睡眠専門の病院は五ヵ所しかなかった。ところが、一〇年後には七〇ヵ所をこえ、いまではその倍にもなった。(自然科学)

(75) けれどもその結果、過去の日本にたいする無理解と蔑視とが生まれる。自由も主体性もなかった日本人だから、司令部案が起草されなくてはならなかったという筋道になる。日本人に人類普遍の原理に立つ憲法を持つ能力があってはならなかった。あれば日

本側の意思を尊重しなくてはならなかったはずであるし、制定が急がれてもならなかったからである。（社会科学）

表6 「動態述語＋なかった」の「ていない」への置き換えの適否

| | 会話 | | 科学的入門書口 | |
|---|---|---|---|---|
| 置き換え可能 | 39 | 50.6% | 25 | 25.3% |
| 置き換え不能 | 38 | 49.4% | 74 | 74.7% |
| 合計 | 77 | 100.0% | 99 | 100.0% |

次に、「動態述語＋なかった」を「ていない」に置き換えることが可能かどうかを調べてみた。

（76）378　01A　ちょっと、なんかあのー、きのう、（中略）丸老と丸包を、一緒に取れねえんじゃねえかっていわれてー、調べてたんだけどー、出てこなかったのね↑（出てきていない）（男性会話）

（77）この地図も（中略）「東西蝦夷山川取調図」と全く同じであり、カラフトの輪郭や緯度はクルーゼンシュテルンの地図に基づき、それに彼自身の調査や原住民から得た情報によって、地名や道路、水系などが詳細に記入されているが、ただ、調査の及ばなかったカラフトの北半部はほとんど空白のままとなっている。（及んでいない）（社会科学）

（76）は「出てきていない」、（77）は「及んでいない」に置き換えが可能と判断した。

表6を見ると、会話では約半数が「ていない」への置き換えが可能だが、科学では75%ほどが「ていない」への置き換えができない例であった。

表5と表6を重ねて読むと、「ていない」に置き換えることが想定できる動態性述語を使った例が、会話では56%、科学では40%あり、そのうち、実際に「ていない」に置き換えができる例が会話では50%、科学では25%であった。つまり、「なかった」の文のうち、「ていない」に置き換えることができる文は、会話では28%、科学では10%ということになる。「なかった」の文は「なかった」で表現する必然性がある文が非常に多いということがいえる。

「なかった」の意味することをまとめてみよう。

まず、過ぎ去ったことが明確な過去を表現する場合である。

(78) しかし、この疑問に直接答えるような説明はなかなか現われなかった。とにかく最初はビッグバンであり、それ以後はかくかくしかじかだとの理論は大いに提出されたが、それらの話は、すべては「最初にビッグバンありき」であった。（自然科学）

(79) しかし、規制されたが百貨店人気は衰えなかったし、また戦後復興期から１２年にわたる無規制の時代に、百貨店は消費ブームに乗ってそれなりに膨張してきたから、百貨店法による規制ですぐにダメージを受けるようなことはなかった。（社会科学）

(78)(79)は「過去」の用法である。過去に説明が現れなかった、人気が衰えなかった、その当時百貨店法ですぐにダメージを受ける状態ではなかった、と述べている。単純過去で過ぎ去ったことが明らかな例は「ていない」では表現できない。

(78)’？この疑問に直接答えるような説明はなかなか現れていない。とにかく最初はビッグバンであった。

(78)’のように「ていない」を使った場合は現在との関係が出てくるが、「なかった」で表現すると過去に結果が出てしまい、変えることができない意味になる。

次に、現在と切り離された過去（日本語記述文法研究会 2007：136）を表している例である。

(80) この学会ではじめて、これまで話題にならなかった二つのテーマが、シンポジウムとして取り上げられた。(自然科学)

(81) 当時は関係者からもあまり注目を浴びなかったが、今日ではその成果がようやく高く評価されてきている。(社会科学)

(80)は「これまで話題にならなかったテーマ」が今回取り上げられた、(81)は「当時は注目を浴びなかった」ことが今日では評価されている、と現在と状況の異なる過去が取り上げられており、現在とは切り離されていると捉えることができる。

そして、主節より以前を表す用法である。

(82) しかし赤水以後、伊能忠敬による実測日本図が完成したが、伊能図は幕府の秘図として官庫におさめられて公開されなかったので、江戸時代後期の日本図は赤水図をもって代表され、赤水の没後も幾度か改訂版が出されたのみならず、幕末に至るまで、多数の赤水図の模刻版もつくられた。(社会科学)

(83) 彼の平和達成の目標は実現しなかったが、ノーベルは莫大な金持ちになった。その遺産の利子でノーベル賞が創設された。(自然科学)

(82)は「伊能図が公開されなかった」から「赤水図が代表となった」「赤水図の模刻版が作られた」、(83)は「平和は実現しなかった」が「ノーベルは金持ちになった」と「なかった」の節が主節より前の時点の事態を表現している。

過去の事態であっても現在と関係があれば「ていない」で否定することができるのに対し、ある事態が過去であることが明確な場合、現在とは切り離されている場合は「ていない」では表現できず「なかった」となる。工藤（1996）が「発話時において肯定的想定の実

現の可能性が残されている」場合には「ていない」が使えると述べているが、実現の可能性がなくなった場合は「なかった」が用いられるといえる。

## 5　まとめ

以上見てきた「ていない」について、「なかった」との関連も含めてまとめておこう。

### 5.1　「ていない」「なかった」の使用状況

「ていない」は会話で多く、小説が目立って少ない。一方「なかった」は小説が非常に多く 700 例以上あったのに対し、会話は 140 例、新書は 250 例程度であった。小説の基本テンスが「た」であることが否定においても明らかになった。

「ていない」がどのような形の否定であるかによって分類した結果は、会話・小説では継続性の否定と効力持続の否定が同程度であるのに対し、新書では継続性の否定はやや少ない。小説・新書では性状の否定が 20%以上ある。

「ていない」は効力持続の否定で使われることがやや多いということがわかった。

「ていない」と「なかった」の出現状況を比較したところ、会話、新書では「ていない」の重要性が、小説と比べ相対的に高い。つまり、会話、新書の文脈では「なかった」「ていない」両者を使えるよう指導する必要があるといえる。

### 5.2　非実現の「ていない」と未実現の「ていない」

結果状態と効力持続の否定の文の中で非実現の「ていない」と未実現の「ていない」の使用状況を調べたところ、会話では非実現の「ていない」の方が多数であり、新書では出現例の半数を超えていた。未実現は小説、新書では未実現・非実現がほぼ同数であった。

つまり、「ていない」が未完了であるか過去の否定であるか、という問いには、会話では非実現が多いが、小説・新書では未完了と非実現はほぼ同じくらい使われていたという結果になった。

### 5.3　過去の文脈

本稿は効力持続の「ていない」の選択にあたって、否定が現在まで及んでいないもの、という基準を用いた。それゆえ本稿の効力持続「ていない」文は過去の文脈が存在しているといえるが、会話の中には、過去のことであると話の参加者が了解しており、過去ということを言語的に明示していない例も見られた。これは参加者が共通の情報を持っていることがあるという会話の特色であろう。

新書での効力持続の否定は引用の形で用いられることが多く、その意味では過去の文脈が存在しているといえる。

### 5.4　事態の把握のしかた

肯定においては「た」は直接的体験、「ている」は間接的な表現とまとめることが可能だが、否定では自己の行為であっても他者の動きや変化であっても「ていない」で表現されていた。効力持続の「ていない」はある事態（結果）がなかったことを述べるものであるため、直接的体験であっても間接的描写であっても、ないという意味では同様であるためであろう。

新書はそもそも直接的体験を述べる文脈が限られているため、直接的体験という基準がどの程度使えるかは明確にできなかった。

### 5.5　統括主題

「ていない」文は会話においても新書においても統括主題のもとに用いられていた。否定表現は肯定の想定を前提に用いられるという性質から、否定の前に与えられる肯定の文脈との間に一つの主題によるつながりができるためであろう。

### 5.6　未実現文の実現想定区間

「まだ」を含む文における実現想定区間を調べたところ、会話においても新書においても実現想定区間が認められる例と認めにくい例が見られた。

実現想定区間が認めにくい理由は、会話では未来のことについて、それを実現させるものと態度が決まっているとは限らないことが挙げられる。そうしたあいまいな態度であっても「まだ」を用いるのは、「まだ～ていない」と示すことによって「いつかは～するかもしれない」という含みを持たせた一種の配慮表現になるためであろう。

新書においては複雑な事象や研究上の議論を取り上げる場合、一つの実現想定区間は定めにくいことが考えられる。

こうして実現想定区間が明確に設定しにくい未実現文は非実現文にかなり近くなり、「まだ」を取り去っても意味的にあまり変わらなくなるものも見られる。

### 5.7　意図的な否定か否か

会話でも新書でも、「ていない」には否定的な意志は読みとりにくく、否定であっても現在と関係づけて述べる姿勢が見られるのに対し、「なかった」では意志的に否定的な行動をしたことが読みとりやすい文脈になる。

以上、従来の研究であげられた「ていない」の性質についての議論をみてきたところ、未実現文と非実現文の境界は比較的あいまいであるという結論に達した。

## 5.8　「なかった」の使い方

「なかった」の使用状況を調べたところ、社会科学では3/4、自然科学では約半数の「なかった」が形の上で必然的に「なかった」になる例であった。「なかった」は過去の事態、現在と切り離された過去、主節より以前の事態などが表され、「ていない」が現在と関係のある否定であるのと異なる。

「ている」「ていた」のアスペクトを整理してみよう。「ている」は基本的には現在の状態を表すが、過去の事態を現在に関係させる用法も持つ。また、基準時以前の事柄を表すために「ている」「ていた」を用いることが可能である。また、結果動詞および状態動詞の一部では「た」は過去の変化を表し、過去の状態を表現したければ「ていた」を使う。つまり、「ていた」には動作継続の「ていた」と、「持っていた」「わかっていた」「思っていた」のような過去の状態の「ていた」が存在するわけである。「ている」「ていた」のような単純な形式が多くの用法を持つことを、教育にあたる側はしっかり意識している必要があるといえるだろう。

そしてそれが否定になると、ある事態が起こらなかったことは比較的容易に「ていない」で表現することができる。家村（2008）が学習者の発話の中で「ていない」は「た」以前に出現するという報告をしているがそれは「ていない」の使いやすさによると類推できる。

テクストのもつテンス的な性格とアスペクトは関係が深い。「ている」に関して言えば、「効力持続」は会話と科学的なテクストでは果たす役割がかなり違っていた。「運動長期」が重要な役割を果たしていることも、本稿が発見したことといえるであろう。

否定についてまとめておこう。現在を基準時とする会話では、話の内容は話者・聞き手が関心を持つ現在と関係することが多いため、否定では「ていない」が用いられることが多い。「た」がタクシス的に働く小説では否定も「なかった」が多い。科学的なテクストでは時系列的に物事を述べる場合は「なかった」も用いられるが、一般論あるいは現在と関係させる表現をする場合には「ていない」となりやすくなる。

今回は結果状態についてはあまり注目しなかったが、結果状態についても考えてみたい。

注

(1)『みんなの日本語』は第7課で「もう昼ごはんを食べましたか。」「いいえ、まだです。これから食べます。」という形で出し、「まだ～ていない」の形は第31課で「レポートはもうできましたか。」「いいえ、まだ書いていません」という例で出している。『新文化初級日本語Ⅰ』は第11課で「もう学校をきめましたか。」「はい、もう決めました。」「いいえ、まだ決めていません。」、『進学する人のための日本語初級』は第12課で「もう御飯を食べましたか。」「はい、もう食べました。」「いいえ、まだ食べていません。」のように出している。

(2) 発話時におけるアクチュアル化の可能性の過ぎ去り、とは以下のように、「発話時において、もはやアクチュアル化の可能性がなくなっている場合」をさす。（例文工藤1996：112）

「いかが？」

「う、ごちそうさま」

「あら、召し上がらなかったの？」

(3) 「発話時における非アクチュアルな事態の過ぎ去り」は「しなかった」を用いることによって、不成立だった事態が過ぎ去り、発話時には実現している事を表す。

「しばらくお目にかかりませんでしたね。」

(4) 「にすぎない」「にちがいない」「なければならない」は「なかった」の形にはできるが、「ていない」の形にはできないので、これらも除いた。

(7) 全体の中での「まだ」文の割合は以下の表のようになり、会話は15%ほどだが、小説では約1/3、新書では約1/4であった。

参考　会話・小説・科学的入門書での「まだ」文の割合

| | 会話 | | 小説 | | 科学的入門書 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| まだ否定 | 37 | 14.9% | 22 | 33.3% | 26 | 24.1% |
| 通常否定 | 0 | 0.0% | 44 | 66.7% | 82 | 75.9% |
| 合計 | 249 | 100.0% | 66 | 100.0% | 108 | 100.0% |

# 第 10 章　まとめ

以上述べてきたことを簡単にまとめ、第 1 章で提示した疑問に答える。

## 1　テンスについて

新書では「る」が基本的なテンスであることが分かった。工藤（1995）が小説のテンスの基本は「た」であると述べたが、科学的なテクストでは基本テンスは「る」である。

新書の文脈では、「た」は、過去の事例や実験など、時系列に沿った表現をする場合、過去の個別の事態を表現する場合に用いられる。

「る」は、時に関わらない内容、ものの属性、解説、筆者の判断を述べる場合に用いられ、科学的なテクストでは「る」が重要である。

科学的な文章の「た」「る」は、「た」だから過去、「る」だから非過去、と単純に整理できるものではない。「た」と「る」は相互に入れ替えが可能な場合も多々ある。

これに対し、会話では、話者のいる現在を基本とするテンスが用いられ、「た」は過去、「る」は未来・現在となり、科学的なテクストとは異なる。そこで、科学的なテクストに会話の観察によって得られたテンス・アスペクトの議論を直接応用することは、可能な場合と難しい場合がある。

## 2　効力持続について

### 2.1　効力持続とは

基準時が現在・未来であり、その基準時以前に起こった動作・作用が何らかの効果・影響を残す場合を「効力持続」とする。一方、基準時が過去あるいは未来で、基準時以前に別の事態が起こった例については「完了」とする。なぜなら、基準時が過去、未来の場合には「効力」が明確に読み取れない例があるためである。

効力持続の文において、過去にある動作・作用が起こった場合、その後残るものは間接的・偶発的な効果である。結果状態が、ある事態の後必然的に発生した状態を述べるのと性質が異なる。

基準時が未来の効力持続は未来の基準時に向けて何かをしながら待つという意味を表す。

### 2.2　「記録」をどう捉えるか

「記録」とは過去の事柄が「記録」として「ている」によって表現されることである。本稿は「記録」を効力持続の下位分類とする。

「記録」の用法では文末は「た」に置き換えられないという議論があるが、新書で用いられる「記録」の場合、文末を「た」に置きかえることは許容される。これは、新書では「る」「ている」で表現されている事柄のもとの文脈が過去であることがしばしばあり、「た」に置き換えた場合は、過去の事例であるという文脈が表面化するだけで、読み手は違和感をもたずに読めるためであろう。

### 2.3　「結果状態」と「効力持続」の関係

効力持続と結果状態とは本質的には同じものであるという議論がある。本稿は事柄の結果が現在まで連続するものを結果状態とし、事柄自体は過去のことで影響のみが現在に残るものを効力持続とした。

しかし、新書では「た」と「る」が置き換え可能な場合が多々存在する。その文脈の中で、効力持続は、「ている」で表現されている事態が、背景である「た」の表現する時を基準時としており、結果が現在まで存続しない場合とした。それに対し、結果状態はその結果が、読者が存在する現在まで続く場合とした。

### 2.4　未来の効力持続

未来の効力持続とは、未来のある時点を想定し、それに向かって何かをしながら待つという意味を表す。「ている」を使うが、未来を意味するので「る」に置き換えが可能である。

未来がいつのことであるか認識できる相手がある場面で用いる。不特定多数を読者として想定する文章などでは使えない。

待つ事態は必ずしも良いこととは限らないが、この「ている」を使った場合は、相手との間に一定の関係性を保つことが表現される。

学習者はこのような事態について、未来のことであるため「る」で表現する傾向があり、それは文法的には正しいが、「る」で表現すると、そっけない、冷たい、と母語話者は感じる。

## 3　会話と新書の「ている」

会話・小説・新書の運動短期・運動長期・結果状態などの使用状況を調べてみたところ、運動短期は小説ではある程度使われていたが、新書では少なかった。運動短期は日常的な動作・作用の継続を表現することが多いので、小説に多く使われる。一方、運動長期はどのテクストでもある程度見られた。運動長期は会話では職業に関すること、その内容など、新書では自然現象・社会現象・思想などが表現されていた。また、新書では長期間にわたる変化を表現する例も見られた。結果状態もどの資料においてもよく使われていた。新書では性状が多かった。運動長期・結果状態・性状はそれを表現するための語彙が必要になる。

効力持続も、どのテクストにおいても10%以上見られ、ある程度重要であることが分かった。効力持続が過去の出来事を現在に関係づけるものであるという点では、会話・新書は共通である。しかし、その下位分類である「記録」の用法および統括主題の存在の点では異なる。

会話では「記録」のように証拠をあげて物事を述べる用法は多いとは言えず、証拠をあげるより人間関係の方を重視し、漠然とした表現が使われる傾向があるのに対し、新書では「記録」は引用として非常に重要な役割を果たしている。

会話で効力持続の「ている」を使う際、統括主題が存在しているかどうかは明確とは言い切れないが、新書では「ている」が話題提供・前提・結論などの働きをする場合には統括主題の存在が非常に重要といえる。

会話では効力持続の「ている」は何を現在と関係させて述べるかを選択して使うことにより、場合によっては配慮表現として機能する。

## 4　学習者の「ている」の誤用

学習者の「ている」の使用には、以下のような特徴が見られた。

母語話者との違いは、効力持続・性状があまり使えていないこと、運動長期は使用する語の範囲が狭いことである。

誤用の性質はタスクによって異なる。物語的なテクストでは「ている」と「た」、描写のテクストでは自他の混同、論述文では「ている」と「る」の混同が問題であった。

「た」は過去だけでなく、まるごとの事態の終了という用法を意識させる必要がある。

「る」は、論述文内で多い、一般化して述べる用法、属性を描写する用法の教育が必要である。

## 5　「ていた」について

### 5.1　「た」と「ていた」

「た」はまるごとの事態を表現する。開始から終了までの事柄全体を表現するには「た」を使う。そしてそれは事態の完成にかかる時間の長さには関係がない。「た」は過去としてだけ教育するのでなく、まるごとの事態として把握するよう指導する必要がある。そして、どのような文脈でまるごとの事態が使われるのかの認識も必要である。

「ていた」を用いる場合、基準時の問題がある。「ている」を使う場合は意識していないが、現在を基準としてその前後に広がる時間について述べることになる。しかし、「ていた」では基準時が副詞や文脈によって示されない場合、不安定な文になる。そしてそれと同時に、動作継続の場合は動詞あるいは動詞句の要求する時間と、文の示す時間幅が合っている必要がある。内的限界動詞はそれぞれの動詞の示す達成限界に達するのに必要な時間と文の意味する時間幅が合っていなければならない。達成限界に対して長すぎる時間幅、短すぎる時間幅が示された場合は認めにくくなる。非内的限界動詞を使う場合は、文の示す時間幅をその動詞の動きが満たす必要がある。それができない場合は許容度が低くなる。

許容度を高める方法は、基準時間・開始時点・終了時点を示す、時間幅を表現する、複文にするなどの方法がある。

### 5.2　動詞の性質と「ていた」の関係について

関係性を表す動詞は「た」で過去が表わせない。過去を表現するには「ていた」にしなければならない。思考を表す動詞「思う」も、「た」は過去の思考の変化を表す。過去の思考を表すには「ていた」を用いる必要がある。

結果動詞を「た」で表現した場合は状態の変化を表し、テンス的には必ずしも過去を表すとは言えない。過去を状態として表す場合には「ていた」を使う必要がある。

このように、動詞によっては過去を表現する場合「ていた」を使う必要がある動詞がある。

### 5.3　「ていた」が表す過去の意味

「ていた」で過去を表す場合は、文脈によって、過去、現在と切りはなされた過去、「発見」といった意味が現れる。

### 5.4　発見の用法

「発見」の「ていた」は今回用いた３種のテクストいずれにおいてもよく使われていた。「発見」は結果状態・性状を表す文の文末に出現しやすいが、動作継続の文でも見られた。変化の表現、感覚で捉えたことの表現、思い出しなどを表す場合に現れやすい。文末で多く見られる表現である。

日本語教育で「ていた」を教えるときには、「発見」の意味がある文で使うと適格な文ができやすい、と学習者に伝えるという方法が考えられるであろう。

### 5.5　「言っていた」について

「言った」と「言っていた」の主体を調査したところ、「言っていた」は 90%ほどが三人称を主体としていた。

「言った」は発話者が明確な場合、「言っていた」は直接的でない伝聞、発話者が不明あるいは不特定の人の場合に見られた。会話ではある程度ぼかした表現が好まれるところから、短い発話であっても、直接的な「言った」より「言っていた」で表現することが好まれる傾向があるのであろう。

### 5.6　「完了」の「ていた」

「完了」の「ていた」は基準時点を示す節より以前の事態を表現する。本章では基準時を過去とする「完了」の「ていた」を取り上げた。

「完了」では、「た」節に焦点があり、「ていた」節はそれ以前の状況を示すような文になる。

完了の文は、ある状態が存在していたところ、「た」節によって状況が変化したことが示される。「ていた」節は「発見」の意味を含む場合、許容度が高くなる。

### 5.7　会話と新書における「ていた」の用法について

「ていた」は「発見」「完了」の用法がある。これらがあることにより、「ている」とは文章中で果たす役割が異なっている。

会話では、「ていた」で、思い出したこと、気がついたことを述べ、そこから話題へと展開していることが見られた。また、「ていた」は「思い出した」つまり忘れていないという意味を表すことができ、それによって丁寧さが表現できる。「ている」の効力持続も配慮が表現できることを述べたが、「ていた」も、きっかけとなる用法は異なるが、同様の性質をもつ。

会話では完了の用法は今回採集した「ていた」文の 20%ほどとあまり比重は高くない。会話では過去と関係を持つ完了より、「ていた」そのものが過去の状態を表す例が多かった。これは、会話は相手との関係で話が進んでいく、考えたことをそのまま整理せずに口にする場合がある、などの特徴があるため、完了のようなほかの節との関係を問題にする用法が読み取りにくいためでもあろう。

新書では、発見の「ていた」は過去の実験や調査の結果、過去の体験などを表現するために用いられていた。発見から話題へとつながる例も少しだが見られた。科学的なテクストで時間軸に沿って物事を述べる場合、「ていた」は過去以前の状態や状況を表現できる。また、「ている」が話題を提供したり結論を示したりするのに使われるのに対し、「ていた」は提供される話題以前の過去の状況、つまり前提を示すためにも用いられていた。そして、完了の用法により、「変化」を表現することもできることがわかった。

「ていた」は「ている」の過去になったもの、という捉え方だけではなく、「ていた」の持つ性格を把握することによってより豊かな文章表現ができるであろう。

## 6　学習者の「ていた」の使用状況

学習者の「ていた」の誤用は、「た」との混同が最も多く、続いて「ている」「る」の順である。テクストによって誤用の種類は異なり、事態の連続を表現する文章では「た」との誤用、論述文では「る」との誤用が目立った。

誤用の原因は以下のようである。

・まるごとの事態が使えず、事態の連続の「た」で表現すべきところを、過去の継続と考え「ていた」にする。

・文末ならば「ている」「ていた」になる形が連体修飾節内では「た」になるのが難しいようである。

・完了の形が使えれば正しい文になる例が見られた。完了の文が安定する条件は以下のようである。

1)「ていた」節で表現されている状況と「た」節で表現される事態が状況の変化を示すものであること。「ていた」節から当然考えられる事態を「た」節で表現した場合は許容度が低くなる。

2)「ていた」節と「た」節の間に時間的な切れ目が存在すること。
3)「発見」の意味を含むこと。
4) 外部からの描写の文にすること。
・活用形を固定化して記憶していることによる誤用が見られた。

## 7 「ていない」

「ていない」について、「なかった」との関連も含めてまとめておこう。

### 7.1 「ていない」「なかった」の使用状況

「ていない」は会話で多く、小説が目立って少ない。一方「なかった」は小説が非常に多かった。小説の基本テンスが「た」であることが否定においても明らかになった。逆に、会話や新書では「ていない」が使えることが重要と言える。

「ていない」がどのような形の否定であるかによって分類した結果は、会話・小説では継続性の否定と効力持続の否定が同程度であるのに対し、新書では継続性の否定はやや少ない。「ていない」は効力持続の否定で使われることがやや多いということがわかった。

### 7.2 未完了の「ていない」と非実現の「ていない」

「ていない」が未完了であるか非実現つまり過去の否定であるか、という問いには、会話では非実現が多いが、小説・新書では未完了と非実現はほぼ同じくらい使われていたという結果になった。

### 7.3 過去の文脈

会話では、過去のことであると話の参加者が了解している場合、過去ということを言語的に明示していない例も見られ、その中で「ていない」が使われていた。

新書での効力持続の否定は引用の形で用いられることが多く、その意味では過去の文脈が存在しているといえる。

会話においても新書においても、過去の文脈の中で「なかった」でなく「ていない」を使うことはよく行われている。

### 7.4 事態の把握のしかた―直接的体験か間接的な表現か

肯定においては「た」は直接的体験、「ている」は間接的な表現とまとめることが可能だが、否定では自己の行為であっても他者の動きや変化であっても「ていない」で表現されていた。効力持続の「ていない」はある事態（結果）がなかったことを述べるものであるた

め、直接的体験であっても間接的描写であっても、ないという意味では同様であるためであろう。

新書はそもそも直接的体験を述べる文脈が限られているため、直接的体験という基準がどの程度使えるかは明確にできなかった。

### 7.5　統括主題

「ている」を効力持続で用いる場合、統括主題の存在が重要であるという議論がある。「ていない」文は会話においても新書においても統括主題のもとに用いられていた。否定表現は肯定の想定を前提に用いられるという性質から、否定の前に与えられる肯定の文脈との間に一つの主題によるつながりができるためであろう。

### 7.6　未実現文の実現想定区間

過去の「た」には実現想定区間は特にないが、パーフェクトの「ていない」には実現想定区間が存在するという議論がある（井上 2001）。

「まだ」を含む文における実現想定区間を調べたところ、会話においても新書においても実現想定区間が認められる例と認めにくい例が見られた。

実現想定区間が認めにくい理由は、会話では未来のことについて、それを実現させるものと態度が決まっているとは限らないことが挙げられる。そうしたあいまいな態度であっても「まだ」を用いるのは、「まだ～ていない」と示すことによって「いつかは～するかもしれない」という含みを持たせた一種の配慮表現になるためであろう。

新書においては複雑な事象や研究上の議論を取り上げる場合、一つの実現想定区間は定めにくいことが考えられる。

こうして実現想定区間が明確に設定しにくい未実現文は非実現文にかなり近くなり、「まだ」を取り去っても意味的にあまり変わらなくなるものも見られる。

### 7.7　意図的な否定か否か

会話でも新書でも、「ていない」には否定的な意志は読みとりにくく、否定であっても現在と関係づけて述べる姿勢が見られるのに対し、「なかった」では意志的に否定的な行動をしたことが読みとりやすい文脈になる。

以上、従来の研究であげられた「ていない」の性質についての議論をみてきた。理論的には未実現文「ていない」と非実現文「なかった」の相違は説明可能であるが、現実のテクストの中では、両者の境界は比較的あいまいであるという結論に達した。

### 7.8　「なかった」の使い方

「なかった」の使用状況を調べたところ、社会科学では 3/4、自然科学では約半数の「なかった」が形の上で必然的に「なかった」になる例であった。「なかった」は過去の事態、現在と切り離された過去、主節より以前の事態などが表され、「ていない」が現在と関係のある否定であるのと異なる。

以上が 9 章までで述べてきたことである。

アスペクトに関しては多くの研究がなされてきたが、それらに対して本稿が付け足すことができた点はいくつかある。第一に、科学的なテクストを資料に用い、そのテンスを明確にしたことであろう。科学的なテクストの基本テンスが「る」であり、それは過去の事例をもとにした議論であるため、「た」と「る」の入れ替えが可能な例が多いということを前提にすれば、これまでなされてきた「記録」の「ている」は「た」に置き換えができないなどの議論も、それは会話の場面でのことである、とテクストの違いを考慮しながら考えることができる。

第二に、運動短期と運動長期を分けて出現傾向を見たことにより、運動長期が単なる動作の継続でなく自然現象、社会現象や思想、長期的な変化を述べるものであるという性格を明確に述べたことであろう。運動長期と効力持続を考えることにより、話題提供、結論という文章の構造をとらえることができた。

第三に効力持続を会話と科学的なテクストの中で読み取ったことである。この作業により、効力持続が会話の中と科学的なテクストの中でかなり違う役割を果たしていることを述べることができた。

第四に、「ていた」の「発見」と「完了」の成立する条件を整理したことである。「発見」は変化が表される状況で出現すると藤城（1996）が述べているが、本稿はそれに感覚の表現、回想の表現、意外性のある文脈などの条件を付加した。「完了」も、先行研究に対し、「た」節に焦点があること、「ていた」節と「た」節の間に時間的な切れ目があり、状況の変化が述べられていると許容度が高まることを加えた。

## 8　アスペクトについての疑問と答え

第 1 章で以下の疑問を提示した。これらについて次に述べていく。

1）「ている」「ていた」「ていない」を個別に取り上げ、それぞれが固有に持つ問題点を洗い出す。

2）テクストの種類の違いと「ている」「ていた」「ていない」の使われ方の違いを検討する。

3）学習者の誤用例を検討し、学習者にとって「ている」「ていた」「ていない」はどこが難しいかを考える。

## 8.1　「ている」「ていた」「ていない」でとりあげた問題点

a 「ている」の問題点

本稿では効力持続、運動長期をとりあげた。

効力持続は現在・未来を基準時とし、それ以前に起こった事柄が基準時に間接的な影響を与えるものである。基準時現在の効力持続は会話では配慮、科学的なテクストでは引用として用いられる。

運動長期は夜を超えてある動作・作用が継続するもので、休んだり活動したりを繰り返しながら全体として継続する場合もある。運動長期は運動短期と異なり、会話では仕事に関する内容、新書では自然現象・社会現象・思想・長期にわたる変化を表す。大学生にとっては、語彙を獲得し、専門分野の自然現象や社会現象が表現できる必要がある。

b 「ていた」の問題点

「ている」は現在を基準時とするが、「ていた」では基準時を副詞・文脈などによって設定する必要がある。

「ていた」は「発見」「完了」の用法が重要で、中級で学習項目に入れる必要がある。「完了」の成立する条件は以下の 4 点である。

1)「ていた」節で表現されている状況と「た」節で表現される事態が状況の変化を示すものであること。「ていた」節から当然考えられる事態を「た」節で表現した場合は許容度が低くなる。

2)「ていた」節と「た」節の間に時間的な切れ目が存在すること。

3)「発見」の意味を含むこと。

4) 外部からの描写の文にすること。

c 「ていない」の問題点

「ていない」は会話・新書では、過去の文脈でもよく用いられる。逆に「なかった」を使うのは小説のような基本テンスが「た」のテクストである。

「ている」に関する先行研究で扱われた多くの内容を「ていない」で確認したところ、肯定と否定はいろいろな点で違いが見られた。

「ていない」が動作継続の否定であるか、効力持続の否定であるか、では効力持続の否定がやや多いという結果になった。

「た」と「ている」について、直接体験は「た」で、間接的な体験は「ている」で表現される、という議論を否定について考えたところ、否定の場合は違いが見られず、どちらも「ていない」で表現されるという結果になった。

実現想定区間の議論では、「た」には実現想定区間が存在しないが、「ていない」の実現想定区間は必ずしも明確とは言えない。それはテクストの種類によって実現想定区間の考え方が異なることによる。

以上をまとめると、「ていない」と「なかった」の境界は比較的あいまいだという結論になった。

## 8.2　テクスト中での「ている」「ていた」「ていない」の使われ方の違い

ａ　「ている」

会話においては運動短期が日常的な動作・作用を表すのに対し、運動長期は仕事に関係する表現が多いという特色がある。

会話では効力持続を用いることによって、過去の特定の事柄を現在と関係させ、「た」を用いることによってそれは過去の事であると表現でき、このような使い分けによって相手への配慮を示すことができる。

運動長期・効力持続を用いることによって、過去の著作や発表を引用することができ、それは著作物では大きな役割を果たす。また、運動長期・効力持続は一定の状況を述べることにより、話題提供や結論の機能を果たす。

ｂ）「ていた」

会話では「発見」の用法により、「思い出した」ということが表現でき、話題につなげることができる。また、「忘れていない」という表現をすることで相手に対する配慮を示すことができる。

新書では過去の実験の結果などを「発見」の用法で示すことができる。また、「完了」は、以前はこのようであったがその後はこのようになった、と変化を表すことができる。

以上見たように、「ている」においても「ていた」においても、会話と新書では両者の持つ異なった特質が文脈の中で働き、必要な役割を果たしている。

ｃ　「ていない」

現在を基準時とする会話では、話の内容は話者・聞き手が関心を持つ現在と関係することが多いため、否定では「ていない」が用いられることが多い。「た」がタクシス的に働く小説では否定も「なかった」が多い。科学的なテクストでは時系列的に物事を述べる場合は「なかった」も用いられるが、一般論あるいは現在と関係させる表現をする場合には「ていない」となりやすくなる。

## 8.3　学習者の誤用例の検討

ａ　「ている」

学習者は、効力持続・性状があまり使えていない。効力持続の一部は、初級段階で「経験」として学ぶが、それ以降、過去の事態が現在に影響が及ぶ、という効力持続の本質的な

指導は授業であまり取り入れられていないためであろう。この用法は二つの時が関わり、影響が残るといってもその影響は間接的であるため、学習者が独力で理解するのは難しい可能性がある。教科書でとりあげ、教師がよく理解し、学習者に納得してもらう必要があるだろう。

性状についても、形容詞的動詞があるということは触れられているだろうが、性状はもっと広い使い方がされている。語彙を含めて指導が必要である。

誤用の性質はタスクによって異なる。物語的なテクストでは「ている」と「た」、描写のテクストでは自他の混同、論述文では「ている」と「る」の混同が問題であった。

「た」は初級の初めで過去として教えるが、それ以上の教育はなされるのだろうか。まるごとの事態の終了が「た」で表現され、事態の終了までの時間が長い場合も短い場合も、まるごとの事態は「た」である、終了は終了として「た」で表現するのであるということを意識させる必要がある。学習者に与えられたタスクの一つは漫画のストーリーを述べるものであったが、学習者の中には、流れのある話としてでなく、目の前の事態を現在〇をしている、のように述べる取り組みをする者がいた。物語を語るやり方を練習するといいのであろう。

「る」は、論述文内で多い、一般化して述べる用法、属性を描写する用法の教育が必要である。これについても、動作・作用の継続を意識する学習者に対し、論述文では動きがある事態であっても、それをまとめて「る」で表現しなさい、その方が論述文的であると伝える必要がある。

テクストの種類によって、「ている」「る」「た」を使い分けることを学習者に理解してもらわなければならない。会話をする、出来事を描写する、物語を述べる、日記を書く、論述文を書く、のように、多様な言語活動をし、その中でテンスやアスペクトを意識する活動をする必要があるのである。

b　「ていた」

学習者の「ていた」の誤用は、「た」との混同が最も多く、続いて「ている」「る」の順である。テクストによって誤用の種類は異なり、事態の連続を表現する文章では「た」との誤用、論述文では「る」との誤用が目立ったという点は「ている」と同様である。

「ていた」でもまるごとの事態が使えず、事態の連続の「た」で表現すべきところを、過去の継続と考え「ていた」にする誤用が多い。本稿は「ていた」の誤用が「た」が使えないことと述べるが、許（2002:48）は逆のことを述べている。許（2002）は、日本語で「ていた」で表現される過去の動作継続を、動詞に何もつかない形や完了を表す“了”を使って表現できると説明している。

(1) 山下：おや、山田さんがいませんね。どうしたんでしょう。
　田中：きっと、まだ会社でしょう。急ぎの仕事があるみたいですよ。
　　きのうも、遅くまでやっていたから。
　山下：昨天也做到很晚。（例文　許ｐ.45）

本稿では学習者が過去の事態を「ていた」で表現する問題ばかり注目していたが、逆の誤用も考え得るという指摘である。「た」と「ていた」の問題はこれからも考えなければならない問題の一つであろう。

「ていた」では、完了の形が使えれば正しい文になる例が見られた。これも、「た」と「ていた」の関係を授業で明確に取り上げられている場合とそうでない場合があるためであろう。「完了」として取り上げ、授業で教育すれば学習者の誤用の一部は減らすことができるかもしれない。

「ている」ができれば「ていた」も自動的にできるとは言い切れないのである。

文末ならば「ている」「ていた」になる形が連体修飾節内では「た」になるのが難しいようである。しかし、この点はなかなか取り上げにくい可能性がある。

# 第 11 章　これからの課題と日本語教育への提言

## 1　これからの課題

今回は「ている」「ていた」「ていない」を別々に取り上げたため、違いを際立たせて記述した。違いを際立たせるために分けて記述したことにより、共通の部分に対する配慮が少なかったことは否めない。

原稿の準備は 2009 年にさかのぼり、当時と比較すると、近年、コーパスの多様化、大規模化が進み、小論はいささか資料の扱い方が小規模、旧式であることは否定できない。

「ている」「ていた」「ていない」のテクストにおける機能の記述を何点か述べた。今回の資料は職場の会話であったが、今回導き出した結論、例えば会話での「ている」の配慮表現は若者の普通体で行われる会話にもあてはまるのだろうか。さらに調査できるとおもしろい結果が出るかもしれない。

「ていた」では寺村（1984）が「ある動作・作用の期間中に別の事態が起こる」という用法について言及している。一般の日本語母語話者に「ていた」で文を作ってくださいと依頼すると「電話で話していたからドアのチャイムが鳴っても出られなかった」などのように簡単に出てくる形である。ところが、実際の用例では、この形の文は会話・小説・新書のどのテクストにおいてもごくわずかしか出現せず、多く見られたのは「ていた」と「た」の間に時間的な差がある例、つまり完了の例であった。この事実をどのように理解すればいいかは、今回は触れることができなかった。稿を改めて考えたい。

「ていない」に関しては、初級の早い段階で「なかった」でなく「ていない」を教育する試みがなされたが、効果については疑問であるとの報告がある（松田・深川・山本 2011）。「ていない」はどの段階でどのように指導すれば学習者に混乱を引き起こさずに定着が図れるのか、知りたいところである。

「ていた」については、本稿で述べた結果を授業で学習者に示し、学習者に文を作ってもらい、ここであげた説明だけで「ていた」の間違いが防げるかどうかを調べたいと希望する。

## 2　日本語教育への提言

本稿は「ている」「ていた」「ていない」が、会話・新書のテクストでどのようなふるまいをしているかを調査し、いくつかの点を指摘できた。

第一に、テクストによってテンスの基本的な考えが異なり、我々は扱うテクストによってテンスを使い分けていることを意識する必要がある。そして、異なる種類のテクストを使った場合、テンスについても学習者に意識させるよう、教師が理解を深める必要がある。

「ている」ができれば「ていた」はそれを過去にするだけである、という考えは否定するべきであり、「ていた」の教育は中級において必要である。

会話、新書は表現の仕方が異なるテクストであった。このような、表現の仕方の異なるテクストでは、同じアスペクトを使う場合でも、その意味の中で使いこなす必要のある用法が多少異なる。そのようなことも考慮にいれた教育がなされれば効果が上がるであろう。

本稿は日本語教育に対して3点提言をしたい。1）テンスの教育をすること。2）「ている」「ていた」「ていない」の教育を中級でもすること、3）「ている」「ていた」「ていない」のそれぞれの特色を把握して教育すること、4）テクストによる文法項目のふるまいの違いを考慮すること、である。

1）テンスの教育をすること

「る」「た」は初級の初めに学ぶことなので、教師はテンスのことは改めて取り上げなくてもわかっているはずだと考えるかもしれない。しかし、

・テクストの違いによって主要なテンスが異なること
・小説あるいは物語の基本テンスが「た」であり、それは過去を意味しないこと
・まるごとの事態は全体を「た」で表現する。事柄全体にかかる時間の長さに関わらず「た」を使うこと。
・論述文では基本テンスは「る」であること。
・時と関わらない一般的な事象は「る」で表現されること

このようなことは中級で読解をする中で教える必要があると思われる。現場では日記を書く、レポートを書くなどのアクテビティをしているはずである。その際、学習者にテンスに意識を払わせ、「た」と「る」が混ざって表現されていてもそれは許されることである、という気づきを与えられればいいのではないか。

2）「ている」「ていた」「ていない」の教育を中級でもすること

「ている」には「効力持続」「性状」など重要ではあるが、学習者が自力では習得しにくい用法がある。また、今回注目した「運動長期」の用法も、実は筆者自身も、このように分類してその性質を調べるまで、「運動短期」と同じようなものと理解していた。

「ている」の「運動長期」は、大学生が読む参考書の中で確認したり、会話の中で注意させたりすることによって、学習者は比較的簡単に使いこなすことが予想される。書き言葉での運動長期の難しい点は語彙の複雑さであろう。語彙については学習者の専門分野で必要な語彙を探る必要がある。

「効力持続」はその概念が最初は理解しにくい(1)。教室で教師とともに学ぶことで効果が上がる用法といえる。初級で学ぶ「経験」の考え方、学習者が比較的よく触れる引用を導入として用い、概念について理解させ、使えるところまでもっていければ、と希望する。

未来の効力持続としてとりあげた形は高梨（2014）に指摘されているように、教科書に説明もなく提示されている。こういう用法は教師が学習者に注意を払わせることで意識化が可能なのではないだろうか。

「性状」は形容詞的動詞だけでなく、関係概念を表す語などでもあらわされるということを、中級以降の語彙が拡大した段階で学習する方が効果的といえる。

「ていた」の用法は中級で学んだ方が、説明が理解できるため効果が上がると考えられる。過去を「ていた」で表現する必要がある動詞群についての教育は、初級でそれらの動詞を少しずつ提示し、中級で整理するという方法が効果的であろう。完了の「ていた」、発見の「ていた」についても教育が必要である。完了と同時に、まるごとの事態の「た」を対照させて、「た」と「ていた」の違いを把握させられれば、と希望する。これらは、学習者が自分の言いたいことを言葉で表現でき、教師がその意図をくんで、そのうえで「た」にするか「ていた」にするか指導できる中級以降でとりあげたほうが学習者の理解が進むであろう。

その際、「ている」「ていた」「ていない」のそれぞれの特色を把握して教育することが必要である。「ている」ができれば「ていた」ができるという考え方は「ている」「ていた」「ていない」の一部では正しいが、すべてに対して言えることではない。特に「ていた」では「完了」「発見」などのような「ている」では出現しない問題がある。「ていた」「ていない」の教育に取り組むことを提案したい。

3）テクストによる文法項目のふるまいの違いを考慮すること

「ている」「ていた」「ていない」の、どのテクストにおいても現れる基本的な用法、共通な性格と同時に、テクストによって表面化する違った面についての理解も必要である。

会話は、相手がいて、相手に配慮する必要があるテクストであり、あまり事実を明確にしなくてもコミュニケーションが成立する。会話では、過去の事態の中で現在に関係させたい事柄を効力持続の「ている」を使うことによって示すことができる。

一方、新書においては、引用は運動長期あるいは効力持続の「ている」が担っている。そして「ている」に統括主題が存在することが、話題提供あるいは結論提示などにおいて重要な役割を果たす。

このように、同一のアスペクト表現である「ている」「ていた」「ていない」がテクストの違いによって表面化する役割が異なっていることがわかった。直接的体験であるか否か、統括主題が存在するか否か、などは、テクストによって強調されたり別の面が表面化することによって目立たなくなったりするという結果になった。

それぞれの項目の機能については、「効力持続」の「ている」が会話において現在との関係を述べることから一種の配慮表現として機能していることを述べた。同様に「効力持続」と「運動長期」の「ている」は新書では話題を提供し、結論を示す機能があることを示した。また、「ていた」は会話においては「発見」の用法が話題提供の機能を果たし、丁寧さを表現することを述べた。これらは「ている」「ていた」の機能の一部であろう。さらに研究が進むことを期待したい。

注（1）社会人対象の日本語教師養成講座の授業で効力持続の「ている」を取り上げたところ、受講者から分かりにくいという反応があった。

## 資料および参考文献

### 資料

会話

現代日本語研究会編(1999)『女性のことば・職場編』ひつじ書房

現代日本語研究会編(2002)『男性のことば・職場編』ひつじ書房

新書　日本語教育支援システム研究会編『CASTEL/J』より

自然科学入門書

井上昌次郎（1988）『睡眠の不思議』、都筑卓司（1991）『時間の不思議』、中原秀臣（1991）『進化論が変わる』、米山正信（1991）『化学とんち問答』各 5 万字

社会科学入門書

織田武雄（1974）『地図の歴史―日本編』、吉田寿三郎（1981）『日本の企業発展史』、中川剛（1985）『憲法を読む』、『高齢化社会』下川浩一（1990）各 5 万字

小説

第一人称小説

沢木耕太郎（1981）『一瞬の夏』、椎名誠（1987）『新橋烏森口青春篇』、

宮本輝（1982）『錦繍』、村上春樹（1985）『世界の終りとハードボイルドワンダーランド』

第三人称小説

安部公房（1962）『砂の女』、北杜生（1964）『楡家の人々』、

塩野七生（1983）　『コンスタンティノープルの陥落』、

筒井康隆（1977）『エディプスの恋人』

使用コーパス

現代日本語研究会編(1999)『女性のことば・職場編』（女性）ひつじ書房

現代日本語研究会編(2002)『男性のことば・職場編』（男性）ひつじ書房

迫田久美子他　『I-JAS』『多言語の日本語学習者横断コーパス』

http://lsaj.ninjal.ac.jp/?page_id=81

李在鎬他　『日本語学習者作文コーパス』http://sakubun.jpn.org/corpus/main.py

李在鎬他　『タグ付き KY コーパス』http://jhlee.sakura.ne.jp/kyc/

### 参考文献


・庵功雄（2001a）「テイル形、テイタ形の意味の捉え方に関する一試案」『一橋大学留学生センター紀要』第 4 号　一橋大学

・庵功雄（2001b）『新しい日本語学入門』スリーエーネットワーク

・庵功雄（2003）『日本語文法演習　時間を表す表現―テンス・アスペクト』スリーエーネットワーク

・井上優（2001）「現代日本語の「た」」つくば言語文化フォーラム編『「た」の言語学』ひつじ書房

・岩崎　卓(2000)「日本語における文法カテゴリーとしてのテンスとは何か」『日本語学』19－5　明治書院

・宇佐美洋（1999）『日本語とアジア諸言語との作文対訳コーパス』国立国語研究所
・王　学群（2003）『現代日本語における否定文の研究―中国語との比較対照を視野に入れて―』日本僑報社
・奥田靖雄（1977）「アスペクトの研究をめぐって（上）」『教育国語』53 巻　むぎ書房
・奥田靖雄（1978）「アスペクトの研究をめぐって（下）」『教育国語』54 巻　むぎ書房
・許夏珮（2000）「自然発話における日本語学習者による「ている」の習得研究」『日本語教育』104 号　日本語教育学会
・許夏珮（2002）「日本語学習者によるテイタの習得に関する研究」『日本語教育』115 号　日本語教育学会
・許夏珮（2005）『日本語学習者によるアスペクトの習得』くろしお出版
・金水　敏（1998）「いわゆる‘ムードの「タ」’について―状態性との関連から―」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論』　汲古書院
・金水　敏・工藤真由美・沼田善子（2000）『日本語の文法３　時・否定と取り立て』岩波書店
・金田一春彦（1950）「国語動詞の一分類」『言語研究』15　［採録：金田一春彦編（1976）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房］
・金田一春彦（1955）「日本語のテンスとアスペクト」『名古屋大学文学部研究論集』X（文学 4）　［採録：金田一春彦編（1976）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
・工藤真由美（1982）「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』第 13 巻第 4 号　武蔵大学人文学会
・工藤真由美（1989）「現代日本語のパーフェクトをめぐって」『ことばの科学』３　むぎ書房
・工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト』ひつじ書房
・工藤真由美（1996）「否定のアスペクト・テンス体系とディスコース」『ことばの科学』7　むぎ書房
・工藤真由美（2006）「話し手の感情・評価と過去の出来事の表現」土岐哲先生還暦記念論文集編集委員会編『日本語の教育から研究へ』くろしお出版
・江田すみれ・小西まどか（2007）「３種類のコーパスを用いた 3 級 4 級文法項目の使用頻度調査」『日本女子大学　紀要　文学部』57
・江田すみれ（2009）「会話と新書での「ている」の用法の違い」『JSAA-ICJLE　国際研究大会』
・江田すみれ（2010）「「ひとつ前の事態」を表す「ていた」の用法―接続節の中で「ていた」を使うために―」『台湾日本語文学報』25
・江田すみれ（2010）「「た」と動作継続の「ていた」の使い分け―時間幅と動詞の示す事柄の関係について―」『日本語教育方法研究会誌』Vol.17

・江田すみれ(2011)「完了の「ていた」の使用条件ー「た」節と「ていた」節の関係―」『2011年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会
・江田すみれ(2013)『「ている」「ていた」「ていない」のアスペクト―異なるジャンルのテクストにおける使用状況とその用法―』くろしお出版
・江田すみれ（2014）「設定時点が未来の「効力持続」―未来まで広がる「ている」の用法について―」『日本語／日本語教育研究』pp.47 - 56　日本語／日本語教育研究会
・小西円（2008）「実態調査からみた「義務の表現」のバリエーションとその出現傾向」『日本語教育』138　日本語教育学会
・小西円（2011）「使用傾向を記述する―伝聞の［ソウダ］を例に―」庵功雄・森篤嗣編『日本語教育文法のための多様なアプローチ』　ひつじ書房
・小林ミナ・小西円・砂川有里子・清水由貴子・奥川育子（2016）「類義表現分析の可能性」『講座日本語コーパス５　コーパスと日本語教育』　国立国語研究所
・崔　亜珍（2009「SRE 理論の観点から見た日本語テンス・アスペクトの習得研究―中国人日本語学習者を対象に―」『日本語教育』142　日本語教育学会
・崔　亜珍（2011）「自然発話における日本語テンス・アスペクトの習得研究―R 時の認識を中心に―」『小出記念日本語教育研究会』19　小出記念日本語教育研究会
・迫田久美子・家村伸子・川根千枝見・崔延朱（2008）「縦断的発話コーパスに見る日本語学習者の文法習得―日本語習得マップ作りのための基礎研究―」『2008 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』　日本語教育学会
・定延利之（2010）「「た」発話を行う権利」『日本語／日本語教育研究』１　日本語／日本語教育研究会
・ザトラウスキー、ポリー（1982）「プラグマティックスから見た日本語の動詞のアスペクト―特に否定形の場合において―」『言語学論叢』　筑波大学
・ジョンソン由紀（2001）「「まだ～ない」文における意思操作の役割」南雅彦・アラム佐々木幸子編『言語学と日本語教育』Ⅱ　くろしお出版
・塩川絵里子（2007）「日本語学習者によるアスペクト形式「テイル」の習得―文末と連体修飾節との関係を中心に―」『日本語教育』134　日本語教育学会
・清水まさ子（2008）「人文系論文における引用文の文末はどのように書けばいいのか―アスペクト的な観点からの一考察―」『日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会
・スコット・サフト・大原由美子（1999）「日本語における否定的返答とコンテクストについて」アラム佐々木幸子編『言語学と日本語教育』くろしお出版
・菅谷奈津恵（2003）「日本語学習者のアスペクト習得に関する縦断研究―「動作の持続」と「結果の状態」のテイルを中心に―」『日本語教育』119　日本語教育学会
・菅谷奈津恵（2004）「文法テストによる日本語学習者のアスペクト習得研究―L1 の役割の検討―」『日本語教育』123　日本語教育学会

・鈴木睦（1997）「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」田窪行則編『視点と言語行動』くろしお出版
・高崎みどり・立川和美(2008)『ここからはじまる文章・談話』ひつじ書房
・高梨信乃（2014）「上級学習者のテイル形使用にみられる問題点―文法指導の隙間―」『日本語／日本語教育研究』　日本語／日本語教育研究会
・高橋太郎（1969）「すがたともくろみ」[再録：金田一春彦編（1976）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房]
・高橋太郎（1985）『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版
・高橋太郎（1994）『動詞の研究　動詞の動詞らしさの発展と消失』むぎ書房
・高橋太郎（2003）『動詞九章』ひつじ書房
・谷口秀治（1997）「「テイル」形に関するムード的側面の考察」『日本語教育』92 号　日本語教育学会
・田村澄香（2000）「名詞文のテンス的意味の考察」『日本語教育』106 号　日本語教育学会
・寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味』Ⅱ　くろしお出版
・寺村秀夫（1990）『外国人学習者の日本語誤用例集』特別推進研究　「日本語の普遍性と個別性に関する理論的および実証的研究」報告書
・張　鱗声（2001）「おまえが大学をでるときには、おれはとっくに死んだ」『日本語教育のための誤用分析』スリーエーネットワーク
・中石ゆうこ（2005）「対のある自動詞・他動詞の第二言語習得研究―「つくーつける」「きまる―きめる」「かわる―かえる」の使用状況をもとに―」『日本語教育』124 号　日本語教育学会
・中右　実編（1997）『日英語比較選書７　ヴォイスとアスペクト』研究社
・中村英子（1996）「動作動詞テイル形の「反復」についてー「反復」の解釈が生まれる諸条件ー」『日本語教育』93 号　日本語教育学会
・難波綾子（2002）「「た」にみられる視点―テレビニュースの日英語比較からー」『第 10 回研究大会予稿集』社会言語科学会
・西由美子・白井恭弘（2004）「会話における「ている」の意味」南雅彦・浅野真紀子編『言語学と日本語教育』Ⅲ　くろしお出版
・仁田義雄（2009）『日本語のモダリティとその周辺』　ひつじ書房
・二通信子他（2000）『改訂版　留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク
・日本語記述文法研究会（2007）『現代日本語文法 3　アスペクト・テンス・肯否』くろしお出版
・野田尚史（2005）『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版
・浜田麻里他（1997）『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版
・早川治子（1999）「笑いの意図と談話展開機能」『女性のことば・職場篇』

ひつじ書房
・平岩百恵（2008）「アスペクト　シテイル・シテイタの用法とその意味」『北海道大学大学院文学研究科　研究論集』第 8 号
・福島健作（1998）「シツツアルに関する一考察」『日本語教育』97 号　日本語教育学会
・藤井正（1966）「「動詞＋ている」の意味」『国語研究室』（東京大学）5 ［採録：金田一春彦編(1976)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
・藤城浩子（1996）「シテイタのもう一つの機能ー感知の視点を表すシテイターー」『日本語教育』88 号　日本語教育学会
・益岡隆志（1991）「受動表現と主観性」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
・益岡隆志（2000）『日本語文法の諸相』　くろしお出版
・町田　健（1989）『日本語の時制とアスペクト』アルク
・松田文子（1998）「眼前事態描写における「タ」の機能―過去への遡りを要請する「タ」」『日本語教育』97 号　日本語教育学会
・松田文子(2002)「過去時ニ～シタカ」に対する否定の返答形式―シテイナイとシナカッタの選択に関してー」『日本語教育』113 号　日本語教育学会
・松田真希子・深川美帆・山本洋（2011）「「使わなかった」は「使っていない」―掘ったイモを活かす教育文法と授業実践―」庵功雄・森篤嗣編『日本語教育文法のための多様なアプローチ』ひつじ書房
・水谷信子（2001）『続日英比較話しことばの文法』　くろしお出版
・宮崎和人（1999）「モダリティ論から見た「～と思う」」『待兼山論叢』第 33 号　大阪大学文学研究科
・宮島達夫（2006）「「テイル」と「テル」」　土岐哲先生還暦記念論文集編集委員会編『日本語の教育から研究へ』　くろしお出版
・宮崎道子他（2010）『Let’s Work It Out』　スリーエーネットワーク
・牟　世鍾（1993）「発見・思いだしにおける「ル」形と「タ」形」『日本語学』明治書院
・メイナード　泉子・K（1993）『会話分析』くろしお出版
・METHAPISIT、 Tasanee、 坂田睦深、 CHUENSRIVIROTE、Arunee（2001）「タイ人日本語学習者のアスペクト表現」前田（宇佐美）洋　平成 11-12 年度科学研究費補助金基盤研究（B）（2）成果報告書　『日本語教育のためのアジア諸言語の対訳作文データの収集とコーパスの構築』国立国語研究所
・森山卓郎（1992）「文末思考動詞「思う」をめぐって」『日本語学』11　明治書院
・森山卓郎（1988）『日本語動詞述語文の研究』　明治書院
・山崎佳子・石井玲子・佐々木薫・高橋美和子・町田恵子（2010）『日本語初級①大地』スリーエーネットワーク

・山本裕子（2001）「聞き手とベースを共有することを表す「～てくる」「～ていく」について」『日本語教育』110 号　日本語教育学会
・吉川武時（1973）「現代日本語動詞のアスペクトの研究」[採録：金田一春彦編(1976)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房]
・TUCHAIS Simon(2006)「文末表現「と思う」の用法と話し手の役割」『日本語学論叢第 2 号』　日本語論叢の会
・李 在鎬(2009)「タグ付き日本語学習者コーパスの開発」『計量国語学』27-2
・李　在鎬・石川慎一郎・砂川有里子(2018)『新日本語教育のためのコーパス調査入門』くろしお出版
・ヴァインリッヒ、ハラルド（1982）『時制論』紀伊国屋書店
・（2016）『みんなの日本語初級 I 第 2 版　教え方の手引き』スリーエーネットワーク